

博士論文

日中両言語における存在型アスペクト形式の認知言語学的研究

黄 利斌

2017 年

目 次

第1章 序論	1
1.1 研究動機と目的	1
1.2 研究対象	7
1.2.1 中国語における考察対象	8
1.2.2 日本語における考察対象	10
1.3 研究方法	12
1.4 本論文の構成	14
1.5 用語の定義	15
1.5.1 進行相と継続相	16
1.5.2 結果相、パーフェクトと単なる状態	16
第2章 先行研究および研究課題	21
2.1 アスペクトの定義およびその位置づけ	21
2.2 中国語アスペクトの体系	27
2.2.1 黎（1924）と王（1943）の分析	27
2.2.2 Li and Thompson（1981）の分析	32
2.2.3 石（1992）の分析	34
2.2.4 Smith（1997）の分析	35
2.2.5 戴（1997）の分析	37
2.2.6 Huang et al.（2009）の分析	40
2.3 日本語アスペクトの体系	43
2.4 日中アスペクトに関する対照研究	46
2.5 日中アスペクト論の問題点	47
2.6 本論文の研究課題	50
第3章 本研究の理論的枠組み	51
3.1 認知文法	51
3.2 プロファイルとベース	53

3.3	場の理論	54
3.4	参照点構造	56
3.5	動的使用基盤モデル	58
3.6	事態認知モデル	59
第4章	中国語「V有」に関する考察	61
4.1	「V有」に関する先行研究	62
4.2	「有」の性格	73
4.2.1	「V有」はアスペクト形式か	75
4.2.2	「V有」と存在動詞「有」との関係	79
4.3	「V有」構文の特徴	85
4.3.1	I型の「V有」構文	85
4.3.2	II型の「V有」構文	93
4.3.3	中間的な存在	97
4.3.4	「V有」の表す意味の連関	98
4.4	動詞に関する制限	100
4.4.1	主体動作・客体変化動詞	104
4.4.1.1	客体の位置変化	106
4.4.1.2	客体の状態変化	108
4.4.2	主体変化動詞	111
4.4.3	主体動作動詞	114
4.5	対象指向性	116
4.6	存在型アスペクト形式「V着」、「在V」との比較	122
4.6.1	「V着」との比較	122
4.6.1.1	動詞に関する制限	123
4.6.1.2	対象指向性	128
4.6.2	「在V」との比較	138
4.7	「V有」を使う理由	141
4.8	結	143
第5章	中国語「有V」に関する考察	144
5.1	先行研究	146

5.2	「有 V」構文が生まれた要因	153
5.2.1	南方方言と英語「have+p.p.」構文による影響	154
5.2.2	「有没有 V」構文による影響	156
5.2.3	「有」構文内部の要因	157
5.3	「有 V」の構文的特徴	158
5.3.1	「NP ₁ +有+V+ (NP ₂)」のパターン	159
5.3.2	「NP ₁ +有+V+Asp+ (NP ₂)」のパターン	160
5.3.3	「NP ₁ +有+Asp+V+ (NP ₂)」のパターン	163
5.4	動詞に関する制限	164
5.5	「有 V」の意味的特徴	171
5.6	「V了」との比較	178
5.7	結	182
第6章	日本語「Vテアル」に関する考察	184
6.1	先行研究	185
6.2	「Vテアル」と存在動詞「アル」との関係	194
6.3	「Vテアル」の意味用法	196
6.3.1	本稿の分類	196
6.3.2	各用法の意味記述	203
6.3.2.1	対象の存在様態	207
6.3.2.2	結果の存在	208
6.3.2.3	行為経験の存在	210
6.4	動詞に関する制限	211
6.4.1	主体動作・客体変化動詞	216
6.4.1.1	客体の位置変化	216
6.4.1.2	客体の状態変化	219
6.4.2	主体動作動詞	220
6.4.3	思考・心理動詞	221
6.5	「Vテアル」の使用実態	221
6.5.1	「Vテアル」の使用領域	222
6.5.2	小説・新聞・会話における「Vテアル」の用法	223

6.6	対象指向性	228
6.7	「Vテイル」、「Vラレテイル」との比較	230
6.8	結	236
第7章	「V有」、「有V」と「Vテアル」の対照	238
7.1	「V有」と「Vテアル」の対照	238
7.1.1	構文的・意味的特徴	238
7.1.2	動詞に関する制限	246
7.1.3	対象指向性	250
7.2	「有V」と「Vテアル」の対照	252
7.3	文法化の観点から	259
7.4	存在型アスペクト形式から見た日中の事態の捉え方	261
7.5	結	266
第8章	結論	268
8.1	本研究のまとめ	268
8.2	本研究の意義	272
8.3	今後の課題	273
	資料	275
	参考文献	276
	初出一覧	289
	謝辞	290

図一覧

図 1-1. 結果相の概念構造	18
図 1-2. 「パーフェクト」の概念構造	19
図 2-1. 限界動詞と非限界動詞	24
図 2-2. 工藤（1995）による日本語動詞の分類	25
図 2-3. 「过」と「了」との違い	34
図 2-4. 戴（1997）による中国語アスペクトの分類	37
図 2-5. 主体動作・客体変化動詞	45
図 2-6. アスペクト形式の意味上の分類	46
図 3-1. 「in the closet」の合成構造	52
図 3-2. 斜辺	53
図 3-3. 参照点構造	56
図 3-4. プロトタイプの所有構造	57
図 3-5. 「象は鼻が長い」の概念構造	58
図 3-6. 動的使用基盤モデル	58
図 3-7. ビリヤードボール・モデル	59
図 3-8. 行為連鎖	60
図 3-9. プロトタイプ的他動関係	60
図 4-1. 「有」における存在用法と所有用法	81
図 4-2. 非能格動詞と非対格動詞	83
図 4-3. 「墙上挂有一幅画」の合成構造	91
図 4-4. 「鲁迅先生在 1926 年写有散文《藤野先生》」の合成構造	96
図 4-5. 「V 有」構文で表される意味の拡張関係	100
図 4-6. 「V 有」に用いられる動詞 V の分類	103
図 4-7. 「装」の概念構造	107
図 4-8. 「涂」の概念構造	109
図 4-9. 「写」の概念構造	110
図 4-10. 主体変化動詞の概念構造	111

図 4-11.	主体動作動詞の概念構造	115
図 4-12.	「落」の概念構造	118
図 4-13.	「漂」の概念構造	118
図 4-14.	「V 着」に用いられる動詞 V の分類	125
図 4-15.	「V 着」の意味的特徴	129
図 4-16.	「V 着」と「V 有」との違い	130
図 5-1.	「有 V」構文の出現要因	150
図 5-2.	「有」構文のネットワーク	158
図 5-3.	「有 V」に用いられる動詞 V の分類	167
図 5-4.	思考・心理活動動詞	168
図 5-5.	他動性と意図性による動詞の分類	169
図 5-6.	「张三没有看见李四」の深層構造	172
図 5-7.	「有一个人在教室里」の深層構造	172
図 5-8.	「张三有去日本」の合成構造	177
図 5-9.	「他准备了今天的会议资料」の概念構造	179
図 5-10.	「他有准备今天的会议资料」の概念構造	179
図 6-1.	「V テイル」の意味	192
図 6-2.	存在構文に基づくテイル（テアル）構文のネットワーク	193
図 6-3.	本研究における「V テアル」の意味用法の分類	199
図 6-4.	「アル」と「イル」の概念構造	204
図 6-5.	「V テ」の様態用法	205
図 6-6.	「V テ」の継起用法	205
図 6-7.	「V テ」の結果用法	206
図 6-8.	「V テ」の並列用法	206
図 6-9.	「窓が開けてある」の合成構造	209
図 6-10.	「上京する時間は言ってあった」の合成構造	211
図 6-11.	「V テアル」に用いられる動詞 V の分類	215
図 6-12.	「入れる」の概念構造	217
図 6-13.	「取り付ける」の概念構造	218
図 6-14.	「外す」の概念構造	218

図 6-15. 「買う」の概念構造	219
図 6-16. 「書く」の概念構造	220
図 6-17. プロトタイプ他動詞と「ニ」、「ニヨッテ」	234
図 6-18. 生産動詞と「*ニ」、「ニヨッテ」	234
図 7-1. Paths of development leading to simple past and perfective grams	261
図 7-2. 「する」的言語と「なる」的言語	262
図 7-3. 「出現」→「存在」→「消失」の過程	264

表一覧

表 1-1. 「V 着」と「V テアル」との意味的特徴	6
表 2-1. 動詞カテゴリーの分類	26
表 2-2. 「了」、「着」と「过」の区別	34
表 2-3. 中国語アスペクトの各意味的要素	39
表 2-4. 中国語アスペクトに関する研究の流れ	42
表 2-5. 日本語アスペクトの 2 項対立	44
表 2-6. 日中両言語のアスペクト体系	46
表 2-7. 日本語と中国語のアスペクト	47
表 2-8. 諸言語のアスペクトの類型論	48
表 2-9. 「呢」、「着」、「了 ₁ 」、「了 ₂ 」の意味的特徴	49
表 4-1. 「V 有」に関する先行研究	72
表 4-2. 「V 有」構文の使用実態	98
表 4-3. 「V 有」に用いられる動詞 V	101
表 4-4. Hopper and Thompson (1980:252) の他動性のプロトタイプ	104
表 4-5. 小説における「V 着」の使用状況	133
表 4-6. 「V 着」の使用状況	137
表 4-7. 「在 V」、「V 着」、「V 有」の意味的特徴	141
表 5-1. 答えとしての「有 (+VP) (+語気詞)」構文の使用傾向	149
表 5-2. 標準語における「有 V」構文に関する主要な先行研究	152
表 5-3. 「有 V」に用いられる動詞 V	165
表 6-1. 意図性による「V テアル」の分類	188
表 6-2. 「V テイル」と「V テアル」の関係	189
表 6-3. 対象を表す名詞句の形式	199
表 6-4. 「V テアル」に用いられる動詞 V	212
表 6-5. 各ジャンルにおける「V テアル」の使用状況	222
表 6-6. 小説・新聞・会話における「V テアル」の用法	224
表 6-7. 「V ラレテイル」形式のアスペクト的意味	232

表 6-8.	「V テイル」、「V ラレテイル」、「V テアル」の意味的特徴	236
表 7-1.	「V 有」と「V テアル」の構文的特徴	240
表 7-2.	「V 有」構文と「V テアル」構文	246
表 7-3.	「V 有」と「V テアル」に用いられる動詞 V	250

略語一覧

?	あまり自然ではないが許される文
??	容認度に個人差がある文
*	許されない文、非文法的な文
Φ	ゼロ形式
<u>下線</u>	例文中、本研究の考察対象となる部分
<u>波線</u>	例文中、本研究の考察対象となる部分の他に、強調したい部分

第1章 序論

1.1 研究動機と目的

中国語が文法カテゴリーとしてのテンスをもたないことは広く認められている (Smith1997:263 ; 木村 2006:46 ; 井上 2012:3 など)。例えば、(1.1) のように、「彼は昨日家で休んでいた」、「彼は今日家で休んでいる」、「彼は明日家で休む」をそれぞれ中国語で表すと、述語形式は全て「在家休息 (家で休む)」となる。すなわち、中国語の述語形式には時間の要素が含まれていない。

(1.1) 他 { 昨天 / 今天 / 明天 } 在家 休息。

tā zuótiān jīntiān míngtiān zàijiā xiūxi

彼 昨日 今日 明日 家で 休む

(作例)

一方、中国語は文法カテゴリーとしてのアスペクト¹を有する言語であると言われている。その上、中国語のアスペクト形式は豊富に存在している。「different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation」(Comrie 1976:3)と定義されているアスペクトは元々ロシア語をはじめとするスラブ諸語における「完結 (perfective) — 非完結 (imperfective)」の対立を表すカテゴリーである。この定義を少し緩めると、中国語の「了 (le)²」、「着 (zhe)」、「过 (guo)」とそれらを伴わない述語との対立もアスペクトの現象として扱われる。

¹ 中国語アスペクト研究の中で、「aspect」という用語に対して、「体 (体)」という用語が多く使われるほか、「时体 (時体)」、「情貌 (情貌)」、「相 (相)」、「动相 (動相)」などの用語もしばしば用いられ、未だに統一されていない。本稿では、日中アスペクト対照研究で多く使われている「アスペクト」という用語を用いることにする。

² 「了」には動詞直後の「了₁」と文末の「了₂」という2種類がある。動詞直後の「了₁」は動作の完成を表し、文末の「了₂」は事態に変化が現れたことやこれから現れる事態への肯定を表すとされている (呂 1999:351 ; 肖・沈 2009 ; 木村 2012 ; 楊 2013 など)。したがって、特別な説明がない限り、本稿という「了」は動詞直後の「了₁」を指す。

(1.2) 他 吃了 早饭 了。

tā chī-le zǎofàn le

彼 食べる-LE 朝ご飯 LE

(彼は朝ご飯を食べた。³)

(1.3) 他 吃着 早饭 呢。

tā chī-zhe zǎofàn ne

彼 食べる-ZHE 朝ご飯 よ

(彼は朝ご飯を食べているよ。)

(1.4) 他 吃过 早饭 了。

tā chī-guo zǎofàn le

彼 食べる-GUO 朝ご飯 LE

(彼は朝ご飯を食べた。)

(1.5) 他 吃 早饭。

tā chī zǎofàn

彼 食べる 朝ご飯

(彼は朝ご飯を食べる。)

(作例)

文 (1.2) では、動詞直後に完結を表す「了」を用いることによって、動詞の表す動作がひとまとまりとして捉えられているのに対し、文 (1.3) では、継続を表す「着」を用いることによって、動詞の表す動作が基準時⁴において継続していると捉えられている。文 (1.4) では、経験を表す「过」によって、基準時とは離れて完結した過去のまとまった事態が表されている。文 (1.5) では、アスペクト形式を用いておらず、時間軸に位置づけられていない時間外的な動作が示されている。

これまでの中国語アスペクト研究では、主に基本アスペクト形式とされている「V 了」、

³ 『日中対訳コーパス』以外の中国語例文の和訳は筆者による。複数の日本語母語話者にその適格性を判断してもらった。

⁴ アスペクトもテンスも時間に関係している文法的カテゴリーであるが、アスペクトは動詞の表す動作が、設定された基準時（基準となる時間）とどのように関わるかを示すカテゴリーである。一方、テンスは、動詞の表す動作が時間軸にどこに位置づけられるかに関わるカテゴリーである。基本的には、動作と発話時とどう関わっているかを示すカテゴリーである。

「V 着」、「V 过」をめぐって議論が進められてきたが（木村 1981 ; Li and Thompson 1981:184-237 ; 石 1992 ; Smith 1997:263-296 ; 戴 1997:33-108 ; 金 2002 ; 劉 2006 など）、これらの形式の他に、文（1.6）、（1.7）のように、動詞の直後に本来の存在動詞である「有（yǒu）」が結びつく「V 有」表現も存在している（以下、「V 有」構文と呼ぶ）。「V 有」構文は現代中国語に多く見られる 1 つの表現である（王 2014:25）。また、文（1.8）、（1.9）のように動詞の前に「有」が結びつく「有 V」表現も存在している（以下、「有 V」構文と呼ぶ）。「有 V」構文は元々古代中国語や閩南語⁵などの南方方言に多く見られる表現であるが、現在、標準語の中にも多く見られる（王他 2006 ; 王・马 2008 ; 蔡 2009 ; 王 2011 ; 王 2014:25 など）。

- (1.6) 每家 每户 门口 都 放有 一个 统一 的 垃圾桶。
 měijiā měihù ménkǒu dōu fang-yǒu yīgè tǒngyī de lājītǒng
 各家 玄関口 全部 置く-YOU 1 つ 同じごみ箱
 （各家の玄関口に同じごみ箱が置いてある。）

（『人民日报』、2016-02-14）

- (1.7) 他 写有 100 多篇 观赏 奇石 的 散文。
 tā xiě-yǒu yībǎi duōpiān guānshǎng qíshí de sǎnwén
 彼 書く-YOU 100 編余り 鑑賞する 奇石 の 散文
 （彼は既に奇石の鑑賞に関する散文を 100 編余り書いている。）

（『人民日报海外版』、2004-06-21）

- (1.8) 据悉、 美国 有 考虑 寻求 中方 赞助。
 jùxī měiguó yǒu kǎolǜ xúnqiú zhōngfāng zànzhù
 聞くところによれば アメリカ YOU 考える 求める 中国側 賛助
 （聞くところによれば、アメリカは中国側へ賛助を求めるのを考えたことがあるそうだ。）

（『国际金融报』、2009-01-23）

⁵ 泉州、アモイなど中国福建省の南部で使用されている方言である。福建語とも呼ばれる。

(1.9) 李湘：你们 有 提前 沟通 一下 吗？

lǐxiāng nǐmen yǒu tíqián gōutōng yīxià ma

李湘 貴方達 YOU 事前 相談する ちょっと 疑問

(李湘：事前にちょっと相談しましたか？)

(湖南电视台、『快乐大本营』、2003-06-28；王他 2006:13 より)

「時の移ろい」、「時機到来」、「光陰矢のごとし」などの表現のように、形のない抽象的な時間概念を表すのに形のある具体的な空間概念が用いられることが多い(砂川 2000:105)。これらの表現の基盤には、「空間を通して時間を捉える」という概念メタファー (conceptual metaphor) が存在していると考えられる⁶。また、言語類型論では、存在動詞が文法化⁷されてアスペクト形式になることは世界中の言語にある普遍的な現象であることが既に検証されている (Bybee 1985 参照)。本研究では、存在動詞から文法化されたアスペクト形式を「存在型アスペクト形式⁸」と呼ぶことにする。基本アスペクト形式とされている「着」も本来の「付着義」を表す動詞「着」から文法化された結果であり (陈 2006)、存在型アスペクト形式の1つであると考えられる。そして、高頻度の使用は文法化の1つの重要な動機づけとなっている (Hopper and Traugott 2003:126-129)。基本存在動詞「有」は「是」につぐ二番目の高頻度の動詞である (刘 2011:99)。したがって、「有」が文法化されてアスペクト形式になることは文法化の観点や言語類型論的観点から見れば何ら不自然ではないと考えられる。これまでの中国語動詞のアスペクト研究はおおむね、「V了」、「V着」、「V过」の意味と機能に焦点を当て、その他のアスペクト的意味を表すと思われる形式、「V有」と「有V」を個々の形式ごとの研究に預けつつ、行われてきた。その結果、「V了」、「V着」、「V过」は中国語のアスペクト形式の範例としてしばしば取り上げられるが、「V有」や「有V」などの他の形式は暗黙のうちに純粋なアスペクト形式として考慮されなくなってしまった。しかしながら、中国語アスペクトの全体像を解明するには、このような周辺的なア

⁶ メタファーは、2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩である (靱山 2002)。そして、概念メタファーとは、「ある対象 (= 目標領域) を、別のよくわかっている物事 (= 起点領域) を通して理解するという認知の仕組みであり、言語の基盤を成す」 (靱山 2014:98)。

⁷ 文法化とは、内容語が徐々に機能語へと変化していくことである。詳しくは Heine et al. (1991) ; Hopper and Traugott (2003) などを参照されたい。

⁸ 「存在型アスペクト形式」は、安・福嶋 (2005)、金水 (2006a)、岡 (2013b) などで使用されている用語である。

スペクト形式とされているものを体系に位置づけ、体系の機能単位間の対立という観点からの考察も欠かせないものであると考えられる。

一方、日本語動詞のアスペクト研究はおおむね、動詞のテ形に存在動詞「イル」が後接する「V テイル⁹」の意味と機能に焦点を当て考察が行われてきたが（副島 2005:6）、「V テイル」の他に、動詞のテ形に存在動詞「アル」が後接する「V テアル」も1つのアスペクト形式として考えられる（益岡 1987；金水 2000；原沢 2005；副島 2005、2007；神永 2008 など）。「V テイル」と「V テアル」は存在動詞「イル」、「アル」の場所・空間的な存在の意味からの拡張であり（山梨 1995:67）、存在型アスペクト形式であるとされている（安・福嶋 2005；金水 2006a など）。文（1.10）では、「V テイル」を用いることによって、動詞の表す動作が基準時の前後に押し広げられた姿として捉えられている。すなわち、「歩く」という動作が存在しており、「動作の継続」の意が表されている。これに対し、文（1.11）では、「V テアル」を用いることによって、動詞の表す動作が終わった後の対象の結果状態が存在していると捉えられている。すなわち、「結果の継続」の意が表されている。

(1.10) 太郎と花子はゆっくり歩いている。

(1.11) 窓が開けてある。

（作例）

日本語のアスペクト研究では、数多く積み重ねられてきた「V テイル」形式に関する研究と比べ、「V テアル」形式に関する研究の蓄積はまだ浅い。また、日中アスペクトの対照研究の中では、日本語の「V テアル」と中国語の「V 着」との対照が多く取り上げられている（鄭 2010；郑・冯 2010；刘 2012；北村 2013 など）。しかしながら、表 1-1 が示すように、中国語の「V 着」は「V テアル」とは異なり、「結果の継続」だけではなく、「動作の継続」を表す場合が多い。つまり、中国語の「V 着」は日本語の「V テアル」ではなく、「V テイル」に対応していると考えられる。

⁹ 先行研究では、動詞の「テイル」、「テアル」形式については、「スル」との対立の観点から「シテイル」、「シテアル」と表記するケースが多いが（工藤 1995；副島 2007 など）、本研究では、中国語の「V 有」、「有 V」との対照観点から、「V テイル」、「V テアル」と表記する。ただし、「V テイル」、「V テアル」の意味は「V テ」の意味と「イル」や「アル」の意味からなっていると考えられる。

表 1-1. 「V 着」と「V テアル」との意味的特徴

	結果の継続	動作の継続
V 着	○	○
V テアル	○	×

一方、日本語教育では、「V テアル」は困難な項目の 1 つであり、初級項目として提示されているが¹⁰、日本語学習者は中上級に至っても、十分習得できるとは言い難い（江田 2002:59）。これまで、中国語には日本語「V テアル」に該当する構文が存在しないと言われている（北村 2011；副島 2017 など）。中国語国内の日本語教科書においても、「V テアル」構文に対して、「V テイル」に対応する「V 着」構文や「V 了」構文で説明されている。したがって、中国人日本語学習者にとっては、「V テアル」の意味特徴を理解するのがより難しいと考えられる。

「V テアル」構文に該当する中国語構文が本当に存在していないかと筆者は考え続けてきた。文 (1.12)、(1.13)、(1.14) が示すように、日本語の場合、「書く」、「ちりばめる」、「置く」のテ形に本来の存在動詞「アル」が結びついている。同様に、中国語の場合、「写」、「嵌」、「安」の後に本来の存在動詞「有」が結びついている。両方とも動作主が義務的に省略されており、対象の結果状態に焦点が置かれている。つまり、中国語の「V 有」と日本語の「V テアル」は形式的にも機能的にも類似しており、対応関係が見られる。

(1.12) a. 封筒の裏に石田玲子という名前が書いてあった。

(『ノルウェイの森』)

b. 信封 后面 写有 石田玲子 的 名字。

xìnfēng hòumian xiě-yǒu shítíánlíngzi de míngzi

封筒 裏 書く-YOU 人名 の 名前

(『挪威的森林』)

(1.13) a. 襖は金粉がちりばめてあった。

(『雁の寺』)

¹⁰ 中国国内で広く使われている日本語教科書『新編日語』第 2 冊の第 1 課で「V テアル」が提示されている。

- b. 隔扇 上面 嵌有 金粉。
 géshàn shàngmian qiàn-yǒu jīnfěn
 襖 上 鏤める-YOU 金粉

(『雁寺』)

- (1.14) a. 窓際に机と椅子が置いてある。

(『あした来る人』)

- b. 窗边 安有 桌椅。
 chuāngbiān ān-yǒu zhuōyǐ
 窓際 置く-YOU 机と椅子

(『情系明天』)

このように、中国語の「V有」と日本語の「Vテアル」に共通して見られることは、偶然なのか、それとも言語類型論的に意味のあることなのか。また、偶然でないとすれば統一的に説明できることなのか。

これまで、中国語の「V有」は個別言語におけるアスペクトの問題と関連付けて論じられてきたが、その意味機能をより明らかにするためには、他の言語との比較・対照が有効である。両表現に関する対照研究は、筆者の知る範囲では見つけることはできなかった。そこで、本研究は、存在・所有動詞である中国語の「有」と日本語の「アル」から文法化された形式である「V有」と「Vテアル」を中心に考察し、他の存在型アスペクト形式との比較を通して、日中両言語の存在型アスペクト形式の特徴を明らかにすることを目的とする。本研究は、中国語の存在型アスペクト形式「V有」は、場所・空間的な存在の意味から拡張したものであり、継続相「V着」と相補分布的な関係をなし、1つの「客体結果相 (objective resultative)¹¹」であることを主張する。

1.2 研究対象

前述した問題意識と目的から、本研究は中国語の存在動詞「有」と日本語の存在動詞「アル」を語彙的源泉とする存在型アスペクト形式に焦点を当てて考察する¹²。

¹¹ 「客体結果相」は副島(2007)の用語である。Nedjalkov(ed)(1988)の言うところの「objective resultative」である。

¹² 中国語では、動詞「在」も物や人の存在を表すことができるが、「有」構文とは異なり、「在」構文

1.2.1 中国語における考察対象

張（2006:67-86）、張編（2010:565-576）をふまえ、中国語「有」構文は以下の5つのタイプに分けることができる。用例は全て張（2006:67-73）によるものである¹³。

A. NP₁+有+NP₂

- (1.15) 他 有 五十元 钱 和 一块 手表。
tā yǒu wǔshíyuán qián hé yīkuài shǒubiǎo
彼 YOU 50元 と 1つ 腕時計
(彼は50元と1つの腕時計を持っている。)

B. NP+有+AP

- (1.16) 道路 有 笔直 有 曲折。
dàolù yǒu bǐzhí yǒu qūshé
道路 YOU 真っ直ぐ YOU 曲っている
(道路は真っ直ぐな所もあるし、曲っている所もある。)

C. NP+有+QP

- (1.17) 我方 的 意见 有 三点。
wǒfāng de yìjiàn yǒu sāndiǎn
当方 の 意見 YOU 3点
(当方は3点の意見がある。)

D. NP₁+V 有+NP₂/QP

- (1.18) 大厅 里 聚集有 几百 人。
dàtīng lǐ jùjí-yǒu jǐbǎi rén
ホール 中 集まる-YOU 何百人
(ホールには何百人も集まっている。)

は一般に特定された物や人はどこに存在するかという意味を表し、所在文とされている。

¹³ AP=形容詞句；QP=数量詞句

(1.19) 这 房子 已经 空有 一年多 了。

zhè fángzǐ yǐjīng kōng-yǒu yīniánduō le

この家 既に 空く-YOU 一年余り LE

(この家は既に一年余り空いている。)

E. NP₁+有+VP

(1.20) 他 有 准备。

tā yǒu zhǔnbèi

彼 YOU 準備する

(彼は準備してある。)

上記の A~E のうち、A~C にある「有」は本来の存在・所有動詞として使用されている。そして、D~E にある「有」は場所・空間的な存在の意味から文法化されたアスペクト形式であると考えられる (宋 1994 ; 王 2014 など)。本研究では、タイプ D の存在型アスペクト形式「V 有」に焦点を当てて考察する。また、構文は「孤立して存在するのではなく、相互に有機的な関係を保って存在する」(益岡 1997:182) と考えられる。「V 有」構文の意味特徴を明らかにするためには、構文の表す幾つかの個別的な意味相互の間にいかなる関係が構成されているかという構文の多義性を考察するだけでなく、異なる構文の間の意味的な繋がりへの考察も欠かせないものであると考えられる。したがって、「V 有」に関連するタイプ E の存在型アスペクト形式「有 V」を取り上げ、両者の比較を通して「V 有」の特徴をより明らかにする。さらに、この 2 つの形式を中国語アスペクトの体系に位置づけて、他の存在型アスペクト形式の「V 着」、「在 (zài) V」および完了型アスペクト形式「V 了」と比較させる。ただし、文 (1.21)、(1.22) のように、「拥有 (擁している/もっている)」、「含有 (含んでいる)」のような「V 有」は、既に語彙項目として辞書に記載されているため、考察の対象外とする。

(1.21) 据悉, 朝鲜 已经 拥有 核武器。

jùxī cháoxiān yǐjīng yōng-yǒu héwǔqì

聞くところによれば 北朝鮮 既に もっている 核兵器

(聞くところによれば、北朝鮮は既に核兵器をもっているそうだ。)

(1.22) 橙子 中 含有 丰富的 维生素 C。
chéngzi zhōng hán-yǒu fēngfù de wéishēngsù
オレンジ 中 含んでいる 豊富な ビタミン C
(オレンジの中に豊富なビタミン C が含まれている。)

(作例)

また、「有 V」構文に関しては、近年、文 (1.23)、(1.24) に示されているような「有 V」構文も標準語の中に定着しつつある (王 2006; 王・马 2008; 王 2014 など)。本研究は (1.23)、(1.24) のような「有 V」構文も考察の対象とする。

(1.23) 我 有 吃 早饭。
wǒ yǒu chī zǎofàn
私 YOU 食べる 朝ご飯
(私はもう朝ご飯を食べた。)

(1.24) 我 跟 他 有 说 这件事。
wǒ gēn tā yǒu shuō zhèjiànshì
私 彼に YOU 話す このこと
(このことはもう彼に話してあった。)

(作例)

1.2.2 日本語における考察対象

日本語の存在型アスペクト形式として、動詞のテ形に存在動詞「イル」、「アル」が後接する「V テイル」、「V テアル」が挙げられる (安・福嶋 2005; 金水 2006a; 岡 2013b など)。この 2 つの形式は、寺村 (1984) の言うところの二次的アスペクト形式である¹⁴。

(1.25) 雨が降っている。

¹⁴ 寺村 (1984) は日本語のアスペクトを一次的アスペクト、二次的アスペクト、三次的アスペクトに分けている。一次的アスペクトとは、スル (未然) とシタ (已然) との対立を表す動詞活用形を指す。二次的アスペクトとは、動詞のテ形に「イル、アル、シマウ、イク、クル」などの補助動詞が後接してからなったアスペクトの形式をいう。そして、「降り始める」、「話しかける」のように、動詞の連用形につくものが三次的アスペクト形式としている。

(1.26) 机の上に本が置いてある。

(作例)

その他に、(1.27)、(1.28)のように、「動詞連用形+ツツ」に「アル」が後接した「Vツツアル」も存在型アスペクト形式であると考えられる。副島(1998a、1998b、2007)は「Vツツアル」という形式をアスペクトのカテゴリーを構成する1成員として認定し、「継続性」を表す非完結相の形式と位置づけている。

(1.27) 「歴史」というキーワードを柱に、活性化への道は、多彩な方向に伸びつつある。

(1.28) 政府の経済政策は、大きな岐路に差し掛かりつつある。

(『BCCWJ-NT』)

これまでの日本語動詞のアスペクト研究は、主に「Vテイル」の意味と機能に焦点を当て、考察が行われてきたが、「Vテアル」に関する研究の蓄積がまだ浅いと言える。本研究は、中国語の「V有」、「有V」に対応する形式として、「Vテアル」を中心に上げる。日本語の存在動詞「イル」と「アル」はともに「存在」を表すが、「Vテイル」ではなく、「Vテアル」を中心に上げて中国語の「V有」、「有V」と対照する理由として、次の通りである。「『イル』のほうがある特定の『存在』にのみ用いられる有標形式であるのにたいし、『アル』は無特徴的形態であると考えられる」(副島 2007:214)。日本語とは異なり、中国語には「イル」のような有生物の存在を表す「有標形式」が存在していない。存在物のある場所・空間での存在を表す時に、存在物の有生か無生に関わらず、全て存在動詞「有」を使用することができる。この点からみれば、中国語の「有」は日本語の「イル」よりも「アル」のほうに近く、無標形式であると考えられる。また、存在表現と所有表現に関しては、英語やスペイン語などの西欧語には、BE型とHAVE型との対立が多く見られる。これに対して、日本語と中国語にはそのような対立は見られない。日本語の「アル」と中国語の「有」は存在動詞のみならず、所有動詞として用いられることも可能である。「イル」も所有文に用いられるが、所有文においても「イル」が有生物の所有を表すことに限られているため、「アル」と比べてやはり「有標形式」であると考えられる。

また、人為的事態の結果状態を表す表現として、文(1.29)、(1.30)のような受動表現「Vラレテイル」も挙げられる。

(1.29) 教室の壁に地図が貼られている。

(1.30) 机の上に本が置かれている。

(作例)

文(1.29)、(1.30)は「結果の継続」を表す「Vテアル」構文と類似しており、動作の主体が文上に明示されないことが多い。原沢(2005)も指摘するように、両者が実際どのように使い分けられているのかについてまだ議論の余地がある。本研究では、受動表現「Vラテイル」との比較も視野に入れ、「Vテアル」の特徴をより明らかにする。

1.3 研究方法

本研究は認知言語学の枠組みで、アスペクトを存在論的に位置づけて捉える。すなわち、アスペクトを事態の存在の在り方を規定する仕方の1つとして捉える(岡2001、2013b)。中国語の存在動詞「有」、日本語の存在動詞「アル」から文法化された存在型アスペクト形式—中国語の「V有」と日本語の「Vテアル」を実証的観点から諸特性を観察・調査することによって、両言語における存在型アスペクト形式の特徴を明らかにする。木村(2006)も指摘するように、「テンスやアスペクトという文法的な表現手段が動作や事態の現実的なあり様を話し手の時間的視点から捉えるものだとするなら、それとは別に、事態や事物の現実的なあり様を話し手の空間的視点において捉えるという表現手段があってもよいはずである」(p.60)。具体的には、存在型アスペクト形式が典型的存在構文と深く関わっていると考え、日中対照の観点から、典型的存在構文からの「V有」構文と「Vテアル」構文の拡張過程を考察し、両構文の統語的特徴、基本的意味や派生的意味を究明する。もっとも周辺の拡張例も中心となる典型的存在構文から何らかの形で動機づけられていると考えられる。また、構文の「外的連関¹⁵」という観点から「V有」構文と「有V」構文を比較し、「V有」構文の特徴をより明らかにする。さらに、体系の機能単位間の対立という観点から他の存在型アスペクト形式や完了型アスペクト形式と比較し、「V有」と「Vテアル」はそれぞれのアスペクト体系にどのように位置づけられるかを検討する。最後に、コーパス調査を通じて、これらの形式の使用実態を示し、実証的な考察を行う。

データに関しては、実際の言語使用状況を把握するため、出来る限りコーパスから収集

¹⁵ 「外的連関」は益岡(1997)の用語である。異なる構文の間の意味的なつながりを問題にする観点である。

した実例を使用する。対照研究では、対訳コーパスに基づいた研究は少なくないが、翻訳作業における訳文の選択は訳者個人の主観的要素に左右されることが多いため、対訳のみを頼りに両言語または多言語間の異同を記述して、そこから導かれた結論は必ずしも納得できるものではない。また、日中対照研究に多く使用される『中日対訳語料庫 第一版¹⁶』（日中対訳コーパス 第一版）には、中国語の「V 有」構文、「有 V」構文と日本語の「V テアル」構文の対訳データはそれほど多くない。よって、本研究では、対訳コーパスの他に、中国語のデータと日本語のデータをそれぞれ扱う個別言語のコーパスも利用する。本研究で使用される主なコーパスは以下の通りである。

【中国語】

- ・『中日対訳語料庫 第一版』（日中対訳コーパス 第一版）
- ・『人民网报刊杂志搜索¹⁷』（人民網新聞雑誌検索）
- ・『媒体言語語料庫¹⁸』（Media Language Corpus）
- ・『北京大学中国語言学研究中心語料庫¹⁹』（北京大学中国語学研究センターコーパス）
- ・『北京口語語料庫²⁰』（北京話し言葉コーパス）

¹⁶ 北京日本学研究中心によって開発された対訳コーパスである。『中日対訳コーパス 第一版』には文学作品と文学作品以外のものが収録されている。文学作品は中国語原著 23 篇、日本語原著 22 篇とその訳本を合わせて 105 篇（約 1130.3 万字）である。文学作品以外は中国語原著 14 篇、日本語原著 14 篇、日中共同のもの 2 篇とその訳本を合わせて 45 篇（約 574.6 万字）である。

¹⁷ 『人民网报刊杂志搜索』（人民網新聞雑誌検索）は、『人民日報』をはじめ、『京華時報』、『江南時報』などの 20 以上の全国紙の新聞記事が収録されている新聞データベースである。新聞データベースを用いた理由は、「V 有」表現は話し言葉より書き言葉のほうに多く使われているためである。

<http://search.people.com.cn/rmw/GB/bkzzsearch/index.jsp>

¹⁸ 中国伝媒大学（Communication University of China）国家語言資源観測と研究有声媒体センターによって開発されたコーパスである。2008 年から 2013 年までの 6 年間の 34039 個のラジオ、テレビ番組の音声データを書き起こしたコーパスである。文字数は 2.4 億字である。

<http://ling.cuc.edu.cn/RawPub/>

¹⁹ 北京大学中国語学研究センター（Center for Chinese Linguistics PKU）によって開発されたコーパスである。新聞、小説、テレビ番組などが収録されている。文字数は約 5.8 億字である。以下、「CCL」と略す。

http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/

²⁰ 北京語言学院語言教学研究所によって開発された話し言葉コーパスである。北京出身の 374 人を対象にインタビューを行い、その自由回答の発言をそのまま記録したものである。以下、「BJKY」と略す。

【日本語】

- ・『現代日本語均衡コーパス 通常版²¹』（BCCWJ-NT）
- ・『名大会話コーパス²²』
- ・『新潮社 100 冊（CD-ROM）²³』

コーパスを用いて言語を分析するメリットとして、次の 2 点が挙げられる。(i) 言語はヴァリエーションに富んでいるものである。内省では視野に入らない様々な言語事実を明らかにすることができる。(ii) 個別的な語法や語用については、母語話者であっても内省はかなり不安定である。コーパスを用いて、大規模なデータに対して漏れなく網羅的に言語データを収集することによって、言語の使用実態を客観的に反映し、分析することができる。

ただし、コーパスによる言語分析にも限界がある。例えば、非文から見えるものはコーパスからは見えない。よって、本研究はコーパスに基づく分析だけではなく、筆者による内省的判断も行う。中国語や日本語の作例や文法性判断テストは基本的に筆者の内省によって判断するが、インフォーマントとして複数の母語話者に協力してもらう。

1.4 本論文の構成

本論文は中国語と日本語における存在型アスペクト形式の特徴を明らかにするという目的で日中アスペクト研究の 1 つとして位置づけられる。本論文は 8 章によって成り立っている。

第 1 章では、本研究の研究動機と目的、研究対象、研究方法および用語の定義について述べる。

第 2 章では、動詞カテゴリーにおけるアスペクトの位置づけを述べた上で、中国語と日本語におけるアスペクト研究の流れを概観し、その問題点を指摘し、本研究の研究課題を

²¹ 日本語の書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって無作為にサンプルが抽出されているコーパスである。文字数は約 1.04 億字である。以下、「BCCWJ-NT」と略す。

²² 120 会話、合計約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである（研究代表者：大曾美恵子）。

²³ 新潮文庫に収められている作品の中から 100 冊分をデジタルデータ化し、新潮社から発行されている CD-ROM である。

提示する。

第3章では、本研究に関連する認知文法、場の理論、参照点構造、動的使用基盤モデル、事態認知モデルなどの認知言語学の理論的枠組みを紹介する。

第4章では、「V有」と存在動詞「有」との関係に着目し、「V有」構文を2類型に分類した上で、「V有」構文と典型的存在構文との拡張関係を究明する。また、事態認知モデルを用いて「V有」構文に用いられる動詞の特徴を分析する。さらに、体系の機能単位間の対立という観点から、存在型アスペクト形式「V着」、「在V」との比較を通して、「V有」は対象の結果状態に焦点が置かれる「客体結果相」であることを明らかにする。

第5章では、動的使用基盤モデルを用いて、「有V」構文が「有N」構文から拡張したことを明らかにする。また、事態認知モデルを用いて「有V」構文に用いられる動詞の特徴を分析する。さらに、「有V」の機能に相当するとされている完了型アスペクト形式「V了」と比較した上で、「有V」構文の意味特徴を明らかにする。

第6章では、「Vテアル」と存在動詞「アル」との関係に着目し、「Vテアル」を3類型に分類した上で、典型的存在構文との拡張関係を明らかにする。また、Langacker (2008 etc.) の認知文法の枠組みで、分類された3類型の「Vテアル」構文の合成構造を分析する。さらに、これまでの研究と違って、小説、新聞、会話という3つの異なるジャンルのテキストへの調査を通して、「Vテアル」の使用実態を明らかにする。最後に、「Vテイル」、「Vラテイル」との比較を通して、「Vテアル」は客体対象の結果状態に重点が置かれる「客体結果相」であることを明らかにする。

第7章では、第4章、第5章と第6章の考察をふまえ、統語的、意味的な観点から中国語の「V有」、「有V」を日本語の「Vテアル」と対照し、三者の共通点と相違点を明らかにする。また、文法化の観点から、中国語の「V有」、「有V」と日本語の「Vテアル」が文法化プロセスにおいて類似していることを指摘する。最後に、存在型アスペクト形式から見て事態把握においては中国語は日本語に近いことを主張する。

第8章では、本論文の結論、意義を述べて今後の課題を提示する。

1.5 用語の定義

ここで、本研究に用いられる「進行相/継続相」、「結果相/パーフェクト/状態」という概念を定めておく。

1.5.1 進行相と継続相

Comrie (1976) は「非完結性 (imperfectivity)」の下位分類として、「進行相 (progressive)」と「継続相 (continuous)」に分類している。前者が後者に含まれ、継続性が非状態性と結合したものが進行性であると指摘している。また、荒川 (2015) は『『持続』[本稿でいう「継続」]は同一状態の維持、『進行』は除々の変化があり、事象が幾つかの局相をたどる』(p.106) と述べている。本研究は、これらの研究と同じ立場に立ち、「進行相」と「継続相」を区別して使用する。例えば、中国語の「在」と「着」とが事態の内部に立ち入る非完結相 (imperfective) であるが、両者の表すニュアンスが異なる。「在」は幾つかの局相を含む「進行相」であり、事態を動的に捉えている。一方、「着」は事態が同じ状態に維持され、静的に捉えられている。文 (1.31) と (1.32) においては、「張三が教科書を取る」という事態が表されるが、前者は教科書を取るために一連の動作が行われ、これらの動作を動的事態として捉えている。例えば、張三は教室で教科書を忘れたことに気づき、急いで研究室に戻って、机の上にある教科書を取ろうとしている。これらの動作は全て「在」によって捉えられる。後者は、教科書が既に張三の手のところに存在しており、目の前に張三が教科書を持っている状態を静的に表している。

(1.31) 张三 在拿 上课 用 的 教科书。

zhāngsān zài ná shàngkè yòng de jiàokēshū

張三 ZAI 取る 授業用 の 教科書

(張三は授業用の教科書を取っている。)

(1.32) 张三 拿着 上课 用 的 教科书。

zhāngsān ná-zhe shàngkè yòng de jiàokēshū

張三 持つ-ZHE 授業用 の 教科書

(張三は授業用の教科書を手に持っている。)

(作例)

1.5.2 結果相、パーフェクトと単なる状態

本研究で用いられる「結果相」という用語は Nedjalkov and Jaxontov (1988) の言うところの「resultative」である。Nedjalkov and Jaxontov は「結果相 (resultative)」に関して、次のように定義している。

The term resultative is applied to those verb forms that express a state implying a previous event. The difference between the stative and the resultative is as follows: the stative expresses a state of a thing without any implication of its origin, while the resultative expresses both a state and the preceding action it has resulted from. Therefore the stative may denote natural, primary states which do not result from any previous event.

(Nedjalkov and Jaxontov 1988:6)

結果相という概念は先行する事態によってもたらされる状態を表す動詞形式に用いられる。状態相と結果相との違いは次の通りである。状態相は先行する事態を含意しない単なる物の状態を表すが、結果相は物の状態を表すとともに、その状態をもたらされた先行する行為も含意されている。よって、状態相は先行する事態を含まない最初の自然な状態を指す。

(和訳は筆者による)

また、Bybee et al. (1994:63) は「a resultative denotes a state that was brought about by some action in the past (結果相は過去のある事態によってもたらされた状態を表す)」と述べている。本稿は Nedjalkov (1988)、Bybee (1994) などに基づき、「状態 (stative)」と区別して、行為の結果としての状態が継続していることを表す継続相を「結果相」と呼ぶことにする。つまり、「結果相」においては先行した出来事が背景化されている。「動作の継続」に対し、「結果相」は変化の「結果の継続」を表す形式である²⁴。「結果相」の概念構造は、図 1-1 に示すことができる。認知主体は眼前に存在する結果状態を通して背景化された動作行為へアクセスするという構造である。すなわち、動作行為が終わった後の結果状態が眼前に存在しており、行為と結果という2つの平面において、結果のほうに重点が置かれる。

²⁴ 副島 (2005) は「動作の継続」を動きの開始点において状況が成立し、その結果が継続している状態にあると捉えることが可能である。つまり、「動作の継続」と「結果の継続」を「結果」で統一的に説明することができる旨を指摘している。

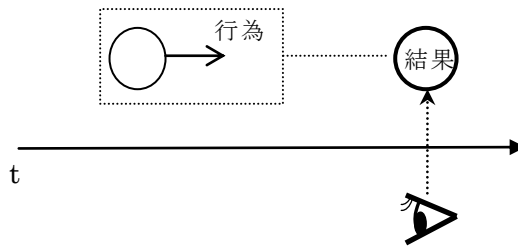


図 1-1. 結果相の概念構造

「結果相」を「パーフェクト」と見なす場合がしばしばある。本研究でいう「パーフェクト」は、英語「perfect」の訳語である。英語の「have+p.p.」という形式によって表されている意味に相当する。中国国内のアスペクト研究では、「完成体」や「完成貌」などの用語が多く用いられる。しかし、「完成」という言葉は偶に「完結相 (perfective)」として使われているため、混乱を招く可能性がある。また、それに対応する日本語として、一般に「完了相」という訳語が使われているが、「完了相」に対してもさまざまな定義が与えられている。例えば、楊 (2001) などでは、「perfective」を「完了相」と呼んでいる。それゆえ、本研究では、工藤 (1995)、須田 (2010) などに倣い、「perfect」を「パーフェクト²⁵」と呼び、「完結相 (perfective)」と区別する。

「パーフェクト」は、「ある過去の場面がひきつづき現在にまでかかわってくることをしめしているのである」(Comrie 1976:52 ; 山田訳 1988:83)。「パーフェクト」については、Comrie (1976) は次のように述べている。

One way in which the perfect differs from the other aspects that we have examined is that it expresses a relation between two time-points, on the one hand the time of the state resulting from a prior situation, and on the other the time of that prior situation.

(Comrie 1976:52)

いままでわれわれがしらべてきた、そのほかのアスペクトからパーフェクトがことなっていることのひとつとして、パーフェクトはふたつの時点のあいだの関係を表現している。つまり、一方には先行する場面から結果として生じてくる状態の時間があり、他方には先行する場面そのものの時間がある、パーフェクトはこれらのふたつの時

²⁵ Bybee et al. (1994) では、「anterior」と呼んでいる。

点のあいだの関係を表現しているのである。

(和訳は山田 1988:83-84 による)

また、工藤（1995）は、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力をもっていること」を「パーフェクト」と呼んでいる。本研究では、これらの先行研究をふまえ、「先行した行為の効力が基準時まで（および、それ以降）引き続き存在していること」を「パーフェクト」と呼ぶ。「パーフェクト」は純粋なアスペクト形式ではなく、テンスとアスペクト両方に関わっていると主張されているが（Comrie 1976）、日本語、中国語、英語などの研究では、しばしば「パーフェクト」をアスペクトとして取り上げている。例えば、Friedrich（1974:36）はアスペクト体系を以下の3つの「基本アスペクトカテゴリー（basic aspect categories）」から分析することができると指摘している。

- (1) durative, continuative, etc.
- (2) punctual, completive, perfective, etc.
- (3) stative, perfect, etc.

また、Li et al.（1982）はアスペクトを「完結相（perfective）」、「非完結相（imperfective）」と「パーフェクト（perfect）」という3つの基本カテゴリーに分けることができると述べている。「パーフェクト」は、動詞の表す運動が、基準となる時間とどのように関わるかについてのカテゴリーであるため、アスペクトであると考えられる。図 1-2 に示される通り、行為と結果という2つの平面のうち、認知主体は結果よりも行為のほうに関心を示している。

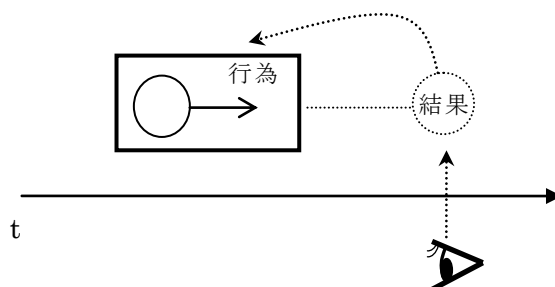


図 1-2. 「パーフェクト」の概念構造

「パーフェクト」の下位分類としては、「状態パーフェクト (statal perfect)」と「動作パーフェクト (actional perfect)」がある。前者は「後続の時間的平面に重点が置かれているならば、先行の変化、本来の意味での動作に条件づけられたなんらかの状態 (あるいは静的関係)」を表すのに対し、後者は「2つの時間的平面のうち先のものに重点が置かれているならば、普通関心の中心にあるものは、自身の後にあれこれの痕跡、結果を残す動作、なんらかの特殊な状況を作る動作、簡単に言えば後続の時間的平面にとってあれこれの点で顕在的であり、後続の時間的平面の観点から観察される動作である」(Маслов 1984:117)。つまり、行為よりも結果のほうに重点が置かれ、基準時における主体か客体の結果状態が視覚で確認できるものが「状態パーフェクト」であり、結果よりも行為自体に重点が置かれ、基準時における主体か客体の結果状態に関心が示されないものが「動作パーフェクト」である。よって、「状態パーフェクト」が「結果相」に相当すると考えられる。そして、本研究で用いられる「パーフェクト」は「動作パーフェクト」を指す。

上述のように、「結果相」と「パーフェクト」の違いとしては、1つの出来事について、認知主体は行為と結果という2つの平面のうちに、先行する行為よりもその結果状態に重点を置くのが「結果相」である。先行する行為に重点を置くのに対して、その結果に関心をあまり示さないのが「パーフェクト」である。そして、先行する行為を全く考慮に入れず、結果状態に関心を寄せすぎると、「単なる状態」になる。

第2章 先行研究および研究課題

アスペクトのカテゴリーは日本語にも中国語にも存在するとされている。これまで、Comrie (1976) のアスペクトに対する定義に基づき、日本語アスペクト研究では、完結相「スル」—非完結相「シテイル」の二項対立をなすと捉えられている（奥田 1977、1978；鈴木 1983；高橋 1985、2003:65-104；工藤 1995 など）。同様に、中国語アスペクト研究では、主にアスペクト形式「了」、「着」、「过」とそれらを伴わない述語との対立を中心に議論が展開されている²⁶（石 1992；Smith 1997:263-296；刘他 2001:361-410；讚井 2002；劉 2006 など）。本章では、中国語と日本語のアスペクト研究の全体的な流れを概観し、従来
の捉え方の問題点を指摘し、本研究の研究課題を提示する。

本章の構成は以下の通りである。

2.1 節では、アスペクトの定義と動詞カテゴリーにおけるアスペクトの位置づけを論じる。2.2 節では中国語アスペクトに関する先行研究を、2.3 節では日本語アスペクトに関する先行研究を、2.4 節ではアスペクトにおける日中対照研究を概観する。2.5 節では日中アスペクト論における問題点を述べる。その上で、2.6 節では本研究の研究課題を提示する。

2.1 アスペクトの定義およびその位置づけ

これまで、一般言語学や個別言語のアスペクト研究では数多くの成果が挙げられてきた。研究者によって、アスペクトに関する定義も様々である。Comrie (1976:3) のアスペクトに対する定義をふまえ、本研究でいうアスペクトを、「事態の時間構成に対して、発話者のいろいろな捉え方を表す形態論的なカテゴリーである」と規定する。すなわち、アスペクトを動詞の表す動作の流れの姿と考えると、1 つの事態の時間構成に対して、発話者は外部の視点からひとまとまりとして捉える場合もあれば、事態の内部に立ち入って進行中の一部分だけを捉える場合もある。また、動作の開始局面或いは終結局面だけを捉える場合もあれば、動作・行為による結果の状態に焦点を当てる場合もある。このように、動詞の表す動作の流れのどの局面に焦点を当てて捉えているかというアスペクト的意味を表すには様々な方法がある。

²⁶ 讚井 (2002) は、中国語のアスペクトは「了」、「着」、「过」という言語形式によって担われており、「そもそもコムリーの言うような二項対立ではなく三項鼎立である」(p.74) と述べている。

アスペクトには、「事態アスペクト (situation aspect)」と「文法的アスペクト (grammar aspect)」とが存在する。「事態アスペクト」は、「話し手の (主体的な) 捉え方の中にあるのではなく」(村木 1991:276)、動詞及び動詞句に内在するアスペクト的意味を指す。したがって、「事態アスペクト」は「語彙的アスペクト (lexical aspect)」、「アクションスアルト (aktionsart)」とも呼ばれる。「事態アスペクト」に関する研究は Vendler (1967)、Dowty (1979)、Durst-Andersen (1992)、Smith (1997) などが挙げられる。現在、広く受け入れられているのは状態 (state)、活動 (activity)、完成 (accomplishment)、達成 (achievement) という Vendler (1967) の動詞に対する 4 分類である。これらの分類は次のような特徴をもっている。

状態：その本来的性質からして結果をともしない非動的な出来事。例えば、
ある、いる、等 (日本語)

知道 (知っている)、愛 (愛している)、等 (中国語)

活動：全体のうちのどの部分も同じ性質である動的過程。例えば、

踊る、読む、笑う、等 (日本語)；

跑 (走る)、吃 (食べる)、喝 (飲む)、等 (中国語)

完成：終点に達する前に動きが存在しつつ、終着点に向かっていく出来事。例えば、

本を 1 冊読む、2km 歩く、家を 3 軒たてる、学校まで歩く、等 (日本語)

看一本书 (本を 1 冊読む)、挖一个洞 (穴を 1 つ掘る)、煮饭 (ご飯を炊く)、盖房子 (家を建てる)、等 (中国語)

達成：動きが付随することなく、ある状態から別の状態へと瞬間的に飛躍する出来事。

きづく、はじまる、レースにかつ、山頂につく、等 (日本語)

毕业 (卒業する)、结束 (終わる)、消失 (消える)、到 (到達する)、等 (中国語)

(副島 2007:41 ; 中国語の用例は筆者による)

このうち、「完成」と「達成」は、動作が必然的に終了し、新たな結果状態を生み出す限界動詞 (telic verb) である。一方、「状態」と「活動」は必然的な終了限界をもたないがゆえに、非限界動詞 (atelic verb) である。限界に関しては、須田 (2010) では以下のように規定されている。

限界は、動詞のさししめず動作の時間的な展開のし方の特徴として、なによりもまず、動詞の語彙的な意味のなかに、その意味特徴の一つとして、含みこまれている。これを内的な限界と呼ぶが、その意味特徴の有無により、動詞は、限界動詞と無限界動詞に分けられることになる。たとえば、「倒れる」、「落ちる」などの動詞は、その動作がつきはて、それ以上展開しない限界という要素を、その語彙的な意味のなかに含んでいるが、「走る」、「ふるえる」などの動詞は、動作のつきはてる点が、その動作の性格からは導きだせず、限界という要素を、その語彙的な意味のなかに含んでいないと言える。前者が限界動詞であり、後者が無限界動詞である。

(須田 2010:139)

上述したように、「限界」は動詞の語彙的な意味の中に含まれている意味特徴であり、工藤（1995）の言うところの「内的時間的限界」である。これに対し、「学校まで走る」、「1時間歩く」のように、動詞の語彙的な意味ではなく、他の限定的条件によって、動作が限界に達することを表せる。これは工藤（1995）の言うところの「外的時間的限界」である。そして、特別な説明がない限り、本研究でいう「限界」を「内的時間的限界」とする。動詞の表す動作が限界に達したら、動作の主体或いは客体の対象がある状態から別の状態に変わることを表す動詞であり、「外的時間的限界」と区別する²⁷。

また、工藤（1995）は、アスペクト対立の有無の観点から、日本語動詞を「外的運動動詞」、「内的状態動詞」と「静態動詞」に大別している。そして、奥田（1977）の見解に従い、動作か変化かという観点と、主体か客体かという観点を組み合わせて、「外的運動動詞」をさらに「主体動作・客体変化動詞」、「主体変化動詞」と「主体動作動詞」に分類している。

²⁷ このような「限界」と「非限界」は、事物を「限界」/「非限界」的に捉える話者の認知能力にその基盤が求められる（Langacker 1987）。「限界」/「非限界」がモノに投射される場合に、空間的に境界がある「可算名詞」と空間的に境界がない「不可算名詞」という区別が考えられる。そして、モノの「限界」/「非限界」がコトに投射される場合に、事態の「完結」と「非完結」との区別が考えられる。

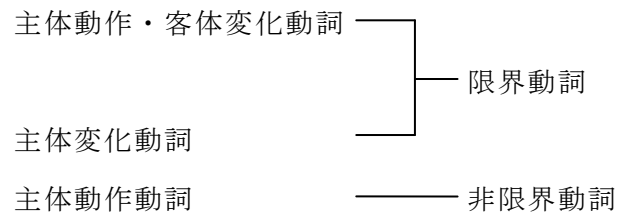


図 2-1. 限界動詞と非限界動詞

図 2-1 のように、限界動詞は、動作主による動作が終わった後に、動作の主体に変化が引き起こされることを表す主体変化動詞と、動作主が対象に働きかけて、客体の対象に変化を引き起こさせる主体動作・客体変化動詞を両方含めている。

具体的に、工藤（1995）の分類を次の図 2-2 にまとめることができる。工藤（1995）の動詞分類はアスペクト的特徴に基づく動詞の分類であり、しかも、主体か客体かという観点からの分類である。本稿で論じている「V 有」、「有 V」、「V テアル」に用いられる動詞の分類にも有効であると考えられる。

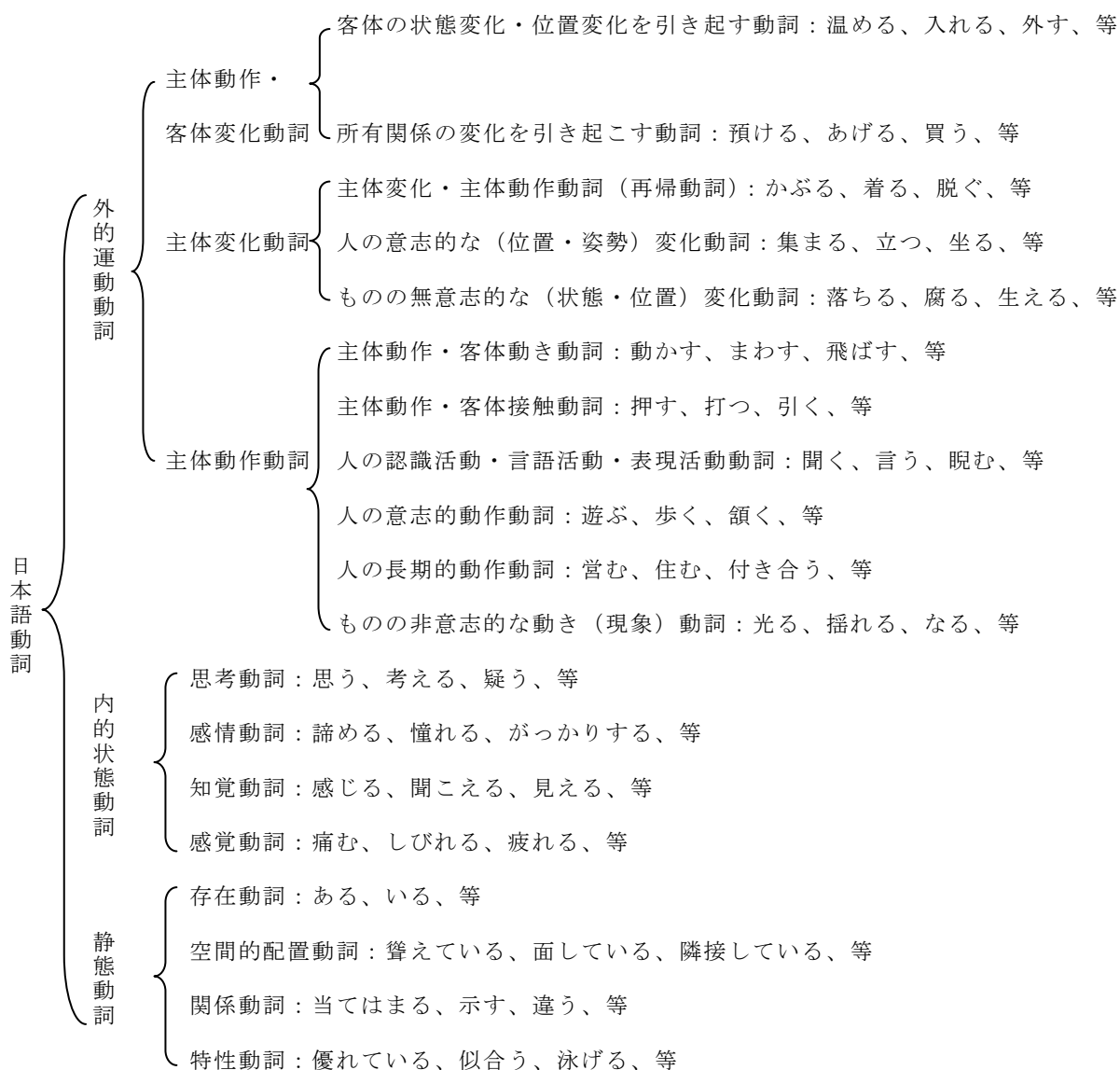


図 2-2. 工藤 (1995) による日本語動詞の分類

一方、「文法的アスペクト」は、動詞の屈折語尾や助動詞の付加などといった文法的形式によって表されている。「視点アスペクト (viewpoint)」(Smith 1997)、「統語的アスペクト」(田川 2005)とも呼ばれる。日本語の場合、「V テイル」、「V テアル」、「V ツツアル」などのアスペクト形式がある。中国語の場合、「V 着」、「V 了」、「V 过」などのアスペクト形式がある。中国語アスペクト研究では、このようなアスペクト形式は「体助詞 (体助詞)」と呼ばれている。本研究でいうアスペクトは、動詞自体がもつ内部的時間の構成といった「事態アスペクト」とは異なり、助動詞などの文法形式によって表される「文法的アスペクト」を指す。ただし、「文法的アスペクト」と「事態アスペクト」は緊密な関係を持ち、

「文法的アスペクト」が実際の文上に実現されるアスペクト的な意味は、「動詞語幹およびそれらと補語が結びついたものにあらかじめ備わっている」（副島 2005:26）ものである。

アスペクトの他に、文の中には、必ず表さなければならない動詞の文法カテゴリーとして、出来事と発話時の時間関係を示すテンス、文の主語が事象においてどのような役割を果たしているかを示すヴォイス、話し手の主観を表すムードという文法カテゴリーが存在する。これらの文法カテゴリーはどのように区分されているのだろうか。以下、これらの動詞の文法カテゴリーを分類し、アスペクトと他の文法カテゴリーとの相対的な関係を説明しておく。

Jakobson (1957) は一般言語学の立場から形態論的なカテゴリーを体系化し、「事象 (event [E])」、「参加者 (participant [P])」、「発言それ自体 (speech itself [s])」、「語られる内容 (narrated matter [n])」という4つの基本要素を立てている。これらを組み合わせると、語られる事象 (En)、発言事象 (Es)、語られる事象の参加者 (Pn)、発言事象の参加者 (Ps) という4つの項目とし、動詞の形態論的なカテゴリーのモデルを提示している²⁸。副島(2005、2007) は、Jakobson (1957) のモデルを以下の表 2-1 のように単純化して提示している。

表 2-1. 動詞カテゴリーの分類 (副島 2007:9)

	参加者が含まれる	参加者が含まれない
非転換子 (発言事象およびその参加者への関連づけを含まない)	PnEn (ヴォイス)	En (肯定否定) En (アスペクト)
転換子 (発言事象およびその参加者への関連づけを含む)	PnEn/Ps (ムード)	En/Es (テンス)

Jakobson (1957) のモデルに基づき、ヴォイスは語られる事象 (En) と語られる事象の参加者 (Pn) を特徴づけた動詞の形態論的なカテゴリーである。話し手の視点が関与することがある、発言事象 (Es) には関与しない。ムードは語られる事象 (En) と語られる事象の参加者 (Pn) との関係が発言事象の参加者 (Ps) に関連づけて特徴づける動詞の形態

²⁸ このモデルは個別言語の分析にも有効と思われ、村木 (1991) はこのモデルを用いて日本語の形態論的なカテゴリーを分類している。

論的なカテゴリーである。テンスは語られる事象 (En) を発言事象 (Es) に関連づけて特徴づける動詞の形態論的なカテゴリーである。アスペクトは語られる事象 (En) それ自体を特徴づける動詞の形態論的なカテゴリーである。つまり、アスペクトはヴォイス、テンス、ムードとは異なり、発言事象に関連づけられていない、語られる事象それ自体のみにかかわり、動詞の表す動作の姿を特徴づける形態的なカテゴリーである。

2.2 中国語アスペクトの体系

このようにして、述語の中核をなすアスペクトは研究者達の関心を引き寄せている。中国語アスペクトの研究は黎 (1924) の『新著国語文法』に端を発し、徐々に研究が広がり、国語学や対照言語学の分野において大きな関心が寄せられている。研究者によって、アスペクトとして捉えられる形式がまちまちである。いかなる形式をアスペクト形式と見なすべきかという問題は明らかにされているとは言い難い。

2.2.1 黎 (1924) と王 (1943) の分析

黎 (1924:122-127) は、助動詞として「可能」を表す「得 (de)」、「完成 (perfect)」を表す「了」、「持续 (continuous)」を表す「着」、「来着 (láizhe)」、「来 (lái)」、「起来 (qǐlái)」、「去 (qù)」、「下去 (xiàqù)」と「重叠法 (iterative)」を挙げている²⁹。(2.1) のように、「可能」を表す「得」は一般に「可能补语 (可能補語)³⁰」として扱われているため (刘他 2001:581-596)、ここでは詳しく論じない。

(2.1) 你 说 一 遍 我 听 听, 说 不 定 我 听 得 懂。
nǐ shuō yībiàn wǒ tīngtīng shuōbúdìng wǒ tīng dé dǒng
貴方 話す 一回 私 聞いてみる かもしれない 私 理解できる
(一回話してみてください。もしかすると私は理解できるかもしれません。)
(刘他 2001:583)

²⁹ 「来/起来」と「去/下去」はそれぞれ日本語の「～始める、～出す、～てくる」、「～つづける、～ていく」の意味に当たる。また、「重叠法」とは、動作を表す動詞を重ねて用いる「動詞の重ね型」を指す。

³⁰ 可能補語は、結果補語と方向補語に関連しており、主観的条件或いは客観的条件から、補語の表す結果又は方向が実現可能かどうかを表す。

黎 (1924) は「了」が「完成 (perfect)」を表し、必ずしも過去を表すとは限らないと述べている。文 (2.2)、(2.3)、(2.4) はそれぞれ「現在パーフェクト (present perfect)」、「過去パーフェクト (past perfect)」、「未来パーフェクト (future perfect)」を表している。

(2.2) 他们 来了 一会儿 了。

tāmen lái-le yīhuìr le

彼ら 来る-LE しばらく LE

(彼らはしばらく前から来ている。)

(2.3) 那时候 我多 喝了 几杯 酒。

nàshíhòu wǒ duō hē-le jǐbēi jiǔ

あの時 私 多く 飲む-LE 何杯か お酒

(あの時、私はお酒を少し飲みすぎた。)

(2.4) 我 总 不会 忘记了 你。

wǒ zǒng bùhuì wàngjì-le nǐ

私 いつも 否定 忘れる-LE 貴方

(私はいかなる場合でも貴方を忘れない。)

(黎 1924:124)

そして、文 (2.5)、(2.6) のように、「着」は「正在进行的持续 (進行中の持続)」を表すと述べられているが、「結果の継続」の意味については言及されていない。

(2.5) 他 在 那儿 坐着。

tā zài nàr zuò-zhe

彼 あそこに 座る-ZHE

(彼はあそこに座っている。)

(2.6) 武松 敲着 桌子。

wǔsōng qiāo-zhe zhuōzi

人名 叩く-ZHE テーブル

(武松はテーブルを叩いている。)

(黎 1924:125)

また、「来着」は「已完成的持续（既然の継続）」を表すと述べられている。つまり、過去のある事態または状態の効力が存在しているという意味が表され、「パーフェクト」の用法とされている。陈（2005）も「来着」を「パーフェクト」と考えている。

(2.7) 我 刚才 说 什么 来着?

wǒ gāngcái shuō shénme lái zhe

私 さっき 言う 何 LAIZHE

（さっき、私はなんて言いましたか？）

（作例）

これに対し、多くの研究者は「来着」を語気助詞³¹と考えている（吕 1999:348-349；朱 1999:235-237；熊 2003、2009；刘 2013 など）。本研究も「来着」を語気助詞と考える。「来着」は文末の「了」に相当し、いつも文末に位置し、文レベル上のものである。動作の姿を表すアスペクトとは異なる。例えば、(2.8) と (2.9) とがほぼ同じ意味を表している。そして、(2.10) に対し、「来着」を削除しても意味はほぼ変わらない。

(2.8) 昨天 下 雨 了。

zuótiān xià yǔ le

昨日 降る 雨 LE

（昨日、雨が降った。）

(2.9) 昨天 下 雨 来着。

zuótiān xià yǔ lái zhe

昨日 降る 雨 LAIZHE

（昨日、雨が降った。）

（作例）

(2.10) “故宫 的 房子 有 多少 间 来着?”

gùgōng de fángzǐ yǒu duōshǎo jiān lái zhe

故宫 の 部屋 ある 何室 LAIZHE

³¹ 中国語学では、文末に置かれて話し手の態度や気持を表す助詞を語気助詞と呼んでいる。

(故宮には部屋が何室ありますか?)

(刘 2013:73-76)

(2.11) “故宮 的 房子 有 多少 间?”

gùgōng de fángzǐ yǒu duōshǎo jiān

故宮 の 部屋 ある 何室

(故宮には部屋が何室ありますか?)

また、黎 (1924) は、(2.12)、(2.13)、(2.14) に示されている「来/起来」、「去/下去」が「方开始的持续 (開始直後の継続)」を、「重叠法」が「动作方开始与继续的进行 (動作開始直後の継続)」と「快完成之趋势 (もうすぐ完成する傾向)」を表すと述べている。

(2.12) 张三 的 病情 渐渐 好起来 了。

zhāngsān de bìngqíng jiànjiàn hǎo-qǐlái le

人名 の 病状 少しずつ よくなる-QILAI LE

(張三の病状は少しずつ良くなってきた。)

(2.13) 小红 擦干 眼泪, 又 继续 说下去。

xiǎohóng cāgān yǎnlèi yòu jìxù shuō-xiàqù

人名 拭く 涙 また 続ける 話す-XIAQU

(小紅は涙を拭いて、話し続けていった。)

(2.14) 小王 点点 头, 表示 赞成。

xiǎowàng diǎndiǎn tóu biǎoshì zàchéng

名前 頷くの重ね型 頭 示す 賛成

(小王はちょっと頷いて賛成を示した。)

(作例)

しかしながら、「来/起来」と「去/下去」は一般にアスペクト形式ではなく、「趋向补语 (方向補語)³²」であると考えられる (朱 1999:146-148; 刘他 2001:546-581; 張編 2010:308-310 など)。また、「動詞の重ね型」は動作がほとんど進行しない性格を有することから、動詞

³² 方向補語とは、動詞の後ろに付く、動詞の表す動作の移動方向を表す補語を指す。

のAspect形式とは考えにくい(俞 1954)。例えば、文(2.14)においては、「点点头(動詞「領く」の重ね型)」は瞬間動詞に近く、継続の意味は読み取れない。Яхонтов(1957)も、「動詞の重ね型」は「結果Aspectや一般Aspectと統一された体系をなすものではない。(略)動作がほとんど進行しない性格を有すること、弱化された性格を有することを示す点」(p.166)であるため、Aspect形式と見做すことができないと指摘している。

このように、黎(1924)の中国語助動詞に対する考察は中国語Aspect研究の第一歩であると考えられる。ただし、黎自身はAspectという概念に対して明確な定義を出していない。

黎(1924)を受け継いで、王(1943:151-160)はAspectを「情貌(情貌)」と呼び、Aspect形式が用いられない動詞の基本形を初めて「普通貌(中立相)」と名付けて、時間軸に位置づけられていない時間外の表現としている。基本形の他に、以下の6つのAspect形式を挙げている。

「进行貌(進行相)」である「着」は事態が進行中の状態にあることを表す。王(1943)は、黎(1924)とは異なり、結果の継続を表すにも「着」を用いることができると指摘している。

(2.15) 票上 开着 数目。
piàoshàng kāi-zhe shùmù
領収書の上 書く-ZHE 数字
(領収書には数字が書かれている。)

(王 1943:153)

「完成貌(完成相)」である「了」は出来事の完成を表す。黎(1924)と同様に、「了」は過去だけではなく、現在や未来の事態をさしだすこともできると指摘されている。

「近过去貌(近過去相)」の「来着」は文末に置かれて出来事が過ぎて間もないことを表す。「近過去相」にある「近」の時間程度は話し手の捉え方によって異なる。発話時直前に行われた出来事でなくても、「来着」を用いることができる。例えば、文(2.16)では、話し手が「先日のこと」を指している。

(2.16) 我 前儿 听见 秋纹 说, 妹妹 背地里 说 我 来着。

wǒ qiánr tīngjiàn qiūwén shuō mèimei bèidìli shuō wǒ lái zhe

私 先日 聞こえる 人名 言う 妹 裏で 言う 私 LAIZHE

(先日秋紋から聞いたが、妹は裏で私のことを言っていたそうだ。)

(王 1943:156)

「开始貌 (始動相)」である「起来」は動作が始まりつつあることを表す。これに対し、「继续貌 (継続相)³³」の「下去」は出来事が引き続き継続していくことを表す。そして、王 (1943) は黎 (1924) と違って、「動詞の重ね型」を「短时貌 (暫時相)」と呼び、出来事が極めて短い時間内で行われることを表すと指摘している。

2.2.2 Li and Thompson (1981) の分析

Li and Thompson (1981:184-237) は中国語のアスペクトを「完結相 (perfective)」の「了」と「完了化表現 (perfectivizing)」、「非完結相 (imperfective)」の「在」と「着」、「経験相 (experiential)」の「过」、「暫時相 (delimitative)」の「動詞の重ね型」という 4 種類に分類している。「完了化表現」とは、「坐到 (に座り込んで)」、「穿上 (着おわる)」、「看见 (見かける)」のような結果複合動詞であり、「結果アスペクト」(ЯХОПТОВ 1957) とも呼ばれている。「完了化表現」は単に動作を表すのだけではなく、動作が遂行されることによって、なんらかの結果が達成される瞬間をも表す。よって、「着」、「了」などの文法アスペクトとは異なると考えられる。

Li and Thompson (1981) は、「了」は事態を「閉じられた出来事 (bounded event)」として捉える「完結性 (perfectivity)」を表す。また、黎 (1924)、王 (1943) とは違って、進行の状態或いは動作行為によって引き起こされた「結果の継続」を表す「着」の他に、「在」が「動作の進行」を表すと指摘している。文 (2.17) と文 (2.18) においては、同じ動詞「穿」が用いられているが、前者は進行相「在」によって、「革靴を履いている最中」という「動作の進行」が表されているのに対して、後者は継続相「着」によって、「革靴を履いている」という「結果の継続」が表されている。

³³ 王 (1943) でいう「継続相」と本研究でいう「継続相」とは異なる概念である。

(2.17) 他 在 穿 皮鞋。

tā zài chuān píxié

彼 ZAI 履く 革靴

(彼は革靴を履いているところだ。)

(2.18) 他 穿着 皮鞋。

tā chuān-zhe píxié

彼 履く-ZHE 革靴

(彼は革靴を履いている。)

(Li and Thompson 1981:221)

「过」は出来事を少なくとも 1 回経験したことがあることを表す。「了」と比べると、「过」の意味特徴がより明らかになる。文 (2.19) に示されるように、「了」の焦点は出来事が発生したという点であり、現在も授業を履修しているというニュアンスが含まれている。すなわち、先行する出来事が発話時に関連づけられている。これに対し、文 (2.20) では、発話時が今年の後期であり、前期に呉教授の授業を履修したが、現在はその出来事は既に終了している。つまり、現在は授業を履修していないというニュアンスが含まれている。

(2.19) 我 今年 选了 吴教授 的 课。

wǒ jīnnián xuǎn-le wújiàoshòu de kè

私 今年 履修する-LE 呉教授 の 授業

(今年、私は呉教授の授業を履修している。)

(2.20) 我 今年 选过 吴教授 的 课。

wǒ jīnnián xuǎn-guo wújiàoshòu de kè

私 今年 履修する-GUO 呉教授 の 授業

(今年[の前期]、私は呉教授の授業を履修した。)

(Li and Thompson 1981:229)

上の 2 つの文の違いは以下の図 2-3 に示すことができる。「选过」の表すスコープは t_1 から t_2 までとなっており、基準時と離れている。これに対し、「选了」の表すスコープは t_1 から基準時 t_3 (及びそれ以後) までとなっている。

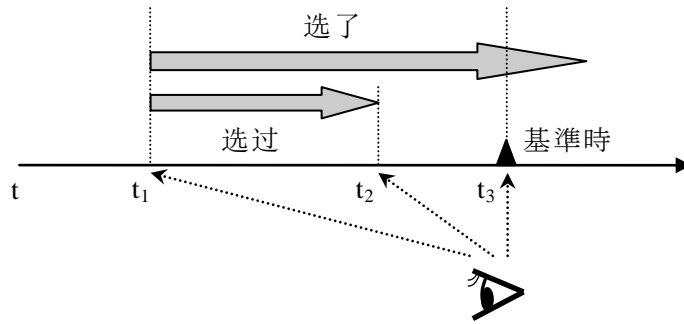


図 2-3. 「过」と「了」との違い

また、Li and Thompson (1981) は王 (1943) と同じ、「動詞の重ね型」が僅かな動作が行われたという意味を表すと指摘し、「暫時相」と名付けている。

2.2.3 石 (1992) の分析

石 (1992) は、中国語のアスペクト形式は「了」、「着」、「过」であると指摘し³⁴、これらのアスペクト形式を取る動詞の特徴については、表 2-2 に示している。

表 2-2. 「了」、「着」と「过」の区別 (石 1992:185)

	実現過程	時段持続	離散性質
了	+	-	-
着	-	+	-
过	-	-	+

「実現過程」とは、動作や状態が出現する前のある時点から出現するまでの変化過程を指す。果物の成長状況を例として挙げると、「生 (熟していない)」は生まれつきの状態であるため、その後ろに「了」をつけることが出来ない、一方、「生 (熟していない)」から「熟 (熟している)」までは 1 つの変化過程が見られるため、「熟 (熟している)」の後ろに「了」をつけることが可能である。「時段持続」とは、動詞の表す動作が継続性をもつことを指す。「死 (死ぬ)」、「倒 (倒れる)」などは継続性をもたない瞬間動詞であるため、「着」と共起できない。「離散性質」とは、動詞の表す動作は明確な開始点と終了点をもつことを

³⁴ 石 (1992) は、動詞直後の「了₁」と文末の「了₂」を同一の助詞が異なる位置に使われる文法の変異体だと考え、両者の使用条件が同じ、同一成分だと考えている。

指す。つまり、「知道（知っている）」、「属于（属する）」のように、明確な開始点と終了点をもたない状態動詞は「过」と共起できない。このようにして、アスペクト「了」、「着」、「过」と共起する動詞の特徴が明らかにされている。石（1992）と同様に、讚井（2002）なども中国語アスペクトを「了」、「着」、「过」と分類している。

また、石（1992）は、動詞直後の「了₁」と文末の「了₂」を同一成分と考えている。しかしながら、既に述べたように、動詞直後の「了₁」と異なり、文末の「了₂」は名詞の後に付くことも可能であり、アスペクトの範疇に属さない。例えば、(2.21)では、「病人がご飯を食べる」という動作が既に完成したことを表すのに対し、(2.22)では、「病人がご飯を食べる」という動作が完成した可能性もあり、「病人がこれからご飯を食べる」或いは「病人がご飯を食べているところ」という可能性もある。つまり、文末の「了₂」は新しい状況の出現を表す文末助詞であり、動詞の表す動作がどの局面にあるのかを特に表さない。

(2.21) 刚 做完 手术 的 病人 吃了 饭, …略…

gāng zuòwán shǒushù de bìngrén chī-le fàn

手術を受けたばかりの病人 食べる-LE ご飯

(手術を受けたばかりの病人はご飯を食べて、…略…)

(2.22) 刚 做完 手术 的 病人 吃 饭 了。

gāng zuòwán shǒushù de bìngrén chī fàn le

手術を受けたばかりの病人 食べる ご飯 LE

(手術を受けたばかりの病人はご飯を {食べた/食べ始めた/食べている}。)

(作例)

2.2.4 Smith(1997)の分析

Smith(1997:263)は「the Mandarin language has a rich viewpoint component with three perfectives, three imperfectives, and a neutral viewpoint³⁵ (中国語は3つの完結相、3つの非完結相と1つの中立相という豊富な視点を表す成分を有している)」と述べている。「完結視点アスペクト (perfective viewpoint)」として、「了」、「过」と「動詞の重ね型 (tentative

³⁵ 「neutral viewpoint」とは、アスペクト形式が含まれていない中立的なものを指す。

reduplication)」が挙げられている。「非完結視点アスペクト (imperfective viewpoint)」として、「在」、「着」と「Φ³⁶」が挙げられている。Smith (1997) は、「了」は全ての出来事を表す文に用いることが可能であり、「完成 (completion)」ではなく、「限界達成 (termination)」を表す。そして、完成を表すのは「了」ではなく、「結果動詞 (resultative verb complements)」であると指摘している。この点については、Li and Thompson (1981:215-216)、石 (1992:198) などとも同じ見解である。例えば、

(2.23) 我 昨天 写了 给 张三 的 信 可是 没 写完
 wǒ zuótiān xiě-le gěi zhāngsān de xìn kěshì méi xiě-wán
 私 昨日 書く-LE 張三への手紙 逆接 否定 書き終わる
 (昨日、張三への手紙を書いてみたが、まだ書き終わっていない。)

(Smith 1997:265)

(2.24) *我 昨天 写完了 给 张三 的 信 可是 没 写完
 wǒ zuótiān xiě-wán-le gěi zhāngsān de xìn kěshì méi xiě-wán
 私 昨日 書き終わる-LE 張三への手紙 逆接 否定 書き終わる
 (*昨日、張三への手紙を書き終わったが、まだ書き終わっていない。)

文 (2.23) では、出来事の完成ではなく、動詞「写 (書く)」によって表された動作の限界達成だけが表されている。そのため、後ろに出来事の完成を否定する文を付け加えることができる。一方、文 (2.24) では、文前半は結果動詞「写完 (書き終わる)」によって、出来事の完成を表し、後半の完成を否定する文とは矛盾になっているため、非文である。

また、「过」については、「sentences with the -guo viewpoint has the essential properties of a Perfect construction (視点アスペクト「过」が用いられる文は「パーフェクト」構造の基本性格をもっている)」(p.269) と述べている。これに対し、望月 (2000) は、「过」は「パーフェクト」の意味をもたず、1つの「経験相」に過ぎないと主張している。例えば、文 (2.25) においては、「パーフェクト」を表しているのは「过」ではなく、文末の「了」である。文末の「了」によって、過去の経験と基準時 (発話時) の話者の状態とが関連付け

³⁶ 無標の非完結相である。「我很高兴 (私はとても嬉しい)」のように、非完結相のアスペクト形式が用いられない状態文を指す。しかし、これは状態動詞自体が備わるものであるため、文法的アスペクトではなく、語彙的アスペクトであると考えられる。

られている。これに対し、文 (2.26) では、単純に「私はロンドンに行ったことがある」という経験が示され、過去の経験が基準時との関連性は言及されていない。これについては、Li and Thompson (1981)、戴 (1997) などと同じ立場である。本稿は基本的に Li and Thompson (1981)、戴 (1997)、望月 (2000) などの観点に賛成し、「过」は単なる「経験相」であり、「パーフェクト」の用法は積極的に表さないと考える。

(2.25) 我 去过 _____ 伦敦 _____ 了。

wǒ qù-guo lúndūn le

私 行く-GUO ロンドン LE

(私は (過去に) ロンドンに行っている。)

(2.26) 我 去过 伦敦。

wǒ qù-guo lúndūn

私 行く-GUO ロンドン

(私はロンドンに行ったことがある。)

(望月 2000:14)

2.2.5 戴 (1997) の分析

戴 (1997) は Comrie (1976) の分類に従って中国語アスペクト形式を「完全体 (完結相)」と「非完全体 (非完結相)」という2つのカテゴリーに分け、完結相については、「现实体 (現実相)」である「了」、「经历体 (経験相)」である「过」と「短时体 (暫時相)」である「重叠动词 (動詞の重ね型)」と分類している。非完結相については、「持续体 (持続相)」である「着」、「起始体 (起動相)」である「起来」と「继续体 (継続相)」である「下去」と分類している。戴 (1997) の分類は以下の図 2-4 にまとめられる。

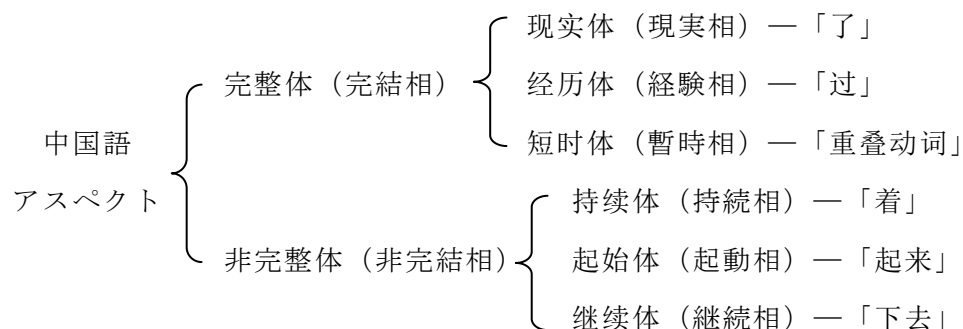


図 2-4. 戴 (1997) による中国語アスペクトの分類

戴 (1997) では、「了」については、「动态性 (動態性)」、「完整性 (完結性)」、「现实性 (現実性)」という 3 つの弁別要素がもちだされている。「動態性」とは、変化の点に焦点が置かれるという意味を指す。文 (2.27)、(2.28) に示されるように、状態動詞「知道 (知っている)」の場合、アスペクト助詞「了」がつくと、動的变化が見られ、「知らない」状態から「知っている状態」になるというニュアンスが含まれている。また、「現実性」は、基準時において出来事が事実になることを表す。卢 (2012) は、「了_体 (動詞直後の「了」)」の基本意味が「相对某个时间参照点, 行为或者状态已经成为事实」(p.23) (ある参照点に対して、行為または状態は既に事実になったこと) であると述べている。つまり、戴 (1997) 卢 (2012) も「了」を「パーフェクト」と見なしている。

(2.27) 他 知道 这件 事情。

tā zhīdao zhèjiàn shìqing

彼 知る この こと

(彼はこのことを知っている。)

(2.28) 他 知道了 这件 事情。

tā zhīdao-le zhèjiàn shìqing

彼 知る-LE この こと

(彼はこのことを知った。)

(作例)

「了」と同様に「过」も「完結性」をもっているが、「过」の表す完結性は基準時より前のある時点におけるひとまとまりの出来事である。つまり、「过」の意味上においては「経歴性」は重要な要素の 1 つである。また、「过」は「了」と同様に「動態性」を有するが、「了」は状態変化の開始点を表すのに対し、「过」は状態変化の終了点を表す。

(2.29) 他俩 红了 脸。

tāliǎng hóng-le liǎn

彼ら 赤くなる-LE 顔

(彼らは顔が赤くなった。)

(2.30) 他俩 红过 脸。

tāliǎng hóng-guo liǎn

彼ら 赤くなる-GUO 顔

(彼らは顔が赤くなったことがある。)

(戴 1997:59)

一方、戴 (1997) は、非完結相である「着」は「継続性」、「動態/静態」という意味上の要素をもっていると述べている。「着」が動態という意味上の要素をもちながら、静態の要素をもつと指摘している。例えば、

(2.31) 我们 就这么 一声不吭地 走着。

wǒmen jiùzhème yīshēngbùkēngde zǒu-zhe

私たち このまま 黙って 歩く-ZHE

(私たちはこのまま何も話さず歩いている。)

(戴 1997:88)

動詞「走 (歩く)」自体は非均質であるが、「着」がつくと、均質的事態として捉えることができる。これは進行相である「在」と対照的である。ただし、戴 (1997) は「在」を副詞として位置づけている。戴 (1997) で論じられている「了」、「着」、「过」の意味的要素を以下の表 2-3 にまとめることができる。

表 2-3. 中国語アスペクトの各意味的要素

	了	过	着
完結性	+	+	-
動態性	+	+	-
現実性	+	-	+
経歴性	-	+	-
継続性	-	-	+

戴 (1997) の分類は評価されるが、王 (1943)、Li and Thompson (1981)、Smith(1997)

などと同様に暫時アスペクトをアスペクト体系に入れるのは妥当ではないと思われる。また、戴(1997)は「起来」、「下去」を非完結相と考えているが、既に述べたように、「起来」、「下去」は方向補語と考えられる。戴(1997)の分類を受け継いで、刘他(2001:361-410)は中国語のアスペクト形式を「了」、「着」、「过」、「来着」を挙げている。刘他(2001)の分類は戴(1997)と大体同じであるが、「起来」、「下去」を方向補語と見なすところが戴(1997)と異なっている。

2.2.6 Huang et al. (2009)の分析

Huang et al.(2009:101-106)は生成文法の枠組みで現代中国語のアスペクト体系の分析を試みた。Huang et al. は、中国語のアスペクト体系が(2.32)のような動詞の前に用いられる形式である「在」、「有」と(2.33)のような動詞の後ろに用いられる形式である「着」、「了」、「过」といった2つの系統に分かれていると指摘している。本来の存在動詞である「有」を中国語アスペクト体系に位置づけて生成文法の枠組みで分析するところにHuang et al. (2009)の特徴がある。

(2.32) a. ta zai chang ge. (他在唱歌。)

彼 ZAI 歌う 歌
(彼が歌っている。)

b. wo mei-you huijia. (我没有回家。)

私 否定-YOU 家に帰る
(私は家に帰っていなかった。)

(2.33) a. ta chang-zhe ge. (他唱着歌。)

彼 歌う-ZHE 歌
(彼が歌っている。)

b. wo hui-le jia. (我回了家。)

私 帰る-LE 家
(私は家に帰った。)

c. zhe-ge ren sha-guo laohu. (这个人杀过老虎。)

この人 殺す-GUO 虎
(この人は虎を殺したことがある。)

(Huang et al. 2009:101-102)

Huang et al. (2009) では、「没有」にある「有」は「パーフェクト」の意味を表すと指摘されているが、詳しい論述がされていない。また、Huang et al. では否定表現にある「有」だけに注目されているが、現在広く使用されている肯定表現の「有」については言及されていない。なお、「有」がアスペクト形式であることは Wang (1965) も指摘している。Wang はこの「有」を動詞直後の「了」の同一形態素の交替形であると主張している。ただし、Wang も Huang et al. も動詞 V の直後に結びつく「有」を見逃している。

上述のように、これまでの中国語アスペクト体系に対する研究の主な流れは以下の表 2-4 にまとめられる。

表 2-4. 中国語アスペクトに関する研究の流れ

形式 文献	Φ	着	了	过	在	得	着	起来	下去	動詞重ね型	有	状態文
黎 1924		継続	完成相			可能	既然の継続	始動の継続	始動の継続	始動の継続		
王 1943	中立相	進行相	完成相				近過去相	始動相	継続相	暫時相		
Li and Thompson 1981		継続相	完結相	経験相	進行相					暫時相		
石 1992		継続相	実現相	終結相								
Smith 1997	中立相	非完結相	完結相	完結相	非完結相					完結相		非完結相
戴 1997		継続相	現実相	経歴相				始動相	継続相	暫時相		
Huang et al. 2009		継続相	完成相	経験相	進行相						完成相	

表 2-4 から分かるように、従来の中国語アスペクトの研究では、どの形式をアスペクトの範疇に入れるかは未だに統一した見解がない。前述したように、「起来」と「下去」は一般に方向補語と見なされている。また、「来着」は語気助詞として扱われる場合が多く、「動詞の重ね型」は動作が殆ど進行しない性格を有することから、アスペクト形式とするのが妥当ではない。したがって、アスペクト形式「了」、「着」、「过」、「在」は基本的に広く認められている。

2.3 日本語アスペクトの体系

形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトは現代日本語にも存在するとされている。戦後の現代日本語アスペクト・テンスの研究は要素主義的アプローチの段階、体系的アプローチの段階、体系・機能的アプローチの段階という 3 つの段階に分けられる（工藤 1995:6-11）。

戦後のアスペクト研究を幕開けたのは金田一（1950）の「国語動詞の一分類」と言える。金田一（1950）は、それ以前の国文法（学校文法）の「スル」を一単語、「シタ」を二単語、「シテイル」を三単語、「シテイタ」を四単語として捉える要素主義的アプローチに対し、「シテイル」を、アスペクトを表す有意味的一単位として扱い、その文法的な意味と動詞の語彙的な意味との相関性を明らかにした。金田一（1950）では、動詞を「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第四種の動詞」と分類している。「ある」、「いる」などの「状態動詞」は「シテイル」が付かない動詞であり、「読む」、「笑う」などの「継続動詞」は「シテイル」が付いて、「その動作が進行中であること」を表し、「死ぬ」、「消える」などの「瞬間動詞」は「シテイル」が付いて、「その動作・作用が終わってその結果が残存している」ことを表し、「優れる」、「聳える」などの「第四種の動詞」はいつも「シテイル」の形で使用される動詞であるとされている。しかしながら、「スル」と「シテイル」との対立を捉えなかった点から見ると、金田一（1950）の分類はやはり要素主義的である。

次に、体系的アプローチとは、「スル」と「シテイル」、「シタ」と「シテイタ」の、「互いに他をまっけてはじめて価値をもつ相補的対立関係」が、アスペクトの体系をなすとしたアプローチである（工藤 1995:7）。鈴木（1957）は初めて「スル」と「シテイル」、「シタ」と「シテイタ」という 2 項の対立を、形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトと規定した。そして、奥田（1978）は「シテイル」を「スル」と対立させ、「動作の継続」と「結果の継続」の 2 つの意味を「継続」という意味に統一している。

あるばあいには「動作の継続」であり、あるばあいには「結果の継続」であって、「継続」ということではひとつである。したがって、この *site-iru* というアスペクトのかたちを「継続相」と名付けて、これらのアスペクチュアルな意味を、ひとつのかたちもっている、意味上の、ふたつのヴァリエントだとみなすことができる。

（奥田 1978:110）

このように、「スル」と「シテイル」、「シタ」と「シテイタ」を2項対立させて捉えるのは鈴木（1957）、奥田（1978）工藤（1995）、高橋（2003）などが挙げられる。

表 2-5. 日本語アスペクトの2項対立

アスペクト	完成相	継続相
テンス		
非過去形	スル	シテイル
過去形	シタ	シテイタ

奥田（1978）に対して、達成動詞と結びついた時に、「シテイル」は「内側からの視点をとることは不可能となり、そのため変化の後の局面に焦点をあてた結果状態の意味しかとれない」（p.83）と白井（2004）が指摘している。しかしながら、「動作の継続」においては、状況の成立点は動詞が表す動きの開始点であり、動きの状態が継続していることが表されている。「結果の継続」においては、状況の成立点は動詞が表す変化の達成点であり、結果の状態が継続していることが表される。両者は並行的な関係であり、「継続相」として統一的に捉えることが妥当である。副島（2007）も「継続性」には「動作が始まる前の準備段階、始まってから終わるまでの間の過程、終わった後の結果状態がある」（p.39）と指摘している。

最後に、脱場面・文脈化されていて、実際の使用法と離れた体系的アプローチとは違って、言語体系（文法体系）を媒介とするテキスト的機能へのアプローチを体系・機能的アプローチの段階とされている（工藤 1995:11）。工藤（1995）の研究は、「スル」と「シテイル」、「シタ」と「シテイタ」の対立をなすアスペクト・テンス体系とテキスト的機能との相関性を追求するものであり、体系・機能的アプローチをとるものと位置づけられている。

このようにして、他のアスペクト形式—「シテアル」、「シテオク」、「シテシマウ」、「シテイク」、「シテクル」³⁷などがアスペクト体系から排除されて、日本語のアスペクト研究が進められてきた。鈴木（1957）、奥田（1977、1978）は「シテアル」などのアスペクト形式をアスペクト体系から排除した根拠については明確に示していないが、工藤（1995）は、

³⁷ 寺村（1984）は、「シテアル」、「シテオク」、「シテシマウ」、「シテイク」、「シテクル」などを「シテイル」と同様に「二次的アスペクト」と呼んでいる。

以下の理由で、「シテアル」、「シテオク」、「シテシマウ」などが「スル」—「シテイル」の
 アスペクト対立と比べて文法化されているとは言い難いと考えて、これらを「準アスペク
 ト」と呼んでいる。

- ・ 包括性の欠如—シテアル、シテオク、シテイク、シテクル
 例えば「死んである」、「流れておく」、「離婚していく（くる）」とは言えない。
- ・ 他の文法的意味の共在—シテアル、シテオク、シテシマウ
 シテアルには「受動+意図性」、シテオクには「意図性」、シテシマウには「感情・
 評価性」が複合的にとらえられている。
- ・ アスペクト対立の存在—シテクル（シテイク）、シテシマウ
 これらは「シテクル—シテキテイル」、「シテシマウ—シテシマッテイル」のよう
 なアスペクト対立をもつ。

(工藤 1995:32-33)

しかしながら、図 2-5 に示されているように、継続相シテイルにとって、主体という概
 念が欠かせないものであるのに対して、シテアルは客体中心のアスペクトであり、シテイ
 ルと一体となって体系をなしていると見るべきである（金水 2000；益岡 2000 など）。

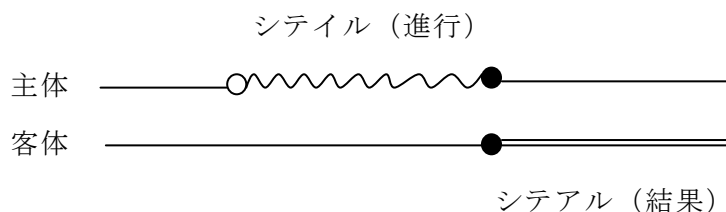


図 2-5. 主体動作・客体変化動詞（金水 2000:45）

また、副島（2005、2007）は従来アスペクト体系の中であまり論じられていない「シツ
 ツアル」、「シテアル」をアスペクト体系の中に位置づけて日本語のアスペクト体系を以下
 のように構築している。本研究も「シテイル」との対立から「シテアル」、「シツツアル」
 をアスペクト体系に位置づけるべきと考える。

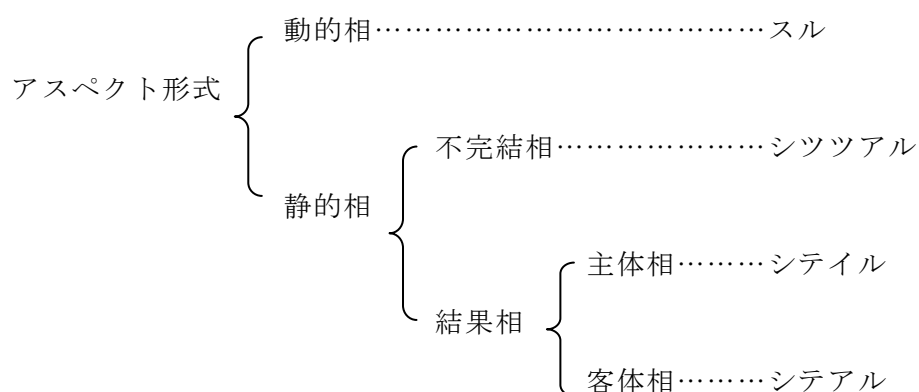


図 2-6. アスペクト形式の意味上の分類 (副島 2007:59)

2.4 日中アスペクトに関する対照研究

このようにして、奥田 (1977、1978)、工藤 (1995) などによって描き出された「スル」と「シテイル」、「シタ」と「シテイタ」の対立をなす日本語アスペクト体系に基づき、日本語の「V テイル」と中国語の「V 了」、「V 着」を中心に、日中両言語におけるアスペクトの対照研究が行われてきた。例えば、下地・任 (2011) は日中のテンス・アスペクト形式を表 2-6 にまとめている。

表 2-6. 日中両言語のアスペクト体系 (下地・任 2011:1)

	完成相	継続相
日本語	スル/シタ	シテイル/シテイタ
中国語	-了 le	-着 zhe

また、劉 (2011) は日本語と中国語のアスペクト体系の対応関係を以下の表 2-7 にまとめている。しかし、完成相の「スル」に対する中国語の文法的な形式がないわけではなく、動詞の裸な形である「中立相」で対応すると考えられる。

表 2-6 と表 2-7 から分かるように、これまでのアスペクトに関する日中対照研究では、主に日本語「スル」と「シテイル」という 2 項対立の枠に当てはめて考察を進めてきた。前述したように、日本語の「シテアル」や中国語の「V 有」がどのようにアスペクト体系に位置づけられるかという問題が浮かび上がってくる。

表 2-7. 日本語と中国語のアスペクト（劉 2011:35）

アスペクト体系		日本語における文法的な形式	中国語における文法的な形式
完成相	完成	シタ	了
	未完成	スル	×
継続相	動作の継続	シテイル/シテイタ	在（動的、会話文） 着（静的、地の文）
	状態の継続	スル、シテイル/シテイタ	着
パーフェクト	動作パーフェクト	アスペクトではない	了
	状態パーフェクト		了、着
	経験パーフェクト ＝経験相		过

2.5 日中アスペクト論の問題点

以上のように、中国語アスペクト研究では、アスペクト形式「了」、「着」、「过」に焦点を当て、日本語アスペクト研究では、「V テイル」に焦点を当てて議論が進められてきたが、中国語「V 有」、「有 V」や日本語「V テアル」のような周辺のアスペクト形式は暗黙のうちに純粋なアスペクト形式とされなくなるわけである。動詞に後接する「V 有」は他のアスペクト形式と類似性が高い形式である。「V 了」—「V 着」—「过」—「V 有」は相互排他的な形式である。そして、「V 有」は「V 着」や「在 V」と同様に述語の表す動作を示す動詞と存在を示す動詞との結合形式であり、継続性をもち、アスペクト的意味のみを表す。

一方、日本語の「V テアル」は以下の3点で「V テイル」と類似している。

- a. 他の「シテ+助動詞」でアスペクト的意味を表す形式において、対立が存在する。
シテクルーシテキツツアルーシテキテイルーシテキテアルなど。このことから、スルーシテイルーシテアルは相互排他的な形式であると考えられる。
- b. 述語の表す動作の、付帯状況を示す動詞の接続形式シテと状態（存在）を示す動詞アル、イルとの結合形式である。
- c. 純粋にアスペクト的意味のみを表し、「継続性」をもつ。

（副島 2007:48；一部修正）

日中両言語においては、歴史的変遷という通時的な観点を見ても、地域方言の分布と共時的観点から見ても、存在動詞から文法化された「存在型アスペクト形式」が多く見られる。また、言語類型論の観点から見ても、存在動詞を語彙的源泉とする「存在型アスペクト形式」が多く見られる (Comrie 1976 ; Bybee et al.1994 ; 石 2004)。アスペクト形式には主に完了動詞から文法されたものと存在動詞からされたものがある。岡(2013b)は日本語、中国語、英語などの言語のアスペクトのタイプを以下の表 2-8 にまとめている。

表 2-8. 諸言語のアスペクトの類型論 (岡 2013b:74)

言語	語彙的源泉	結果相 (パーフェクト)	進行相	アスペクトのタイプ
日本語	いる	シテイル	シテイル	存在型
宇和島	おる	シトル	シヨル	存在型
琉球首里	フウン	ソーン	ソーン	存在型
朝鮮語	issta	hai issta	ha-ko issta	存在型
アイヌ語	an	wa an	kor an	存在型
英語	be	be+p.p.	be + V-ing	存在型
	have	have+p.p.		所有型
中国語	在 裏		在 + V 文末の呢	存在型
	着	V + 着		存在型
	了	V + 了, 文末の了		完了型
ロシア語	方向接辞	完了体	不完了体	完了型

表 2-8 に示されるように、中国語アスペクトには完了動詞からなる完了型と存在動詞からなる存在型とが存在している。中国語においては、肯定の意味を表すアスペクト形式「了」は前者に属し、否定を表すアスペクト形式「没 (mei)」は後者に属する。「没 V」は否定を表す「パーフェクト」の標識であり、類推などの動機づけで「有」が肯定を表す「パーフェクト」の標識になるのは何ら不自然ではない (石 2004:36)。中国語アスペクト体系に「V 有」と「有 V」の位置づけ、日本語アスペクト体系に「V テアル」の位置づけは、日中両

言語のアスペクト体系を考える上で1つの重要なポイントとなると考えられる。

本研究は、これまであまり焦点に当てられていない、存在動詞を語彙的源泉とする「存在型アスペクト形式」—中国語の「V有」、「有V」と日本語の「Vテアル」を中心に、従来のアスペクトの枠組みを超えて、中国語アスペクト形式を存在表現のヴァリエーションとして捉えている。すなわち、アスペクト形式となる存在動詞の機能をより重要視する。この考え方は木村（2006）、岡（2013b）のアスペクトに関する新たな見解を重要な導きの糸としている。

木村（2006）は従来アスペクトという時間的なパラダイムではなく、事態や事物の現実的なあり様を話し手の空間的視点において捉えている。木村は、「呢（ne）」、「着」、「了₁」、「了₂」を「実存相」と呼んで中心に論じており、「过」を「動作主体のある種の属性を語る形式に近いもの」と考えて考察対象としていない。「呢」と「着」が「話し手にとってのリアルな空間領域にコトやモノを位置づけて空間系実存相を担い」、動詞直後の「了」と文末の「了」は「話し手にとってのリアルな時間領域にコトを位置づけて、アスペクトとして時間系実存相を担っている」と述べている。すなわち、木村（2006）は中国語アスペクトを「ある事態が空間的又は時間的に実存するという大きなカテゴリーで捉えた方が良い」と提案している。それらのアスペクト形式が表す意味的特徴は次の表 2-9 にまとめることができる。

表 2-9. 「呢」、「着」、「了₁」、「了₂」の意味的特徴

アスペクト形式	意味的特徴
呢	ある状況が問題の場に「現然と存在する」という意味を表す。
着	人や物を特定の場所に位置させる動作を意味する動詞（「定位動詞」）に後接して、動作の実現の結果として人や物が特定空間に「存在」する状況を表す。「着」の「持続」の意味は「存在」を表す。
了 ₁	動詞に後接して、「限界性（bounded）のある動作」が参照時において「既の実現済み」であることを表す。
了 ₂	何らかの「変化」が参照時において「既の実現済み」であることを表す。

2.6 本論文の研究課題

前述した先行研究の問題点をふまえ、本論文は中国語の存在動詞「有」と日本語の存在動詞「アル」を語彙的源泉とする「存在型アスペクト形式」—中国語「V有」、「有V」と日本語「Vテアル」を中心に考察し、その統語的・意味的特徴を明らかにし、これらのアスペクト形式が両言語のアスペクト体系にどのように位置づけられるかを究明する。具体的には、以下の5つの研究課題を設定した。

- 1) 「V有」は中国語のアスペクトカテゴリーの正当な形式であると言えるか?
- 2) 「有」と「V有」/「有V」、そして、「アル」と「Vテアル」とはそれぞれどのような相関があるか?
- 3) 体系の機能単位間の対立という観点から、「V有」、「有V」と「Vテアル」は体系の中にどのように位置づけられるか?
- 4) 「V有」/「有V」と「Vテアル」は実際にどのように使用されているか?
- 5) このような存在型アスペクト形式は日中両言語の事態の捉え方をどのように反映しているか?

第3章 本研究の理論的枠組み

認知言語学では、外部世界にある対象の意味は私たちから独立したものではなく、私たちがそれをどのように捉えたかという「認知 (cognition)」の在り方が、その対象の意味に大きく反映されていると考えている。客観的に見れば同じ状況であっても、認知主体の捉え方によって解釈が異なる。文法カテゴリーとしてのアスペクトは、出来事に対する認知主体の捉え方を表すと考えられる。アスペクトという用語は元々「視点 (viewpoint)」という意味から名付けられた³⁸。「相的意味は、動詞によってあらわされた動作を話し手が時間におけるその動作の経過と配分の観点から (ただし発話の瞬間とは関係なしに) 行なうあれこれの『評価』、特徴付けを反映している」(Маслов 1978:34) という定義からしてもアスペクトは動詞の表す事態の構成を時間的な観点からどのように見るかという認知主体の認知の在り方と深く関わっていると言えるだろう。

このような認知言語学の基本的な考え方を元に、本研究は、木村 (2006)、岡 (2013b) が提案しているように、アスペクトを存在論的に位置づけて中国語「V 有」、「有 V」と日本語「V テアル」を考察する。すなわち、アスペクト形式となる存在動詞の機能をより重要視する。木村 (2006) は、中国語の主なアスペクト形式を事態が実存するという「実存相」に位置づけることが可能であることを提案している。また、岡 (2013b:74) が指摘しているように、日本語や中国語などの東アジア言語におけるアスペクト形式はほとんど存在表現から文法化されたものである。

具体的な分析に入る前に、本研究に関連する主要な認知言語学の概念を説明する。

3.1 認知文法

認知文法は Langacker (1987、1991a、1991b、2000、2008 など) によって提唱された文法理論である。認知文法は、文法を認知活動と無関係な形式的な規則の体系と見なさず、形式が精緻な意味を構築し、記号化する記号体系として捉えている。すなわち、生成文法とは異なり、認知文法は動的な使用基盤モデルの立場をとり、規則は具体的な使用事例に内在するものであり、実際の使用事例からボトムアップ的に抽出されるスキーマとして存在

³⁸ アスペクトはラテン語の「aspectus (視点)」に由来している。また、Smith (1997) は「視点アスペクト (viewpoint)」という用語を使用している。

すると考えている（坪井 2013:282）。

このように、文法は、概念構造と音韻構造の対からなる記号構造の集合体である。記号構造の内部では、成分構造（component structure）が統合することによって、合成構造（composite structure）が形成される。成分構造とは、統合の対象となる単純な構造である。合成構造とは、統合された結果生じる、象徴的に複雑な構造である（熊代 2013:201）。合成構造はそれ自体の構成要素である成分構造の意味極と音韻極をそれぞれ単純に足しあわせたものではない。また、合成構造を成分構造に還元することはできないが、合成構造は成分構造と共に1つの記号構造の集合体を形成する（Langacker 2008:164）。

例えば、図 3-1 では、前置詞「in」と名詞句「the closet」という2つの成分構造が前置詞句「in the closet」という合成構造に統合される仕組みを表している。長方形 C は「the closet」に関する意味的特徴の全てを表している。前置詞「in」はトラジェクターがランドマークに空間的に内包されるという非プロセス関係をプロファイルしている。「in」と「the closet」は、「in」のランドマークと「the closet」のプロファイルとの間に成立する対応関係によって統合される。前置詞句「in the closet」全体は、クローゼットの種類ではなく、空間的な内包関係を表している。

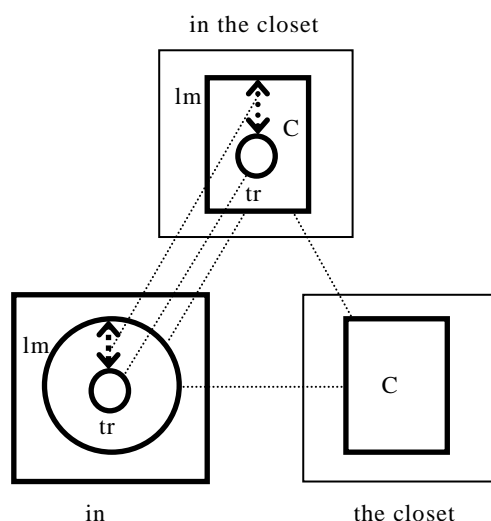


図 3-1. 「in the closet」の合成構造³⁹（Langacker 2008:193）

この場合、「in」が構文のプロファイル決定子（profile determinant）であり、太線のボツ

³⁹ タイトルは筆者による。

クスで示されている。構文では、合成構造がプロファイルする事物と、成分構造のいずれかがプロファイルする事物とが同様であることは多く存在する。図 3-1 のように、合成構造「in the closet」へプロファイルを「譲渡」する成分構造「in」はプロファイル決定子と呼ばれる (Langacker 2008:192-197 参照)。つまり、主要部 (head) に相当する。認知文法では、生成文法のように、主要部をそれ以上分解できない文法的要素として捉えるのではなく、合成構造のある段階における主要部を、合成構造と同じ文法範疇を示す成分構造として規定している。本研究では、このような立場をとり、中国語の「V 有」、「有 V」と日本語の「V テアル」は動詞 V と存在動詞との意味に深く関わっていると考え、これらの表現の合成構造を明らかにする。

3.2 プロファイルとベース

既に述べたように、認知言語学では、同じ概念内容であっても、概念主体の捉え方によって異なる解釈になる。概念主体が認知領域に焦点化する際立ちの大きい部分はプロファイルと呼ばれ、背景的要素として機能し、プロファイルを際立たせる概念内容の全体はベースと呼ばれる。例えば、私たちは斜辺 (hypotenuse) を言う場合には、一本の直線のみを想起するだけではなく、直角三角形全体が概念化されなければならない。この場合、直接指し示された斜辺はプロファイルとして際立って認知され、概念化された直角三角形はプロファイルを際立たせるベースとなる。

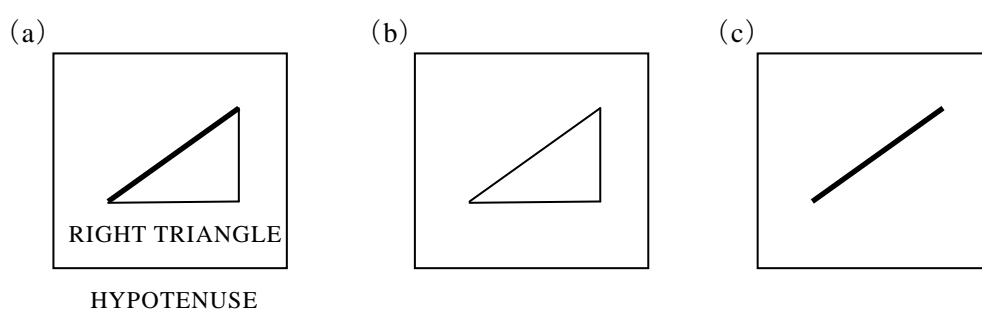


図 3-2. 斜辺 (山梨 2000:20)

このように、認知領域にプロファイルされる対象のうち、相対的により際立って認知される対象がトラジェクター (trajector) であり、トラジェクターを背景的に位置付ける対象がランドマーク (landmark) であると規定されている。

3.3 場の理論

「場とは、意味的な空間である。物理的に把握できるものではなく、私たちは意識、下意識で意味的に捉える空間的・時間的なスペースである」(井出・植野 2012:34)。場の理論の哲学的基盤となるのは、西田(1987)の「場所論」、城戸(2003)の「場所の哲学」、清水(2003)の「場の理論」などが挙げられる。メイナード(2000)、井出(2006)、井出・植野(2012)などは語用論研究の分析として、池上(1981、2000)、岡(2005、2013a)などは日本語文法の分析として、場の理論を用いた。

池上(1981)は、十九世紀の場所論者たちが名詞の格の意味の分析、記述の分析を中心に立てた「場所理論」の延長に基づいて、「運動(場所的な移動)」と「静止(場所的な存在)」という動詞的な概念の分析を行った。池上(1981)は言語類型論的に「する」的な言語と「なる」的な言語という対立を指摘したことにとどまらず、「場所理論」を日本の言語学に用いて理論枠組みを作り上げたとして大いに評価されている。そして、池上(2000)は「環境論的自己(ecological self: Neisser 1998)」という認知心理学の概念を用い、「主体」と「客体」の対立を超え、自己を環境の中に埋め込まれた存在として捉えられることを主張している。

環境の中で自らが動く時、環境において起こっていると認識される変化は、他ならぬ我が身に起こっている変化の指標である。環境の中で我が身と全く無関係に起こっている変化があっても、それは我が身にとっては無意味でしかあり得ない。「環境」という概念自体がそこに埋め込まれている自己への関与ということを含意している通り、環境で起こっていることは、とりも直さず、自己において起こっていることでもある。一歩進めば、出来事は環境においてではなく、自己において起こっているのであると言うことも出来よう。出来事が起こるのは環境の中であると諒解していたのが、実はそうではなくて、自己において起こっていると捉えることも出来るのである。出来事が出来(しゅったい)するのは環境という場所ではなくて、自己という場所においてではないかということである。このような捉え方は、自己と環境とを対立するものとして措定し、自己が環境に対して働きかけ、自らの意に叶うように変えて行くという図式とは鮮明に対立する。後者では自己は何かを「する」主体である。前者では、自己は何かが出来する一つまり、そこで何か「なる」一場所である。

(池上 2000:301)

人間を場所として捉えること自体は言語学において奇異なことではない。日本語の場合、尊敬表現として、敬意を表す対象人物に対し、直接的な指示を避けて、「なる」的な表現を用いる。つまり、その人物を場所化して表現することが多く見られる（池上 1981:199-200、2000:303）。

(3.1) 天皇陛下ニオカセラレマシテハ、オ召シ上リニナリマシタ。

(池上 1981:199)

また、池上（1981、2000）は日本語が「主題優越型の言語（topic-prominent language）」であり、「主題」の概念は基本的に「場所」の概念をメタファー的に拡張したものであると指摘している。例えば、以下の2つの文は並行した構造をもっていると考えられる。

(3.2) 東京ハ人ガ多イ。

(3.3) 象ハ鼻ガ長イ。

(池上 2000:304)

文(3.2)では、東京という具体的な場所に「人が多い」というコトが成り立っているのに対し、文(3.3)では、比喩的に「象」という場（領域）において「鼻が長い」というコトが成り立っていると解釈できる。

城戸（2003）は、場所をより根本的なものとして「場所＝存在」と「存在者＝存在」といった両者を統合しようとしている。これを「場所的存在論」と名付けている。「場所的存在論」を日本語文法の分析に用いた論文は岡（2005、2013a 他）などが挙げられる。「認知的無意識の構造としてあげられる基本レベル概念、意味論的フレーム、空間関係概念とイメージ・スキーマ、概念メタファーはすべて、場所的思考に結びついている」（岡 2013a:80）。

日本語も中国語も「主題優越型の言語」である（Li and Thompson 1976、1981:15-16；池上 1981:200-204、2000:304-305）。また、両言語におけるアスペクト形式は殆ど存在表現から文法化されたものである（岡 2013b:74）ことに鑑み、「場の理論」の観点から中国語の「V有」構文、「有V」構文と日本語の「Vテアル」構文を分析するには有効であると考えられる。

3.4 参照点構造

「場所的存在論」と認知言語学の理論との関わりとして、参照点構造が挙げられる。参照点構造とは、私たちはある対象をターゲットとして指すには、直接的に把握するのではなく、その対象に隣接するものを参照点として認知し、その参照点を経由してターゲットにアクセスするプロセスである。私たちはあるターゲットを探し出すときに、直接にそのターゲットにアクセスすることが困難である場合が多い。一般に、そのターゲットに隣接する際立ちの大きい物が最初に想起され、それを経由してターゲットにアクセスする場合が多い。Langacker (1993、1999:171-202、2009:81-108) は、その手掛かりとして最初に想起されるものを参照点 (reference-point) と呼び、参照点を経由してターゲットにアクセス能力を参照点能力 (reference-point ability) と呼んでいる。参照点能力は言語事象の基盤となっている (Langacker 1999:171)。図 3-3 は、認知主体が参照点 (R) を経由してターゲット (T) にアクセスする心的経路を示している。最初に、認知主体は際立ちの高い事物である参照点を認知する。そして、参照点を経由して支配領域⁴⁰ (dominion) に存在する問題のターゲットとしての対象にアクセスする。この場合、ターゲットが焦点となり、一番際立っている。その代わりに、参照点は背景的になり、ターゲットを位置づけることになっている。つまり、ターゲットはトラジェクター (trajector) として機能し、参照点はランドマーク (landmark) として機能する (Langacker 1999:179)。

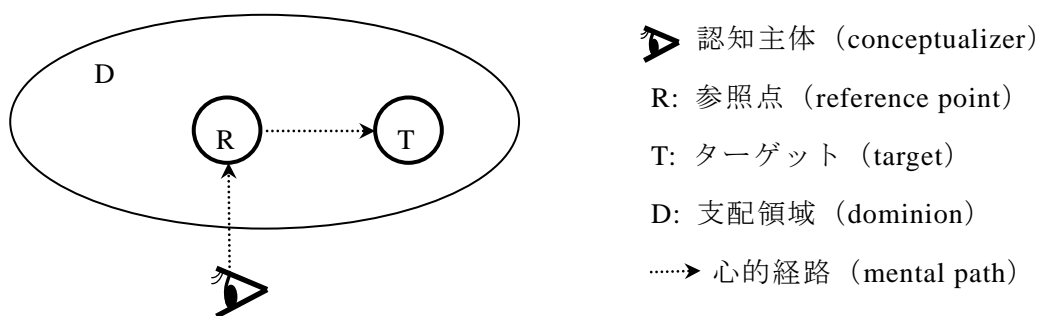


図 3-3. 参照点構造 (Langacker 1999:174 ; 一部修正)

所有表現の場合、例えば、「太郎のパソコン」と言う時、認知主体はまず参照点である所有者の「太郎」を想起して、それを手がかりとしてターゲットである所有物の「パソコン」

⁴⁰ 支配領域とは、物理的な空間ではなく、参照点を手がかりにしてアクセスすることが可能な事物の集合体を指す。

にアクセスするという構造が存在すると考えられる。図 3-4 では、実線の矢印は「太郎」と「パソコン」との間の所有関係を表す。パソコンが太郎という支配領域に存在するとして捉えることができる。

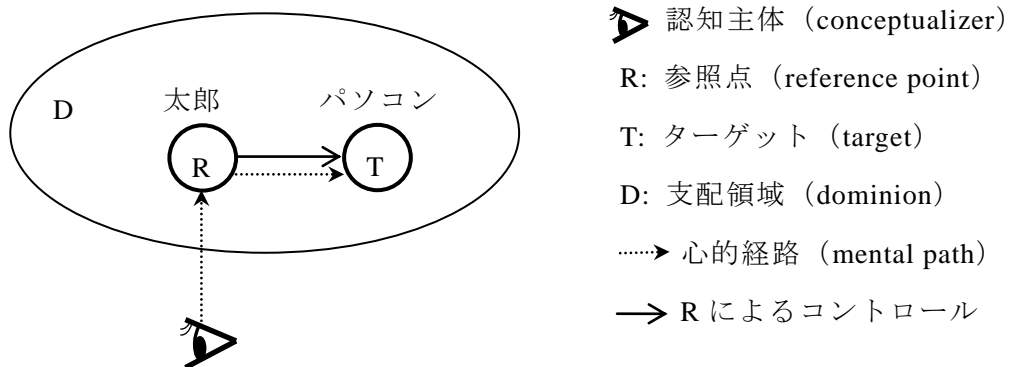


図 3-4. プロトタイプの所有構造 (Langacker 2009:84 を参考に作成)

さらに、「象は鼻が長い」という主題文については、「ハ」でマークされている「象」は場所を比喩的に拡張した用法であり、概念の「場」とも言える。池上 (2000) は、主題をコトが成り立つ「場 (所)」として考えている。「topic」という単語はもともとギリシャ語の場所を意味する単語「topos」から由来している (池上 2000:305)。したがって、参照点構造を用いて主題文である「象は鼻が長い」の概念構造を表すことができる。図 3-5 のように、認知主体は「象」を参照点として、それを手がかりとして、「鼻が長い」というコトにアクセスする心的経路が存在している。「象」を参照点かつ支配領域として、「鼻ガ長イ」という部分が指し示されるという構造になっている。つまり、「象」という概念の「場」において「鼻が長い」というコトが成り立っていると考えられる。

上述のように、3.3 節で述べた「場の理論」と参照点能力の関係に関しては、「参照点能力というのは、場所を手がかりにモノを認知する人間の基本的能力として位置づけられる」。「Y = X ガアル」という存在構文においては、場所 Y を参照点として、個体 X にアクセスするという構造になっている (岡 2013a:92-94)。

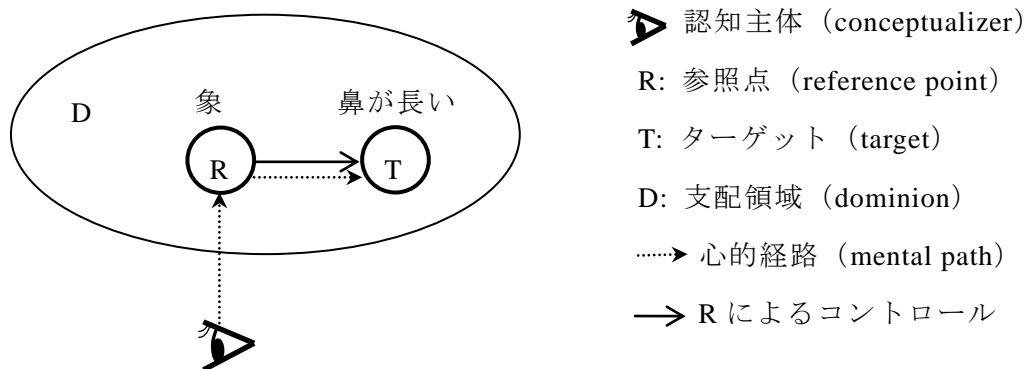
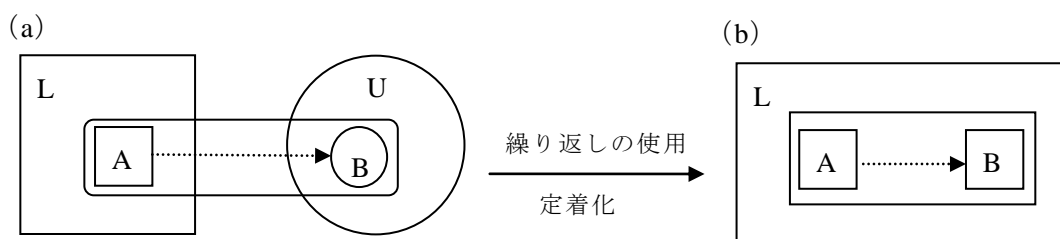


図 3-5. 「象は鼻が長い」の概念構造

3.5 動的使用基盤モデル

動的使用基盤モデル⁴¹ (dynamic usage-based model) は Langacker (1988、2000) によって提唱されて、様々な文法現象を、生成文法のように実際の言語使用から切り離された静的な規則の体系として捉えるのではなく、実際の言語使用の中からボトムアップ的に得られる抽象化したスキーマの膨大なネットワークとして捉えるモデルである。すなわち、「言語使用に応じてカテゴリーが新たな拡張事例を取り込み、その拡張例が定着 (entrenchment) した段階で新たにスキーマが作られていくとみなすモデルである」(谷口 2005:16)。以下、図 3-6 を用いて拡張事例が言語体系に取り込まれて定着していく過程を説明する。



A: 慣例的な言語ユニット B: 非慣例的な言語ユニット
L: 言語体系 U: 実際の言語使用

図 3-6. 動的使用基盤モデル (Langacker 2000:11 ; 一部修正)

⁴¹ 訳語として、動的使用基盤モデルの他に、「使用基盤モデル」、「(動的) 用法依存モデル」などの訳語もある。本研究では、実際の言語使用を動的に捉えるという点を強調して、谷口 (2005) の訳語を借りている。

Langacker (2000) で挙げている「mouse」の意味拡張の例で説明すると、言語体系に慣例的なユニット[A]に相当する「動物のネズミ」が既に存在している。実際の言語使用中で、非慣例的なユニット[B]に相当する「コンピュータ用語としてのマウス」が存在して、本来の「動物のネズミ」から逸脱している。しかし、実際の言語使用中で、繰り返し高頻度で使用されているうちに、「コンピュータ用語としてのマウス」が言語体系 L に取り込まれて定着することになった。

本研究では、動的使用基盤モデルの立場をとり、本来中国語の言語体系に存在していなかった「有 V」構文は、言語使用中で、繰り返して使用されているうちに定着しつつあることを説明する。また、慣例的な言語ユニット「有 N」との比較を通して、「有 V」の構文的・意味的特徴を明らかにする。

3.6 事態認知モデル

認知言語学でいう「事態 (event)」は、外部世界に行われた客観的事実というより、むしろ人間が主観的な視点から意味づけしたものに重点が置かれている。「行為や動作などプロセス的な事態だけではなく、状態や属性を述べる静態的な状況も指す」(谷口 2005)。私たちはこのような事態を認識してコード化する際に、幾つかの典型的な事態認知モデルがある。例えば、Langacker (1991a) が提唱したビリヤードボール・モデル (billiard-ball model) が挙げられる。外部世界の事態を理想化して、ビリヤードボールのように個体から個体へのエネルギーの伝達として捉える事態認知モデルである (図 3-7)。

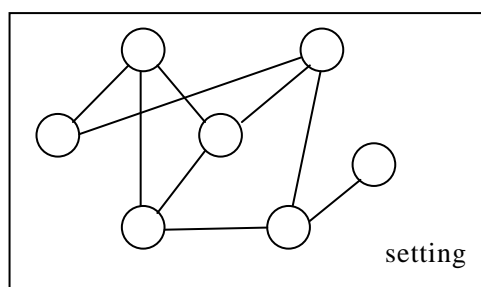


図 3-7. ビリヤードボール・モデル (Langacker 1991a:215)

上記のビリヤード・モデルから、一区切りのエネルギー伝達の連鎖を認知のスコープとして取り出したものが、行為連鎖 (action chain) と呼ばれている。

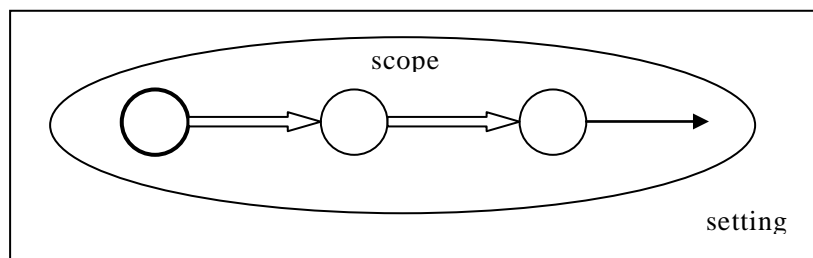


図 3-8. 行為連鎖 (Langacker 1991a:215)

行為連鎖モデルを用いて、典型的な空間的・状態的な他動関係を図 3-9 に示すことができる。

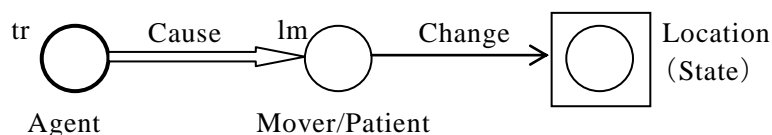
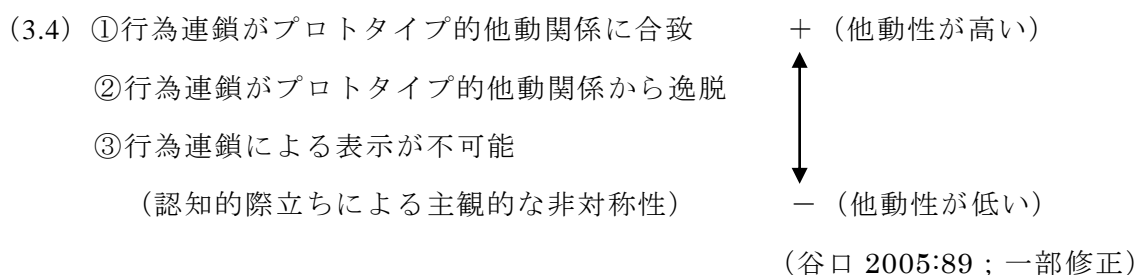


図 3-9. プロトタイプの他動関係 (谷口 2005:34 ; 一部修正)

本研究では、エネルギーの伝達に強調が置かれている行為連鎖モデルを援用して、中国語の「V 有」構文、「有 V」構文と日本語の「V テアル」構文の表す事態を分析する。行為連鎖モデルを用いて動詞の意味を表示するには、次の 2 つのメリットが挙げられる。(i) 表される事態の参与者と含まれる関係を明示することができる。(ii) (3.4) のように他動性の程度差を述べることができる (谷口 2005:89)。



(3.4) に示されるように、行為連鎖がプロトタイプの他動関係に合致すれば、他動性は高い。行為連鎖による表示が不可能であれば、他動性は低いと考えられる。

第4章 中国語「V有」に関する考察

第1章で既に述べたが、「V有」構文とは、次の(4.1)、(4.2)が示すように、動詞の直後に日本語の「アル」に相当する存在動詞「有」が付加され、動作・行為の結果としてもたらされる状態が存続していることを表す表現である。

- (4.1) 就 在 墙上 画有 一个 小三角形 和 一串
jiù zài qiángshàng huà-yǒu yīgè xiǎosānjiǎoxíng hé yīchuàn
するとに 壁上 書く-YOU 1つ 小さな三角形 と 何本か
短短的 细线的 下面、 划添了 两条 线。
duǎnduǎn de xìxiàn de xiàmian huàtiān-le liǎngtiáo xiàn
短い の 細い線 の 下 書き足す-LE 二本 線
(壁に書いてある小さな三角形と何本かの細い線の下に、線を二本書き足した。)

(『彷徨』)

- (4.2) 石头 上 刻有 一些 字。
shítou shàng kè-yǒu yīxiē zì
石 上 刻む-YOU 幾つか 字
(石に字が幾つか刻んである。)

(『中国語辞典』)

- (4.3) 桌上 有 一本 书。
zhuōshàng yǒu yīběn shū
机の上 YOU 一冊 本
(机の上に本が一冊ある。)

- (4.4) 树 旁边 有 一块 大石头。
shù pángbiān yǒu yīkuài dàshítou
木のそば YOU 1つ 大きな石
(木のそばに大きな石が1つある。)

(作例)

本章では、(4.1)、(4.2) のような「V有」構文と、(4.3)、(4.4) のような典型的存在構文との関係に注目し、「V有」構文の統語的・意味的特徴を考察し、主に以下の3点を主張する。

- 1) 「V有」は場所・空間的な存在の意味から拡張したものであると考えられる。
- 2) 「V有」は動作・行為の結果としてもたらされる客体対象の状態に重点が置かれる「客体結果相」の表現であり、主体の状態を表す「V着」と相補分布的であると言える。
- 3) 「V有」は書き言葉に偏っている。これは「V有」の客観性に由来する。

本章の構成は以下の通りである。

4.1節では、中国語「V有」に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘する。4.2節では、存在動詞「有」の性格を述べ、「V有」と「有」との関係を論じる。4.3節では、「V有」構文をI型とII型に分類し、それぞれの構文的特徴を考察し、「V有」構文内部の意味のつながりを明らかにする。4.4節では、コーパスを利用して、「V有」に使われる動詞の使用状況を調べる。また、事態認知モデルを用いて、これらの動詞の特徴を明らかにする。4.5節では、「V有」は「対象指向性⁴²」をもち、客体対象に焦点が置かれる「客体結果相」であると指摘する。4.6節では、体系の機能単位間の対立の観点から、「V有」を存在型アスペクト形式「V着」、「在V」と比較させて、中国語アスペクト体系における「V有」の位置づけを明らかにする。4.7節では、「V有」の使用傾向を考察し、その原因を究明する。4.8節では、本章のまとめを述べる。

4.1 「V有」に関する先行研究

これまで、文(4.5)、(4.6)のような基本アスペクト形式とされている「V了」、「V着」についての考察は多く行われてきたものの、周辺的なアスペクト形式とされている「V有」に関する研究は未だに少ない。

⁴² 「対象指向性」は益岡(1987)の用語であり、「対象の状態存続が問題となる性質」(益岡1987:226)を指す。

- (4.5) 鲁迅 先生 在 1926 年 写了 散文 《藤野 先生》。
 lǚxùn xiānsheng zài nián xiè-le sǎnwén téngyě xiānsheng
 鲁迅先生 1926 年に 書く -LE 散文 作品名
 (1926 年に、鲁迅先生は散文『藤野先生』を書いている。)

- (4.6) 桌上 放着 一 本 书。
 zhuōshàng fàng-zhe yīběn shū
 机の上 置く -ZHE 一册 本
 (机の上に本が置いてある。)

(作例)

現代中国語において、「V 有」という形式の存在は、ЯХОНТОВ (1957)、Jaxontov (1988)、
 吕 (1999) などの研究で既に指摘されている。ЯХОНТОВ (1957:213) によると、「V 有」は
 動作・行為の結果としての状態を表す特別な文語体の構文であり、南方方言から借用され
 たものである。「有」は動詞 V の修飾成分として動詞 V に後接しているという。また、
 Jaxontov (1988:114) は、「V 有」が「結果相 (resultative)」である「V 着」に類似してお
 り、書き言葉として使用され、話し言葉としては使用されていないと述べている。

- (4.7) 有些 木排 上 还 搭有 小小 的 板棚。
 yǒuxiē mùpái shàng hái dā-yǒu xiǎoxiǎode bǎnpéng
 若干 イケダの上 も 建てる -YOU ちっぽけな 板囲いの小屋
 (若干のイケダの上には、ちっぽけな板囲いの小屋が建ててある。)
- (4.8) 每一 小方格 中 有 的 有 铸有 “一两” 二字。
 měiyī xiǎofānggé zhōng yǒude yǒu zhù-yǒu yīliǎng èr zì
 それぞれ 小さな四角の格子 中 あるもの YOU 铸こむ -YOU 一两 2 字
 (それぞれの小さな四角の格子には、「一两」の 2 字の铸こんであるものがある⁴³。)

(ЯХОНТОВ 1957:213)

⁴³ 和訳は橋本 (1987) による。

Яхонтов (1957) や Jaxontov (1988) は、文語体や方言であることを理由として「V有」に対する考察には深く立ち入らなかった。しかしながら、コーパスで調べた結果、「V有」表現は書き言葉だけではなく、話し言葉としても広く使用されている。例えば、文 (4.1)、(4.2) はそれぞれ小説と辞書から抽出した用例であり、文 (4.9) は中国国営放送のニュースから、(4.10) は地方放送のニュースから引用した例文である。また、文 (4.11) は北京語の話し言葉コーパスの中にある用例である。

(4.9) 几分钟后，他被带到了非法停靠区域的出租车上，
jǐfēnzhōng hòu tā bèi dàidào-le fēifǎ tíngkào qūyù de chūzūchē shàng
数分後 彼 受身 連れる-LE 違法駐車 区域 の タクシー 上
而 这辆车的后坐上已经 坐有 两名 乘客。
ér zhèliàngchē de hòuzuò shàng yǐjīng zuò-yǒu liǎngmíng chéngkè
逆接 この車 の 後座 上 既に 座る-YOU 2名 乘客
(数分後、彼は違法駐車区域に止まっているタクシーに連れられたが、タクシーの後座には既に2名の乗客が座っている。)

(中央电视台、『朝闻天下』、2009-02-04)

(4.10) 起火的仓库面积约800平方米，里面 堆有 橡胶、
qǐhuǒ de cāngkù miànjī yuē píngfāngmǐ lǐmiàn duī-yǒu xiàngjiāo
火災のあった倉庫面積約 平方メートル 中 積む-YOU ゴム
布匹、润滑油 等 物品。
bùpǐ rùnhuá yóu děng wùpǐn
布 潤滑油 等 物品
(火災のあった倉庫は面積が約800平方メートル、中にはゴム、布や潤滑油等の物品が積んであった。)

(广州电视台、『今日报道』、2009-11-05)

(4.11) 因为我的业余爱好是花卉，啊，所以我还
yīnwèi wǒ de yèyú àihào shì huāhuì a suǒyǐ wǒ hái
原因 私の趣味 断定 花卉 相づち だから 私 も

订有 『大众 花卉』, …略…

dìng-yǒu dàzhòng huāhuì

購読する-YOU 雑誌名

(私の趣味は花卉ですから、『大衆花卉』という雑誌も購読している。)

(『BJKY』)

そして、「V 有」表現に関する本格的な研究は 1980 年代以後から始まったと言える。主要な研究としては、史 (1984)、孙 (1996)、石 (2004)、罗・范 (2006)、张 (2006)、王 (2011)、王 (2014) などが挙げられる。

史 (1984) は「V 有」における動詞 V と「有」の関係について、「有」が中心になっている「偏正構造 (polarization structure)」と指摘している。潘 (2006) も同じ立場である。

孙 (1996) は、中国語の「存在句 (存在構文)」を A 類、B 類、C 類という 3 種類に分けている。A 類は文 (4.12)、(4.13) に示されるように、「有」や「是」によってマークされた存在構文である。B 類は文 (4.5)、(4.6) のような「V 了」構文、「V 着」構文を指す。そして、「V 有」という形式を C 類の存在構文としている。「V 有」構文を存在構文に位置づけて考察するのが孙 (1996) の特徴である。

(4.12) 桌上 有 个 苹果。

zhuōshàng yǒu gè píngguǒ

机の上 YOU 1つ リンゴ

(机の上にリンゴが 1 つある。)

(4.13) 山下 是 一大片 草地。

shānxià shì yīdàpiàn cǎodì

麓 断定 大きな芝生

(麓は大きな芝生である。)

(作例)

孙 (1996) では、「V 有」を存在構文の 1 つとして考察を行い、動詞 V は本動詞の機能

であり、「有」は「結果補語标记⁴⁴（結果補語標識）」であると述べている。また、『汉语水平考试词汇大纲』（HSK 語彙リスト）にある 2897 個の動詞⁴⁵を考察した結果、「V 有」構文に用いられる動詞が以下の 88 個であることを明らかにしている。ただし、各動詞の出現頻度は示されていない。

第一類（V₁と記する）：

安（置く）、办（作る）、保存（保存する）、保留（保存する）、备（備える）、标（印をつける）、布（配置する）、部署（配置する）藏₁（收藏）（保存する）、插（挿す）、掺（混ぜる）、存₁（儲存）（預ける）、搭（組み立てる）、带₁（携帯）（持つ）、雕（彫刻する）、订（契約を結ぶ）、堆（積む）、缝（縫う）、附（付ける）、盖（覆う）、雇（雇う）、挂（掛ける）、画（描く）、划（線などを引く）、环（取り囲む）、绘（描く）、混（掺杂）（混ぜる）、加（加える）、建（建てる）、建立（設立する）、镌（彫刻する）、镌刻（彫刻する）、开办（開設する）、开设（開設する）、刻（刻む）、留（保留）（残す）、录（記録する）、配（配置する）、配置（配置する）、佩（付ける）、喷（噴き出す）、披（羽織る）、辟（開拓する）、聘（招聘する）、铺设（敷く）、漆（塗る）、嵌（嵌める）、设（設ける）、设立（設立する）、设置（設置する）、收（受け取る）、竖（まっすぐ立てる）、塑（粘土などで形づくる）、题（書き留める）、贴（貼る）、涂（塗る）、挖（掘る）、握（握る）、镶（鏤める）、镶嵌（鏤める）、写（書く）、绣（刺繍する）、悬（掲げる）、遗存（残る）、印（刷る）、栽（植える）、载（載せる）、珍藏（収蔵する）、种（植える）、贮（蓄える）、铸（鑄造する）、装₁（放入）（入れる）、装₂（安装）（取り付ける）、装备（装備する）、装载（積みこむ）

第二類（V₂と記する）：

包含（含む）、包括（含む）、带₂（具有）（もっている）、含（含む）

第三類（V₃と記する）：

藏₂（隠蔽）（隠す）、存₂（存在）（存在する）、落（落ちる）、散落（散り落ちる）、停（止める）、隱藏（隠す）、蘊藏（埋蔵している）、坐（坐る）、长（生える）

⁴⁴ 結果補語は、動詞の後ろにくっつけて、動作によって生じた具体的な結果を表し、動詞と一体化して複合動詞を構成する。「打死（打ち殺す）」、「照红（赤く照り映える）」のように、動詞および形容詞が結果補語になることができる。また、結果補語の後ろに、「了」、「过」などのアスペクト形式を付けることができる。

⁴⁵ 孫（1996）は、HSK 語彙リストにある動詞の他に、内省により 20 数個の動詞も考察対象としている。

(孙 1996:23 ; 和訳は筆者による)

また、吕 (1999:630-631) は、「有」を「用在动词后面、结合紧凑、类似一个词 (動詞の後に用いられ、その動詞と「有」が1つの語のように緊密に結合されているもの)」と考え、文 (4.14) にある「有」は所有の用法を表し、文 (4.15) にある「有」は存在の用法を表すと述べている。つまり、孙 (1996)、吕 (1999) は「有」をアスペクト助詞と見なさず、1つの結果補語であると主張している。

(4.14) 这家伙 怀有 不可告人 的 目的。

zhèjiāhuo huái-yǒu bùkěgàorén de mùdì

あの人 抱く-YOU 秘密な目的

(あの人には秘密な目的を抱いている。)

(4.15) 铜镜上 刻有 花纹。

tóngjìngshàng kè-yǒu huāwén

銅鏡の上 刻む-YOU 花模様

(銅鏡の上に花模様が刻んである。)

(吕 1999:630-631)

张 (2006:74) は、存在を表す「V有」構文は「强调存在，而附带说明存在的方式 (存在を強調し、存在の様態に対する説明は二次的なものである)」と述べている。例えば、文 (4.16) のように、文の一次的な意味は物の存在、つまり、何冊かの本が机の上に存在していることを表している。このような存在の意味は、存在動詞「有」によるものである。「堆 (積む)」という動詞は存在の様態を規定し、二次的な意味にすぎない。ただし、张では具体的な根拠が示されていない。

(4.16) 桌上 堆有 几本书。

zhuōshàng duī-yǒu jǐběnshū

机の上 積む-YOU 何冊かの本

(机の上に何冊かの本が積んである。)

(作例)

周 (2009) は孫 (1996) の観点に賛成し、「V 有」が「述補構造 (述語+補語という構造)」であると述べている。その上、周 (2009) は「V 有」構文には存在の意味と所有の意味という 2 つのタイプが存在しており、分けて考察する必要があることを示唆している。存在の意味を表す「V 有」構文は、「V 着」構文や「V 了」構文と入れ替えても、構文の意味は殆ど変わらないが、所有の意味を表す「V 有」構文は、「V 着」構文や「V 了」構文に置き換えることが不可能と主張している。確かに、文 (4.17) のように、所有の意味を表す「V 有」構文は、一般に「V 着」構文や「V 了」構文と置き換えられないが、それは動詞「著 (著する)」の文体に関わっていると思われる。すなわち、「著 (著する)」は文語体でしか使用されないため、「着」や「了」とは相容れない。「V 有」構文自体の意味による制限ではないと考えられる。例えば、周 (2009) に対して文 (4.18)、(4.19) のような反例が挙げられる。

- (4.17) a. 鲁迅 先生 著有 《阿 Q 正传》
 lǔxùn xiānsheng zhù-yǒu ā zhèngzhuàn
 鲁迅先生 著する-YOU 『阿 Q 正伝』
 (鲁迅先生は『阿 Q 正伝』を著している。)
- b. *鲁迅 先生 著着 《阿 Q 正传》
 lǔxùn xiānsheng zhù-zhe ā zhèngzhuàn
 鲁迅先生 著する-ZHE 『阿 Q 正伝』
- c. *鲁迅 先生 著了 《阿 Q 正传》
 lǔxùn xiānsheng zhù-le ā zhèngzhuàn
 鲁迅先生 著する-LE 『阿 Q 正伝』

(周 2009:70)

- (4.18) a. 犯人 带有 武器。
 fànren dài-yǒu wǔqì
 犯人 持つ-YOU 武器
 (犯人は武器を持っている。)
- b. 犯人 带着 武器
 fànren dài-zhe wǔqì
 犯人 持つ-ZHE 武器

(犯人は武器を持っている。)

c. 犯人 带了 武器

fànrén dài-le wǔqì

犯人 持つ-LE 武器

(犯人は武器を持っている。)

(4.19) a. 当时, 他发现 该男子只 穿有 一条 裤子, 身高

dàngshí tā fāxiàn gāi nánzǐ zhǐ chuān-yǒu yītiáo kùzi shēngāo

当時 彼 気づく その男 だけ 履く-YOU 一枚 ズボン 身長

在 1.72 米 左右, 而且 很 壮实。

zài mǐ zuǒyòu érqǐě hěn zhuàngshi

1.72 メートル位 しかも とても がっちりしている

(当時、その男は一枚のズボンだけ履いていた。身長が約 1.72 メートルで、身体ががっちりしていたと彼が気づいた。)

(『江南时报』、2006-06-01)

b. 该男子只 穿着 一条 裤子

gāi nánzǐ zhǐ chuān-zhe yītiáo kùzi

その男 だけ 履く-ZHE 一枚 ズボン

(その男は一枚のズボンだけを履いていた。)

c. 该男子只 穿了 一条 裤子

gāi nánzǐ zhǐ chuān-le yītiáo kùzi

その男 だけ 履く-LE 一枚 ズボン

(その男は一枚のズボンだけを履いていた。)

文 (4.18)、(4.19) に示されているように、動詞「带 (持つ)」、「穿 (着る)」自体が[+所有]の意味を有することにも関わらず、何れも「V 着」構文と「V 了」構文に置き換えることは可能である。周 (2009) の主張をさらに検討する必要がある。

一方、「有」をアスペクト形式として、「V 有」に関する考察を行ったのは宋 (1994)、石 (2004)、罗・范 (2006)、王 (2014) などがある。宋 (1994) は「V 有」における「有」を独立成分と見なさず、「完成体 (パーフェクト)」或いは「持续体 (持続相)」を表すアスペクト形式と指摘している。

(4.20) 桌上 有 一册 书。

zhuōshàng yǒu yīběn shū

机の上 YOU 一册 本

(机の上に本が一冊ある。)

(4.21) 桌上 放有 一册 书。

zhuōshàng fàng-yǒu yīběn shū

机の上 置く-YOU 一册 本

(机の上に本が一冊置いてある。)

(宋 1994:33)

石 (2004) は宋 (1994) と同様に、「V 有」にある「有」をアスペクト形式と見なしている。石 (2004) は、Langacker (1991b) を参考に存在・所有動詞「有」が「パーフェクト」の用法に文法化された認知基底を述べ、そのアスペクト的用法を指摘している。すなわち、(4.22) に示されているように、アスペクト形式としての「有」は、空間領域における物の実用性を表す所有動詞の意味が時間領域における現時点との関連性を表す「パーフェクト」の意味に投射されていると考えられる。

(4.22) 领有动词: 过去某时刻拥有某种东西 + 具有现时的实用性
(所有動詞) (過去のある時点にあるモノを有する) (現時点の実用性を有する)

↓ ↓
完成体: 过去某时刻发生的动作 + 具有现时的相关性
(完成体) (過去のある時点に行われた動作) (現時点との関連性を有する)

(石 2004:35 ; 和訳は筆者による)

宋 (1994)、石 (2004) などに対し、羅・范 (2006) は、統語・意味などの面から「有」を基本アスペクト形式とされている「了」、「着」と比較させ、「V 有」構文に用いられる動詞 V は制限されており、[+存在]又は[+所有]という素性をもたなければならないと指摘し、「有」を「准表体助詞 (準アスペクト形式)」として位置づけている。

また、張 (2010) は日本語の「V テイル」、「V テアル」が用いられる複合存在表現に対応する中国語として、代表的な「V 着」の他に、「V 有」が使用されることもあるという事

実を認めているが、Яхонтов (1957) や Jaxontov (1988) のように「V有」が「V着」の地理的、又は文体的ヴァリエーションに過ぎないと考えている。2つの形の間には「Vテイル」、「Vテアル」のような文法機能上の違いは見られないと述べている。しかしながら、「V有」と「V着」は用いられる動詞において異なる振る舞いを見せている点から、「V有」は決して「V着」の文体的ヴァリエーションではないと言えるだろう。

一方、王 (2014) は「V有」構文が構文・意味上において「V了」構文に相当すると述べている。ただし、王では「V有」に関する詳しい議論はなされていない。

(4.23) 墙上 写有 “肃静” 两个 大字。
qiángshàng xiě-yǒu sùjìng liǎnggè dàzì
壁上 書く-YOU 静肃 2つ 大文字
(壁上には「静肃」という2つの大文字が書いてある。)

(4.24) 墙上 写了 “肃静” 两个 大字。
qiángshàng xiě-le sùjìng liǎnggè dàzì
壁上 書く-LE 静肃 2つ 大文字
(壁上には「静肃」という2つの大文字が書いてある。)

(王 2014:25)

上述したように、「V有」に関する主要な先行研究を表 4-1 にまとめることができる。

表 4-1. 「V 有」に関する先行研究

文献	観点
Яхонтов (1957)	<ul style="list-style-type: none"> ・動作や行為の結果状態を表す ・文語体での使用、および、南方方言からの借用
Jaxontov (1988)	<ul style="list-style-type: none"> ・「結果相」である「V 着」に類似する ・話し言葉としては使用されない
史 (1984)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有」を中心とする「偏正结构 (polarization structure)」
宋 (1994)	<ul style="list-style-type: none"> ・「V 有」が「パーフェクト」または「継続相」である
孙 (1996)	<ul style="list-style-type: none"> ・V と「有」が「述補关系 (述補関係)」である ・動作性他動詞が多く使用される
石 (2004)	<ul style="list-style-type: none"> ・「V 有」が「パーフェクト」の用法である ・「パーフェクト」を表す「V 有」の認知基底は動詞「有」にある
罗・范 (2006)	<ul style="list-style-type: none"> ・「V 有」が準アスペクト形式である ・共起する動詞は[+存在]/[+所有]の素性を有する
张 (2006)	<ul style="list-style-type: none"> ・「V 有」構文においては「存在」が中心である ・存在の様態が二次的である
周 (2009)	<ul style="list-style-type: none"> ・V と「有」が「述補关系 (述補関係)」である ・存在の「V 有」は「V 着」/「V 了」に置き換えられるが、所有の「V 有」は「V 着」/「V 了」に置き換えられない
張 (2010)	<ul style="list-style-type: none"> ・「V 有」が「V 着」の地理的、文体的ヴァリエーションである ・「V 有」と「V 着」は「V テイル」、「V テアル」のような違いはない
王 (2014)	<ul style="list-style-type: none"> ・「V 有」が「V 了」に相当する

このように、先行研究では、主に「有」がアスペクト形式であるか否か、動詞 V と「有」との関係を巡って議論されているが、統一的な見解はまだ得られていない。また、「V 有」構文の内部の意味的ありようについては詳しい説明はなされていない。以下、典型的存在

構文との関連に着目して、「V 有」の構文的・意味的特徴を明らかにする。

4.2 「有」の性格

「V 有」の特徴を明らかにするため、語彙的源泉となる存在動詞「有」の特徴を分析する必要があると考えられる。「有」を述語動詞とする構文は「有」構文と呼ばれ、中国語の存在表現を担う基本的な構文である。木村（2011）は意味論的な観点から「有」構文を以下のタイプに分類している。用例（4.25）～（4.32）は全て木村（2011）による。

タイプ A：「特定の時空間におけるリアルな具体物の存在」を表すタイプ

(4.25) 铁笼子 里 有 一只 熊猫。

tiělóngzǐ lǐ yǒu yīzhī xióngmāo

檻 中 YOU 1 頭 パンダ

（檻の中にパンダが 1 頭いる。）

タイプ B：「特定の時空間におけるリアルな状況の存在」を表すタイプ

(4.26) 今天 有 雨夹雪。

jīntiān yǒu yǔjiáxuě

今日 YOU みぞれ

（今日はみぞれが降る。）

タイプ C：「構造体における構成部品の存在」を表すタイプ

(4.27) 这把伞 有 42 支 伞骨。

zhèbǎsǎn yǒu sìshíèr zhī sǎngǔ

この傘 YOU 42 本 骨

（この傘には 42 本の骨がある。）

タイプ D：「範疇における成員の存在」を表すタイプ

(4.28) 京剧 的 旦 有 花旦、老旦、武旦。

jīngjù de dàn yǒu huādàn lǎodàn wǔdàn

京劇 の 女形 YOU 花旦 老旦 武旦

(京劇の女形には「花旦」、「老旦」、「武旦」がある。)

タイプ E: 「事物における相対的關係者の存在」を表すタイプ

(4.29) 我 有 三个 表哥。

wǒ yǒu sāngè biǎogē

私 YOU 3人 従兄

(私には3人の従兄がいる。)

タイプ F: 「所有物としての存在」を表すタイプ

(4.30) 爸爸 有 两台 电脑。

bàbà yǒu liǎngtái diànnǎo

お父さん YOU 2台 パソコン

(お父さんにはパソコンが2台ある。)

タイプ G: 「事物における質的属性の存在」を表すタイプ

(4.31) 他 有 酗酒 的 毛病。

tā yǒu xùjiǔ de máobìng

彼 YOU 泥酔する の 悪い癖

(彼には泥酔する悪い癖がある。)

タイプ H: 「事物における量的属性の存在」を表すタイプ

(4.32) 他 有 一米八。

tā yǒu yīmǐbā

彼 YOU 1メートル80

(彼は1メートル80ある。)

以上のように、木村(2011)は「有」構文を8つのタイプに分けているが、この8つのタイプは大きく「存在」と「所有」という2つの用法にまとめることができる。以下、「存在」と「所有」を表す存在動詞「有」と「V有」における「有」との関連性を論じる。

4.2.1 「V有」はアスペクト形式か

4.1節で述べたように、これまで「V有」構文にある「有」がアスペクト形式であるか否かに関して、意見が分かれている。本研究では、「有」をアスペクト形式と考えて論を進める。その理由については、主に以下の3点が挙げられる。

文(4.33)、(4.34)が示すように、「V有」構文には他のアスペクト形式「V了」、「V着」、「V过」を用いることができないが、置き換えることは可能である。アスペクト形式「V了」、「V着」、「V过」の代わりに、ここでは、「有」がアスペクト形式の機能を果たしていると考えられる。つまり、「V了」、「V着」、「V过」と「V有」はシンタグマティックな関係ではなく、パラディグマティックな関係にある。

(4.33) 他 在 银行里 存有 一笔 钱。
tā zài yínhángli cún-yǒu yībǐ qián
彼 に 銀行の中 預ける-YOU お金
(彼は銀行にお金を預けてある。)

(4.34) 他 在 银行里 存有 { *了 / *着 / *过 } 一笔 钱。
tā zài yínhángli cún-yǒu -le -zhe -guo yībǐ qián
彼 に 銀行の中 預ける-YOU -LE -ZHE -GUO お金

(石 2004:37)

加えて、文(4.23)が(4.35)に、文(4.33)が文(4.36)に置き換えることが可能であり、意味もほとんど変わらないことから、「V有」は「V了」、「V着」と類似した意味機能をもっていると考えられる。例えば、Jaxontov (1988)も「V有」が「V着」に類似していると指摘している。また、石(2004)や王(2014)では、「V有」はアスペクト形式「V了」と類似した機能を有しており、「パーフェクト」の用法であると主張している。

(4.35) 墙上 写 {着 / 了} “肃静” 两个 大字。
qiángshàng xiě -zhe -le sùjìng liǎnggè dàzì
壁上 書く -ZHE -LE 静肃 2つ 大文字
(壁上には「静肃」という2つの大文字が書いてある。)

(4.36) 他 在 银行里 存 {着 / 了} 一笔 钱
tā zài yínhánglǐ cún -zhe -le yībǐ qián

彼 に 銀行の中 預ける -ZHE -LE お金

(彼は銀行にお金を預けてある。)

(作例)

実際のデータを見ると、「V有」と「V着」、「V了」が同一の文に現れる場合も少なくないことが分かる。例えば、文(4.37)、(4.38)のように、1つの存在構文において、「V有」表現と「V了」表現、「V着」表現とが等位接続できるという事実が存在する。

(4.37) 正厅 中央 墙上 安有 神牌, 神牌 前 安放了
zhèngtīng zhōngyāng qiánghàng ān-yǒu shénpái shénpái qián ānfàng-le

正面ロビー 中央 壁上 置く-YOU 神札 神札 前 置く-LE

火徳公 石像, 上空 悬挂着 “惇序堂” 三个 大字。

huǒdégōng shíxiàng shàngkōng xuánguà-zhe dūnxùtáng sāngè dàzì

名前 石像 上方 掲げる-ZHE 名前 3つの大文字

(正面ロビー中央の壁には神札が置いてあり、神札の前に火徳公石像が置いてあり、上方には「惇序堂」という3つの大文字が掲げてある。)

(『人民日报』、2015-04-04)

(4.38) 在 巢湖市 内, 不时 能 看到 路边 悬挂着 醒目的

zài cháohúshì nèi búshí néng kàndào lùbiān xuánguà-zhe xǐngmù de

巢湖市内では 時々 可能 見える 道の傍 掛ける-ZHE 目立つの

标牌, 写着 “公共卫生间” 的 字样, 并 刻有

biāopái xiě-zhe gōnggòngwèishēngjiān de zìyàng bìng kè-yǒu

標識 書く-ZHE 公共トイレ の 文字 しかも 刻む-YOU

指示 路线。

zhǐshì lùxiàn

ルート

(巢湖市内では、道の傍に掛けられている目立った標識が時々見える。その上には「公共トイレ」と書いてあり、ルートも刻んである。)

(『人民日报』、2017-03-22)

さらに、「有」を用いた文(4.39)、(4.41)は既然の事態を表し、自然な文であるが、「有」を省略した文(4.40)、(4.42)は未然事態を表し、非文となっている。つまり、「V有」は「結果」というアスペクト的意味をもっている。この点からも、「V有」はアスペクトの機能を担う形式であるという認識は否定できないと言える。

(4.39) 墙上 挂有 一幅 画。

qiángshàng guà-yǒu yīfú huà

壁上 掛ける-YOU 一枚 絵

(壁に絵が一枚掛けてある。)

(4.40) *墙上 挂 一幅 画。

qiángshàng guà yīfú huà

壁上 掛ける 一枚 絵

(作例)

(4.41) 她 订有 《文汇报》、《参考消息》 等 5份 报刊, …略…

tā dìng-yǒu wénhuìbào cānkǎoxiāoxī děng wǔfèn bàokān

彼女 購読する-YOU 文匯報 参考消息 など 5種 新聞

(彼女は『文匯報』、『参考消息』などの5種の新聞を購読している。)

(『人民日报』、2009-09-11)

(4.42) *她 订 《文汇报》、《参考消息》 等 5份 报刊

tā dìng wénhuìbào cānkǎoxiāoxī děng wǔfèn bàokān

彼女 購読する 文匯報 参考消息 など 5種 新聞

上述の3点をもう一度まとめると以下のようなになる。つまり、「V有」は中国語のアスペクトカテゴリーの正当な形式である。

1) 「V了」、「V着」と「V有」とはシンタグマティックな関係ではなく、パラディグマティックな関係にある。

2) 「V有」は「V了」や「V着」と類似した意味機能を有している。

3) 「V 有」は既然の事態を表し、「結果」というアスペクト的意味をもっている。

ところで、「V 有」はしばしば「結果補語（結果補語）」であると指摘されているが、以下の2点から「V 有」と結果補語とは異なると言える。

「V 有」とは違って、結果補語は「V 了」、「V 过」と共起できる。例えば、文 (4.43)、(4.44) のように、結果補語「死（死ぬ）」、「断（折れる）」の後ろにアスペクト形式「了」や「过」が使用されている。

(4.43) 老农民 和 东郭 先生 一起 把 狼 打死了。

lǎonóngmín hé dōngguō xiānsheng yīqǐ bǎ láng dǎsǐ-le

老農民 と 名前 先生 一緒に 処置 狼 撃ち殺す-LE

(老農民は東郭先生と一緒に狼を撃ち殺した。)

(刘他 2001:537)

(4.44) 他 从来 没 打断过 别人 的 发言。

tā cónglái méi dǎduàn-guo biérén de fāyán

彼 今まで 否定 遮る-GUO 他人 の 発言

(彼は今まで他人の発言を遮ったことがない。)

(刘他 2001:540)

また、結果補語を「V 了」、「V 着」などのアスペクト形式に置き換えると意味が変わる。刘他 (2001:535) も指摘しているように、「了」は動作の発生或いは状態の出現を表すが、結果補語は動作による具体的な結果状態を表す。例えば、(4.45)、(4.46) の a と b の意味は同じとは言えない。しかしながら、(4.35)、(4.36) に示されているように、「V 有」と「V 了」、「V 着」などのアスペクト形式とはほぼ意味を変えず置き換えることができる。

(4.45) a. 你 看完 这本书 了 吗?

nǐ kànwán zhèběnshū le ma

貴方 読み終わる この本 LE 疑問

(この本は読み終わりましたか?)

b. 你 看了 这本书 了 吗?

nǐ kàn-le zhèběnshū le ma

貴方 読む-LE この本 LE 疑問

(この本は読みましたか?)

(4.46) a. 他 擦 干净 椅子 后, 坐了 下来。

tā cā gānjìng yǐzi hòu zuò-le xiàlái

彼 拭く 綺麗に 椅子 後 坐る-LE XIALAI

(彼は椅子を綺麗に拭いてから、座り込んだ。)

b. 他 擦了 椅子 后, 坐了 下来。

tā cā-le yǐzi hòu zuò-le xiàlái

彼 拭く-LE 椅子 後 坐る-LE XIALAI

(彼は椅子を拭いてから、座り込んだ。)

(作例)

上述したように、本研究では「V 有」を、結果補語ではなく、1 つのアスペクト形式と見なして論を進めていく。

4.2.2 「V 有」と存在動詞「有」との関係

存在動詞「有」が独立動詞として用いられる場合には、(4.47)、(4.48) のように、存在の用法と所有の用法がある。つまり、中国語の「有」は、日本語の「アル」と同様に、存在の用法と所有の用法を併せ持っている。これに対し、英語では、存在を表すには動詞 BE が用いられ、所有を表すには動詞 HAVE が用いられる。

(4.47) 山上 有 一幢 別墅

shānshàng yǒu yīzhuàng biéshù

山の上 YOU 1 棟 別荘

(山の上には別荘が 1 棟ある。)

(4.48) 张三 有 一幢 別墅

zhāngsān yǒu yīzhuàng biéshù

張三 YOU 1 棟 別荘

(張三には別荘が 1 棟ある。)

(作例)

存在と所有との間には明確な境界線が存在しないと考えられる。両者の関係については、三上 (1963) は次のように述べている。

存在と所有とは水と油との関係でなく、水 (冷) と湯のように一直線に連続する観念だと思われる。[「A に B がある」のように]「A に」はまずあり場所であり、次いで場所になぞらえられた物や人である。時も存在のあり場所と見なされることがある。A が類概念 (または集合) で、B が種概念 (集合の元) というのもある。

- (4.49) a. 机の上に本がある。(所)
b. 秋には、村の祭がある。(時)
c. バラの木には、とげがある。(物)
d. 私には、妻も子もない。(人)
e. 笛には、横笛と縦笛がある。(集合)

(三上 1963:43)

言語類型論においても既に明らかになったように、所有は存在の概念からの拡張であると考えられる (池上 1981:69-77 ; Heine 1997:45)。

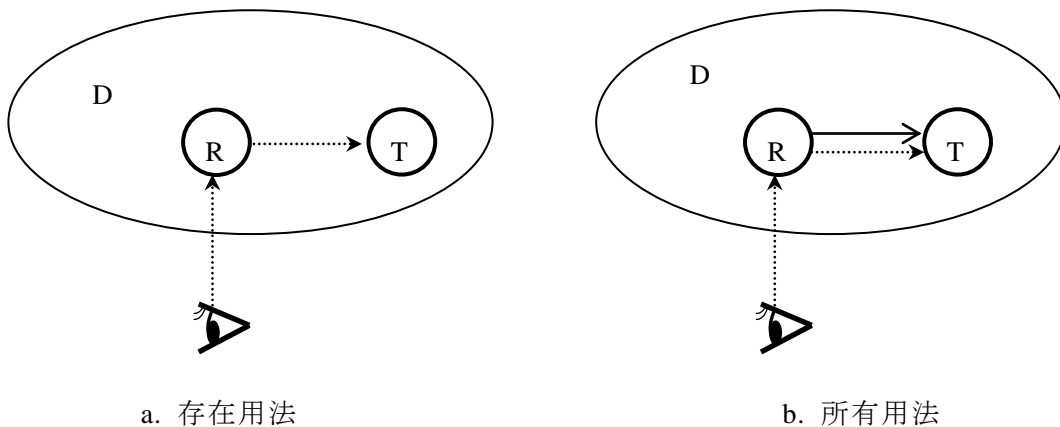
possession is a relatively abstract domain of human conceptualization, and expressions for it are derived from more concrete domains. These domains have to do with basic experiences relating to what one does (Action), where one is (Location), who one is accompanied by (Accompaniment), or what exists (Existence).

(Heine 1997:45)

所有は人間の概念化の中で比較的抽象的な領域である。その表現はより具体的な領域に由来する。これらの「より具体的な領域」は人の基本的経験に関連する。人が行った動作 (動作・行為)、人がいる場所 (位置)、誰に付き添われるか (付随)、或いは、何が存在するか (存在) などが含まれている。

(和訳は筆者による)

また、孔（2004）は、幼児の言語習得を観察し、幼児の言語データには具体的な存在の用法が 11 例もあるのに対し、抽象的な所有の用法は僅か 2 例であると述べ、習得時間については、存在用法は所有用法より早く、前者が 1.4 歳であり、後者が 2 歳であると指摘している。人間が認知活動を行う際に、眼前に存在している具体的な物は一番認知しやすい。具体から抽象へという認知プロセスから見れば、本研究でも、存在の用法は「有」のプロトタイプの用法であり、所有の用法は存在の用法から拡張したと位置づけられる。つまり、所有は存在の一種であると考えられる。参照点構造を用いて、中国語存在動詞「有」における存在用法と所有用法の概念構造を図 4-1 に示すことができる。図 a とは違って、図 b では参照点 (R) がターゲット (T) をコントロールするという関係が表されている。



▶ 認知主体 (conceptualizer)

T: ターゲット (target)

.....> 心的経路 (mental path)

R: 参照点 (reference point)

D: 支配領域 (dominion)

→ R によるコントロール

図 4-1. 「有」における存在用法と所有用法

一方、「V 有」構文においても、存在動詞「有」のような存在の用法と所有の用法が見られる。「V 有」構文は基本的に「NP₁+V 有+NP₂」という構造を有し、以下の 2 つのパターンに大別できる。

(I) L (Location) + V 有 + P (Patient)⁴⁶

(4.50) 墙上 挂有 一幅 画。(壁には絵が一枚掛けてある。)

qiángshàng guà-yǒu yīfú huà

壁上 掛ける-YOU 一枚 絵

文法関係 (主語)

意味役割 (被動作主)

(作例)

(II) A (Agent) + V 有 + P (Patient)

(4.51) 我们 拍有 照片 呢。(私たちは写真を撮ってあります。)

wǒmen pāi-yǒu zhàopiàn ne

私達 撮る-YOU 写真 よ

文法関係 (主語) (目的語)

意味役割 (動作主) (被動作主)

(『中国語辞典』)

以下では、典型的存在構文である「有」構文と「V 有」構文との関係を詳しく分析する。分析する前に、まず議論に関わる非対格性を説明しておく。Perlmutter (1978) によって提唱された「非対格性の仮説 (Unaccusative Hypothesis)」では、自動詞がさらに非能格動詞 (unaccusative verbs) と非対格動詞 (unergative verbs) の二種類に分かれると指摘されている。非能格動詞は参与者が自力的に、意図的に行為をなす自律的事態である。これに対して、非対格動詞は意図的ではなく、他の参与者からの力を受けて行為が行われる依存的事態である。また、Langacker (1991a:243-246) は、参与者が 1 つだけの変化過程において、変化を引き起すエネルギーの源によってさらに 2 種類に区別している。外部のエネルギーを受けず、参与者自身のエネルギーで変化を起こす場合を「Self-induced thematic relation」と呼び、外部のエネルギーを受けて変化が起こる場合を「Externally-driven thematic relation」と呼んでいる。この 2 種類は、図 4-2 の認知モデルによって示されている。図 4-2 から分かるように、Langacker の「Self-induced thematic relation」と「Externally-driven thematic

⁴⁶ 被動作主 (Patient) と対象 (Theme) を区別して使用する場合もある。例えば、三原・平岩 (2006) では、動作の影響を受けるものを被動作主と呼び、状態変化や位置変化を受ける名詞句を対象と呼ぶ。本研究では、このような区別はしない。

relation」は、それぞれ非能格動詞と非対格動詞に対応している。

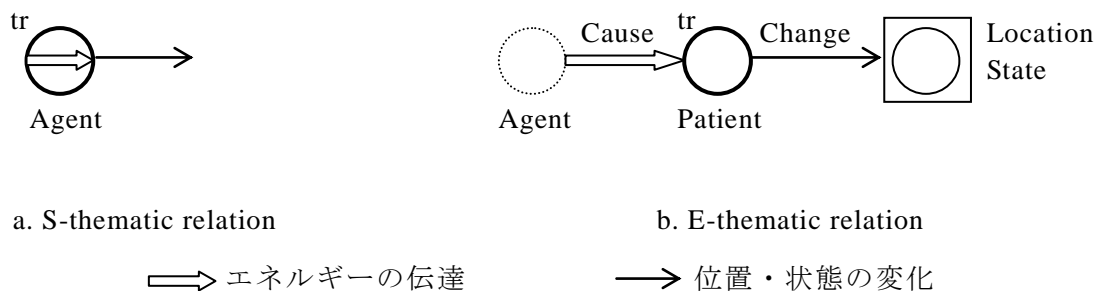


図 4-2. 非能格動詞と非対格動詞 (Langacker 1991a:245 ; 一部修正)

「有」構文に関しては、文 (4.47) が表す存在用法においては、「山上 (山の上)」が形式主語であり、「別荘 (別荘)」が実際の主語として機能している⁴⁷。単一の参与者である「別荘 (別荘)」は元々存在しているわけではなく、外部の参与者からエネルギーを受けて、「山の上」という場所に出現したわけである。すなわち、存在を表す「有」は非対格動詞的な構造をもっていると考えられる。これに対し、文 (4.48) が表す所有用法においては、所有者である「张三 (張三)」が主語となり、所有物である「別荘 (別荘)」が目的語となる。すなわち、所有を表す「有」は他動詞的な構造をもっていると考えられる。

一方、「V 有」構文に関しては、文 (4.50) のように、場所名詞「墙上 (壁上)」が形式主語であり、対象 (被動作主) である「画 (絵)」が実際の主語であるとされている。動作主が義務的に省略されている。参与者である「画 (絵)」は自らのエネルギーによって行為をなすわけではなく、外部の参与者からエネルギーを受けて「壁に掛けられている」という状態になったわけである。すなわち、非対格動詞的な構造であると考えられる。動作主が明示されず、視覚で捉えられる結果状態が存在しており、話し手の焦点は客体対象に置かれている。ここでは、これを I 型とする。文 (4.50)、(4.52) は共に絵の存在を表しているが、両者の表す意味が全く同じとは言えない。文 (4.50) は動作行為終了後の結果状態の存在を表し、時間内の表現であるのに対して、文 (4.52) は単なる状態を表し、開始点と終了点を視野に入れていない時間外の表現である。それに加え、文 (4.50) では、絵の存在だけではなく、その存在の在り方まで規定されている。すなわち、絵は壁に貼られて

⁴⁷ 「L (Location) + 有 + P (Patient)」という文型における主語については、まだ統一した見解がないが、対象が「有」の意味上の主語であることは誰も否定できないであろう。張 (1991) も同じ立場である。また、望月 (1999) は、「有」存在構文が VS 語順をとると指摘している。

いる様態ではなく、壁に描かれている様態でもなく、掛けられている様態で存在しているという意味が表されている。

(4.52) 墙上 有 一幅 画。

qiángshàng yǒu yīfú huà

壁上 YOU 一枚 絵

(壁に絵が一枚ある。)

(作例)

これに対し、文 (4.51) では、動作主である「我们 (私達)」が明示されて主語の位置に立ち、対象である「照片 (写真)」は目的語の位置に立つ。すなわち、主語と目的語両方をもつ、他動詞的な構造であると考えられる。動作主が明示されていることから、話し手の焦点は対象よりも、動作主による行為に置かれていると言える。ここでは、これを II 型とする。文 (4.51)、(4.53) は共に所有を表しているが、文 (4.51) は私たちが写真を撮ったという行為経験の所有を表しているのに対し、文 (4.53) は単に物の所有を表す時間外の事態である。このようにして、「V 有」構文は、項構造においては、単独として使用されている存在動詞「有」と同様な特徴を見せている。すなわち、「V 有」表現では存在動詞「有」の「存在」と「所有」といった二面性が引き継がれていると考えられる。

(4.53) 我们 有 照片 呢。

wǒmen yǒu zhàopiàn ne

私達 YOU 写真 よ

(私たちには写真があるよ。)

(作例)

この点については、日本語の「V テアル」構文にも類似した特徴が存在している。竹沢 (2001:717-719) は、文 (4.54)、(4.55) がそれぞれ動詞 V の表す動作によって引き起こされる「結果的状況の存在」と「結果的状況の所有」を表していると指摘し、「V テアル」構文の 2 つのパターンが独立動詞アルの二面性をそのまま引き継いでいると指摘している。つまり、日本語の「V テアル」表現と中国語「V 有」は共に本来の存在動詞から「存在」

と「所有」の意味が引き継がれていると考えられる。両者の共通点と相違点については、第7章で詳しく述べる。

(4.54) 駐車場に車が止めてある。

(4.55) 太郎が駐車場に車を止めてある。

(竹沢 2001:717)

4.3 「V有」構文の特徴

史(1984)は、上述の2種類の「V有」構文の以外に、以下の2種類の「V有」構文を挙げているが、文(4.56)、(4.57)のような「V有」構文は出現頻度が低くて「V有」構文全体の分類に対する価値がないと述べている。今回コーパスで調査した結果、(4.57)のような用例は1例も見つからなかった。また、(4.56)のように、「在銀行里(銀行に)」は副詞的成分であり、やはり、II型の「V有」構文と考えられる。以下、I型、II型の「V有」構文を中心に考察を進める。

(4.56) 他 在 銀行里 存有 一笔钱。(N₁+在 L+V有+N₂)

tā zài yínhángli cún-yǒu yībǐqián

彼 に 銀行の中 預ける-YOU お金

(彼は銀行にお金を預けてある。)

(4.57) 銀行里 他 存有 一笔钱。(L+N₁+V有+N₂)

yínhángli tā cún-yǒu yībǐqián

銀行の中 彼 預ける-YOU お金

(銀行には、彼はお金を預けてある。)

(史 1984:27)

4.3.1 I型の「V有」構文

4.2節で述べたように、「NP₁+V有+NP₂」という基本構造をもつ「V有」構文はI型とII型に分かれる。I型の「V有」構文は「L (Location) +V有+P (Patient)」という構造をもつ。I型では、NP₁が典型的な場所名詞であり、動作主が完全に背景化され、話し手の関心は目の前の対象にある。構文全体として、問題にされているのは動詞の表す動作の結果

としてもたらされる対象の存在の状態である。ここでは、「対象の存在様態⁴⁸」と呼ぶことにする。このような特徴は「V着」にも見られる。(4.58)、(4.59)に示されているように、「V着」における変化動詞⁴⁹は存在の様態、すなわち、どのような状態で存在しているかを表し、両者の違いは絵の存在の在り方にある(刘 1985:121)。

(4.58) 墙上 贴着 一幅 画。

qiángshàng tiē-zhe yīfú huà

壁上 貼る-ZHE 一枚 絵

(壁上に絵が一枚貼ってある。)

(4.59) 墙上 挂着 一幅 画。

qiángshàng guà-zhe yīfú huà

壁上 掛ける-ZHE 一枚 絵

(壁上に絵が一枚掛けてある。)

(刘 1985:121)

「対象の存在様態」を表す「V有」構文は、話し手にとっての〈いま・ここ〉というリアルな特定な時空間において実体が存在することを表す。典型的存在構文に一番近く、「現場性」が強い、「知覚性」に富んだ広義の存在表現⁵⁰であると考えられる。この場合、存在動詞「有」が中心的な働きをなし、動詞Vが二次的なものである。その根拠として、以下の4点が挙げられる。

まず、文(4.60)、(4.61)のように、1つの存在構文においては、I型の「V有」構文と存在動詞を用いた典型的な存在構文とが等位接続できることが挙げられる。

⁴⁸ 「存在様態」は野村(1994、2003)、岡(2001、2013b)などの研究で用いられる用語である。本稿でいう「対象の存在様態」は、これらの研究を参考にしている。

⁴⁹ 客体変化動詞と主体変化動詞両方が含まれている。刘(1985)では「表示状态的动词(状態を表す動詞)」と呼んでいる。

⁵⁰ 広義の存在表現とは、「墙上挂着一幅画(壁に絵が一枚掛けてある)」のように、事物や人の存在だけを表す典型的存在構文に対し、その存在の在り方を述べる描写性の高い構文である。

- (4.60) 出 延平路，上 堤岸，有 一 精致 的 小亭，安置有 一尊
 chū yánpínglù shàng dī'àn yǒu yī jīngzhì de xiǎotíng ānzhì-yǒu yīzūn
 出 道路名 登 堤防 YOU 1つ 精巧 の 東屋 置く-YOU 1つ
 台湾 现存 最大 的 “泰山 石敢当”
 táiwān xiàncún zuìdà de tàishān shígǎndāng
 台湾 现存 最大 の 泰山 石敢当

(延平路を出て堤防に上ると、精巧な東屋があり、台湾で現存する最大の「泰山石敢当」が置いてある。)

(『人民日报海外版』、2007-06-21)

- (4.61) 船身 为 樟木质 结构，船头 有 两只 狮子 把守，
 chuánshēn wéi zhāngmùzhì jiégòu chuántóu yǒu liǎngzhǐ shīzi bǎshǒu
 船体 断定 楠木構造 船頭 YOU 2匹 獅子 守衛する
 四个 角 各 挂有 一个 古香古色 的 宫灯，…略…
 sìgè jiǎo gè guà-yǒu yīgè gǔxiānggǔsè de gōngdēng
 数量詞 角 各 掛ける-YOU 1つ 古色蒼然とした飾り提灯

(船体は楠木で作られている。船頭には守衛の獅子が2匹あり、4つの角にそれぞれ古色蒼然とした飾り提灯が掛けてある。)

(北京人民广播电台、『城市零距离』、2008-07-31)

次に、I型の「V有」構文にある場所名詞句は動詞Vではなく、本来の存在動詞「有」が要求して出現していることである。(4.62)に示されているように、文(a)では、「疊(畳む)」という動詞の意味には場所が必須項として指定されておらず、場所を表す名詞句「壁櫛里(押入れの中)」が現れたのは存在動詞「有」が要求しているからであると考えられる。その理由としては、「疊(畳む)」が省略された文(b)が成立するが、「有」が省略された文(c)は不自然になるからである。同様に、(4.63)が示しているように、文(a)では、「绑(縛る)」という動詞には場所名詞句が必須ではなく、存在動詞「有」の要求で場所名詞句「身上(体の上)」が現れたと考えられる。その理由としては、動詞「绑(縛る)」が省略された文(b)が成立するのに対し、「有」を省略された文(c)が成立しないからである。

(4.62) a. 壁橱里 叠有 被子。
 bìchúli dié-yǒu bèizi
 押入れの中 畳む-YOU 布団
 (押入れの中に布団が畳んである。)

b. 壁橱里 有 被子。
 bìchúli yǒu bèizi
 押入れの中 YOU 布団
 (押入れの中に布団がある。)

c. *壁橱里 叠 被子。
 bìchúli dié bèizi
 押入れの中 畳む 布団

(作例)

(4.63) a. 德国 媒体 报道 说, 这名 蒙面 男子 身上
 déguó méitǐ bàodào shuō zhè míng méngmiàn nánzǐ shēnshang
 ドイツ メディア 報道する 言う この 覆面 男 身体
绑有 炸药, …略…
 bǎng-yǒu zhà yào
 縛る-YOU 爆弾

(ドイツのメディアによると、この覆面の男の体には爆弾が縛ってある。)

(『京华时报』、2006-11-27)

b. 这名 蒙面 男子 身上 有 炸药
 zhè míng méngmiàn nánzǐ shēnshang yǒu zhà yào
 この 覆面 男 身体 YOU 爆弾
 (この覆面の男の体には爆弾がある。)

c. *这名 蒙面 男子 身上 绑 炸药
 zhè míng méngmiàn nánzǐ shēnshang bǎng zhà yào
 この 覆面 男 身体 縛る 爆弾

(作例)

また、典型的存在構文からなる問いの文に対して、I型の「V有」構文が自然に用いら

れることから、このタイプの「V有」構文が典型的存在構文に近いことが言えるだろう。

(4.64) 一桌上 有 什么?

zhuōshàng yǒu shénme

机の上 YOU 何

(机の上に何がありますか?)

一a. (桌上) 有 一 本 书。

zhuōshàng yǒu yīběn shū

机の上 YOU 一 冊 本

(机の上に一冊の本があります。)

一b. (桌上) 放有 一 本 书。

zhuōshàng fàng-yǒu yīběn shū

机の上 置く-YOU 一 冊 本

(机の上に一冊の本が置いてあります。)

(作例)

文(4.64)のように、典型的存在構文からなる問いに対し、「V有」構文は典型的存在構文と同様に自然な答えが成り立つことから見れば、このタイプを広義の存在表現の一種と見なすことは正当であると考えられる。答えaにおいては、本の存在だけを述べているが、どのような状態で存在しているかという問題については特に言及されていない。答えbにおいては、本は散らかしている状態で存在しているのではなく、「置いた」状態で存在しているというニュアンスが含まれている。

同様に、文(4.65)のように、壁に絵が存在していることを表すだけでなく、どのような状態で存在しているのかも説明されている。すなわち、絵は貼られているのではなく、描かれているのでもなく、壁に掛けられている状態で存在している。「対象の存在様態」を表す「V有」では典型的存在構文と比べ、対象の存在の在り方がより具体的に規定されていると言える。この点に関しては、張編(2010:568)も動詞Vが「有」を修飾・限定していると指摘している。

(4.65) 墙上 挂有 一幅 画。

qiángshàng guà-yǒu yīfú huà

壁上 掛ける-YOU 一枚 絵

(壁に絵が一枚掛けてある。)

(再掲)

さらに、典型的存在構文「有」構文は一般に (4.66) のような構造をもっている。つまり、存在動詞「有」の前に場所を表す名詞句が現れ、「有」の後に数量詞または量詞を伴う不定 (indefinite) 名詞句が現れる。

(4.66) 「事物が存在する場所」 + 「有」 + 「不定の事物」

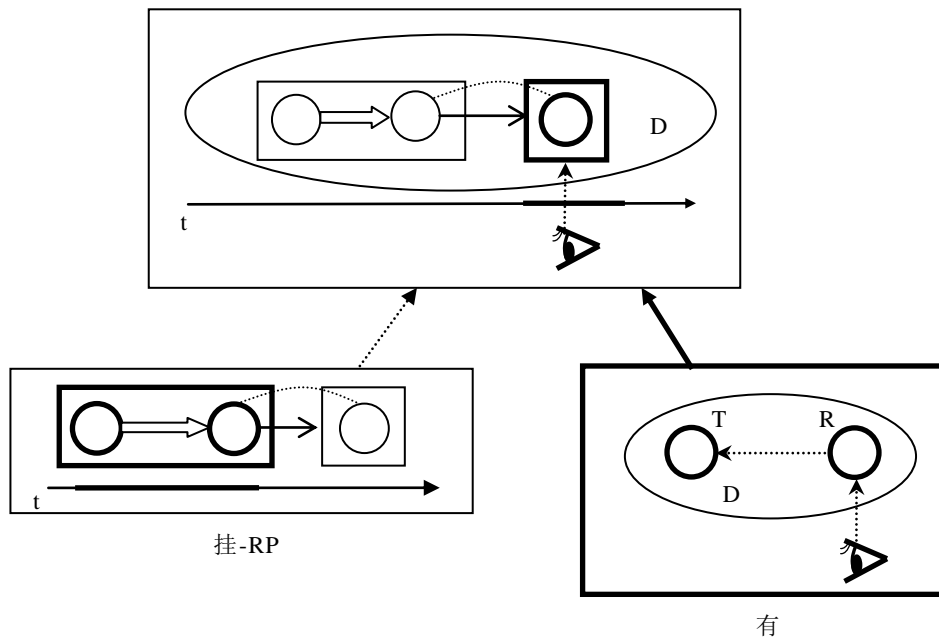
(望月 1999:208)

これに対し、I 型の「V 有」構文も類似した構造をもっている。すなわち、(4.67) のように、「V 有」の前に場所を表す名詞句が現れ、「V 有」の後に定名詞句ではなく、存在主体を表す不定名詞句が現れる。よって、I 型の「V 有」構文と典型的存在構文とは同一構造をもっていると言えるだろう。

(4.67) 「事物が存在する場所」 + 「V 有」 + 「不定の事物」

上述したように、I 型の「V 有」構文が典型的存在構文に一番近いと見なすのが妥当であると考えられる。

次に、認知文法の枠組みで I 型の「V 有」構文の合成構造を考察する。図 4-3 に示されるように、文 (4.65) の合成構造は「挂-RP」と「有」という 2 つの成分構造からなっていると考えられる。



R: 参照点 T: ターゲット D: 支配領域
 RP: 結果述語 心経路 一致

図 4-3. 「墙上挂有一幅画」の合成構造

「V 有」と言えば、まず「前項述語 (Verb[V]) + 結果述語 (Resultative Predicate[RP])」という動補構造 (V-RP) が想起される。動補構造は中国語文法における重要な概念であり、アスペクトにも深く関わっている。中国語のアスペクト形式は結果補語に由来することは既に明らかにされている。動補構造 (V-RP) には、「V」の部分に先に動詞「挂」が入る。図 4-3 の左下の成分構造「挂-RP」では、動作主と対象がそれぞれトラジェクターとランドマークとしてプロファイルされている。対象の位置変化は含意されているが、プロファイルされていない。物の存在を表す右下の成分構造「有」と統合することによって、上位の合成構造になる。この場合、存在を表す「有」がプロファイル決定子である。図では太線のボックスで囲われる。場所名詞句が明示され、動作主が義務的に削除される。物の存在様態が焦点化されて、先行する行為はあまりシフトされていない。

ところで、I 型の「V 有」構文には次のように、先行する動作・行為による結果性がほとんど感じ取れない、性質のやや異なる文が存在している。

(4.68) 水果里 含有 多种 维生素。
 shuǐguǒlǐ hán-yǒu duōzhǒng wéishēngsù
 果物の中 含んでいる 多く ビタミン
 (果物の中には多くのビタミンが含まれている。)

(4.69) 他们 占有 大量 房产 和 土地
 tāmen zhàn-yǒu dàliàng fángchǎn hé tǔdì
 彼ら 占有している 大量の家屋敷や土地
 (彼らは大量の家屋敷や土地を占有している。)

(『中国語辞典』)

例えば、文 (4.68)、(4.69) は眼前描写の表現ではない。これらの表現は時間軸に位置づけられていない時間外表現である。ここでは、「単なる状態」と呼ぶことにする。「単なる状態」は一般に具体的な動作や行為が読み取れず、物の属性や状態を語る表現である。つまり、前述したように、この場合、言語主体は結果状態のほうに注目しすぎて、先行する動作のほうにまったく関心を示さない。「単なる状態」を表す「V有」はほとんど1つの単語になり、辞書の語彙項目となっている。例えば、「含有」、「占有」などは既に辞書に載せられている。

文 (4.68)、(4.69) においても、存在動詞「有」の文法化の度合いはそれほど高くないため、存在の意味は強く残されている。文 (4.68)、(4.69) はそれぞれ文 (4.70)、(4.71) とほぼ同じ意味を表している。ただし、(4.70)、(4.71) より (4.68)、(4.69) がもっている情報量が多い。例えば、文 (4.68) では、「含 (含む)」を、存在の在り方を規定する比喩的な表現として捉えることも可能である。つまり、「水果里 (果物の中)」という場所に「维生素 (ビタミン)」が包まれて存在しているという意味が表される。したがって、「単なる状態」を表す「V有」構文は「対象の存在様態」を表す「V有」構文の一種であると考えられる。

(4.70) 水果里 有 多种 维生素。
 shuǐguǒlǐ yǒu duōzhǒng wéishēngsù
 果物の中 YOU 多く ビタミン
 (果物の中には多くのビタミンがある。)

(4.71) 他们 有 大量 房产 和 土地
 tāmen yǒu dàliàng fángchǎn hé tǔdì
 彼ら YOU 大量の家屋敷や土地
 (彼らには大量の家屋敷や土地がある。)

4.3.2 II型の「V有」構文

II型の「V有」構文は「A (Agent) +V有+P (Patient)」という基本構造をもち、動作主が明示されて主格の位置にあり、対象は対格の位置に生起する。II型における「有」はI型における「有」より存在の意味が抽象化され、基本アスペクト形式とされている「了」に相当し、「パーフェクト」の意味を表す機能語的な性質に至っていると見なすことができる。構文全体としては、具体的な対象の存在ではなく、基準時（及び、それ以降）において動作行為の有効性が引き続き存在しているという意味を表していると言える。ここでは、「行為経験の存在⁵¹」と呼ぶことにする。

文(4.72)、(4.73)、(4.74)では、I型の「V有」とは異なり、眼前の状態を描く現象文ではない。参照点となる具体的なものは必ずしも目の前に存在しておらず、具体的な結果状態の存在を表すのではなく、過去の行為経験の効力が基準時（及び、それ以降）において存在していることを表す。

(4.72) 鲁迅 先生 在 1926 年 写有 散文 《藤野先生》
 lǔxùn xiānshēng zài nián xiě-yǒu sǎnwén téngyě xiānshēng
 魯迅先生 1926年に 書く-YOU 散文 作品名
 (1926年に、魯迅先生は散文『藤野先生』を書いている)

(再掲)

(4.73) 安置点 负责人 掌握有 安置点 内 所有 群众 的
 ānzhidiǎn fùzérén zhǎngwò-yǒu ānzhidiǎn nèi suǒyǒu qúnzhòng de
 避難所 責任者 把握する-YOU 避難所 中 全部 人々 の

⁵¹ このような考えは金水(2000)、岡(2001、2013b)から学んだところが多い。金水(2000)は格に動作主がくるB型「Vテアル」構文における動作主は経験主体であり、「NP₂(経験主)ハ[…V₁テ]_{VP}アル」という構造をもつと述べている。つまり、出来事がNP₂(経験主)に存在していることを表す。また、岡(2001、2013b)は、直接的結果や痕跡が存在せず、先行する行為と現在の発話が関連付けられる「Vテアル」を「行為存在型」と呼んでいる。

受灾 情况…略…

shòuzāi qíngkuàng

被災状況

(避難所の責任者は避難所内の人々の被災状況を把握している…略…)

(『京华时报』、2010-04-17)

(4.74) 新闻 中心 为 记者 准备有 午餐 和 晚餐。

xīnwén zhōngxīn wèi jìzhě zhǔnbèi-yǒu wǔcān hé wǎncān

ニュースセンター 記者のために 準備する-YOU 昼食と夕食

(ニュースセンターのスタッフは記者たちのために昼食と夕食を準備してある。)

(『人民日报』、2014-11-05)

存在動詞「有」を中心とする I 型の「有」構文と比べ、II 型の「V 有」構文は動詞 V が中心となっていると考えられる。例えば、動詞「写（書く）」、「掌握（把握する）」、「准备（準備する）」を省いた文 (4.75)、(4.76)、(4.77) は不自然な文、あるいは非文となっている。この点から見れば、このタイプの「V 有」は広義の存在を表すのではなく、動詞 V が中心的な役割を果たしていると分析できる。この場合、「有」は「了」に相当する「パーフェクト」の用法をもつと考えられる。

(4.75) *鲁迅 先生 在 1926 年 有 散文 《藤野先生》

lǔxùn xiānshēng zài nián yǒu sànwén téngyě xiānshēng

魯迅先生 1926 年に YOU 散文 作品名

(4.76) ?安置点 负责人 有 安置点 内 所有 群众 的

ānzhìdiǎn fùzérén yǒu ānzhìdiǎn nèi suǒyǒu qúnzhòng de

避難所 責任者 YOU 避難所 中 全部 人々 の

受灾 情况…略…

shòuzāi qíngkuàng

被災状況

- (4.77) *新闻 中心 为 记者 有 午餐 和 晚餐。
 xīnwén zhōngxīn wèi jìzhě yǒu wǔcān hé wǎncān
 ニュースセンター 記者のために YOU 昼食と夕食

また、文 (4.78)、(4.79) のように、「已经(既に)」のような時を明示する副詞的成分を付け加えることができることも、このタイプの「V 有」構文が結果よりも行為のほうに重点が置かれ、先行する事態と基準時とを関連付ける「パーフェクト」の用法として分析できる 1 つの証拠になる。

- (4.78) 安置点 负责人 已经 掌握有 安置点 内 所有 群众 的
 ānzhidiǎn fùzérén yǐjīng zhǎngwò-yǒu ānzhidiǎn nèi suǒyǒu qúnzhòng de
 避難所 責任者 既に 把握する-YOU 避難所 中 全部 人々 の
 受灾 情况…略…

shòuzāi qíngkuàng

被災状況

(避難所の責任者は既に避難所内の人々の被災状況を把握している…略…)

- (4.79) 新闻 中心 已经 为 记者 准备有 午餐 和 晚餐…略…
 xīnwén zhōngxīn yǐjīng wèi jìzhě zhǔnbèi-yǒu wǔcān hé wǎncān
 ニュースセンター 既に 記者のために 準備する-YOU 昼食と夕食

(ニュースセンターは記者たちのために既に昼食と夕食を準備してある。)

「行為経験の存在」を表す「V 有」は存在場所が典型的な場所名詞である「対象の存在様態」と異なり、対象が具体的な場所にある状態で存在していることを表すのではなく、先行した行為経験の効力が動作主（経験主）という抽象的な場（概念領域）に引き続き存在していることを表す。(4.72) における合成構造は図 4-4 に示すことができる。

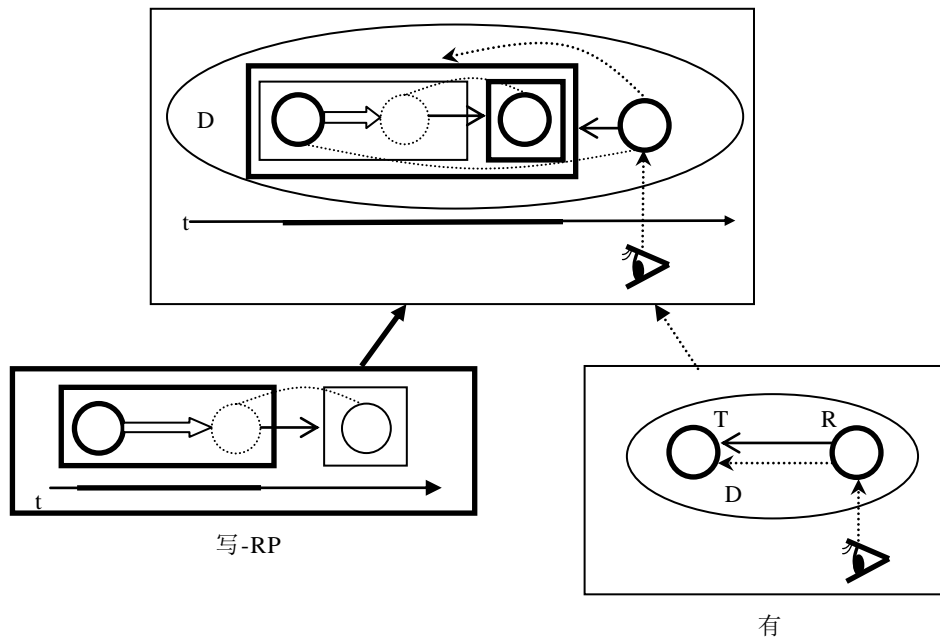


図 4-4. 「鲁迅先生在 1926 年写有散文《藤野先生》」の合成構造

I 型の「V 有」と同様に、II 型の「V 有」にもまず動補構造が想起される。「写（書く）」は生産動詞であり、元々客体対象が存在しないため、「書く」の概念構造では、対象を虚線のサークルで示している。左下の成分構造「写-RP」の時点では、生産物である「散文」はまだプロファイルされていない。動作主が顕現化されているため、行為のほうに関心が置かれ、「写（書く）」の表す行為がプロファイル決定子となる。図では太線で囲われる。また、動作主の明示により、「有」の存在用法ではなく、所有用法がベースになる。この 2 つ成分構造が統合することによって上位の合成構造になる。目の前に具体的結果状態が残されていないため、動作主（鲁迅先生）が参照点（R）として機能している。そして、ターゲット（T）は先行する事態（散文《藤野先生》を書く）によって精緻化されている。認知主体は参照点である動作主を通して先行する事態へアクセスする。すなわち、II 型の「V 有」は先行する行為を所有するという仕組みになっている。I 型とは異なり、眼前の情景を描写する現象文ではない。

4.3.3 中間的な存在

ところで、「対象の存在様態」と「行為経験の存在」の中間的なものが存在している。生成文法とは異なり、認知言語学ではこのような中間的なものを積極的に認めている。「V有」構文の NP₁ の位置には、団体や組織を表す名詞句が用いられる場合がある。その際、NP₁ を物の存在の場所と捉えるか動作・行為を引き起こした動作主と捉えるかによって、「V有」の表す意味が変わっていくと考えられる。孫（1996）においても、このような中間的な存在が指摘されている。文（4.80）のように、仮に「店舗（店舗）」を、物が存在している物理的な存在場所として捉えるならば、訳文1のように対象の結果状態の存在を描写していると理解できる。この場合、「店舗（店舗）」の後ろに方位詞「里（中）」を付け加えても意味はほぼ変わらない。これに対し、「店舗（店舗）」を擬人化して、行為の動作主（店の持ち主など）として捉えるならば、訳文2になり、訳文1と比べて対象の結果状態が問題にされるだけでなく、動作主が明示されていることによって、行為自体にも重きが置かれることになる。

(4.80) 街 两边 的 店铺 都 安有 音响。

jiē liǎngbiān de diànpù dōu ān-yǒu yīnxiǎng

道路 両側 の 店舗 全部 設置する-YOU ステレオ

(訳1：道路の両側にある全ての店舗にはステレオが設置されている。)

(訳2：道路の両側にある全ての店舗はステレオを設置している。)

(『京华时报』、2008-08-24)

このように、1つの文が「存在」と「所有」を併せ持つ現象は元の「有」構文にも観察される。文（4.81）において、「上野动物园（上野動物園）」を1つの団体・機構と理解すれば、所有の意味が読み取れ、「上野动物园（上野動物園）」を1つの具体的な場所と理解すれば、存在の意味が読み取れる（袁他 2009:305）。

(4.81) 上野 动物园 有 一对 中国 赠送 的 大熊猫。

shàngyě dòngwùyuán yǒu yīduì zhōngguó zèngsòng de dàxióngmāo

上野動物園 YOU 一組 中国 贈る の パンダ

(上野動物園には中国から贈られてきたパンダが一組いる。)

4.3.4 「V 有」の表す意味の連関

上述の「V 有」構文の各用法の使用実態を把握するため、コーパスから無作為に 500 件の実例を抽出して分析した。「V 有」構文の各意味用法の分析結果を表 4-2 に示す。

表 4-2. 「V 有」構文の使用実態

	対象の存在様態	行為経験の存在	中間的存在	単なる状態	計
V 有	391	73	22	14	500
%	78.2%	14.6%	4.4%	2.8%	100%

表 4-2 に示したように、「V 有」構文においては、「対象の存在様態」という意味の出現率が一番高く（78.2%）、大半を占めている。「行為経験の存在」と「単なる状態」という 2 つの意味用法はそれぞれ 14.6%と 2.8%にとどまり、使用頻度はそれほど高くない。

基本的な用法と派生的な用法を認定するには多くな基準がある。例えば、瀬戸（2007a,b）は多義語の基本的な用法の特徴として以下のものが挙げられている。(i) 文字通りの意味である；(ii) 関連する他の意味を理解する上での前提となる；(iii) 具体性（身体性）；(iv) 認知されやすい；(v) 想起されやすい；(vi) 用法上の制約を受けにくい；(vii) 意味展開の起点（接点）となる；(viii)、言語習得の早い段階で獲得される (ix) 使用頻度が高い。松本（2009）はこれらを「概念的中心性」と「機能的中心性」に集約した上で、この両方を併せ持ったものが基本的な用法のプロトタイプとしている。これは構文の多義性を考える際にも有効であると考えられる。本研究は松本（2009）を参考にして「概念的中心性」と「機能的中心性」という 2 つの側面から「V テアル」の基本的な用法と派生的な用法を考える。

「概念的中心性」に関しては、4.1 節で述べたように、I 型の「V 有」構文（「対象の存在様態」を表す「V 有」構文）に現れる場所名詞句は動詞 V によるものではなく、「有」によるものである。また、典型的存在構文からなる問いの文に対して、「V 有」構文は典型的存在構文と同じように自然に用いられる。よって、典型的存在構文の表す意味との近さから考えると、II 型の「V 有」構文（「行為経験の存在」を表す「V 有」構文）と比べ、I 型の「V 有」構文は基本的な用法であることが言える。

また、「機能的中心性」に関しては、ここでは、主に形式的な制約が少ないという考え方に基づいて基本的な用法を認定する（靱山 1992、2000）。例えば、「もの」には具体的な物体を表す意味と人を表す意味が挙げられる。人を表す場合には「賢い者」のように修飾語が必要に対し、物体を表す場合にはそのような制約がない。このように、制約条件の有無に基づいて、靱山（2000）は物体を表す意味のほうを「もの」の基本的な用法としている。また、副島（2007）は、日本語の「V テアル」を分析する際に動作主や時を表す副詞成分などの条件の限定の有無という観点から、「変化の結果の継続」が基本的な用法であり、「パーフェクト」が派生的な用法であると主張している。例えば、文（4.82）と比べ、文（4.83）、（4.84）は、それぞれ動作主「谷口」と副詞成分「一昨日」などの限定的条件がつけられており、派生的な用法であると考えられる。

(4.82) テーブルの上には、彼女の腕時計と眼鏡が置いてあった。

(4.83) 谷口がレンタカーを借りて、近くに停めてあるのだ。

(4.84) 「しまった！」と思わず声を上げたのは、昨日の夕食と一緒に、と一昨日、谷口と約束してあったのだ。

(副島 2007:166-168)

(4.85)、(4.86) が示しているように、中国語の「V 有」においては、I 型と比べて、II 型のほうが動作主や副詞成分などの限定的条件が多く現れるため、派生的な用法であると考えられる。

(4.85) 墙上 挂有 一幅 画。

qiángshàng guà-yǒu yīfú huà

壁上 掛ける-YOU 一枚 絵

(壁に絵が一枚掛けてある。)

(4.86) 新闻中心 为 记者 准备有 午餐 和 晚餐。

xīnwén zhōngxīn wèi jìzhě zhǔnbèi-yǒu wǔcān hé wǎncān

ニュースセンター 記者のために 準備する-YOU 昼食と夕食

(ニュースセンターは記者たちのために昼食と夕食を準備してある。)

(再掲)

上述したように、I型の「V有」構文はII型の「V有」構文と比べ、存在の意味が色濃く残っており、典型的存在構文に一番近い。その上、動作主や時を表す副詞成分などの限定的な条件が現れないことから、基本的な用法であると考えられる。これに対し、II型の「V有」構文は存在の意味を表す典型的存在構文と離れており、限定的な条件が多く、派生的な用法であると考えられる。また、I型の「V有」構文は具体的な存在物がある場所に存在していることを表すのに対し、II型の「V有」構文は抽象的な行為経験が動作主（経験主）という概念領域に存在していることを表すという点から考えても、II型の「V有」構文は派生的な用法である。「V有」構文の表す構文の意味は以下の図4-5に示すことができる。すなわち、「行為経験の存在」は「対象の存在様態」から拡張していると考えられる。

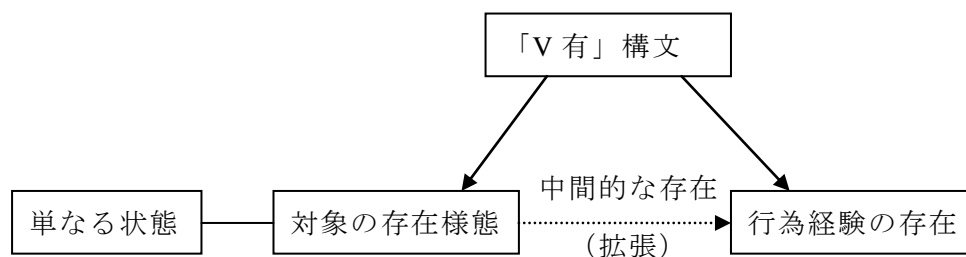


図4-5. 「V有」構文で表される意味の拡張関係

4.4 動詞に関する制限

本節では「V有」構文に現れる動詞Vについて考察する。中国語の新聞データベースである『人民网报刊杂志搜索』（人民網新聞雑誌検索）を利用する。新聞のデータベースを用いた理由は、「V有」構文は話し言葉より書き言葉（特に新聞などの記事）として多く使用されているためである。『人民网报刊杂志搜索』（人民網新聞雑誌検索）にある2006年から2015年までの10年間の記事を対象に、『汉语动词用法词典⁵²』（漢語動詞用法辞典）に挙げられている1223個の基本動詞の直後に「有」をつけてキーワードとして検索する⁵³。その結果、「V有」表現が22265件抽出され、動詞Vの異なり語数は計158語である⁵⁴。これらの動詞の出現回数を表4-3に示す。

⁵² 孟他編（1999）。

⁵³ 「他的画有雪域高原的凝重浑厚,又有阳光夏日的轻快绚丽。」のような「V有」構文でない表現は削除する。

⁵⁴ 実際に「有」と共起する動詞は158語を超えている。「刻（刻む）」、「嵌（嵌める）」などの常用動詞は『汉语动词用法词典』に収録されていないが、「有」と共起することができる。

表 4-3. 「V有」に用いられる動詞 V

順番	動詞	出現回数	順番	動詞	出現回数	順番	動詞	出現回数
1	印（刷る）	3028	54	绑（縛る）	30	"	烧（焼く）	5
2	装（取り付ける）	2900	55	登（載せる）	29	108	拿（持つ）	4
3	存（預ける）	2686	"	包（包む）	29	"	拍（撮る）	4
4	留（残す）	2271	57	打（掘る）	28	"	漂（漂う）	4
5	写（書く）	1771	"	签订（調印する）	28	"	提（提げる）	4
6	标（印をつける）	1237	59	砌（積み上げる）	25	"	积累（積み重ねる）	4
7	犯（犯す）	885	"	修（建造する）	25	"	串（一列に連なる）	4
8	贴（張り付ける）	847	61	流传（伝播する）	24	114	乘（乗る）	3
9	遇（遇う）	829	"	遗留（残る）	24	"	关（閉じこめる）	3
10	盖（覆いかぶせる）	500	63	穿（着る）	23	"	扣（留めおく）	3
11	挂（掛ける）	439	64	坐（坐る）	22	"	抹（塗る）	3
12	放（置く）	312	65	开辟（開拓する）	21	"	埋葬（埋葬する）	3
13	包含（含む）	310	"	安置（置く）	21	"	捏（こねて形作る）	3
14	签（署名する）	283	67	布置（設置する）	20	"	泡（浸す）	3
15	出版（出版する）	230	"	凿（掘る）	20	"	聘请（招聘する）	3
16	画（描く）	211	69	蘸（つける）	19	"	扔（捨てる）	3
17	立（立てる）	193	70	围（囲む）	18	"	梳（梳かす）	3
18	长（生える）	188	"	生长（生える）	18	"	烫（焼きつける）	3
19	开（開ける）	179	72	套（被せる）	17	"	钻（穴をあける）	3
20	生（生む）	164	"	分（分ける）	17	"	搀（混ぜる）	3
21	保存（保存する）	156	74	保持（維持する）	16	127	掘（掘る）	2
22	绣（刺繍する）	154	"	挖（掘る）	16	"	捆（縛る）	2
23	沾（くっつく）	141	76	准备（準備する）	15	"	冒（噴き出す）	2
24	包括（含む）	133	77	隐藏（隠す）	14	"	飘（ひらひら舞う）	2
25	保留（保存する）	132	"	搭（組み立てる）	14	"	骑（またがる）	2
26	堆（積む）	121	79	钉（釘を打ち込む）	13	"	牵（引く）	2

27	塗（塗る）	120	"	落（落ちる）	13	"	申請（申請する）	2
28	混（混ぜる）	118	"	登記（登録する）	13	"	滲（しみこむ）	2
29	住（住む）	115	82	織（織る）	12	"	躺（横たわる）	2
30	停（止める）	102	"	排（並べる）	12	"	添（付け加える）	2
31	埋（埋める）	101	"	圧（押しつける）	12	"	吸収（吸収する）	2
32	办（作る）	97	"	租（借りる）	12	138	叠（畳む）	1
33	种（植える）	96	86	拌（かき混ぜる）	11	"	堵（ふさぐ）	1
34	铺（敷く）	93	"	缠（巻きつける）	11	"	翻译（翻訳する）	1
"	安排（手配する）	93	"	收集（収集する）	11	"	刮（風がふく）	1
36	摆（置く）	85	"	填（書き入れる）	11	"	糊（貼る）	1
37	戴（つける）	82	90	发表（掲載する）	10	"	寄（送る）	1
38	安（置く）	79	"	拴（つなぐ）	10	"	浇（水を掛ける）	1
39	设计（設計する）	77	92	作（書く）	8	"	爬（はう）	1
40	盛（盛る）	74	"	缝（縫う）	8	"	佩带（つける）	1
41	养（飼う）	69	94	披（羽織る）	7	"	绕（巻きつける）	1
42	插（挿す）	58	"	欠（負債する）	7	"	散布（散布する）	1
43	订（契約を結ぶ）	55	"	洒（まく）	7	"	散发（発散する）	1
44	记（書く）	52	"	垫（敷く）	7	"	晒（照りつける）	1
45	雇（雇う）	48	"	裹（包む）	7	"	搜集（収集する）	1
46	掌握（把握する）	43	99	刷（塗る）	6	"	停留（止める）	1
47	喷（噴き出す）	42	"	站（立つ）	6	"	托（支える）	1
48	加（加える）	39	101	背（背負う）	5	"	喂（餌をやる）	1
49	染（染める）	36	"	撒（まき散らす）	5	"	预备（用意する）	1
50	派（派遣する）	35	"	扎（ひもでくくる）	5	"	造（作る）	1
51	划（線などを引く）	34	"	招（招聘する）	5	"	抄（書き写す）	1
52	栽（植える）	33	"	投（投じる）	5	"	掉（落とす）	1
53	剩（残す）	31	"	塞（ふさぐ）	5			

※「"」は出現数が同じ動詞の順番を表している。また、和訳は動詞の主要な意味だけを示している。

孫（1996）は『汉语水平考试词汇大纲』（HSK 基本語彙）にある動詞に基づき、コーパスから「V有」表現に用いられる動詞Vを88語にまとめているが、今回の調査結果では、「V有」に使用される動詞の数は孫（1996）の結果を遥かに超えている。表4-3では、出現数が上位1～5位の動詞はそれぞれ「印（刷る）」、「装（取り付ける）」、「存（預ける）」、「留（残す）」、「写（書く）」である。この5つの動詞は延べ件数が1万件を超え、全体の半分以上を占めており、高頻度で使用されている。

工藤（1995）の動詞分類に基づき、表4-3に挙げられている動詞を以下のように分類することができる。

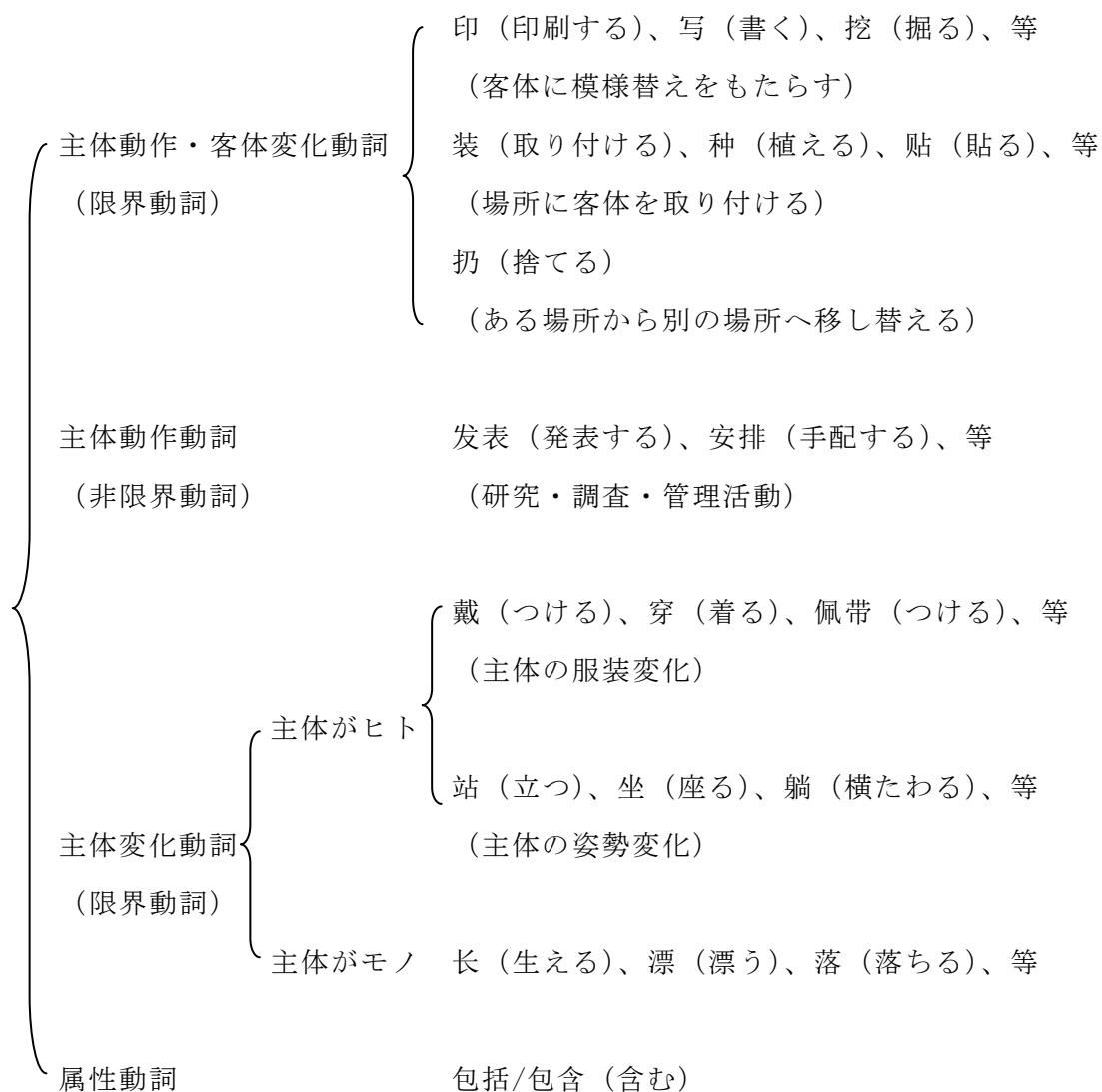


図4-6. 「V有」に用いられる動詞Vの分類

図 4-6 から分かるように、「V 有」に使用されている動詞の中で、限界動詞がほとんどである。限界動詞は、「有」と結びついて、限界達成後の結果状態を表す。以下、図 4-6 の分類に基づいて、「V 有」に用いられる各グループの動詞の意味特徴を分析する。

4.4.1 主体動作・客体変化動詞

まず、I 型の「V 有」に多く使用されている主体動作・客体変化動詞から考察する。主体動作・客体変化動詞は動作主が対象に働きかけて、その作用を受けて客体対象に変化が起こされ、結果が生じることを表す。つまり、他動性の高い動詞である。他動性に関しては、本論文では、近年絶大な影響を与えている Hopper and Thompson (1980) の他動性のプロトタイプ理論を取り上げる。Hopper and Thompson は他動性のプロトタイプのパラメーターを以下のように提案している。

表 4-4. Hopper and Thompson (1980:252) の他動性のプロトタイプ⁵⁵

	High	Low
A. Participants (参与者)	2 or more participants, A and O (2人以上: 動作主と対象)	1 participant (1人)
B. Kinesis (キネシス)	action (行為)	non-action (非行為)
C. Aspect (アスペクト)	telic (限界的)	atelic (非限界的)
D. Punctuality (瞬間性)	punctual (瞬間)	non-punctual (非瞬間)
E. Volitionality (意志性)	volitional (意志的)	non-volitional (非意志的)
F. Affirmation (極性)	affirmative (肯定)	negative (否定)
G. Mode (モード)	realis (現実)	irrealis (非現実)
H. Agency (動作主性)	A high in potency (高い力量性)	A low in potency (低い力量性)
I. Affectedness of O (対象の被影響度)	O totally affected (全面的影響)	O not affected (影響無し)
J. Individuation of O (対象の個性)	O highly individuated (高い個性)	O non-individuated (低い個性)

⁵⁵ 和訳は中村 (2004:175) を参考にしている。

角田（2009:67-93）は、Hopper and Thompson（1980）を修正、発展させ、意味的側面と形の側面から動詞の他動性のプロトタイプを考えている。ただし、角田（2009）も指摘するように、形の側面は意味的側面とは異なり、言語によって必ずしも同じではない。中国語は、日本語と違って、対象はヲ格をとるかニ格をとるかという形式上の区別がもたないため、ここでは、主に項の数、語順などという形の側面と、「動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす」（角田 2009:85）という意味的側面から動詞の他動性を考える。

主体動作・客体変化動詞の表す動作は、「V有」の形式で、客体対象の変化が限界に達成し、達成された結果状態が継続していることを表す。一見他動性の高い動詞が「V有」構文に用いられやすいという結論を簡単に出しても良さそうであるが、次の反例が挙げられる。

(4.87) 他 从 苹果树 上 摘 {了 / *有} 一个 苹果。

tā cóng píngguǒshù shàng zhāi -le -yǒu yīgè píngguǒ

彼 から 林檎の樹 上 採る -LE -YOU 1つ 林檎

（彼は林檎の樹から林檎を1つ採った。）

(4.88) 张三 擦掉 {了 / *有} 黑板 上 的 字, 然后 走出 了 教室。

zhāngsān cādiào -le -yǒu hēibǎn shàng de zì ránhòu zǒuchū -le jiàoshì

人名 消す -LE -YOU 黑板 上 の 字 その後 出る LE 教室

（張三は黑板の上の字を消してから教室を出た。）

（作例）

文（4.87）、（4.88）においては、動詞「摘（採る）」、「擦掉（消す）」の表す動作は客体対象に及び、その上、客体対象に位置変化または状態変化を起こす。他動性の高い動詞と考えられる。しかしながら、これらの動詞は「V了」構文に用いられるのに対して「V有」構文には用いられない。すなわち、「V有」構文に使用される動詞においては、他動性の他に、より重要な特徴が潜んでいるのではないだろうか。「摘（採る）」、「擦掉（消す）」などの動詞には「出現」ではなく、「消失」という特徴を共有している。ここでは、「V有」構文に使われる動詞には他動性よりも「出現」という特徴が重要であると仮定し、論を進めていく。

4.4.1.1 客体の位置変化

主体動作・客体変化動詞の中には、動作主体が客体対象にエネルギーを伝達し、客体対象の位置を移動させるという客体対象の位置変化を表す動詞がある。文(4.89)、(4.90)では、「装(取り付ける)」と「放(置く)」はある場所に対象を取り付けるという意味を表す取り付け動詞である⁵⁶。これらの動詞の表す動作が限界に達した後に、客体対象である「监控(防犯カメラ)」、「油桶(ドラム缶)」はそれぞれ所定の場所に取り付けられることが表される。

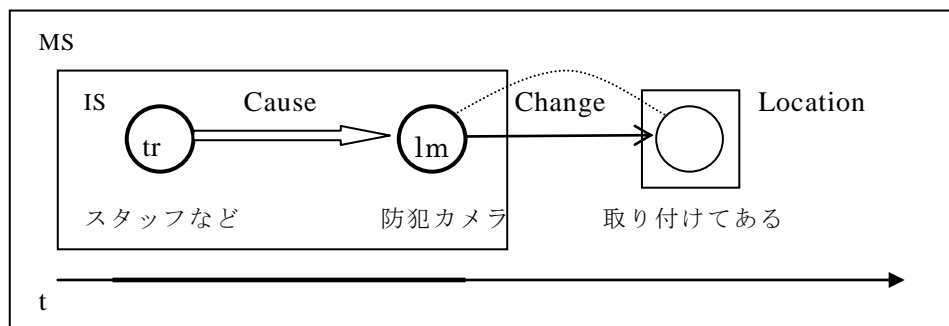
(4.89) 投票点的投票箱均为半透明,投票箱上方
tóupiàodiǎn de tóupiàoxiāng jūnwéi bàn tòumíng tóupiàoxiāng shàngfāng
投票所の投票箱全て断定半透明投票箱上
装有摄像头。
zhuāng-yǒu shèxiàngtóu
取り付ける-YOU 防犯カメラ
(投票所の投票箱は全て半透明で、その上には防犯カメラが取り付けられている。)
(『人民日报』、2012-03-05)

(4.90) …略…靠近后门的位置放有油桶,长长的
kàojìn hòumén de wèizhì fàng-yǒu yóutǒng chángchángde
近く後のドアの位置置く-YOU ドラム缶長い
抽油器插在桶中。
chōuyóuqì chā zài tǒngzhōng
給油ポンプ挿すに缶の中
(…略…後ろのドアの近くにドラム缶が置いてあり、長い給油ポンプはドラム缶の中に挿してある。)
(『京华时报』、2008-10-14)

Langacker (1991a) の事態認知モデルを用い、文(4.89)にある「装(取り付ける)」の表す概念構造を図4-7に示すことができる。動詞「装(取り付ける)」の概念構造では、動

⁵⁶ 「装有」の「装」は、取り付けるという意味の他に、「入れる」という意味も持っているが、いずれも客体の位置変化を表す。

作主と対象がそれぞれトラジェクター (tr) とランドマーク (lm) としてプロファイルされている。「対象が取り付け先へ移動・付着するプロセス」は直接スコープ (IS) に存在しないが、動詞によって喚起が可能な意味である。「装 (取り付ける)」の後ろに「有」をつけると、結果状態がプロファイルされて、「結果の状態での存在」が表される。



⇒ エネルギーの伝達 → 位置の変化 一致

IS: 直接スコープ (immediate scope) MS: 最大スコープ (maximal scope)

図 4-7. 「装」の概念構造

また、文 (4.91) では、「扔 (捨てる)」は場所の移し替えを表す動詞であり、対象がある場所から別な場所へ移動されるという意味が表される。これらの動詞の共通点として、動詞の表す動作が限界に達した後に、客体対象が元の場所から到着場所 (着点) に移動されたという点が挙げられる。つまり、客体の位置変化を示す動詞の表される動作が終わった後に、着点領域において客体対象が現れる (「出現」) という意味が含まれている。これらの動詞の後ろに「有」をつけると、着点領域に客体対象が現れたという結果状態が引き続き存在しているとして捉えることが可能である。

(4.91) 桌子 旁 的 垃圾筐 里, 扔有 少许 的 输液瓶、
 zhuōzǐ páng de lājikuāng lǐ rēng-yǒu shǎoxǔ de shūyèpíng
 机 そば の ゴミ箱 中 捨てる-YOU 少し の 輸液ボトル
 输液管 和 针头, …略…
 shūyèguǎn hé zhēntóu
 輸液セット

(机のそばにあるゴミ箱の中には少しの輸液ボトルと輸液セットが捨てられ

ている。…略…)

(『江南时报』、2006-08-29)

4.4.1.2 客体の状態変化

動作の主体が客体にエネルギーを伝達し、客体の状態に変化が引き起こされる動詞の場合、「有」が付くと、変化された状態の継続となる。

(4.92) 衣服 上 绣有 各种 花纹 和 图案, …略…

yīfú shàng xiù-yǒu gèzhǒng huāwén hé túàn

服 上 刺繡する-YOU 各種 紋様 と 絵

(服には花模様と絵が刺繡してある。…略…)

(『人民日报海外版』、2012-07-13)

(4.93) 台北 双层 观光 巴士 通体 呈 红色, 车身 两侧

táiběi shuāngcéng guānguāng bāshì tōngtǐ chéng hóngsè chēshēn liǎngcè

台北 二階建 観光バス 全体 赤色になっている 車体 両側

塗有 英文 “台北 观光” 字样。

tú-yǒu yīngwén táiběi guānguāng zìyàng

塗る-YOU 英文 台北観光 文字

(台北の二階建の観光バスは全体赤色となっている。車体の両側に英文の「台北観光」という文字が塗ってある。)

(『人民日报海外版』、2017-04-07)

状態変化は位置変化の拡張であると考えられるが、その拡張を動機づけているのは一般的な空間化メタファーである (Goldberg 1995:81-84 ; Lakoff and Johnson 1999:178-186、2003:258 ; 谷口 2005:30-34)。Lakoff and Johnson (1999) では、「位置」と「状態」との関係について次のように指摘されている。

(4.94) a. States Are Locations (interiors of bounded regions in space)

b. Changes Are Movements (into or out of bounded regions)

(Lakoff and Johnson 1999:179)

すなわち、本来の空間的・位置的な変化を示す表現が状態変化を表すために用いられる。(4.95)のように、本来の空間的位置を表す前置詞や動詞が状態の概念を表すことになっている。これは空間化メタファーによる拡張であると考えられる。一方、状態変化を表す動詞を用いて位置変化を表すことはできない。つまり、状態変化は位置変化からの拡張であると言える。従って、状態変化も空間的な位置変化を示す事態認知モデルで表すことができる。

(4.95) a. I'm in love.

(Lakoff and Johnson 1999:180)

b. The jello went from liquid to solid in a matter of minutes.

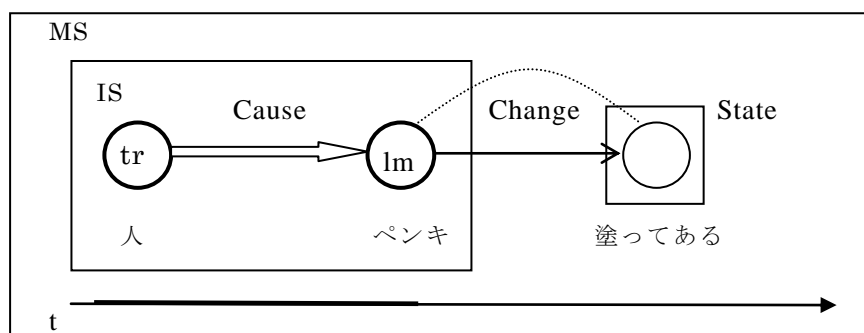
(Goldberg 1995:83)

(4.96) a. *The car became in the park.

b. *John became to the bathroom.

(谷口 2005:34)

(4.93)にある動詞「塗(塗る)」の表す概念構造は図4-8に示すことができる。図4-8では、動作主(人)と対象(ペンキ)がそれぞれtrとlmとしてプロファイルされている。「対象が目標場所に付着するプロセス」はISに存在しないが、動詞によって喚起が可能な意味である。「塗(塗る)」の後ろに「有」をつけると、塗られた結果状態がプロファイルされて、「結果の状態での存在」が示される。



⇨ エネルギーの伝達 → 状態の変化 一致

IS: 直接スコープ (immediate scope) MS: 最大スコープ (maximal scope)

図4-8. 「塗」の概念構造

ところで、「印（刷る）」、「写（書く）」などは一般に生産動詞とも呼ばれ、動詞の表す動作が限界に達した後に、存在物がある領域に出現することを表す。「写（書く）」の概念構造は図 4-9 で示すことができる。動詞「写（書く）」の後に「有」をつけると、存在物（文字）の存在状態が続いていくという意味になる。図 4-9 に示されるように、元々対象が存在しないことから、これらの生産動詞の表す事態がプロトタイプの客体状態変化動詞からやや逸脱していると言える。しかし、生産動詞の表す動作によって、ある場所に対象が存在しない状態から存在する状態になるという点から見れば、やはり客体の状態変化として捉えることができると考えられる。例えば、「写（書く）」という動詞の表す動作によって、紙などに字が現れて状態変化が引き起こされたと解釈できる⁵⁷。すなわち、「写（書く）」という動詞が表す事態には 2 つの側面が含まれている。1 つは、文字がない状態からある状態になるという「物の出現」である。もう 1 つは、文字が現れることによって、その場所において状態変化が起こされるという「場所の状態変化」である。

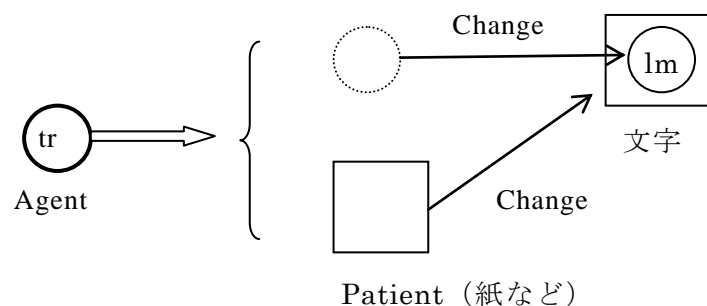


図 4-9. 「写」の概念構造（谷口 2005:69 を参考に作成）

文 (4.97) では、「写（書く）」という動作が終わった後に、対象「名片（名刺）」に「欧洲《红楼梦》研究协会会长（欧州『红楼梦』研究協会会長）」という文字が現れ、客体の状態変化が確認される。動詞「写（書く）」の後ろに「有」がつくと、現れた状態が引き続き存在していることを示している。文 (4.98) では、「挖（掘る）」という動作が行われる前に、地面に井戸があるわけではない。動作が終わった後に、井戸が現れてくるわけである。そして、動詞「挖（掘る）」の後ろに「有」がつくことにより、地面に井戸が掘られた状態で存在していることが表される。

⁵⁷ 副島（2009）も「書く」、「作る」などの生産動詞を主体動作・客体変化動詞と分類し、他動性の高い動詞と考えている。

(4.97) 他 的 名 片 上 写 有 “ 欧 洲 《 红 楼 梦 》 研 究 协 会 会 长 ”
 tā de míngpiàn shàng xiě-yǒu ōuzhōu hónglómèng yánjiū xiéhuì huìzhǎng
 彼の名刺 上 書く-YOU 欧州 紅樓夢 研究協會 會長
 (彼の名刺には「ヨーロッパ『紅樓夢』研究協會會長」と書いてある。)

(『人民日报海外版』、2015-05-08)

(4.98) 楼内 挖有 水井，…略…

lóunèi wā-yǒu shuǐjǐng

建物 掘る-YOU 井戸

(建物の中に井戸が掘ってある。)

(『华东新闻』、2006-01-28)

このようにして、位置変化を表す動詞と状態変化を表す動詞の場合、「V有」が表す結果状態の継続は、主体動作・客体変化動詞の結果性と存在動詞「有」の静止的な継続性とが相まってもたらされたものであると考えられる。

4.4.2 主体変化動詞

主体変化動詞は主体動作・客体変化動詞と同様に、動作が「限界」に達した後に、ある状態から別の状態に変わっていく。いわゆる限界動詞である。ただし、主体動作・客体変化動詞とは異なり、主体変化動詞は客体対象ではなく、動作主体自身の変化を表す。図 4-10 のように、太い矢印は動作主というサークルの中にあり、動作主が自分自身にエネルギーを伝達して行為をなすことを示す。エネルギーを受けた動作主に位置変化または状態変化が起こされる。

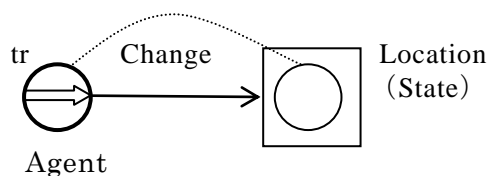


図 4-10. 主体変化動詞の概念構造

「主体変化動詞」には、主体が意志性のある有生物の場合と主体が意志性のない無生物の場合という 2 種類がある。以下、この 2 種類に分けて「主体変化動詞」に「有」がつく

場合の意味を検討する。

主体が意志性のある有生物の場合、主に「穿（着る）」、「戴（つける）」などの主体の服装変化を表す動詞と「站（立つ）」、「坐（座る）」などの主体の姿勢変化を表す動詞が挙げられる。主体の服装変化を表す動詞は再帰動詞とも呼ばれ、動作が終わった後に、アクセサリや服装などが他のところから動作主体に付着してきたという結果になるため、動作主体における存在物の「出現」であると言える。文（4.99）のように、「穿（着る）」という動作が終わった後に、「背心（ベスト）」が結果として「女孩（女の子）」の身体の上に存在することになった。動詞「穿（着る）」の直後に「有」を付けることによって、ベストを着ているという状態が表されている。文（4.100）のように、動詞「戴（つける）」の表す動作が終わった後に、飾りが頭の上に付着される。「有」によって、その付着された状態が続いていることが表される。

- (4.99) 据 新华社 电 伊拉克 警方 25 日 公布 一段 录像、
jù xīnhuáshè diàn yīlākè jǐngfāng rì gōngbù yīduàn lùxiàng
新华社によると イラク 警察側 25 日 公開する 1 つ ビデオ
显示 一名 15 岁 女孩 身上 穿有 一件 炸弹 背心
xiǎnshì yīmíng suì nǚhái shēnshang chuān-yǒu yījiàn zhàdàn bèixīn
示す 一名 15 歳 女子 身体上 着る-YOU 一枚 爆弾 ベスト
(新华社によると、25 日にイラクの警察側が公開したビデオでは、一人の 15 歳
の女子が爆弾ベストを着ていた。)

(『京华时报』、2008-08-27)

- (4.100) 展馆 中, 每一位 工作人员 头上 都 戴有 一个
zhǎnguǎn zhōng měiyīwèi gōngzuòrén yuán tóushàng dōu dài-yǒu yīgè
展示館の中 各人 スタッフ 頭上 全部 つける-YOU 1 つ
熊猫 样式 的 头饰, …略…
xióngmāo yàngshì de tóushì
パンダ 様式 の 飾り

(展示館のスタッフ全員はパンダ様式の飾りを頭につけている。…略…)

(『人民日报海外版』、2015-07-15)

また、「站（立つ）」、「坐（座る）」などの主体の姿勢変化を表す動詞については、同様に「出現」の意味が含まれている。「站（立つ）」、「坐（座る）」など動詞は動態と静態という 2 つの意味をもっており、「站（立つ）」や「坐（座る）」の動詞が表す動作が終わった後に、主体はあるところに「立っている」、「座っている」という状態である。

(4.101) 来 办事 的 群众 并不多、楼下 11 个 窗口、
lái bànshì de qúnzhòng bìngbùduō lóuxià gè chuāngkǒu
来る 手続きをする の 市民 多くない 1 階 11 個の窓口
楼上 15 个 窗口、都 坐有 工作 人员。
lóushàng gè chuāngkǒu dōu zuò-yǒu gōngzuò rényuán
2 階 15 個の窓口 全部 座る-YOU スタッフ

（手続きをしに来る市民がそれほど多くない。1 階には 11 個の窓口があり、2 階には 15 個の窓口がある。全ての窓口にはスタッフが座っている。）

（『人民日报』、2013-02-17）

次に、主体が意志性のない無生物の場合を見てみよう。「落（落ちる）」のような物が主体である動詞においても、「出現」の意味特徴が読み取れる。文（4.102）では、「落（落ちる）」の表す動作によって、松の葉っぱと実が石径に落ちている状態が現れる。そして、動詞の後ろに「有」をつけることによって、その状態が継続していくことになる。

(4.102) 记者 看到、石径 上 落有 松针 松果、…略…
jìzhě kàndào shíjìng shàng luò-yǒu sōngzhēn sōngguǒ
記者 見かける 石径 上 落ちる-YOU 松の葉っぱと実
（記者は石径に松の葉っぱと実が落ちているのを見かけた。）

（『人民日报』、2006-01-28）

王（2007:208）は、「V 着」構文と「V 了」構文が置き換えられる条件として、動詞が「附着（とりつけ）」という意味特徴をもたなければならないと指摘している。「附着」という概念は本稿でいう「出現」に近い。文（4.103）、（4.104）に示されるように、存在物の「出現」が確認される場合、一般に I 型の「V 有」は「V 着」や「V 了」に置き換えることが

できる。つまり、I型の「V有」も存現構文の特徴を有していると言える。

- (4.103) 他 的 名 片 上 写 { 有 / 着 / 了 } “ 欧 洲 《 红 楼 梦 》 研 究
tā de míngpiàn shàng xiě -yǒu -zhe -le ōuzhōu hónglóumèng yánjiū
彼の名刺 上 書く -YOU -ZHE -LE 欧州 紅樓夢 研究
协会 会长”。

xiéhuì huìzhǎng

協会会長

(彼の名刺には「ヨーロッパ『紅樓夢』研究協会会長」と書いてある。)

- (4.104) 投票点 的 投票箱 均 为 半透明, 投票箱 上方
tóupiàodiǎn de tóupiàoxiāng jūnwéi bàn tòumíng tóupiàoxiāng shàngfāng
投票所 の 投票箱 全て 断定 半透明 投票箱 上
装 { 有 / 着 / 了 } 摄像头。

zhuāng -yǒu -zhe -le shèxiàngtóu

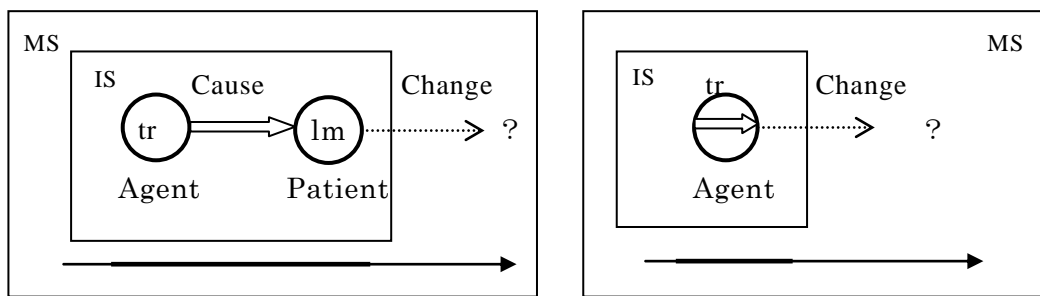
取り付ける -YOU -ZHE -LE 防犯カメラ

(投票所の投票箱は全て半透明で、その上には防犯カメラが取り付けられている。)

前述したように、これらの動詞が用いられる「V有」表現においては、一般に場所名詞句が用いられ、対象がある状態で、ある場所に存在しているという意味を表し、広義の存在表現であると考えられる。「有」は存在を表す本動詞の役割を、動詞 V は存在の在り方を規定する役割を担っている。

4.4.3 主体動作動詞

主体動作動詞については、対象がある場合とない場合に分けて考察する必要がある。客
体対象がある場合は、図 4-11 の (a) に示されるように、動作主が対象にエネルギーを伝
達したが、動作終了後には対象の変化が見られない。一方、対象が存在しない場合は、(b)
のように、動作主体が自分自身にエネルギーを伝達したが、動作終了後には動作主体の変
化が見られない。



a. 客体がある場合

b. 客体がない場合

図 4-11. 主体動作動詞の概念構造

II 型の「V 有」においては、「発表（発表する）」、「安排（手配する）」などの主体動作動詞を用いることもできる。I 型の「V 有」とは異なり、目標領域に存在物の出現が確認されにくい。また、主格の位置に動作主が置かれ、客体対象よりも行為の有効性に焦点が置かれている。すなわち、動詞の表す動作行為の効力が基準時に存在し続けている。文(4.105)では、具体的な結果状態が確認できず、動作主の顕在化によって、言語主体の関心が動作にあるわけである。また、動きの時点の明示によって、動作が基準時より前に位置づけられている。つまり、「パーフェクト」の用法であると考えられる。(4.106)に示されるように、「V 有」を「V 了」構文に置き換えられるのに対して「V 着」構文に置き換えられないことも、II 型の「V 有」は「パーフェクト」の用法であることを裏付けている。

(4.105) 本届 世界杯 决赛 开幕 以前, 联合国 秘书长 安南
 běnjiè shìjièbēi juésài kāimù yǐqián liánhéguó mìshūzhǎng ānnán
 今回 ワールドカップ決勝戦 開幕する 前 国連 事務総長 アナン
 曾 发表有 如下 言论。
 céng fābiǎo-yǒu rúxià yánlùn
 かつて 発表する-YOU 以下の言論

(今回のワールドカップ決勝戦が開幕する前に、国連事務総長アナンは以下の
 の言論を発表している。)

(『江南时报』、2006-07-05)

(4.106) 本届 世界杯 决赛 开幕 以前, 联合国 秘书长 安南
 běnjiè shìjièbēi juésài kāimù yǐqián liánhéguó mìshūzhǎng ānnán
 今回 ワールドカップ決勝戦 開幕する 前 国連 事務総長 アナン
 曾 发表 {了 /*着 } 如下 言论。
 céng fābiǎo -le -zhe rúxià yánlùn
 かつて 発表する -LE -ZHE 以下の言論

(今回のワールドカップ決勝戦が開幕する前に、国連事務総長アナンは以下の
 言論を発表している。)

以上のように、「V有」においては、他動性の他に「出現」という特徴が重要である。限界動詞（主体動作・客体変化動詞と主体変化動詞）が一番多く使用される。そして、「V有」の意味は動詞Vと「有」とが相まってもたらされたものである。限界動詞は、動作が終わると、変化の限界が達成され、結果状態が生じる。非限界動詞（主体動作動詞）は、限界をもたず、動作が終わったとしても結果状態が生じない。基本的に、「V有」は限界動詞と結び付いた場合、基準時に結果状態の存在が表される。非限界動詞と結び付いた場合、基準時に動作行為の効力の存在が表される。

4.5 対象指向性

対象の存在様態を表すI型の「V有」に用いられる動詞は主に主体動作・客体変化である。これらの限界動詞に「有」を付けることによって、動作主が義務的に削除されて、話し手の関心は客体である対象にあり、「対象指向性」をもつことが容易に理解できるだろう。ただし、I型の「V有」には、「落（落ちる）」、「長（生える）」などの主体変化動詞が用いられる場合がある。これらの主体変化動詞は客体の変化ではなく、主体の変化を表すため、客体対象に話し手の関心が示される「対象指向性」の説明は適用されないように見える。しかし、4.2節で述べた「非対格性の仮説」を用いると、I型の「V有」は主体変化動詞が現れているにも関わらず、「対象指向性」をもっていることを説明できる。既に述べたように、非能格動詞は参与者が自力的に、意図的に行為をなす自律的事態である。これに対して、非対格動詞は意図的ではなく、他の参与者からの力を受けて行為が行われる依存的事態である。

(4.107) 记者 看到、 石径 上 落有 松针 松果、…略…

jìzhě kàndào shíjìng shàng luò-yǒu sōngzhēn sōngguǒ

記者 見かける 石径 上 落ちる-YOU 松の葉と実

(記者は石径に松の葉と実が落ちているのを見かけた。)

(再掲)

(4.108) 过 了 一会儿、老板娘 端来 一碗 汤、 汤上

guò le yīhuìr lǎobǎnniáng duānlái yīwǎn tāng tāngshàng

しばらく経つと 女将 持ってくる 1つ スープ スープの上

漂有 蛋花。

piāo-yǒu dànhuā

漂う-YOU 卵の花

(しばらく経つと、女将はスープを持ってきて、スープの上に卵の花が漂っている。)

(『市场报』、2007-07-10)

文 (4.107) では、主語の位置に立つ「松针松果 (松の葉と実)」は自力的・意図的に石径に落ちたわけではなく、風などの外力によって落下したと考えられる。つまり、目的語相当すると考えられる。同様に、文 (4.108) では、「蛋花 (卵の花)」が自力でスープの上に現れるわけではない。動作主体の働きかけによってスープの上に漂っているという結果状態になったわけである。図 4-12 と図 4-13 に示されるように、(4.107)、(4.108) にある「落 (落ちる)」と「漂 (漂う)」は主体変化動詞であることにも関わらず、対象の変化を引き起こす動作主体が存在している。つまり、「松针松果 (松の葉と実)」と「蛋花 (卵の花)」を対象として捉えることも可能である。よって、主体変化動詞が用いられる「V有」構文についても、主体動作・客体変化動詞の場合と同様に、話し手の関心はやはり客体である対象にあると言える。

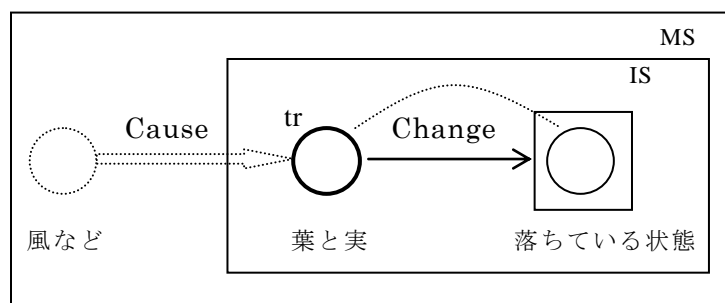


図 4-12. 「落」の概念構造

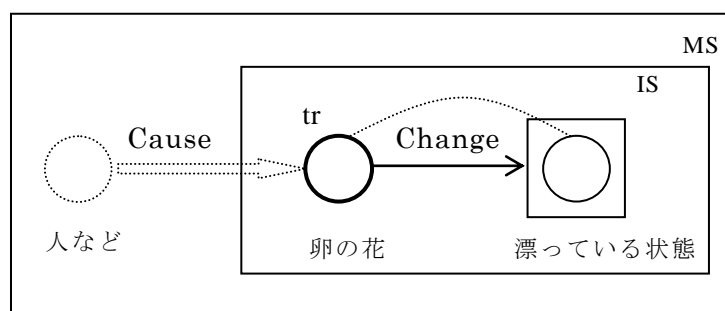


図 4-13. 「漂」の概念構造

次に、「穿（着る）」、「戴（つける）」のように、主体の服装変化を表す主体変化動詞の場合について論じる。これらの動詞は再帰動詞とも呼ばれ、主語が動作主でありながら、結果や効力が生じる対象でもある。より分かりやすく説明するために、ここでスペイン語の例を取り上げる。スペイン語の再帰動詞「vestirse（着る）」、「levantarse（起きる）」が、自分自身の動作を表す時に、それぞれ「me visto（自分を着させる）」、「me levanto（自分を起きさせる）」という形式を取る。つまり、話者の関心が動作主＝対象にあると言える。また、「站（立つ）」、「坐（座る）」のような主体の姿勢変化動詞についても同様なことが言える。

一方、行為経験の存在を表すⅡ型の「V有」構文においては、主格の位置に動作主体が表され、対格の位置に客体対象が表されている。一見普通の能動文と同様に話者の視点は主格に位置する動作主にあるように見えるが、実際は客体対象にも視点が置かれている。ここでは、動作主を疑問・解答の焦点に置く例を取り上げて、Ⅱ型の「V有」は一般の他

動表現より、対象に焦点が置かれることを説明する⁵⁸。例えば、文 (4.109)、(4.111) に対して行為を行ったのは誰なのかという質問文においては、文 (4.110)、(4.112) のように、「V 了」表現は成立するが、「V 有」表現は成立しない。このことから、「V 了」は積極的に動作主を差し出し、動作行為のほうに関心があるのに対し、「V 有」は行為経験の有効性の意味を表す場合であっても、動作主との関わりが少なく、対象のほうにも関心があると考えられる。

(4.109) 钱穆 先生 于 1942 年 发表有 《〈清 儒学 案〉序》、…略…

qiánmù xiānsheng yú nián fābiǎo-yǒu qīng rúxué àn xù

人名 尊称 1942 年に 発表する-YOU 書名

(钱穆先生は 1942 年に『「精儒学案」序』を発表している。)

(『人民日报』、2007-08-12)

(4.110) 是 谁 发表 { 了 / *有 } 《〈清 儒学 案〉序》

shì shuí fābiǎo -le -yǒu qīng rúxué àn xù

断定 誰 発表する -LE -YOU 書名

(4.111) 今晚, 安排有 欢迎会。

jīnwǎn ānpái-yǒu huānyíng huì

今晚 手配する-YOU 歓迎会

(今晚、歓迎会が手配されている。)

(4.112) 今晚, 是 谁 安排 { 了 / *有 } 欢迎会。

jīnwǎn shì shuí ānpái -le -yǒu huānyíng huì

今晚 断定 誰 手配する -LE -YOU 歓迎会

(今晚、歓迎会を手配したのは誰?)

(作例)

また、文 (4.113) のように、「V 有」直後の名詞句 NP₂ が不定名詞句であることは一般である⁵⁹。これに対し、(4.114) のように、NP₂ の位置に定名詞句を用いた文は不自然にな

⁵⁸ この考え方は益岡 (1987:214-217)、副島 (2009:18) から学んだことが大きい。

⁵⁹ 「V 有」と違って、「V 了」、「V 着」の後には定名詞句と不定名詞句の両方を用いることが可能である。

る。文 (4.113) では、NP₂ の位置に数量詞「一幅 (一枚)」を伴う不定名詞句が使用されている。数量詞による個体化機能は、存在対象に個別の実体としての輪郭を与えること一「輪郭化 (profiling)」に大きく貢献し、存在対象の卓立化を促す効果をもつと考えられる (木村 2011:112-115)。つまり、話し手の関心は旧情報の「墙上 (壁上)」ではなく、輪郭化された新情報の「一幅画 (一枚の絵)」にあると言える。

(4.113) 墙上 挂有 一幅 画。

qiángshàng guà-yǒu yīfú huà

壁上 掛ける-YOU 一枚 絵

(壁上に絵が一枚掛けている。)

(4.114) ??墙上 挂有 这幅 画。

qiángshàng guà-yǒu zhèfú huà

壁上 掛ける-YOU この絵

(作例)

加えて、動作主の存在を暗示する受動表現には「V 了」が使えるのに対して、「V 有」は使えないことから、「V 了」構文と比べて「V 有」構文は動作主との関わりが少ないと言えるだろう。なお、「V 有」構文は受身表現に用いられないことは、薛 (2008) も指摘している。

(4.115) 墙上 被 挂了 一幅 画。

qiángshàng bèi guà-le yīfú huà

壁上 受身 掛ける-LE 一枚 絵

(壁上には絵が一枚掛けられている。)

(4.116) *墙上 被 挂有 一幅 画。

qiángshàng bèi guà-yǒu yīfú huà

壁上 受身 掛ける-YOU 一枚 絵

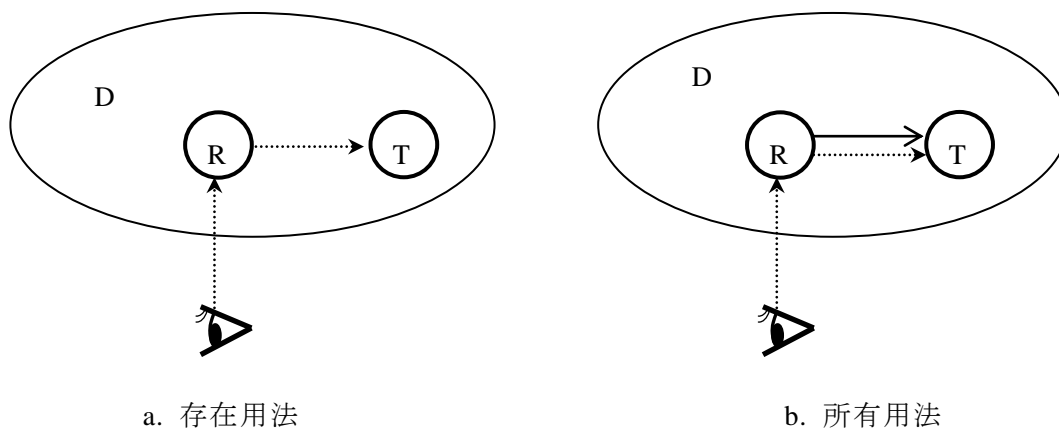
(作例)

さらに、「V 有」は意志動詞からなる「命令形」、「勧誘形」、「願望態」など主観表現と共

起できない。上述の分析に基づき、「V有」は客体対象の結果状態に焦点が置かれる1つの「客体結果相」であると言える。

ところで、なぜ「V有」構文はこのような「対象指向性」をもっているのだろうか。ここでは、3.4節で述べた参照点構造を用いて、「V有」が対象指向性をもっている理由を述べる。既に論じてきたように、「V有」は存在動詞「有」の存在用法と所有用法を継承している。I型の「V有」は存在動詞「有」の存在用法を継承している。

存在用法としての「有」の概念構造は以下の図4-1(a)である。認知主体は場所を参照点として、ターゲットである存在物へアクセスするプロセスを表している。最初に、認知主体は際立ちの高い事物である場所を参照点とする。そして、参照点を経由して支配領域にある存在物にアクセスする。この場合、認知主体の焦点は参照点からターゲットに移行される。ターゲットである存在物はより際立って認知される対象になる。これに対し、参照点である場所は背景的になり、ターゲットである存在物を位置づけることになっている。前述したように、I型の「V有」は広義の存在表現であると考えられる。典型的存在構文と同様に、場所は背景的に位置づけられ、対象はより際立って認知される。つまり、客体である対象は焦点化されるわけである。



- 👁️ 認知主体 (conceptualizer)
- T: ターゲット (target)
- ⋯→ 心的経路 (mental path)
- R: 参照点 (reference point)
- D: 支配領域 (dominion)
- Rによるコントロール

図4-1. 「有」における存在用法と所有用法 (再掲)

一方、II型の「V有」は存在動詞「有」の所有用法を継承している。所有用法としての「有」の概念構造は図4-1(b)である。認知主体は所有者を参照点として、ターゲットである所有物へアクセスするプロセスを表す。この場合、参照点としての所有者は背景的であり、ターゲットとしての所有物は前景的である。従って、II型の「V有」においては、動作主(経験主)は背景的に位置づけられ、客体対象はより際立って認知される対象であると考えられる。要するに、存在用法であるか所有用法であるかに関わらず、「有」の表す概念構造では、「有」の後ろの部分が焦点化される。この特徴は「V有」にも反映されている。

4.6 存在型アスペクト形式「V着」、「在V」との比較

現代中国語には、存在型アスペクト形式として、「V有」の他に、継続を表す「V着」、進行を表す「在V」も挙げられる。「V着」と「在V」は、話し言葉としても書き言葉としても広く使用されているアスペクト形式である。中国語のアスペクト形式の全体像は、同カテゴリ内の他の形式との相関によって解明される。以下、「V有」を「在V」、「V着」と比較させ、三者の対立関係を明らかにする。

4.6.1 「V着」との比較

「V着」に関しては、木村(1983)、石(1992)、郭(1993)、方(2000)などによって、数多くの成果が挙げられている。これらの研究は大きく2つの観点に分けることができる。1つの観点は、「V着」は異なる意味特徴をもっているという見方である。例えば、木村(1983)は、「着」を「着₁」と「着₂」に分類し、「着₁」は動態の進行を表し、「着₂」は静態の継続を表すと主張している。郭(1993)は、「着」をさらに細かく分類し、「着₁」は動態動作の継続を表し、「着₂」は動詞自体がもつ静態状態の継続を表し、「着₃」は動作が終わった後の結果状態の継続を表すと主張している。一方、もう1つの観点は、動態動詞につく「着₁」と静態動詞につく「着₂」は同じであるという見方である。石(1992)、方(2000)などはこの観点をもっている。本研究もこの立場に立つ。すなわち、動態の継続や静態の継続はあくまで「着」をとるそれぞれの動詞が個々の文脈で表す「個別的意味」であり、「着」の「一般的意味」は継続であるとする⁶⁰。

⁶⁰ 副島(2007)では、Jakobson(1972)の「変異体(variation)」と「不変体(invariant)」という対概念を導入し、形式に固有の不変体を「一般的意味」と呼び、個々の文脈において現れる多様な変異体を

継続性をもつ「V着」と「V有」との類似性がしばしば指摘されている(刘 1985; Jaxontov 1988; 張 2010 など)。刘 (1985:120) は、客体変化動詞または主体変化動詞が用いられる「V着」は「V有」と同じ意味用法をもつと主張している。また、Jaxontov (1988:114) は、「V有」は結果相「V着」に類似していると述べている。さらに、張 (2010:81) は、「V有」は「V着」の地理的または文体的ヴァリエーションであると述べている。このように、これまで「V有」と「V着」とはほぼ同じであるという考え方が多く、両者の区別についてはあまり詳しく論じられていない。

「着」は元々存在を表す動詞であったが、現在は文法化されて独立動詞としての機能が失われ、1つのアスペクト形式になっている。以下、「V着」と「V有」との相違に注目して両者の比較を進めていく。

4.6.1.1 動詞に関する制限

文 (4.117) ~ (4.120) に示されるように、継続性を有する「V着」は動詞の語彙的意味によって、主に4つの用法に分けられる。文 (4.117) は、「対象の存在様態」の用法であり、場所名詞句が共起して対象である「孔子的像(孔子の像)」が「教室正面(教室の正面)」という場所に掛けられている状態で存在することを表している。文 (4.118) は、「結果の存在」の用法であり、場所名詞句が共起しなくなり、動作行為がシフトされている。(4.119) は「過程の存在」の用法であり、動作が継続しているという状態で存在していることを表している。(4.120) は動作行為が想起されにくくなり、「単なる状態」を表している。

(4.117) 在 倪藻 上 的 学 校 里, 每 个 教 室 正 面 都 挂
 zài nízǎo shàng de xuéxiào li měigè jiàoshi zhèngmiàn dōu guà
 倪藻の行っている学校には どの教室にも 正面 全部 掲げる
 着 孔 子 的 像。
 -zhe kǒngzǐ de xiàng
 -ZHE 孔 子 の 像

(倪藻の行っている学校にはどの教室にも正面に孔子の像が掲げてある。)

(『活动变形人』)

「個別的意味」と呼んでいる。

(4.118) 门 开着, 好像 一只 怪兽 的 大口。

mén kāi-zhe hǎoxiàng yīzhǐ guàishòu de dàkǒu

門 開く-ZHE まるで 1頭 怪獣 の 大きい口

(門はまるで怪獣の口のように大きく開いている。)

(『家』)

(4.119) 母子俩 都 不再 说话, 望着 窗外, 窗外

mǔzǐliǎ dōu bùzài shuōhuà wàng-zhe chuāngwài chuāngwài

親子ふたり とも もう何も言わず 眺める-ZHE 窓の外 窓の外

仿佛 全是 虚空。

fǎngfú xūkōng quánshì

ようだ 全部 虚空

(親子ふたりとももう何も言わずに窓の外を眺めていた。外にはただ虚空が広がっているかのようだった。)

(『插队的故事』)

(4.120) 小巷 里 出奇的 安静, 两旁 耸立着 笔直

xiǎoxiàng lǐ chūqí de ānjìng liǎngpáng sǒnglì-zhe bǐzhí

小さい巷 中 拍子抜けするほど静かだ 両側 聳え立つ-ZHE まっすぐ
的 高墙。

de gāoqiáng

の 高い壁

(路地は両側とも高い壁で、奥へ入ると拍子抜けするほど静かだった。)

(『轮椅上的梦』)

王 (2007:7-43) は、工藤 (1995) の動詞分類をふまえて「V着」に用いられる外的運動動詞と内的状態動詞を分類している。王 (2007) の分類は以下の図 4-14 にまとめられる。

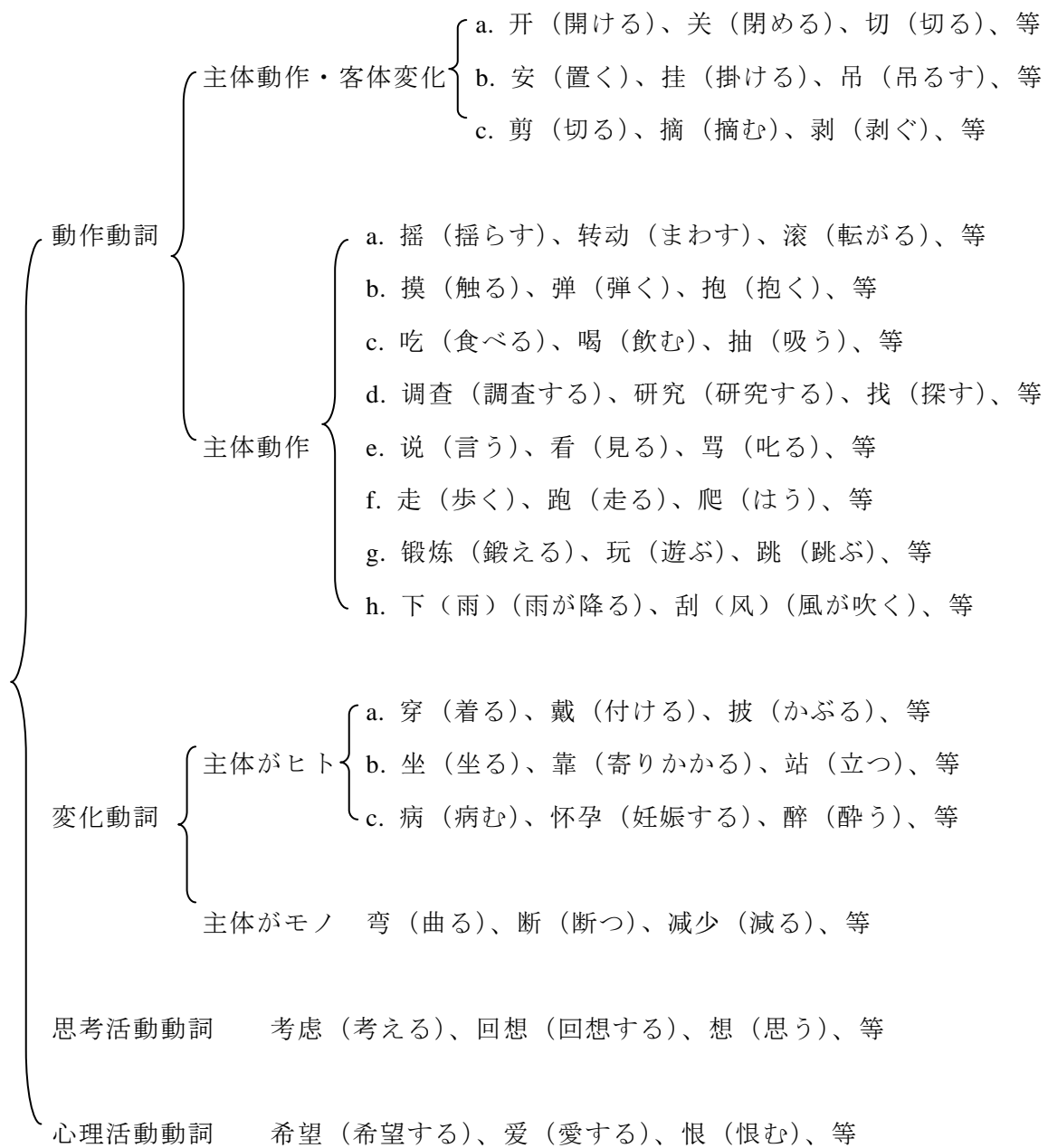


図 4-14. 「V 着」に用いられる動詞 V の分類

図 4-14 に示されるように、「着」と共起する動詞の種類は主体動作・客体変化動詞、主体動作動詞、主体変化動詞、思考活動動詞、心理活動動詞に広がっている。中でも、主体動作動詞は広く使用されている。これに対し、「说 (言う)」、「走 (走る)」などの主体動作動詞、考虑 (考える)、回想 (回想する) などの思考活動動詞と希望 (希望する)、爱 (愛する) などの心理活動動詞は「V 有」には使用されない。これらの動詞は、動詞の表す動作が終わった後に具体的な結果状態が出現しないという共通点を有している。前述したよ

うに、「V有」に用いられる動詞として、基本的には結果状態の「出現」が必須条件であるため、これらの動詞は「V有」には使用されていない。よって、「着」と比べ、「有」と共起できる動詞の種類は少ない。

ただし、「消失」を表す動詞は「V着」にも「V有」にも用いることができない。これは、両者が本来存在を表す存在動詞であることに関連していると考えられる。例えば、「摘（採る）」という動詞の表す動作が終わった後に、「树上（樹の上）」に対象である「一个苹果（1つのリンゴ）」が存在しなくなる。この場合に、「V着」構文も「V有」構文も用いられない。つまり、「V有」と「V着」においては、対象をある場所に位置させる動作を表す定位動詞との意味の協働によって、動作終了後の物事の存在を表す意味が基本的である。これは中国語存在型アスペクトの1つの特徴であると考えられる。「中国語の機能語の多くは、共起対象との意味的協働に依存しつつ自らの文法的作用の実現を果たす傾向が強く」（木村2006:57）、「V有」も「V着」も相対的に文法力が乏しいと言える。

- (4.121) a. 小王 从 树上 摘了 一个 苹果
 xiǎowàng cóng shùshàng zhāi-le yīgè píngguǒ
 王さん から 樹の上 採る-LE 1つ リンゴ
 (王さんは樹の上からリンゴを1つ採った。)
- b. *小王 从 树上 摘着 一个 苹果。
 xiǎowàng cóng shùshàng zhāi-zhe yīgè píngguǒ
 王さん から 樹の上 採る-ZHE 1つ リンゴ
- c. *小王 从 树上 摘有 一个 苹果。
 xiǎowàng cóng shùshàng zhāi-yǒu yīgè píngguǒ
 王さん から 樹の上 採る-YOU 1つ リンゴ

(作例)

この点については、井上（2001）も次のように指摘している。中国語の「V了」、「V着」は「事象そのものがもつ形（閉じた形/開いた形）を明示的に描き出す形式である」のに対して、日本語の「Vテイル」は事象そのものがもつ形を明示的に描き出す形式ではなく、『ある時点において同時的に存在する状態』という枠を設定し、そこに事象の実現後の状態をあてはめる表現である」（p.27）。

(4.122) a. 私はずっと彼を待っていた。

b. 我 一直 等着 他。

wǒ yīzhí dèng-zhe tā

私 ずっと 待つ-ZHE 彼

(4.123) a. 私は彼を三時間待っていた。

b. 我 {等了/ *等着} 他 三个 小时。

wǒ dèng-le dèng-zhe tā sāngè xiǎoshí

私 待つ-LE 待つ-ZHE 彼 三時間

(4.124) a. 門が開いている。

b. 门 开着。

mén kāi-zhe

ドア 開く-ZHE

(4.125) a. 私の猫が死んでいる。

b. 我的猫 {死了 / *死着}

wǒ de māo sǐ-le sǐ-zhe

私の猫 死ぬ-LE 死ぬ-ZHE

(井上 2001:26-27)

動詞との意味的協働に依存する中国語の存在型アスペクト形式は朝鮮語の「eo issta」構文（日本語「V テイル」構文に相当する構文）とかなり類似している。動作終了後主体の存在が確認できなくなる「消滅」の動詞の場合は、朝鮮語の「eo issta」構文を使用することもできない（岡 2000:165）。

(4.126) *비행기가 사라져 있다.

pihaenggi-ga salaji-eo issta.

飛行機が 消えて いる

(4.127) *내 지갑이 없어져 있다.

nae jigab-i eopseoji-eo issta.

僕の 財布が なくなっている

(岡 2000:165)

ところが、「V 着」は「パーフェクト」の用法を表すことができないのに対し、「V 有」は「パーフェクト」の用法を表すことができる。例えば、文（4.128）では、「1926年に散文を書いた」という行為は基準時まで効力をもっていることが表される。しかし、「V 有」を「V 着」に置き換えた文（4.129）は非文である。正しい文にするためには、時間的成分「1926年」を削除する必要があるが、この場合、「V 着」は「動作の継続」を表すことになる。すなわち、「V 着」は「結果の存在」、「過程の存在」にとどまっており、「パーフェクト」への発展が見られない。

(4.128) 鲁迅 先生 在 1926 年 写有 散文 《藤野先生》。

lǔxùn xiānsheng zài nián xiě-yǒu sǎnwén téngyěxiānsheng

魯迅先生 1926年に 書く-YOU 散文 藤野先生

(1926年に、魯迅先生は散文『藤野先生』を書いている。)

(4.129) *鲁迅 先生 在 1926 年 写着 散文 《藤野先生》。

lǔxùn xiānsheng zài nián xiě-zhe sǎnwén téngyěxiānsheng

魯迅先生 1926年に 書く-ZHE 散文 藤野先生

(作例)

4.6.1.2 対象指向性

次に、「V 着」と「V 有」の表す継続性に焦点を当てて両者の相違を考察する。これまで、「V 着」は「継続性」という基本的な用法をもち、「動作の継続」と「結果の継続」という2つの下位分類ができるとされている。非限界動詞であれば「動作の継続」、限界動詞であれば、「結果の継続」を表す。例えば、文（4.130）では、「鸽子们（鳩たち）」が歩いている過程を表すが、文（4.131）では、「写（書く）」という動作の結果として、写真に名前が書いてあるという「結果の継続」を表す。

(4.130) 鸽子们 大摇大摆地 在 院子里 走着。

gēzimen dàyáodàbǎide zài yuànzili zǒu-zhe

鳩たち 大威張りで 庭の中 歩く-ZHE

(鳩たちは大威張りで庭を歩いていた。)

(『紅高粱』)

(4.131) 相片 旁边 还有 一张 纸， 上面 也 写着 我的
 xiàngpiàn pángbiān hái yǒu yīzhāng zhǐ shàngmian yě xiě-zhe wǒ de
 写真 横 それから 一枚 紙 上 も 書く -ZHE 私 の
 名字。

Míngzi

名前

(写真の横においてあった紙にも、わたしの名が書いてあったわ。)

(『青春之歌』)

「V 着」の表す「動作の継続」と「結果の継続」を次の図 4-15 に示すことができる。I と F はそれぞれ動作の開始点と終了点を表す。「動作の継続」は I と F の間にある動きの状態を静的状態のように継続的に捉える。「結果の継続」は F から始まる結果状態を継続的に捉える。

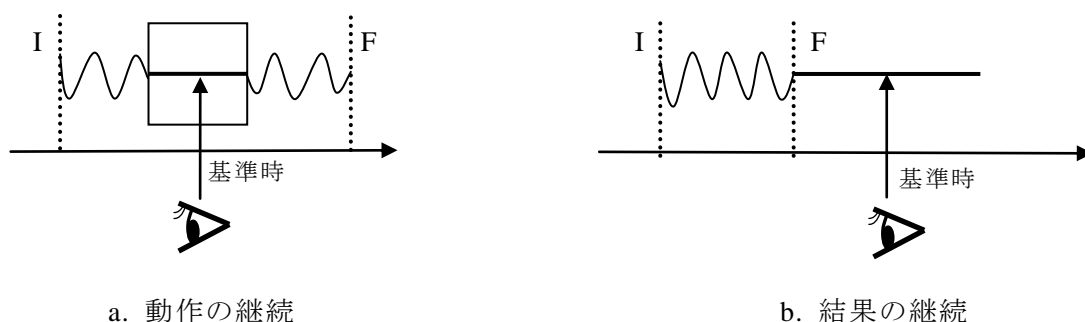


図 4-15. 「V 着」の意味的特徴

一方、「V 有」も基本的に「継続性」を有するが、「V 着」とは異なり「動作の継続」ではなく、「結果の継続」を表す。例えば、「動作の継続」を表す文 (4.130) に対しては、「V 有」構文に置き換えられないが、文 (4.131) に対しては、「V 有」に置き換えても意味がほぼ変わらない。

(4.132) *鸽子们 大摇大摆地 在 院子里 走有。
 gēzimen dà yáo dà bǎi de zài yuàn zǐ lǐ zǒu-yǒu
 鳩たち 大威張りで で 庭の中 歩く -YOU

(4.133) 相片 旁边 还有 一张 纸, 上面 也 写有 我的
 xiàngpiàn pángbiān hái yǒu yīzhāng zhǐ shàngmian yě xiě-yǒu wǒ de
 写真 横 それから 一枚の紙 上 も 書く -YOU 私 の
 名字。

míngzi

名前

(写真の横においてあった紙にも、わたしの名が書いてあったわ。)

「V 着」と「V 有」がとりたてる局面は以下の図 4-16 に示すことができる。すなわち、両者が重なっている部分は「結果の継続」を表す場合である。

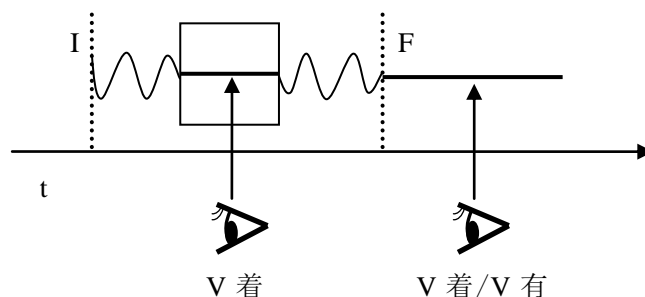


図 4-16. 「V 着」と「V 有」との違い

副島（2005、2007）は、「動作の継続」を動作の開始点において新しい状況が成立し、その状況が継続していることを表すと捉えることが可能であると指摘している。「V 着」が事態を状態化して捉えるのが基本であるため、非限界動詞に「着」が付いた場合、動きの開始点において、限界に達成して実現された状況が継続していると捉えられる。すなわち、「V 着」が表す「動作の継続」と「結果の継続」を「結果」というアスペクトの意味として一元化して捉えることができる。異なるところは、「動作の継続」においては、「結果」の開始点は動きの開始点である。「結果の継続」においては、「結果」の開始点は動きの終了点である。Jaxontov (1988) も「V 着」を「結果相」と位置づけて、基本的に (4.134) のような「主体 (subjective)」を表すタイプ、(4.135) のような「客体 (objective)」を表すタイプと文 (4.136) のような「所有 (possessive)」を表すタイプが存在すると指摘している。ただし、文 (4.136) は、主体の状態を表しているため、やはり「主体結果相」の一種と考えられる。前述したように、「V 有」は客体の状態に重点が置かれている。「V 有」と「V 着」とは共に結果状態を表す「結果相」の表現であると言える。

(4.134) 他 坐着。

tā zuò-zhe

彼 坐る-ZHE

(彼が坐っている。)

(4.135) 门 开着。

mén kāi-zhe

ドア 開く-ZHE

(ドアが開いている。)

(4.136) 他 戴着 帽子。

tā dài-zhe màozi

彼 付ける-ZHE 帽子

(彼は帽子を付けている。)

(Jaxontov 1988:113)

「結果の継続」を表す「V 着」と「V 有」においては、動作主が削除され、結果状態に重点が置かれるとされている。しかしながら、文 (4.137) のように、動作主は最初から不問に付されているものの、動作主を補おうとすると、文 (4.138) のように、「A+在 L+V 着+P」という形式で動作主を補うことも可能である。鵜殿 (1982) が指摘しているように、動作の主体が明示された文 (4.138) は静態義と動態義両方を解釈することができる。

(4.137) 墙上 挂着 一幅 画儿。

qiángshàng guà-zhe yīfú huàer

壁上 掛ける-ZHE 一枚 絵

(壁に絵が掛けてある。)

(4.138) 他 在 墙上 挂着 画儿。

tā zài qiángshàng guà-zhe huàer

彼 に 壁上 掛ける-ZHE 絵

(彼は壁に絵を掛けたままにしてある。/彼は壁に絵をかけているところだ)

(鵜殿 1982:10)

一方、「V 有」に関しては、文 (4.139) が示すように、動作の主体は義務的に削除され

ており、補おうとしても補うことができない。つまり、存在状態の背後に動作主の存在を読み取ることは可能である「V着」と比べ、動作主の存在を読み取りにくい「V有」のほうは動作主体との関わりが少なく、対象指向性をもっていると考えられる。

(4.139) ??他 在 墙上 挂有 画儿。
tā zài qiángshàng guà-yǒu huà'er
彼 に 壁上 掛ける-YOU 絵

また、文(4.140)では、「挖有(掘ってある)」は対象の存在状態を表しているが、「挖着(掘っている)」にした文は、「動作の継続」になったため、非文となる。

(4.140) …略…兔子 为了 生存, 通常 要在 觅食的 区域内
tùzi wèile shēngcún tōngcháng yào zài mìshí de qūyù nèi
兎 生存するために 通常 する 食物を探す区域内で
挖有 多个 洞穴。
wā-yǒu duōgè dòngxué
掘る-YOU 幾つか ほら穴

(生存するために、兎は食物を探す区域内で幾つかのほら穴を掘るものだ。)

(『江南时报』、2006-12-21)

(4.141) *…略…兔子 为了 生存, 通常 要在 觅食的 区域内
tùzi wèile shēngcún tōngcháng yào zài mìshí de qūyù nèi
兎 生存するために 通常 する 食物を探す区域内で
挖着 多个 洞穴。
wā-zhe duōgè dòngxué
掘る-ZHE 幾つか ほら穴

(4.142) のように、文(a)では、動詞「写(書く)」に「着」がつけられて、動作主体が論文を書いている状態を表し、「対象指向性」を積極的に表さない。一方、文(b)では、動詞「写(書く)」に「有」が付けられており、「パーフェクト」の用法であるが、前述したように、弱い「対象指向性」を有すると考えられる。つまり、「V着」は主体の結果状態を積極的に表す「主体結果相」であるのに対し、「V有」は客体の結果状態を積極的に表す

「客体結果相」であると言える。

(4.142) a. 他 写着 论文。

tā xiè-zhe lùnwén

彼 書く-ZHE 論文

(彼は論文を書いている。)

b. 20年前, 他 写有 许多 论文。

niánqián tā xiè-yǒu xǔduō lùnwén

20年前 彼 書く-YOU たくさん 論文

(20年前に彼は論文を書いている。)

(作例)

さらに、筆者は『日中対訳コーパス』に収録されている『插队的故事』と『红高粱』という2編の小説を対象に、「V着」が実際にどのように現れているのかを調査した。この2編の小説は、どちらも会話の文も多く使用されている。調査の結果、「V着」の総出現数は1679例であった。出現回数の10回以上の動詞を以下の表4-5に示す。

表 4-5. 小説における「V着」の使用状況

V着	出現回数	例文
看着	91	仲伟满意地 <u>看着</u> 他的女儿。(仲偉は満足そうに自分の娘を眺めている。)
对着	44	大抬杆子架在河堤上, 枪口 <u>对着</u> 石桥。(土手に備えつけられた旧式砲は、石の橋を狙っている。)
跟着	39	…略…他走得缓慢又镇静, 身后也没 <u>跟着</u> 那条狗。(歩き方がゆっくりとして落ち着いていて、うしろに犬を連れていなかったという。)
带着	28	那个监工又转过来, 提着藤条, 脸上还 <u>带着</u> 那种冷静的笑容。(あの監督がまたもどってきた。藤の鞭をさげ、顔にはやはり冷たい笑みを浮かべている。)
提着/ 提拎着	26	父亲 <u>提着</u> 手枪, 钻进高粱地, 跨过公路, 走到哑巴面前。(父は拳銃をさげて高粱畑にもぐりこみ、公路を横ぎって唾巴のところへ行った。)
拉着	23	一个土匪 <u>拉着</u> 骡子跑过来。(一人の盗賊が騾馬を引いて駆けてきた。)

望着	22	母子俩都不再说话， <u>望着</u> 窗外，…略…（親子ふたりとももう何も言わずに窓の外を眺めていた。）
站着	21	奶奶舒适地 <u>站着</u> ，…略…（祖母はのびやかな気分で立っていた。）
盯着	19	栓儿端着长把镰刀立在河岸上，两眼 <u>盯着</u> 上游的浪峰。（栓兒は長い柄の鎌を持って川岸に立ち、両目を上流の波頭に見据えている。）
等着/ 等待着	18	监工张嘴叼了烟，又 <u>等着</u> 那人替他点燃。 （監督は口に煙草をくわえ、男が火をつけるのを待っている。）
挑着	17	一个大个子兵 <u>挑着</u> 两个空酒篓。 （大柄な一人の兵士が、空の酒籠を2つ天秤棒で担いでいる。）
端着	17	栓儿端着长把镰刀立在河岸上，两眼盯着上游的浪峰。（栓兒は長い柄の鎌を持って川岸に立ち、両目を上流の波頭に見据えている。）
叫着/ 叫唤着	17	劫路人在余占鳌手下熟练地 <u>叫着</u> 。（追いはぎが、余占鰲の手の下でぺらぺらとまくしたてた。）
沿着	17	驴车 <u>沿着</u> 清平河走，清平河只剩了几尺宽的细流。（驢馬車は流れの幅が数尺しかない清平河に沿って走った。）
牵着	16	父亲 <u>牵着</u> 爷爷的手，向着高粱深处走。（父は祖父の手をひいて、高粱の茂みの奥へ歩いていった。）
坐着	16	“昨儿我在饭馆里就看见她了，一个人 <u>坐着</u> ，光喝水。”（「昨日食堂で見かけたんだ。ひとりぼっちで座って水ばかり飲んでた」）
盼着	15	羊羔羔也 <u>盼着</u> 老羊回来。（小羊が親の帰りを待っている。）
听着	15	哑巴拄着枪， <u>听着</u> 余大牙把那首歌子杂乱无章地唱。（啞巴は銃を地面について、余大牙の調子はずれな歌に耳をかたむけていた。）
拖着	14	刘大号 <u>拖着</u> 一条血腿，从河堤边爬过来，…略…（劉大号为血まみれの片足をひきずって、土手から這ってきた。）
抱着	14	外曾祖父 <u>抱着</u> 一捆干草，一把把地抽着喂驴。（曾祖父は干し草の束をかかえ、それをひとつかみずつ抜いて驢馬に食わせている。）
骑着	13	在这条小路上，奶奶 <u>骑着</u> 小毛驴，悠闲地行走，…略…（その小道を、祖母は驢馬に乗ってゆったりと進む。）
打着	13	有一个队员睡着了， <u>打着</u> 很响的呼噜。（隊員が一人、大きないびきをかいて

		眠っていた。)
想着	13	我 <u>想着</u> 别的：假如需要死，我敢不敢。(私は別のことを考えていた。死ななければならぬとしたら自分は死ぬるだろうか。)
按着	13	那人用一只手 <u>按着</u> 那布包。(男は、その包みを手で押さえている。)
躺着	12	…略…透过玻璃隐约可见四只鸡安稳地 <u>躺着</u> 。(ガラス越しに四羽の鶏がおとなしく横たわっているのがぼんやり見える。)
贴着	12	堤漫坡上的队员们身体紧 <u>贴着</u> 野草和黑土，一动不动。(土手の斜面にいる隊員たちは野草と黒土にへばりついて、ぴくりとも動かない。)
挂着	12	…略…脖子上 <u>挂着</u> 一个沉甸甸的银锁。(頸にはずっしりと重い銀の鎖がかかっていた。)
扛着	12	仲伟一本正经 <u>扛着</u> 老镢站在河滩里。(仲偉が真面目くさった顔をして鍬を担いで川原に立っている。)
说着	11	爷爷抽抽噎噎地哭着，嘴里喃喃地 <u>说着</u> 。(祖父はむせび泣きながら、ぼそぼそとつぶやいていた。)
响着	11	火把下 <u>响着</u> 壮胆的吼叫，…略…(松明の下では景気づけの掛け声が響いていた。)
拿着	11	那女人 <u>拿着</u> 钱，提着鸡，千恩万谢地走了。(女は金を持ち、鶏をさげて、繰返し礼を述べて立ち去った。)
扶着	11	和尚什么也没说，慢吞吞地 <u>扶着</u> 树倒了。(和尚はなにも言わず、木にもたれてゆっくりと倒れた。)
背着	10	他 <u>背着</u> 一支长筒子鸟枪，枪托儿血红色。(かれは銃身の長い猟銃を背負っていた。銃床は血のように赤い。)
照着	10	现在大火照耀庭院， <u>照着</u> 洞房门上贴着的对联。(そしていま、はげしい火が庭と新婚夫婦の部屋の入口に貼られた対聯を明るく照らしている。)
向着	10	我父亲本能地感觉到队伍是 <u>向着</u> 东南方向开进的。(隊伍は東南の方向へ進んでいる、と父は本能的に感じとった。)
握着	10	爷爷蹲下去， <u>握着</u> 方七的手，…略…(祖父は身をかがめて、方七の手を握った。)

表 4-5 から分かるように、「V 着」には「看（見る）」のような非限界動詞が多く使用されている。そして、積極的に動作主体の状態を表し、対象の結果状態は積極的に表さない⁶¹。例えば、文（4.143）、（4.144）では、動作主体「仲伟（仲偉）」、「他（彼）」の状態を表している。

(4.143) 仲伟 满意地 看着 他的 女儿。

zhòngwěi mǎnyìde kàn-zhe tā de nǚér

人名 満足そうに 眺める-ZHE 彼の 娘

(仲偉は満足そうに自分の娘を眺めている。)

(『插队的故事』)

(4.144) 他 背着 一支 长筒子 鸟枪, …略…

tā bēi-zhe yīzhī zhǎngtǒngzi niǎoqiāng

彼 背負う-ZHE 1 挺 長い寮猟銃

(彼は銃身の長い寮銃を背負っていた。)

(『红高粱』)

また、三宅（2005）は、『当代北京口语语料库』（現代北京語話し言葉コーパス）を利用し、「V 着」が実際の話し言葉としてどのように現れているかを、調査した。調査の結果、東城区のデータ中での「V 着」の総出現数は 472 例であった。表 4-6 は、出現数が第 1 位から上位 13 位までの動詞を示している。

⁶¹ 「桌上放着一本书（机の上に本が一冊置いてある）」のように、状態の主が意味役割上の対象であっても、その結果の姿を表すことが可能である。ただし、実際の使用状況を見ると、このような対象の結果状態を表す用法がそれほど多くない。

表 4-6. 「V 着」の使用状況⁶² (三宅 2005:196)

V 着	出現回数	例文
带着	36	我自己呢，曾经带着自己的小孩儿，到北戴河去玩儿了一次。(私はね、嘗て自分の子供を連れて、一回北戴河へ遊びに行ったことがある。)
跟着	31	啊，因为有些家长呀，我们一带孩子出去玩儿去，他们甚至于后面儿偷偷跟着，看着自己的孩子。(私たちは学生を連れて外へ遊びに行くと、何人かの親が後ろについて、自分の子供の様子を見ている。)
看着	28	啊，尽管它这长城也是人工建造的哈，一个它，我觉得特别这个，嗯，看着特别壮观。(万里の長城は人々によって作られたが、見ていると、特に壮観だと思う。)
帮着	15	退休以后在，家里能，帮着干这一般的，家务事儿，能，照顾一下，我哥哥的小孩儿有时候儿。(定年後、家事を手伝っていて、たまには兄の子どもの面倒を見ることができる。)
呆着	15	在家呆着吃饭哪，这这这吃饭的问题都解决不了，还交学费？(家に居てご飯を食べるか？ご飯の問題さえ解決できない。学費を払うもんか？)
坐着	15	屋里，在屋里坐着也是发抖啊，不许，不想干别的事儿。(部屋の中で座っても震える。他のことはやりたくない。)
拿着	14	后来半道儿上呢，又碰上几个当兵的，他们呢，拿着录音机，放着流行歌曲，还，还，还觉得挺有意思，挺热闹的。(その後、途中で何人かの兵士に出会った。彼らはラジカセを持って、流行っている歌を流していた。面白くて賑やかだった。)
等着	13	就是，嗯，就是，现在还等着分房呢。(そうだ、そうだ。今住居の分配を待っているね。)
活着	10	像那个我爱人的奶奶吧，现在也活着呢。(私の妻のお婆さんはね、現在も生きているよ。)
想着	8	在这个时间，在这一段儿时间里呢，我也总想着能够多学点儿东西啊，嗯，学好了，把这一天的工作，一天的生活，让它充实起来。(私もこの期間で多

⁶² 和訳は筆者によるもの。

		くのことを学びたいと思っているよ。この一日の仕事、生活を充実させたい。)
写着	8	青年湖哇，出城往往往往西北走，出城那个就是那，就往北走有一个牌子， <u>写着</u> 青年湖公园进去就是。(青年湖はね、町を出て北西へ進み、北へ行くと看板がある。青年湖公園と書かれている。中に入ると青年湖だ。)
站着	8	就是有那么，你看我们坐满了，大车是二十八个座儿，然后 <u>站着</u> 那么十几个人儿吧，是哈，不到五十人。(見て、大きい車の座席数は 28 席で、席は全部埋まっている。そして、十数人が立っている。全部で 50 人に達していない。)
指着	7	嗯，我母亲，还有一个，还有一个祖母，都在一块儿生活， <u>指着</u> 我父亲，靠小学教师那点儿薪，那点儿薪金。(うん、母、そして、お婆さんと一緒に生活している。父の小学校で働いている父の少ない給料に頼っている。)

表 4-6 から分かるように、出現頻度が高い「带着 (連れている)」、「跟着 (ついている)」、「看着 (見ている)」などは全て主体の状態を表している。よって、三宅 (2005) の調査結果も本研究の結論を裏付けている。すなわち、「V 着」は積極的に主体の状態を表すのに対し、「V 有」は積極的に客体の状態を表す。

4.6.2 「在 V」との比較

存在動詞「在」は場所・空間における位置づけを表す動詞である。現在でも、独立動詞として使用されている。その場所・空間的な存在の意味からアスペクト的な意味へ拡張していると見られる。例えば、

- (4.145) a. 张三 在 家。
zhāngsān zài jiā
张三 ZAI 家
(張三は家にいる。)
- b. 书 在 桌上。
shū zài zhuōshàng
本 ZAI 机の上

(本は机の上にある。)

(4.146) a. 张三 在 上 厕所。

zhāngsān zài shàng cèsuǒ

张三 ZAI トイレに行く

(張三はトイレに行っている。)

b. 李四 正 在 赶 回来 的 路上。

lǐsì zhèng zài gǎn huílái de lùshàng

李四 最中 ZAI 急いで 帰る の 道路上

(李四は急いで帰っている最中だ。)

(4.147) a. 我 在 想 你。

wǒ zài xiǎng nǐ

私 ZAI 想う 貴方

(貴方のことを想っている。)

b. 他 在 学 日语。

tā zài xué rìyǔ

彼 ZAI 勉強する 日本語

(彼は日本語を勉強している。)

(作例)

文(4.145)の「在」は文字通りの場所・空間的な存在を叙述する存在動詞である。文(4.146)の「在」は進行を表すアスペクトの表現になっているが、場所名詞句が現れて場所・空間的な存在としての意味がまだ残されている。文(4.147)の「在」は場所・空間的な存在という意味が読み取れず、進行を表すアスペクトの表現になっている。

前述したように、継続性として、「V着」以外に、進行を表すアスペクト形式「在V」が挙げられる。「在」は動作を動的事態として捉えるが、「着」は動作を静的事態として捉える。文(4.148)では、張三は教科書を取るという事態が表されるが、文(a)は教科書を取るために一連の動作が行われ、動的事態として捉えられている。例えば、張三は教室で教科書を忘れたことに気づき、急いで研究室に戻って、机の上にある教科書を取り、そして、走って教室へ戻る。これらの動作は全て「在」によって捉えられる。一方、文(b)は、張三は教科書を持っている状態が表され、教科書が張三の手に存在している状態であ

る。したがって、「在 V」は眼前に起こっている出来事を「前景」として描くが、「V 着」は眼前に起こっている出来事を「前景」ではなく、「背景」として客観的に述べる場合が多い。状態化機能については、「在 V」と違って、「V 有」と「V 着」が共通点をもっている。

(4.148) a. 张三 在 拿 上课 用 的 教科书。

zhāngsān zài ná shàngkè yòng de jiàokēshū

張三 ZAI 取る 授業用 の 教科書

(張三は授業用の教科書を取っている。)

b. 张三 拿着 上课 用 的 教科书。

zhāngsān ná-zhe shàngkè yòng de jiàokēshū

張三 持つ-ZHE 授業用 の 教科書

(張三は授業用の教科書を手を持っている。)

(再掲)

また、「在 V」は専ら「動作の進行」を表し、「結果の継続」、「パーフェクト」や「単純状態」などの意味を表さない。例えば、以下の日本語の表現は、いずれも「在 V」で対応することが不可能である。すなわち、動作を表すか結果を表すかという点においては、「在 V」と「V 有」が相補的である。

(4.149) 道に電信柱が倒れている。

(4.150) 荷物をフロントに預けてあった。

(作例)

以上、「在 V」、「V 着」と「V 有」との関係を考察してきた。表 4-7 に示しているように、「在 V」は「動作の進行」だけを表すのに対し、「V 有」は「結果の継続」のみを表すという点においては、相補的関係をなしている。また、「V 着」は積極的に主体の状態を表すが、「V 有」は積極的に客体の状態を表す。状態の主が主体であるか客体であるかという点においては、両者は相補的関係をなしていると考えられる。

表 4-7. 「在 V」、「V 着」、「V 有」の意味的特徴

形式 \ 意味	基本的意味		派生的意味
	限界動詞	非限界動詞	
在 V	動作の進行		—
V 着	結果の継続	動作の継続	単なる状態
	(主体の状態)		
V 有	結果の継続	—	パーフェクト
	(客体の状態)		単なる状態

4.7 「V 有」を使う理由

「V 了」、「V 着」に比べ、「V 有」は文法化の度合いが比較的低く、存在を表す「有」の意味が色濃く残っている。存在動詞「有」は、元々物事存在を表すため、「V 有」という形式は事態を客観的に描写する性格をもっている。新聞記事に「V 有」が偏って多く使用されている（呉 2006）事実も、動作・行為の結果状態を客観的に示し、説明報告するという「V 有」の特徴に適しているものである。

「V 有」が文語的表現であり、文体的な制限の強さを主張する従来 of 考え方（Яхонтов:1957 ; Jaxontov:1988 ; 罗・范 2006 等）に対して、次のような反論ができる。話し言葉コーパスにおいても「V 有」の使用が確認されていることから、この形式は特定の文体において使用制限を受けているのではなく、「V 有」自体がもつ「客観性」で、書き言葉において使用機会が多くなっているだけであると言える。

また、「V 有」の使用により、文章の単調さを避けることができる。例えば、文 (4.151) においては、眼前の状況描写として、「V 有」構文と「V 着」構文が混じって使用されている。「堆有」を「堆着」に変えると、3つの表現とも「V 着」構文になり、読者に表現の重複さというイメージを与えてしまう。(4.152) のように、「V 有」は連体修飾節に現れている。もし「V 着」構文に変えると、かなり近い位置で連続的に「V 着」構文が連続的に使用され、文が不自然になる。

(4.151) 太阳 快 落山 的 时候, 我们 走进 小溪 旁 的
 tàiyáng kuài luòshān de shíhou wǒmen zǒujìn xiǎoxī páng de
 太陽 もうすぐ 暮れる の 時 私たち 入る 小川 そば の

一户 人家，三间 房子 很新， 房前 堆有 刚 砍
yīhù rénjia sānjiàn fángzi hěnxīn fángqián duī-yǒu gāng kǎn
一軒 住居 3室 部屋 新しい 部屋の前 積む-ZHE さっき 切る
好的 成竹， 堂屋里 正面 摆着 几个 大柜，
hǎo de chéngzhú tángwūli zhèngmiàn bǎi-zhe jǐgè dàguì ,
完成 の 竹 母屋の中 正面 置く-ZHE 幾つか 大きな箆筒
柜子上 有 一台 大 电视， 地上 摊着 刚
guǐzi shàng yǒu yītái dà diànshì dìshang tān-zhe gāng
箆筒上 ある 一台 大きなテレビ 地上 広げる-ZHE さっき
收获 的 稻穗。

shōuhuò de dàosùì

収穫された稲穂

(日が暮れて、私たちは小川の傍にある一軒家に入った。部屋は3室あり、非常に新しい。部屋の前には、切られたばかりの竹が積んであり、母屋の正面には大きな箆筒が幾つか置いてある。箆筒の上には、大きなテレビが一台ある。床には収穫された稲穂が敷いてある。)

(『人民日报』、2006-01-28)

(4.152) 其中 一个人 拿着 写有 “不要 再 杀 我们 了” 的
qízhōng yīgèrén ná-zhe xiě-yǒu bù yào zài shā wǒmen le de
その中の一人 持つ-ZHE 書く-YOU もう我々を殺さないで の
标语牌， 另一个人 拿着 写有 “那 是 一 本 书
biāoyǔpái lìngyīgèrén ná-zhe xiě-yǒu nà shì yīběn shū
スローガン もう一人 持つ-ZHE 書く-YOU あれは一冊の本である
(不是 枪)” 的 标语牌。

bùshì qiāng de biāoyǔpái

鉄砲ではない の スローガン

(その中、一人は「もう我々を殺さないで」と書いてあるスローガンを持っている。もう一人は「あれは一冊の本である(鉄砲ではない)」と書いてあるスローガンを持っている。)

(『人民日报海外版』、2017-03-10)

ところで、「V有」も「V着」も、否定文として用いられる場合は少ない。「V有」は「V着」とは異なり、否定表現「没」と共起せず、文語の「未」と共起する。否定文での使用が少ない原因としては、次のように考えられる。「V有」と「V着」は、存在物の状態の実現を前提として、その状態がどのように維持されているか、すなわち、存在物の存在様態を述べる表現である。否定文にすると、存在物の状態の実現という前提まで否定されるので、「V有」と「V着」を用いる意味が無くなってしまうわけである。

4.8 結

本章では、中国語の「V有」について、存在動詞「有」との関係、動詞に関する制限、および他の存在型アスペクト形式との相違などの面から考察を行った。I型の「V有」では、場所名詞句が現れ、動作主が義務的に省略される。その代わりに、対象が主語になる。非対格動詞的な構造をなしている。これに対し、II型の「V有」では、動作主と対象はそれぞれ主語と目的語である。他動詞的な構造をなしている。存在動詞「有」の存在と所有という二面性を継承している。

また、「印（刷る）」、「装（取り付ける）」、「存（預ける）」、「留（残す）」、「写（書く）」などの他動性の高い動詞は「V有」構文に用いられやすい。ただし、動詞の他動性が高ければ高いほど、「V有」に使用されやすいわけではない。「擦（消す）」、「摘（採る）」のように、具体的な場所に対象が無くなるという「消失」の意味が含まれる動詞は「V有」構文に用いられない。すなわち、「V有」に使用される動詞に関する制限としては、他動性の他に、「出現」という要素も重要であると考えられる。このように、動詞との意味的協働に依存する現象は存在動詞に由来する中国語存在型アスペクト形式の1つの特徴である。

さらに、これまで「V有」は「V着」の文体的なヴァリエーションにすぎないと指摘されているが、本章では体系の機能単位間の対立の観点から「V有」を「V着」と比較させ、「V着」は主に主体の状態を表すのに対し、「V有」は積極的に客体の状態を表すことを明らかにした。

最後に、「V有」は書き言葉だけではなく、話し言葉としても使用されている。書き言葉として「V有」が多く使用されるのは、この形式が特定の文体において使用制限を受けているのではなく、「V有」自体が「客観性」をもっているからである。

第5章 中国語「有V」に関する考察

中国語の存在動詞「有」に関しては、その直前に動詞 V が用いられるだけでなく、「有」の後に動詞 V を用いる現象も多く見られる。

(5.1) 他 有 准备。

tā yǒu zhǔnbèi

彼 YOU 準備する

(彼は準備してある。)

(5.2) 他俩 的 感情 有 发展。

tāliǎng de gǎnqíng yǒu fāzhǎn

彼らの感情 YOU 発展する

(彼らの感情は発展している。)

(张編 2010:566-569)

(5.3) 有 说 有 笑

yǒu shuō yǒu xiào

YOU 話す YOU 笑う

(話したり笑ったりする)

(5.4) 有 吃 有 喝

yǒu chī yǒu hē

YOU 食べる YOU 飲む

(食べたり飲んだりする)

(作例)

これまで、現代中国語では、(5.1)、(5.2) のような動詞が名詞的用法⁶³になる場合と(5.3)、(5.4) のような固定表現以外には、存在動詞「有」は動詞 V を目的語とすることができないと主張する研究者が少なくない(朱 1999:71; 黄・廖編 2002 など)。しかしながら、文

⁶³ 朱(1999)では、これらの動詞は「名动词(名動詞)」と名付けられている。

(5.1)、(5.2)においては、「准备（準備する）」、「发展（発展する）」の品詞は相変わらず動詞であり、意味上では「有」の影響により、「准备（準備する）」、「发展（発展する）」の表す動作が物のように捉えられている（張 2006:69-70；張編 2010:569 など）。

「有」の後ろに動詞が用いられることは決して珍しい現象ではない。古代中国語では、「有」の後ろに動詞を用いることが多く見られる（伍 2003；石 2004；韓 2009 など）。『現代汉语词典第6版』（現代漢語辞典第6版）にも、「有」は「一部の動詞の前に用いられ、謙讓を表す」（p.1578；筆者訳）と記述されている⁶⁴。つまり、「有」の後ろに動詞を用いることが可能である。

また、ここ数十年の間にテレビ番組や新聞などには(5.5)、(5.6)、(5.7)のような「有V」構文が広く使われて定着しつつあり（王他 2006；曹 2013:112-116；王 2014 など）、しかも、その使用が増えていく傾向にある⁶⁵。

(5.5) 据悉、 美国 有 考虑 寻求 中方 赞助。

jùxī měiguó yǒu kǎolǜ xúnqiú zhōngfāng zànzhù

聞くところによれば アメリカ YOU 考える 求める 中国側 賛助

（聞くところによれば、アメリカは中国側へ賛助を求めるのを考えたことがあるそうだ。）

（『国際金融報』、2009-01-23）

(5.6) 春晚 有 请 奥运 冠军。

chūnwǎn yǒu qǐng àoyùn guànjūn

番組名 YOU 招く 五輪チャンピオン

（春晚⁶⁶は既に五輪チャンピオンを招いている。）

（『兰州晨报』、2004-08-19；王他 2006:14 より）

(5.7) 杨利伟： 我 在 上面 是 有 看到 地球上 的 情况。

yángliwěi wǒ zài shàngmian shì yǒu kàndào dìqiú shàng de qíngkuàng

名前 私 で 上 断定 YOU 見かけた 地球上 の 様子

⁶⁴ ただし、辞典に挙げられているのは「有请」、「有劳」のような単語である。

⁶⁵ 蔡（2009）は、上海の大学に在籍している384名の大学生のアンケート調査結果を分析した結果、「有V」構文を使ったことがある学生の割合が約58%を占めている。

⁶⁶ 「春晚」は毎年大晦日に放送される番組「春節聯歡晚会」の略称である。ここでは、2005年の「春節聯歡晚会」を指す。

（「私は宇宙で地球上の様子を見かけた。」と楊利偉さんが言った。）

（CCTV、『与宇航员—杨利伟面对面』、2003-10-29；王他 2006 より）

本章では、(5.1)、(5.2)、(5.5)、(5.6)、(5.7) のような「有 V」構文を考察対象とする。中国語コーパスの『媒体語言語料庫⁶⁷』（Media Language Corpus）、『人民網報刊検索』、『北京大学現代漢語語料庫』などから収集した実例を、場の理論や参照点構造を用いて分析する。主に以下の3点を主張する。

- 1) 「有 V」構文は「具体的な対象の存在」を表す「有 N」構文から拡張したものであると位置づけられる。構文全体としては先行する事態が動作主（経験主）という概念領域（場）に存在していることを表す。
- 2) 「有 V」は行為性を弱める機能を有している。これは存在動詞「有」の状態性に由来していると考えられる。
- 3) 「有 V」は行為のほうに焦点が置かれ、対象の結果状態に重点が置かれる「V 有」と相補的な関係をなしている。

本章の構成は以下の通りである。

5.1 節では、「有 V」構文に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘する。5.2 節では、「有 V」構文が生まれた要因を探り出す。5.3 節では、3つのパターンに分けて「有 V」の構文的特徴を考察する。5.4 節では、コーパスを利用して「有 V」構文に使用される動詞を調べ、動詞に関する制限を明らかにする。5.5 節では、典型的存在構文との関係に着目して「有 V」構文の意味特徴を明らかにする。5.6 節では、「有 V」と完了型アスペクト形式「V 了」との比較を行う。5.7 節では、本章のまとめを述べる。

5.1 先行研究

動詞の前にくる「有」がアスペクト形式であることは既に Wang (1965)、Huang et al. (2009) などによって証明されている。(5.8) に示されているように、(b) は (a) に対応する否定文であり、否定形式「不」が用いられる。しかし、(5.9) に示されているように、「了」を

⁶⁷ 本稿では、方言などの要素を排除するために、『媒体語言語料庫』の中で中央テレビと中央ラジオに出現した用例だけを利用する。

用いた肯定文 (a) に対し、「不」を用いた否定文 (c) は成立しないが、「没有」又は「没」を用いた否定文 (b) は成立する。

(5.8) a. 他 买 书。

tā mǎi shū

彼 買う 本

(彼が本を買う。)

b. 他 不 买 书。

tā bú mǎi shū

彼 否定 買う 本

(彼が本を買わない。)

(5.9) a. 他 买了 书。

tā mǎi-le shū

彼 買う-LE 本

(彼が本を買った。)

b. 他 {没有 / 没} 买 书。

tā méi-yǒu méi mǎi shū

彼 否定-YOU 否定 買う 本

(彼が本を買わなかった。)

c. *他 不 买了 书。

tā bú mǎi-le shū

彼 否定 買う-LE 本

(Wang 1965:458)

このように、アスペクト形式を含む否定文の不規則性については、Wang (1965) 以前の伝統的な文法では、(i) 「了」を削除する；(ii) 「不」を「没有」に変える。また、「没有」は「没」に省略することができる」と記述されている。これに対し、Wang (1965) は、「有」とアスペクト形式「了」とを同一形態素の交替形と見なし、「没有」は否定標識にアスペクト形式が加わったものであり、「没」の非省略形ではないと指摘している。

(5.10) a. 他 有 买 书。

tā yǒu mǎi shū

彼 YOU 買う 本

b. 他 不 有 买 书。

tā bú yǒu mǎi shū

彼 否定 YOU 買う 本

(Wang 1965:459)

文 (5.10) は実際に使われる形の前の段階の理論上の文であり、実際に使われる形に変えるためには、次のような変形規則が必要であると指摘されている。(i)「不」を「没」に変える；(ii)「有」を動詞の直後に移す；(iii)「有」を「了」或いはゼロ形式に変える。Wang (1965) は、「有」と「了」とが同一形態素の交替形であると主張しているが、「形式が異なれば意味も異なる」という立場から見れば、この点についてはまだ検討する必要がある。また、Wang は「没有」中の「有」だけを論じている。アスペクトの特徴が明示できるように、本研究は否定等の文法要素ができるだけ付随していない肯定文にある「有」を考察する。

「有 V」に関する研究は方言の分野と標準語の分野に分かれる。方言における「有 V」に関する研究は、郑 (1985)、施 (1996)、周 (2008)、陈・王 (2010)、飯田 (2013) などが挙げられる。これらの研究は主に南方方言における「有 V」を中心に考察が行われた。一方、標準語における「有 V」構文に関する研究は 90 年代から始まったと言える。その後、研究者らの関心を引き寄せて、「有 V」構文に関する研究成果も多く積み重ねられてきた。主な研究は宋 (1994)、石 (2004)、王他 (2006)、王・马 (2008)、崔 (2013)、王 (2014) などが挙げられる。

王他 (2006) は、疑問文としての「有 V」構文を対象に、中央テレビなどのメディアで使用される 6 つの疑問文の使用頻度を調査した結果、(5.11) のような「有+VP+吗」疑問文は (5.12) のような「有没有+VP+吗」疑問文に次いで、二番目 (19%) となっていることを述べたうえで、「有 V」の出現は「有没有+VP」構文による影響であると主張している。

(5.11) 李湘：你们 有 提前 沟通 一下 吗？

lǐxiāng nǐmen yǒu tíqián gōutōng yīxià ma

名前 貴方達 YOU 事前に 相談する ちょっと 疑問

(李湘：事前にちょっと相談しましたか？)

(湖南电视台、『快乐大本营』2003-06-28；王他 2006:13 より)

(5.12) 康萍： 你 有没有 打电话 问问 他们。

kāngpíng nǐ yǒuméiyǒu dǎdiànhuà wènwèn tāmen

名前 貴方 あるかどうか 電話する 聞く 彼ら

(康萍：電話で彼らに聞きましたか？)

(CCTV1、『风雨乾坤』第4集、王他 2006:11 より)

そして、王他（2006）は会話の中で答えとしての「有 V」構文の使用傾向を考察した結果、「有没有+VP」という正反疑問文の答えとしての「有 V」構文が一番多く使用されていることを明らかにしている。

表 5-1. 答えとしての「有 (+VP) (+語気詞)」構文の使用傾向⁶⁸ (王他 2006:18)

疑問文	答え			
	出現頻度	比率	発展傾向	
a. 「有没有+VP」正反疑問	55	25	45.4%	疑問文は答えにとって最も誘発的である
b. 「VP+吗」是非疑問		17	30.9%	疑問文は答えにとって誘発的ではない
c. 「有+VP+吗」是非疑問		10	18.2%	疑問文は次第に使われ、答えと組合せになる
d. 「没有+VP」是非疑問		2	3.66%	
e. 「VP+没有」是非疑問		1	1.83%	

崔（2013）は、「有 V」構文の使用は東南方言、香港・台湾の標準語や英語といった外部要因と、否定表現「没有 V」から肯定表現「有 V」への言語の対称性による内部要因に関わっていると主張し、図 5-1 のようにまとめている。

⁶⁸ 和訳は筆者による。

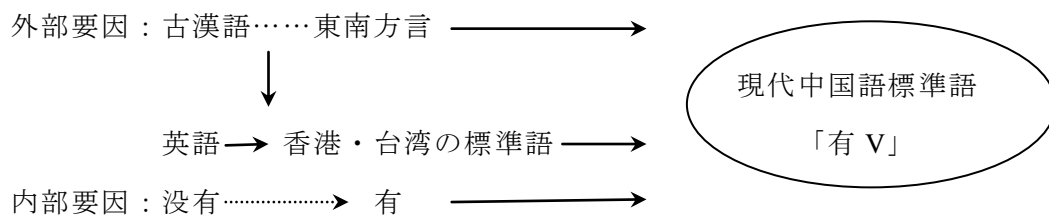


図 5-1. 「有 V」構文の出現要因⁶⁹ (崔 2013:50)

一方、「有 V」構文にある「有」の意味機能についても、未だに議論されている。宋 (1994) は、「有」はアスペクト形式であり、「動作が既に完了したこと」を表し、共起できる動詞は限られており、双音節の自動詞が多く使われると述べている。

石 (2004) は、標準語で使われている「有 V」構文は「V 了」のような「パーフェクト」の機能に相当するが、「有」と後ろの動詞 V との関係は「述語－目的語」という関係であると述べている。その理由として、「有」の後ろにアスペクト助詞「了」を付け加えることができる」と指摘されている。しかし、今回の調査では、「有」と「了」が共起する「有 V」構文の実例は稀であることが明らかになった。

また、Huang et al. (2009) は、中国語のアスペクト体系には動詞の前につくもの（「有 V」、
「在 V」）と動詞の後につくもの（「V 着」、「V 了」、「V 过」）に分かれ、「有」が「パーフェクト」の用法をもつと指摘している。孟 (2013)、王 (2014) も「有 V」が「パーフェクト」の用法であると考えている。

一方、王・马 (2008) は、「有」は事態の現実性に対する肯定を表すと指摘している。例えば、「有」を用いた文 (5.13) は「有」を用いない文 (5.14) より肯定の意味が強いと指摘する。王 (2012) は、王・马 (2008) と同様に、「有 V」が動作行為の客観存在と現実性に対する肯定を表すと主張している。

(5.13) 我 有 在 进步。

wǒ yǒu zài jìnbù

私 YOU ZAI 進歩する

(私は進歩しているところだ。)

⁶⁹ タイトルと和訳は筆者による。

(5.14) 我 在 进步。

wǒ zài jìnbù

私 ZAI 進歩する

(私は進歩している。)

(王・馬 2008:89)

また、劉 (2013) は「有」は「状態の確認」や「状態の強調」という話者の心的態度を表す。アスペクトマーカ―ではなく、文の外側の部分に位置するムードであると述べている。つまり、王・馬 (2008)、劉 (2013) などは、動詞前の「有」が強調の意味を表し、アスペクト形式と見なしていない。しかしながら、文 (5.15)、(5.16) のように、「有」を省略すると、事態が既然から未然になる。

(5.15) a. 上周 我 有 去 北京 出差。

shàngzhōu wǒ yǒu qù běijīng chūchāi

先週 私 YOU 行く 北京 出張する

(先週、私は北京へ出張に行った。)

b. *上周 我 去 北京 出差。

shàngzhōu wǒ qù běijīng chūchāi

先週 私 行く 北京 出張する

(5.16) a. 我 跟 张三 有 说 这件事。

wǒ gēn zhāngsān yǒu shuō zhèjiànshì

私 張三に YOU 言う このこと

(このことは張三に言っている。)

b. 我 跟 张三 说 这件事。

wǒ gēn zhāngsān shuō zhèjiànshì

私 張三に 言う このこと

(このことは張三に言う。)

(作例)

上述のように、標準語における「有 V」構文に関する主要な先行研究は以下の表 5-2 に

示すことができる。

表 5-2. 標準語における「有 V」構文に関する主要な先行研究

文献	観点
Wang (1965)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有」と「了」とが同一形態素の交替形である ・「没有」は否定標識にアスペクト形式が加わったものである
宋 (1994)	<ul style="list-style-type: none"> ・動作行為が既に完了したことを表す「实现体（実現相）」である
石 (2004)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有没有 V」疑問文に対し、「パーフェクト」の肯定式と否定式があり、「有 V」はその肯定式である
王他 (2006)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有没有+V」、「有+V」と「没有+V」はネットワークをなしている ・「有」は副詞である、事態の確認を表す
王・马 (2008)	<ul style="list-style-type: none"> ・標準語で使用されている「有 V」は方言と同じであり、事態の現実性を肯定するという機能を果たし、一般的肯定を表す
Huang et al. (2009)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有 V」は中国語アスペクト体系に位置づけられ、「パーフェクト」の用法である
王 (2012)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有 V」動作行為の客観存在と現実性に対する肯定を表す
劉 (2013)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有 V」はアスペクトマーカ―ではなく、文の外側の部分に位置するムードである
孟 (2013)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有 V」は「パーフェクト」の用法である ・英語の「have+p.p.」構文などによる影響を受けている
崔 (2013)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有 V」の使用は、外部要素と内部要素による ・「有 V」動作の存在への肯定と「パーフェクト」の用法である
王 (2014)	<ul style="list-style-type: none"> ・「有 V」は「V 了」に相当し、「パーフェクト」の用法をもつ

表 5-2 から分かるように、これまで、「有 V」構文の出現に関しては、方言や英語「have + p.p.」構文による影響という外部の要因と、言語の対称性という言語内部の要因に注目

されてきたが、「有」構文自体の内部の拡張関係については、あまり注目されていない。また、「有」は「パーフェクト」の用法か「強調」の用法かについての論争に終始しているものが多い。本研究では、認知言語学の視点から、従来言われている「パーフェクト」と「強調」の対立を、1つの事態把握を2つの側面であることを明らかにし、「存在物が場所に位置づけられる」という空間概念を表す「有」の基本的意味から拡張したものとして、その位置づけを試みる。

5.2 「有 V」構文が生まれた要因

これまでの研究では、「有 V」構文は話し言葉として使用され、書き言葉としては使用されていないと指摘されているが、『人民网报刊检索』（人民網報刊检索）から抽出したデータを見ると、書き言葉としての「有 V」構文も使用されていることが明らかになった。例えば、文（5.17）、（5.18）は書き言葉としての「有 V」の例文である。

(5.17) 据悉、 美国 有 考虑 寻求 中方 赞助。
 jùxī měiguó yǒu kǎolù xúnqiú zhōngfāng zànzhù
 聞くところによれば アメリカ側 YOU 考える 求める 中国側 賛助
 （聞くところによれば、アメリカ側は中国側へ賛助を求めるのを考えたことがある。）

（再掲）

(5.18) 如今 的 展览、 无论 规模 大小、 无论 画种、 几乎 都 有
 rújīn de zhǎnlǎn wúlùn guīmó dàxiǎo wúlùn huàzhǒng jīhū dōu yǒu
 現在の展覧会 規模や画の種類に関わらず ほとんど 全部 ある
 开幕式、研讨会、 有的 甚至 有 邀请 明星 捧场。

kāimùshì yántǎohuì yǒude shènzhì yǒu yāoqǐng míngxīng pěngchǎng

開幕式 シンポジウム さらには YOU 招く 芸能人 参加

（現在の展覧会では、規模や画の種類に関わらず、ほとんど開幕式やシンポジウムなどが行われる。さらには、芸能人を招いた場合もある。）

（『人民日报海外版』、2011-07-22）

以下、先行研究を批判的に概観し、「有 V」構文が話し言葉と書き言葉に現れる要因を考

察する。

5.2.1 南方方言と英語「have+p.p.」構文による影響

先行研究では、標準語における「有 V」構文の出現は南方方言（特に台湾で使用されている中国語）と英語「have+p.p.」構文による影響であると指摘されている。確かに、「有 V」構文が南方方言の中では広く使用されている。黄（1996:176-177）の調査によると、閩南語などの南方方言における「有 V」が「完成体（パーフェクト）」の用法を表しているという。石・李（2001:272）も同じように述べている。

(5.19) 我有收着汝个批。(南方方言)

我 收到了 你的 信。(標準語)

wǒ shōudào-le nǐ de xìn

私 受け取る-LE 貴方の手紙

(お手紙は届いた。)

(5.20) 伊有食我无食。(南方方言)

他 吃了 我 没 吃。(標準語)

tā chī-le wǒ méi chī

彼 食べる-LE 私 否定 食べる

(彼は食べたが、私はまだ食べていない。)

(黄 1996:176-177)

一方、既に述べたように、英語とは異なり、中国語の存在動詞「有」は存在と所有の用法を併せ持っている。完了を表す「have+p.p.」構文を翻訳するときに、直訳として「有 V」構文が選ばれやすい。例えば、(5.21) に対する中国語直訳は (5.22) であると考えられる。

(5.21) I have seen her this morning.

(5.22) 今天 早上 我 有 见到 她。

jīntiān zǎoshang wǒ yǒu jiàndào tā

今朝 私 YOU 見かける 彼女

(今朝、私は彼女を見かけた。)

(作例)

確かに、南方方言や英語「have+p.p.」構文による影響は否定できないが、これらを「有 V」構文が生まれた要因と考えるのは妥当ではない。なぜならば、古代中国語においても「有 V」形式の使用が見られるからである（伍 2003；韓 2009 など）。

伍（2003）によると、先秦時代から既に「有 V」形式が使用されている。ただし、その頃の「有」の品詞はまだ動詞であり、「有 V」の「パーフェクト」の用法は元代から始まったが、明の後期から段々消えていく。清の後半にはその用法が見られなかったという。文（5.23）は元代末期・明代初期に朝鮮半島で使用されていた中国語教科書『朴通事』から引用した例である。『朴通事』は北京語に基づいて書かれた教科書である。（5.24）は清代の『紅樓夢』の中の用例である。清の末期に至って、「有 V」構文が見られなくなった。すなわち、現代中国語における「有 V」構文は古代中国語の「有 V」構文の一種の復活であると考えてもおかしくない。

(5.23) 一 黑衣 道場 里 你 有 来 么？

hēiyī dào chǎng lǐ nǐ yǒu lái me

黒衣道場 中 貴方 YOU 来る 疑問

(黒衣道場には来ていましたか？)

一 我 有 来。

wǒ yǒu lái

私 YOU 来る

(来ていました。)

(『朴通事』；韓 2009:7 より)

(5.24) 贾母 便 问：“近来 可 有 添 些 什么 新书？”

jiǎmǔ biàn wèn jìnlái kě yǒu tiān xiē shénme xīnshū

名前 すぐに 聞く 最近 強調 YOU 買い足す 幾つか 何か 新しい本

(最近、何か新しい本を買い足したかと賈母がすぐ聞いた。)

(『紅樓夢』；韓 2009:8 より)

5.2.2 「有没有 V」構文による影響

「有 V」構文と類似した構文として「有没有 V」構文が挙げられる。「有没有 V」構文が現代中国語の標準語で使われ始めたのは 80、90 年代である。刑（1990）は「有没有 V」構文は香港などのドラマで使用されて、標準語での使用はまだ定着していないと述べているが、現在、「有没有 V」構文は既に標準語に定着している。その上、疑問文の中で、この形式が一番多く使用されている（王他 2006:18）。

(5.25) 有没有 看过 《末代皇帝》?

yǒuméiyǒu kàn-guo mòdàihuángdì

あるかどうか 見る-GUO ラストエンペラー

(『ラストエンペラー』を見たことがありますか?)

(5.26) 有没有 调查过 他的 背景?

yǒuméiyǒu diàochá-guo tā de bèijǐng

あるかどうか 調べる-GUO 彼の 背景

(彼の背景を調べたことがありますか?)

(刑 1990:82)

王他（2006）は、文（5.25）のよう疑問文に対し、否定の答えとしては（5.27）のような「没有 V」表現が自然に用いられる。その類推で、肯定の答えとして、文（5.28）のような「有 V」表現を用いるのも何ら不自然もないと述べている。しかし、収集したデータを見ると、多くの「有 V」は（5.25）のような疑問文環境ではなく、単独の叙述文として使用されている。また、「有 V」自体にも疑問詞を付けて疑問文にすることができる。よって、「有 V」構文の出現は「有没有 V」構文による影響がそれほど大きくないと考えられる。

(5.27) 没有 （看过 《末代皇帝》）。

méiyǒu kàn-guo mòdàihuángdì

否定 見る-GUO ラストエンペラー

(ラストエンペラーを見たことがないです。)

(5.28) 有 (看过 《末代皇帝》)。

yǒu kàn-guo mòdàihuángdì

YOU 見る-GUO ラストエンペラー

(ラストエンペラーを見たことがあります。)

5.2.3 「有」構文内部の要因

このように、本稿は「有 V」構文が生まれた要因は方言や英語「have+p.p.」構文、「有 没有」構文による影響ではなく、「有」構文による拡張であることを主張したい。「有 V」構文にある「有」は、元々物の「存在」或いは「所有」という意味を表す存在・所有動詞である。例えば、文 (5.29)、(5.30) では、それぞれ「別荘が山の上に存在すること」と「張三は別荘を所有すること」が表されている。

(5.29) 山上 有 一幢 別荘。

shānshàng yǒu yīzhuàng biéshù

山の上 ある 1 棟 別荘

(山の上には別荘が 1 棟ある。)

(5.30) 张三 有 一幢 別荘。

zhāngsān yǒu yīzhuàng biéshù

張三 ある 1 棟 別荘

(張三には別荘が 1 棟ある。)

(作例)

日本語では、所有関係を表すには、「～には～がある」といった「与格主語構文」が用いられ、「存在の場所」用法が「所有」にメタファー的拡張している (岡 2013a:142)。同様に、中国語では、存在用法が「有」のプロトタイプ用法であり、所有用法は存在用法からの拡張であると考えられる (4.2.2 節を参照されたい)。つまり、「有」の基本的意味は「具体的な対象の存在」を表す。「有 V」構文は言語使用の中で「具体的な対象の存在」という慣例的な言語ユニットから拡張したと考える。その根拠として、「主張 (主張/主張する)」のように、「有」の後ろに動詞が名詞のように使用されている中間的なものが既に定着していることが挙げられる。

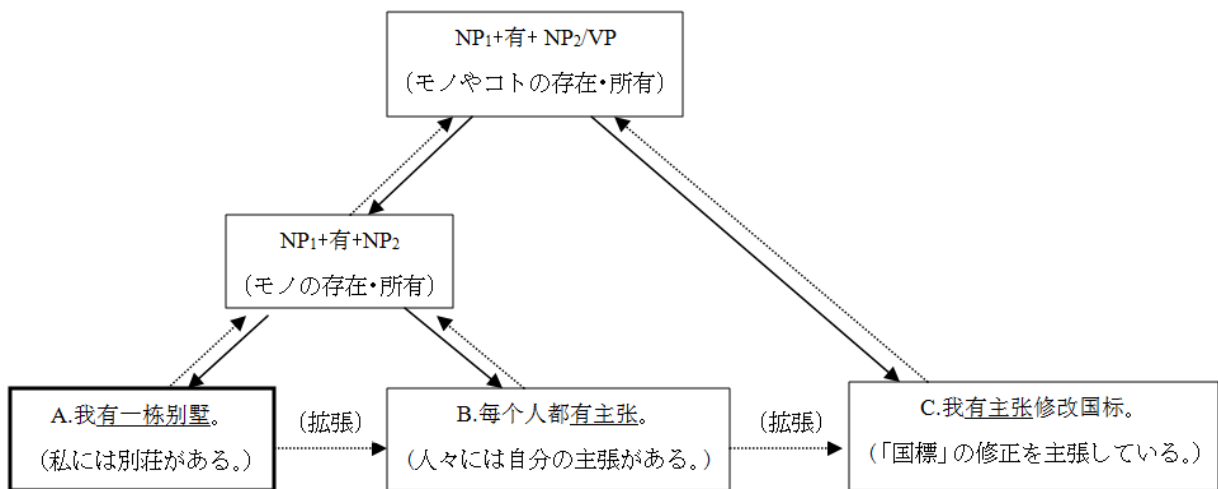


図 5-2. 「有」構文のネットワーク

すなわち、図 5-2 が示すように、最初に具体的な対象の存在を表す慣例的な言語ユニットが存在する。言語使用中に、具体から抽象へというプロセスで「有主张（主張がある）」のような抽象的な対象の存在を表す拡張事例も定着してきた。「主张（主張/主張する）」は名詞的な用法と動詞的な用法を有している。拡張事例 B の場合、名詞的な用法としての「主张（主張）」が使われている。そこで、基本ユニットと拡張事例を抽象化したスキーマ「NP₁+有+NP₂」が生まれる。そのような動詞の名詞的な用法は既に言語使用の中で定着したものと考えられる（朱 1999:71）。英語や日本語では、名詞と動詞の区別は形態上にも見られるのに対し、中国語には名詞と動詞の区別が形態上の違いに結びつかないため、「NP₁+有+NP₂」というスキーマは言語使用の中で、拡張事例 B からさらに「有主张～（～を主張する）」のような拡張事例 C まで拡張されている。拡張事例 C の場合、名詞的な用法ではなく、動詞的な用法として「主张（主張する）」が使われている。このことにより、さらに抽象的なスキーマ「NP₁+有+NP₂/VP」が生じ、定着しつつある。顾（2016）も「有 N」と「有 V」は同一構造をもっていると指摘している。

5.3 「有 V」の構文的特徴

次に、「有 V」の構文的特徴を考察する。コーパスから抽出したデータを分析した結果、「有 V」構文は主に次の 3 つのパターンに分けることができる。以下、それぞれのパターンを見てみよう。

- (a) NP₁+有+V+ (NP₂)
- (b) NP₁+有+V+Asp+ (NP₂)
- (c) NP₁+有+Asp+V+ (NP₂)

5.3.1 「NP₁+有+V+ (NP₂)」のパターン

このパターンでは、アスペクト形式「有」以外に他のアスペクト形式が使用されていない。ここでは、「NP₁+有+V+ (NP₂)」と記す。例えば、文 (5.31)、(5.33) に対し、「有」が省略されている文 (5.32)、(5.34) は未然事態になる。つまり、事柄を未然事態ではなく、已然事態として述べるには「有」が必要であることから、この形式はアスペクトの機能を担っていることが否定できない。文 (5.31) では、基準時（発話時）より前に行われた「买房子（マンションを買う）」という動作行為が完結し、その効力が基準時までには続いていることが表されている。(5.33) では、「春晚」という番組は 2005 年の大晦日に行われるものであり、番組の半年前に行われた動作行為「请奥运冠军（オリンピック金メダル選手を招いた）」の効力が基準時において（それ以降、番組の放送までに）引き続き存在していることが表されている。

(5.31) 调查结果 指出、 有 18.3% 表示 “有 买 房子”、…略…

diàochájiéguǒ zhǐchū yǒu biǎoshì yǒu mǎi fángzi

調査結果 指摘する ある 述べる YOU 買う マンション

（調査結果によると、18.3%の人は「マンションを買った」と述べている。）

（『人民日报海外版』、2014-04-14）

(5.32) *调查结果 指出、 有 18.3% 表示 “买 房子”、…略…

diàochájiéguǒ zhǐchū yǒu biǎoshì mǎi fángzi

調査結果 指摘する ある 述べる 買う マンション

(5.33) 春晚 有 请 奥运 冠军。

chūnwǎn yǒu qǐng àoyùn guànjūn

番組名 YOU 招く 五輪チャンピオン

（春晚は既に五輪チャンピオンを招いている。）

（再掲）

(5.34) *春晚 请 奥运 冠军。

chūnwǎn qǐng àoyùn guànjūn

番組名 招く 五輪チャンピオン

また、文 (5.35) では、「听到 (聞こえる)」は「結果アスペクト」(ЯХОНТОВ 1957) であり、動作を遂行する際に「銃声が聞こえた」という結果が達成される瞬間を表す。「有」によって、その結果の効力は現在に至るまで動作の主体という場に存在している。これに対し、「有」を省いた文 (5.36) は不自然である。「有」を使わずに自然な文に直すには、文 (5.37) が示しているように、発話時との関連付けを表すアスペクト形式「了」が必要になる。

(5.35) 附近 的 邻居 也 都 说 的确 有 听到 枪声、…略…

fùjìn de línjū yě dōu shuō díquè yǒu tīngdào qiāngshēng

近隣の人たち も みんな 言う 確かに YOU 聞こえる 銃声

(確かに銃声が聞こえたと言ったと近隣の人たちも言った。)

(中央电视台、『中国新闻』、2010-07-14)

(5.36) ??附近 的 邻居 也 都 说 的确 听到 枪声、…略…

fùjìn de línjū yě dōu shuō díquè tīngdào qiāngshēng

近隣の人たち も みんな 言う 確かに 聞こえる 銃声

(5.37) 附近 的 邻居 也 都 说 的确 听到了 枪声、…略…

fùjìn de línjū yě dōu shuō díquè tīngdào-le qiāngshēng

近隣の人たち も みんな 言う 確かに 聞こえる-LE 銃声

5.3.2 「NP₁+有+V+Asp+ (NP₂)」のパターン

先行研究で述べられているように、「有 V」構文の動詞 V の部分に経験相である「过」が用いられる場合も少なくない。ここでは、「NP₁+有+V+Asp+ (NP₂)」と記する。

(5.38) 他 可能 出去 了吧。他 有 说过 要 去 呼吸 新鲜

tā kěnéng chūqù le ba tā yǒu shuō-guo yào qù hūxī xīnxiān

彼は出かけただろう 彼 YOU 言う-GUO たい 行く 吸う 新鮮な

空气 什么 的。

kōngqì shénme de

空気 など 語気助詞

(彼は出かけただろう。外で新鮮な空気を吸いたいなどと言っていた。)

(『CCL』)

(5.39) 他们 普遍 的 预期 比较 高。 因为 整个 的 方案 也 有

tāmen pǔbiàn de yùqī bǐjiào gāo yīnwèi zhěnggè de fāng'àn yě yǒu

全般的に彼らの予期が高い 原因を表す 全部 の 方案 も YOU

征求过 汽车 厂商、…略…

zhēngqiú-guo qìchē chǎngshāng

求める-GUO 自動車メーカー

(全般的に彼らの予期が高い。全部の方案については自動車メーカーにも意見を求めたから。)

(中央电视台、『今日观察』、2009-01-15)

既に述べたように、本研究では、「过」は「経験相」であり、「パーフェクト」の用法ではないと考える。例えば、文(5.41)においては、「パーフェクト」を表しているのは「过」ではなく、文末の「了」である。文末の「了」によって、過去の出来事が基準時(発話時)と関連付けられている。一方、文(5.40)では、単純に「私はロンドンに行ったことがある」という経験が示され、過去の経験が基準時との関連性は言及されていない。

(5.40) 我 去过 伦敦。

wǒ qù-guo lúndūn

私 行く-GUO ロンドン

(私はロンドンへ行ったことがある。)

(5.41) 我 去过 伦敦 了。

wǒ qù-guo lúndūn le

私 行く-GUO ロンドン LE

(私は(過去に)ロンドンへ行っている。)

(望月 2000:14)

また、Huang et al. (2009:105) は動詞の後ろに付く「过」と共起できる理由については、次のように述べている。

The perfective preverbal yǒu and the perfective suffixal -le cannot co-exist. This follows if both morphemes reflect the same aspectual information under Asp. Then it is natural that the same information under the same syntactic node does not get manifested twice. For the same reason, the co-existence of yǒu and the experiential suffix -guo is possible because the two morphemes do not carry identical information.

(Huang et al. 2009:105)

すなわち、Huang et al.は、「有」と「过」が共起できるのは両者の担う役割が異なるわけであり、「有」は「パーフェクト」の用法で、「过」は「経験相」と考えている。文(5.38)、(5.39)では、「有」が「パーフェクト」を表す役割を果たしていると考えられる。両文ともに、前半部分は話し手の判断となり、後半部分が判断を根拠づける過去の出来事となっている。典型的な「パーフェクト」の用法であると考えられる。

ところで、文(5.42)のような動詞の後ろに「了」が使用される文も稀に存在しているが、一般的に「有」と「了」は共起できないと言える。「有」と「了」は同じ「パーフェクト」の用法を有しているため、両者は共起できないわけである。「有」と「了」が共起できないことについては、Huang et al. (2009:105) でも指摘されている。

(5.42) 一共 有 列了 22 项、22 项 当中 有 多少 是
yīgòng yǒu liè-le xiàng xiàng dàngzhōng yǒu duōshao shì
全部 YOU 挙げる-LE 22 の項目 22 の項目 中 ある 幾つ 断定
假 的 呢?
jià de ne
嘘 の 疑問

(彼は 22 の項目を挙げたが、そのうちの幾つが嘘だろう?)

(中央电视台、『新闻 1+1』、2012-10-22)

5.3.3 「NP₁+有+Asp+V+ (NP₂)」のパターン

5.3.2 節で述べた「NP₁+有+V+Asp+ (NP₂)」とは異なり、動詞 V の後ではなく、動詞 V の前に「有」以外のアスペクト形式—「在」を用いることもできる。ここでは、このパターンを「NP₁+有+Asp+V+ (NP₂)」と記する。

(5.43) 我 有 在 听 你 说话。

wǒ yǒu zài tīng nǐ shuōhuà

私 YOU ZAI 聞く 貴方 話す

(お話を聞いているところだよ。)

(『CCL』)

(5.44) 我 在 听 你 说话。

wǒ zài tīng nǐ shuōhuà

私 ZAI 聞く 貴方 話す

(お話を聞いている。)

当然、文 (5.43) では、進行を表す役割は「在」が担っているが、「有」が用いられることによって、単なる進行の意味ではなく、発話時より以前から現在に至るまで聞き続けており、これからも続くかもしれないという意味が表されている。いわゆる「進行相のパーフェクト (perfect progressive)」である。これと対照に、「有」が省略された文 (5.44) は「今話を聞いていること」が表され、単なる「進行」の意味である。このタイプの「有 V」構文は (5.45) のような英語の「have been V-ing」構文と非常に類似している。

(5.45) I have been singing.

(comrie 1976:62)

(5.46) She has been waiting to see you since two o'clock (and still waiting) .

(江川 2008:241)

上述のように、「有 V」構文は大きく 3 つのパターンに分けられ、全てのパターンは先行した出来事と基準時が関連づけられている「パーフェクト」の用法を表している。副島 (2007) は、「パーフェクト」の意を示すには、言語主体が先行する行為のほうに関心があ

るという環境が必要であると指摘している。「有 V」構文の 3 つのパターンにおいては、何れも動作主が顕在している。動作主が省略されても、聞き手が動作主を特定することができる。よって、動詞の表す動作による結果よりも行為のほうに関心がある「パーフェクト」であると考えられる。

5.4 動詞に関する制限

「有 V」構文が話し言葉に偏っていることに鑑み、本節では話し言葉コーパスである『媒体言語語料庫』(Media Language Corpus) を用いて、「有 V」構文に用いられる動詞 (V) の使用状況を考察し、動詞 V に関する制限を明らかにする。方言などの要素を排除するために、今回の調査は中央テレビと中央ラジオ⁷⁰という 2 つの全国レベルの番組の音声から文字化したデータを考察対象とする。『汉语动词用法词典』にある 1223 個動詞に基づき、これらの動詞の前に「有」をつけて検索する。「有 V」構文に用いられる動詞は 153 であった。検索結果は以下の表 5-3 に示す。

⁷⁰ 中国の国営放送であり、日本の NHK に相当するレベルである。

表 5-3. 「有 V」 に用いられる動詞 V

順 番	動詞	出現 回数	順 番	動詞	出現 回数	順 番	動詞	出現 回数
1	做 (する)	48	"	喜欢 (好む)	3	"	挖苦 (皮肉る)	1
2	去 (行く)	35	"	练 (練習する)	3	"	拖欠 (引き延す)	1
3	考虑 (考える)	31	"	抓 (掴む)	3	"	拖欠 (引き延す)	1
4	看 (見る)	24	"	交流 (交流する)	3	"	吐槽 (愚痴を言う)	1
5	讲 (話す)	21	"	修改 (修正する)	3	"	涂改 (書き直す)	1
6	听 (聞く)	20	"	解释 (説明する)	3	"	投诉 (提訴する)	1
7	谈 (話す)	17	58	隐藏 (隠す)	2	"	贴 (貼る)	1
8	降 (下げる)	14	"	宣布 (公布する)	2	"	提醒 (注意する)	1
9	投资 (投資する)	13	"	闻 (嗅ぐ)	2	"	讨论 (討論する)	1
"	提出 (提出する)	13	"	推荐 (推薦する)	2	"	摊派 (割り当てる)	1
11	遇到 (出会う)	12	"	偷 (盗む)	2	"	思考 (考える)	1
"	听说 (聞く)	12	"	体会 (体得する)	2	"	渗出 (しみ出す)	1
13	写 (書く)	11	"	塌陷 (沈没する)	2	"	伤心 (悲しむ)	1
"	发现 (発見する)	11	"	算 (計算する)	2	"	认识 (知っている)	1
15	提供 (提供する)	10	"	说明 (説明する)	2	"	签订 (調印する)	1
"	卖 (売る)	10	"	入围 (入選する)	2	"	签约 (調印する)	1
17	缩小 (縮小する)	9	"	缺 (不足する)	2	"	牵制 (牽制する)	1
"	透露 (漏らす)	9	"	取得 (取得する)	2	"	期待 (期待する)	1
19	预料 (予測する)	7	"	签名 (サインする)	2	"	拍卖 (競売する)	1
"	掌握 (把握する)	7	"	签字 (サインする)	2	"	闹 (騒ぐ)	1
21	扩大 (拡大する)	6	"	披露 (公表する)	2	"	没收 (没収する)	1
"	送 (送る)	6	"	碰到 (出会う)	2	"	埋怨 (恨む)	1
23	准备 (準備する)	5	"	碰面 (出会う)	2	"	落户 (住み着く)	1
"	注意 (注意する)	5	"	坐 (坐る)	2	"	落 (落ちる)	1
"	知道 (知っている)	5	"	执行 (執行する)	2	"	落实 (確定する)	1
"	隐瞒 (隠す)	5	"	怕 (怖がる)	2	"	看见 (見える)	1

"	違反（違反する）	5	"	挪用（流用する）	2	"	进入（入る）	1
"	叫（呼ぶ）	5	"	留（残す）	2	"	揭开（開く）	1
"	介绍（紹介する）	5	"	利用（利用する）	2	"	搅局（混ぜ返す）	1
"	给（あげる）	5	"	见（見かける）	2	"	浇（水をかける）	1
"	派（派遣する）	5	"	汇报（報告する）	2	"	监视（監視する）	1
"	买（買う）	5	"	后悔（後悔する）	2	"	加强（強める）	1
33	通知（知らせる）	4	"	规定（規定する）	2	"	记住（記憶する）	1
"	通过（合格する）	4	"	改善（改善する）	2	"	画（描く）	1
"	使用（使用する）	4	"	愿意（したい）	2	"	喝（飲む）	1
"	取消（取り消す）	4	87	租（借りる）	1	"	跪（しゃがむ）	1
"	哭（泣く）	4	"	走出（進める）	1	"	关心（気にかける）	1
"	觉得（思う）	4	"	总结（まとめる）	1	"	挂（掛ける）	1
"	喊（呼ぶ）	4	"	装（取り付ける）	1	"	刮（削り取る）	1
"	形成（形成する）	4	"	转向（変える）	1	"	公布（公布する）	1
"	照顾（世話をする）	4	"	转移（移動する）	1	"	告诉（教える）	1
"	拍（写真を撮る）	4	"	转发（転送する）	1	"	感到（感じる）	1
43	拖延（引き延す）	3	"	转载（転載する）	1	"	否认（否認する）	1
"	投入（投入する）	3	"	主张（主張する）	1	"	反省（反省する）	1
"	提高（高める）	3	"	征求（求める）	1	"	发表（発表する）	1
"	申请（申請する）	3	"	酝酿（醸成する）	1	"	顶嘴（口答えする）	1
"	配备（配備する）	3	"	学习（勉強する）	1	"	订阅（購読する）	1
"	流出（流出する）	3	"	修订（修正する）	1	"	发生（発生する）	1
"	获得（獲得する）	3	"	修（修理する）	1	"	违背（背く）	1
"	联系（連絡する）	3	"	相信（信じる）	1	"	维持（維持する）	1
"	举行（举行する）	3	"	献血（献血する）	1	"	遵守（守る）	1

表 5-3 から分かるように、出現回数が前 5 位動詞は「做（する）」、「去（行く）」、「考虑（考える）」、「看（見る）」、「讲（言う）」である。これらの動詞は全て客体対象に変化をもたらさない、或いは客体対象をもたず主体の動作だけを表す非限界動詞である。「做饭（ご

飯を作る)」、「做菜 (料理を作る)」などの生産動詞のように、動詞「做」の表す動作が終わった後に、対象が現れて結果状態を確認することができるが、「有 V」構文に使われる動詞「做 (する)」については、「做生意 (商売をする)」、「做采访 (インタビューをする)」のように、抽象的な動作を表す場合が多い。これらの動作が終わった後に、具体的な結果状態を確認するのは困難である。工藤 (1995) の動詞分類に基づき、上記の表 5-3 に挙げられている動詞を以下のようにに分類する。

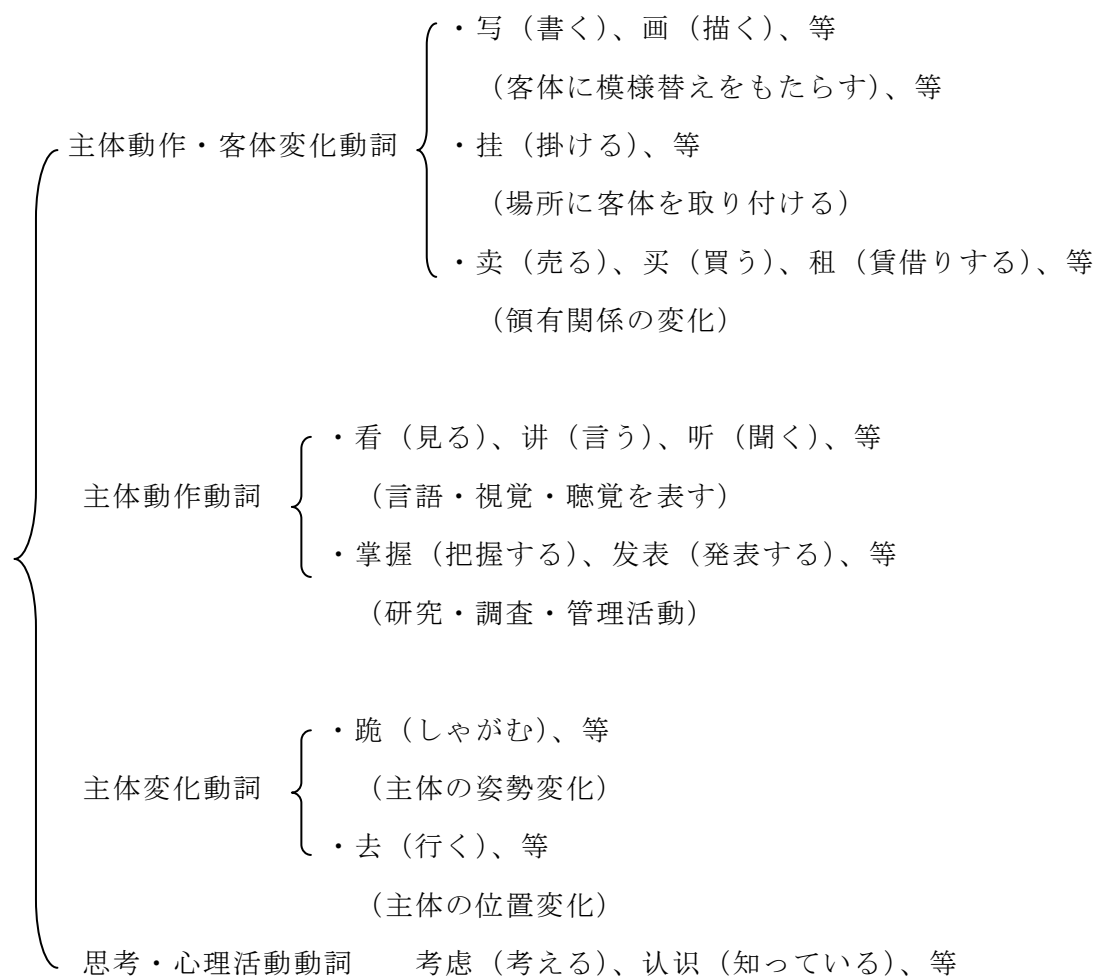


図 5-3. 「有 V」に用いられる動詞 V の分類

以下、他動性と意図性の観点から、これらの動詞を分析する。

第 4 章で既に述べたように、本研究では、角田 (2009) をふまえて、主に形式の面と意味の面から動詞の他動性を考える。表 5-3 と図 5-3 から分かるように、「有 V」構文に使われる動詞の中で、「主体動作動詞」と「思考・心理活動動詞」が約 8 割を占めている。図

4-11 のように、「主体動作動詞」には客体がある場合とない場合に分かれる。いずれも変化が観察されにくいことから他動性の低い動詞であると言える。

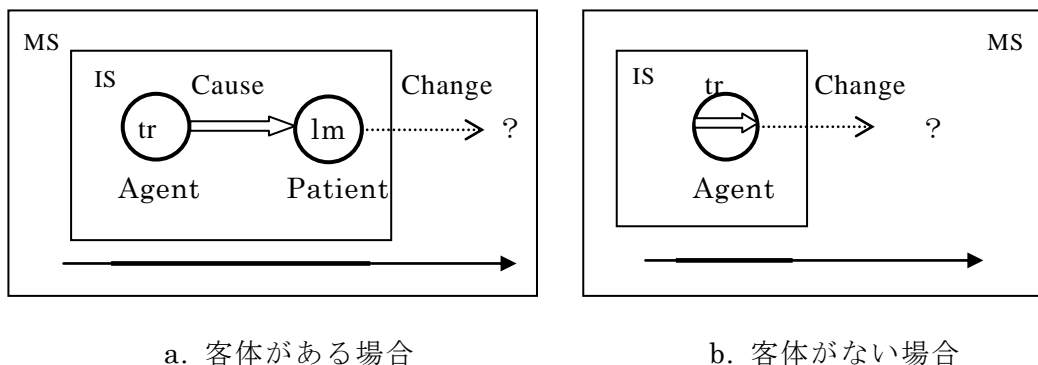


図 4-11. 主体動作動詞の概念構造（再掲）

また、「思考・心理活動動詞」の表す事態は、図 5-4 のように示すことができる。主格にたつものは動作主体というより経験者といったほうがふさわしい。そして、客体対象が存在しているものの、エネルギーの伝達が見られないため、虚線の矢印で表している。当然、客体対象に変化が起こらない。やはり、他動性の低い動詞である。例えば、「考慮（考える）」という思考動詞については、考えることによって「考えられたこと」に何か変化が起こされるわけではない。ようするに、これらの動詞は動作が終わった後に、目で確認できる結果状態を残さない。よって、「V 有」と比べると、「有 V」構文においては、言語主体が対象の結果状態に関心を示さず、行為のほうに焦点を当てていると言える。

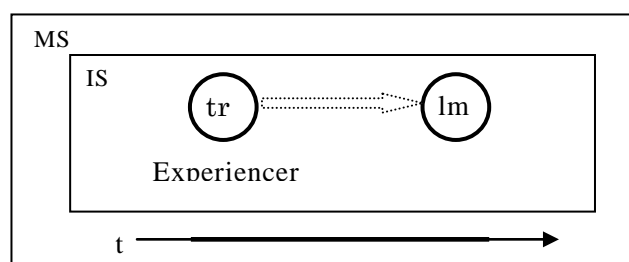


図 5-4. 思考・心理活動動詞

また、意図性と他動性は 2 つの異なる概念である。これについては、角田（2009）でも指摘されている。例えば、「杀（殺す）」は他動性の高い動詞であるが、文（5.47）におい

ては意図性がほとんど読み取れない。

(5.47) 张三 一不小心 把 李四 杀死了。
zhāngsān yībùxiǎoxīn bǎ lǐsì shāsǐ-le
张三 うっかり 処置 李四 殺す-LE
(張三はうっかりして李四を殺した。)

(作例)

他動性と意図性を考えた動詞の分類は以下の図 5-5 である。

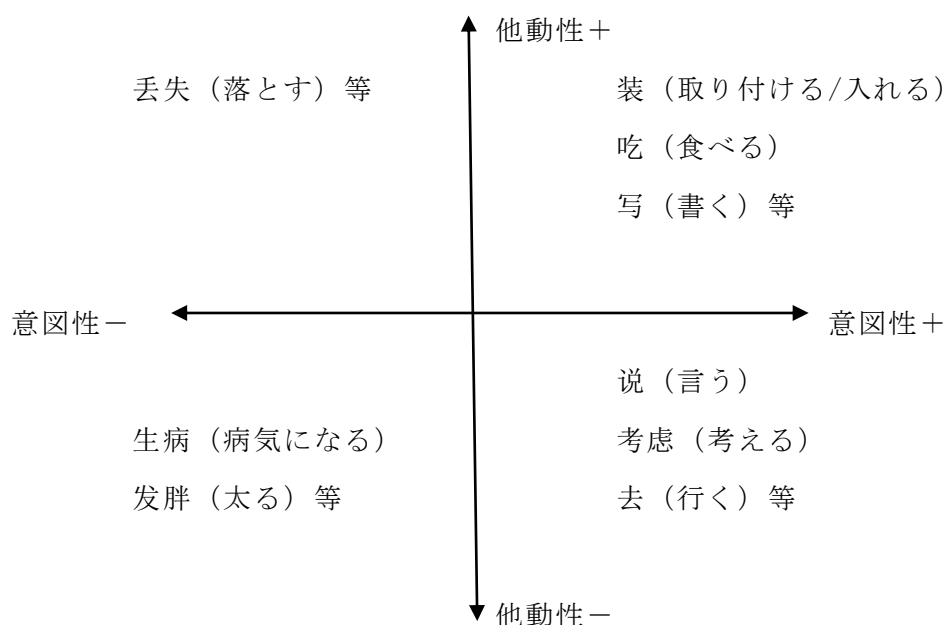


図 5-5. 他動性と意図性による動詞の分類

本研究は以下の 4 つの方面から動詞の意図性を判断する。(a) 願望を表す助動詞と共起できるかどうか。(b) 許可を表す助動詞と共起できるかどうか。(c) 命令文に用いられるかどうか。(d) 自己コントロールできるかどうか。例えば、文 (5.48) では、試験でいい成績を取るために、規定の通りに作文を書いたという行為には意図性が読み取れる。文 (5.49) では、行為を行う目的が明示されており、意図的行為であると考えられる。

(5.48) 我 都 写了 八百多 字，因为 到 后面 时间 比较 赶，
wǒ dōu xiě-le bābǎiduō zì yīnwèi dào hòumian shíjiān bǐjiào gǎn
私 までも 書く -LE 八百字余り ため 後半になって 時間 比較的 急ぐ
…略…，后面 的 一段 字 有些 潦草， 我 都 有 写。

hòumian de yīduàn zì yǒuxiē liǎocǎo wǒ dōu yǒu xiě
後半 の 1段 字 少し ぞんざい 私 全部 YOU 書く

(私は八百字余りまでも書きました。後半になって時間が足りなかったため、
…略…後半の字が少しぞんざいですが、全部書いています。)

(中央人民广播电台、『新闻纵横』、2013-08-04)

(5.49) 第二，我 有 主张 修改 国标，完全 不是 为了 厂商
dìèr wǒ yǒu zhǔzhāng xiūgǎi guóbiāo wánquán bùshì wèile chǎngshāng
第二 私 YOU 主張する 修正する 国標 完全に 否定 のため メーカー
说话， 是 为 老百姓 的 需求 说话。

shuōhuà shì wèi lǎobǎixìng de xūqiú shuōhuà
言う 断定 のため 国民 の 需要 言う。

(第二、国標の修正を主張しているのはメーカーのためではなく、国民のためです。)

(中央电视台、『新闻 1+1』、2009-12-21)

上記の例文から見ると、「有 V」構文は意図的行為の結果を表すように見えるが、意図性を感じない「有 V」構文も少なくない。例えば、

(5.50) 记者：你 当时 有 听到 他 喊 吗？

jìzhě nǐ dāngshí yǒu tīngdào tā hǎn ma

記者 貴方 その時 YOU 聞こえる 彼 呼ぶ 疑問

(記者：その時、彼が呼んでいたのが聞こえましたか?)

(中央电视台、『新闻 1+1』、2013-08-07)

(5.51) 我们 有 遇到过 这样 的 商家，…略…

wǒmen yǒu yùdào-guo zhèyàng de shāngjiā

私たち YOU 出会う -GUO このような 商売人

(私たちはこのような商売人に会ったことがあります。…略…)

(中央人民广播电台、『新闻纵横』、2012-03-15)

また、今回の検索結果にはなかったが、形容詞もこの構文に用いることが可能であると
考えられる。

(5.52) 昨天， 我 有 很 高兴。

zuótiān wǒ yǒu hěn gāoxìng

昨日 私 YOU とても 楽しい

(昨日、とても楽しかった。)

(5.53) A: 今年 夏天 上海 都 没有 怎么 热过。

jīnnián xiàtiān shànghǎi dōu méiyǒu zěnmē rē-guo

今年 夏 上海 も 否定 それほど…しない 暑い-GUO

(今年の夏は、上海はそれほど暑くなかった。)

B: 有 热过 啊! 前几天 不是 很 热 吗?

yǒu rē-guo ā qiánjǐtiān búshì hěn rē ma

YOU 暑い-GUO 感嘆詞 先日 反問 とても 暑い 疑問

(暑かったよ。先日暑かったじゃなかったの?)

(作例)

すなわち、「有 V」構文自体は先行する事態の効力の存在を表す。意図性は動詞によるものであり、構文自体は意図性を伴わない。これは日本語「V テアル」と類似している。詳しくは第7章で述べる。

5.5 「有 V」の意味的特徴

最後に、本節では「有 V」構文の意味特徴を考察する。5.2 節で述べたように、本研究は「有 V」構文は「有 N」構文から拡張したものであり、存在・所有の意味が引き継がれていると考えている。黄(1988)は、存在文における「有」と「パーフェクト」を表す「有」がもつ深層構造は同様であり、同じ助動詞であると考えている。図 5-6 が示すように、「张三(張三)」が繰り上げ規則により表層構造の主語 NP の位置に移動され、「张三没有看见

李四」 という文になる。

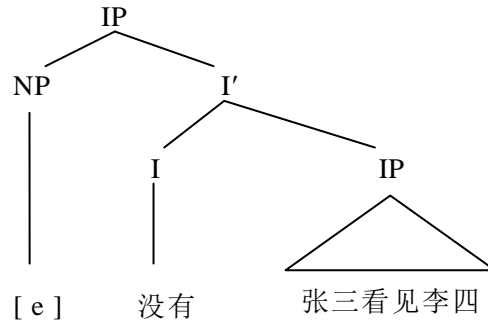


図 5-6. 「张三没有看见李四」の深層構造 (黄 1988:57)

一方、図 5-7 が示すように、「一个人 (一人)」が不定名詞句であるため、表層主語 NP の位置に繰り上げることができないため、元の位置に残され、「有一个人在教室里」という文になる。

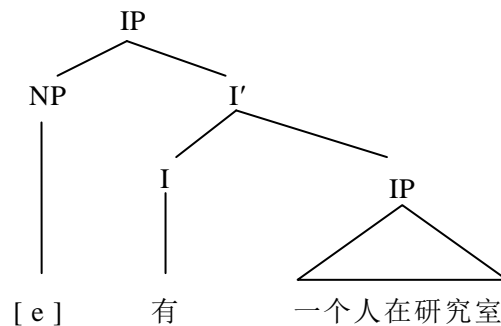


図 5-7. 「有一个人在教室里」の深層構造 (黄 1988:57)

黄 (1988) に対し、本研究では、存在を表す「有」と「パーフェクト」を表す「有」は同じ助動詞ではなく、後者が前者からの拡張であると考えられる。顾 (2016) も認知言語学の観点から「有 N」と「有 V」は同一の認知構造を有していると指摘している。

“有 N”和“有 V”构式中“有”字的功能是一致的，要么是“领有”实体或事件，要么表示实体或事件的“存在”。…略…一旦“领有物”的现实实用性通过隐喻承继映射到了“完成事件”的现实相关性，“有 V”就产生了“事件影响”的浮现意义。

(顧 2016:111)

「有 N」構文と「有 V」構文における「有」の機能は一致している。実体や出来事の「所有」か「存在」が表されている。…略…「所有物」の現実実用性がメタファーによって「完成した出来事」の現実関連性に投射されたときに、「有 V」には「出来事の影響」という意味が現れるわけである。

(和訳は筆者による)

すなわち、文 (5.54) のように、「我 (私)」は所有者であり、「別荘 (別荘)」という具体的な物を所有するという意味である。一方、文 (5.55) においては、「我 (私)」は経験主であり、「寄存行李 (荷物を預ける)」という出来事を経験している意味である。言い換えれば、経験主である「我 (私)」という領域において、先行する動作行為「寄存行李 (荷物を預ける)」が存在していると理解することもできる。

(5.54) 我_(所有者) 有 [一栋 別荘]_{NP}。

wǒ yǒu yīdòng biéshù

私 YOU 1 棟 別荘

(私には別荘が 1 棟ある。)

(5.55) 我_(経験主) 有 [寄存 行李]_{VP}。

wǒ yǒu jìcún xíngli

私 YOU 預ける 荷物

(私は荷物を預けてある。)

(作例)

「所有」の意味が引き継がれている「有 V」構文は「パーフェクト性」をもつ日本語の「V テアル」構文に類似している。金水 (2000:51) は、「パーフェクト性」をもつ「V テアル」構文は (5.56) のような構造をもち、NP が (5.57) のような所有構文における所有者に近く、また (5.58) のような「～したことがある」構文の経験主と共通している可能性を示している。NP は主題を表す「ハ」でマークされるのが典型的であると指摘している。

(5.56) NP_(経験主) ハ[…V₁テ]_{VP} アル

(5.57) 私は (??が) {家族/会社/予定} がある。

(5.58) 私は (??が) [10年前に UFO を見たこと]がある。

(金水 2000:51)

「パーフェクト性」をもつ日本語の「Vテアル」構文と同じように、「有V」構文の主格の位置にくる名詞句 NP は主題でもあると考えられる。中国語は「主題優越型の言語」であると言われている (Li and Thompson 1976)。中国語の主題の特徴については、石・李 (2001) は「主題には焦点標記『是』を付けることができない」、「主題文は従属節に用いられない」、「主題が表すものは既知情報としての定名詞句である」などの判断基準を述べている。石・李 (2001) に基づき、「有V」構文の主格の位置にくる名詞句 NP はこれらの判断基準を全て満たしている。よって、NP は主題でもあると考えられる。

具体的には、文 (5.59) に対し、文 (5.60) のように NP である「张三 (張三)」の前に焦点化標記「是」をつけて「张三 (張三)」を焦点化した文は不自然であるが、(5.61) のように、「V了」構文にある主語「张三」の前に焦点化標記「是」を付けても文がかなり自然である。また、文 (5.62) のように、「有」の前に焦点化標記「是」をつけて「有V」の部分焦点化した文は自然である。たとえば、コーパスを抽出した実例 (5.7) においても、「有」の前に「是」が付けられている。すなわち、「有V」構文においては、焦点化されているのは「有」の前の部分 NP ではなく、「有」の後の部分であると考えられる。

(5.59) 张三 有 去 日本。

zhāngsān yǒu qù rìběn

人名 YOU 行く 日本

(張三は日本に行っている。)

(5.60) *是 张三 有 去 日本。

shì zhāngsān yǒu qù rìběn

断定 人名 YOU 行く 日本

(5.61) 是 张三 去了 日本。

shì zhāngsān qù-le rìběn

断定 人名 行く-LE 日本

(日本に行ったのは張三だ。)

(5.62) 张三 是 有 去 日本。

zhāngsān shì yǒu qù rìběn

人名 断定 YOU 行く 日本

(張三_は日本_に行_ってい_るの_だ。)

(作例)

加えて、「有 V」構文は主節に用いられるが、従属節には用いられない。例えば、一般の主述文である文 (5.63) は従属節にも用いられるが、従属節として「有 VP」構文が用いられる文 (5.64) は成立しない。

(5.63) 张三 去 日本 (的 时候 / 以后)、…略…

zhāngsān qù rìběn de shíhou yǐhòu

人名 行く 日本 の とき 後

(張三_が日本_に行_くとき/張三_が日本_に行_った後)、…略…)

(5.64) 张三 有 去 日本 (*的 时候 / *以后)、…略…

zhāngsān yǒu qù rìběn de shíhou yǐhòu

人名 YOU 行く 日本 の とき 後

(作例)

さらに、NP は文脈に現れている既知情報であり、一般に定名詞句または人称代名詞である。不定名詞句を用いることができない。文 (5.59) に対して、不定名詞「一个人 (一人)」が使用されている文 (5.65) は不自然である。また、文 (5.66) のように、人称代名詞である「他」が指す人物は文脈の中に既に何回も現れたため、話し手と聞き手は既知情報として共有しており、主題でもあると考えられる。

(5.65) *一个人 有 去 中国。

yīgèrén yǒu qù zhōngguó

一人 YOU 行く 中国

(作例)

(5.66) 他 有 告诉 你、这 是 什么 公司 吗？

tā yǒu gàosu nǐ zhè shì shénme gōngsī ma

彼 YOU 教える 貴方 これ 断定 何 会社 疑問

(これが何の会社かについては、彼から言われましたか？)

(中央电视台、『东方时空』、2009-03-30)

上述のように、「有 V」構文に現れる NP は主題でもある。池上 (2000:304-305) は、「主題」の概念は基本的には「場所」の概念からメタファー的に拡張されたものであり、「主題」が「コト」が成り立つ「場」であると指摘している。

(5.67) 東京ハ人ガ多イ。

(5.68) 象ハ鼻ガ長イ。

(池上 2000:304)

前述したように、文 (5.67) では、東京という「場所」において「人が多い」という「コト」が成り立っている。これに対し、文 (5.68) では、「場所」という概念から比喩的に拡張された「象」という領域（場）においては、「鼻が長い」という「コト」が成り立つのである。山梨 (2000:95-99) は、参照点構造を用いて「ハ」の認知過程を「『ハ』でマークされている名詞句が参照点になって、その支配領域において、述語が目標として示される」と説明している。また、岡 (2013a:105) は、「X ハ Y」のスキーマを「X を参照点に、その支配領域（場）において、目標である Y を指し示す」と規定している。池上 (2000)、山梨 (2000)、岡 (2013a) を参考にし、主題文である「有 V」構文の合成構造を次のように説明することができると思われる。

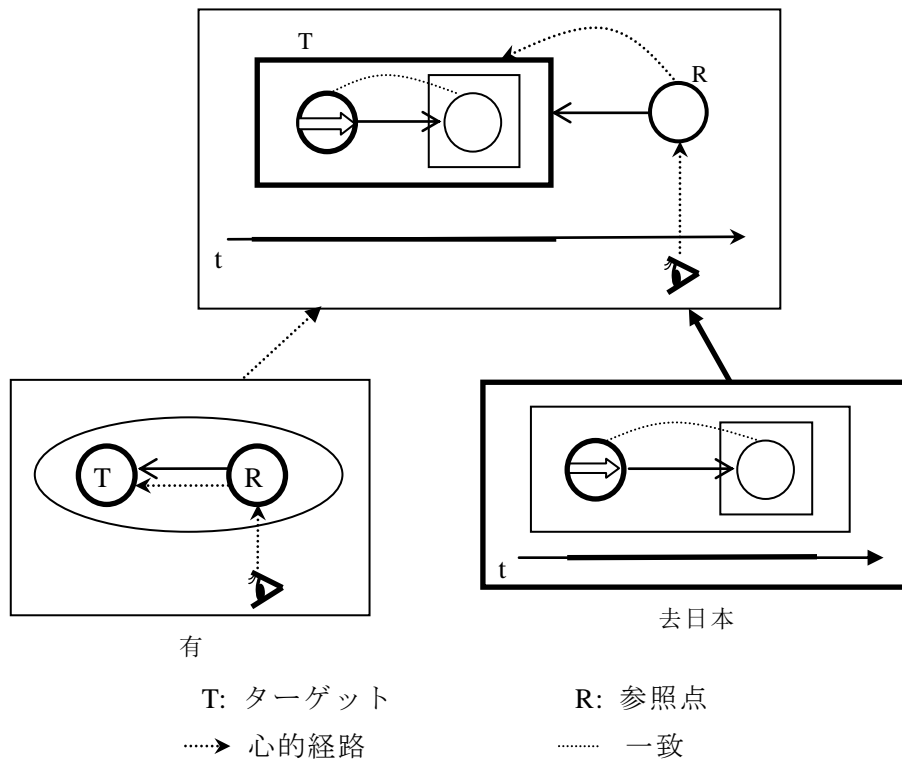


図 5-8. 「张三有去日本」の合成構造

図 5-8 が示しているように、動作主（経験主）である「张三（張三）」が顕現されており、「有」の表す所有の概念構造が想起される。動作主（経験主）である「张三（張三）」が参照点（R）としての機能を果たしている。左下の成分構造では、ターゲット（T）はまだ特定されいない。そして、右下の成分構造「去（行く）」では、動作の終わっても、具体的な結果状態が残されない。動作主（経験主）が顕現されて行為のほうがプロファイルされる。よって、右下の成分構造はプロファイル決定子になり、このまま合成構造へプロファイルを譲渡する。この 2 つの成分構造が合成し、ターゲット（T）は先行する行為「去日本（日本へ行く）」によって精緻化されている。すなわち、「有 V」構文の概念構造は、「認知主体は動作主（経験主）を場として取り立てて概念領域を作り出し、先行する事態がその概念領域に存在する」と規定できる。抽象的な事柄を具体的な物の存在として捉えることから、「有 V」構文の使用は一種の「存在のメタファー（ontological metaphor）」と言える。

先行する事態が動作主（経験主）という場に存在することを表す「有 V」構文は英語の「have+p.p.」構文にも類似している。文 (5.69) の「have」の意味を訳出すると、「私は、その時計をなくした（lost the watch）という過去の事実を現在もっている（have）」となる

(江藤 2015:23)。これに対する中国語の訳文として、「有 V」構文を用いても何ら不自然ではない。

(5.69) I have lost the watch.

(江藤 2015:23)

(5.70) 我 有 丢 这只 手表。

wǒ yǒu diū zhèzhǐ shǒubiǎo

私 YOU なくす その 時計

(私はその時計をなくしている。)

5.6 「V了」との比較

上述のように、「有 V」における「有」と基本アスペクト形式「了」に相当し、「パーフェクト」の用法をもつと考えられる。これまでの先行研究でも、「有」と「了」との機能は類似していると指摘されている (Wang 1965 ; 宋 1994 ; 石 2004 ; Huang et al. 2009 ; 王 2014 など)。しかし、両者が同じ「パーフェクト」の機能を表すとすれば、「V了」という形式が定着しているのにも関わらず、なぜ敢えて「有 V」が使われるだろう。ここでは、「有 V」と「V了」を比較させ、両者の相違点を分析する。

両者の比較に入る前に、まず辞書的語彙になっている「有请」を見てみよう。(5.71)に見られるように、「有」の付いた文 a は「有」のない文 b よりも丁寧である。元々の動詞「有」自体は状態動詞であり、状態性を備えている。動詞「请」とともに使われる場合、「有」の状態性により、動詞「请」の表す行為性が弱まり、出来事を物のように捉えることになる。つまり、「有请」の丁寧さは「有」の状態性に由来していると思われる。

(5.71) a. 有请 今晚 的 嘉宾。

yǒuqǐng jīnwǎn de jiābīn

どうぞ 今晚 の ゲスト

(今晚のゲスト、どうぞご登場ください。)

b. 请 今晚 的 嘉宾。

qǐng jīnwǎn de jiābīn

どうぞ 今晚 の ゲスト

(今晚のゲスト、ご登場ください。)

(作例)

同様に、「有 V」構文にも動詞の表す行為性を弱めて、出来事を物のように捉えるという特徴が見られる。例えば、(5.72) においては、動作主が対象に働きかけて結果が生じるという典型的な他動関係が見られる。これに対し、(5.73) においては、「会議資料を準備する」という出来事が物のように捉えられている。すなわち、「会議資料を準備すること」が動作主（経験主）である「彼」という場に存在していると解釈できる。前者と比べて、後者の方は行為性が弱まっている。

(5.72) 他 准备了 今天 的 会议 资料。

tā zhǔnbèi-le jīntiān de huìyì zīliào

彼 準備する-LE 今日の会議資料

(彼は今日の会議資料を準備した。)

(5.73) 他 有 准备 今天 的 会议 资料。

tā yǒu zhǔnbèi jīntiān de huìyì zīliào

彼 YOU 準備する 今日の会議資料

(彼は今日の会議資料を準備してある。)

(作例)

(5.72)、(5.73) の表す概念構造はそれぞれ図 5-9、図 5-10 に示すことができる。

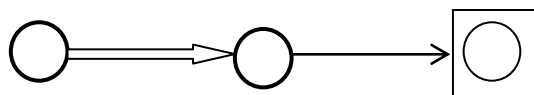


図 5-9. 「他准备了今天的会议资料」の概念構造

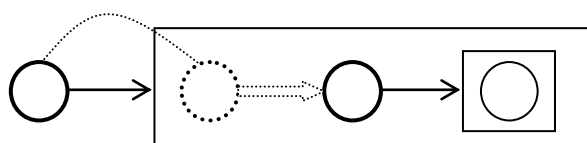


図 5-10. 「他有准备今天的会议资料」の概念構造

また、前述したように、「有 V」構文にある動作主（経験主）NP₁は主題であり、話し手は「VP」の部分に焦点を当てる。参照点能力に関わるスキニングの認知プロセスであると考えられる。例えば、(5.75)では、認知主体は、まず参照点としての動作主（経験主）「本田（本田）」に視線を投影し、次にこの視線をターゲットである「进球（ゴールをきめる）」の方向に移動していく。つまり、焦点は「进球（ゴールを決める）」ということにあり、「本田（本田）」ではない。これに対し、「V了」にはそのような機能が特に備わっていない。(5.74)では、焦点は「本田（本田）」に置かれる可能性もあれば、「进球」に置かれる可能性もある。

(5.74) 昨天 的 比赛 本田 进球了。

zuótiān de bǐsài běntián jìnqiú-le

昨日の試合 本田 ゴールを決める-LE

（昨日の試合、本田 {が/は} ゴールを決めた。）

(5.75) 昨天 的 比赛 本田 有 进球。

zuótiān de bǐsài běntián yǒu jìnqiú

昨日の試合 本田 YOU ゴールを決める

（昨日の試合、本田 {*が/は} ゴールを決めた。）

（作例）

以下の疑問文を用いたテストでもこれを証明することができる。(5.76)では、疑問文 a の新情報は疑問詞である「谁（誰）」であり、これに対する答えとして、文 b がごく自然に使えるが、文 c が不自然である。一方、(5.77)では、疑問文 a の新情報は「进球了吗（ゴールを決めたかどうか）」であり、これに対する答えとして、文 b も文 c も用いられる。

(5.76) a. 昨天 的 比赛 谁 进球了？

zuótiān de bǐsài shuí jìnqiú-le

昨日の試合 誰 ゴールを決める-LE

（昨日の試合、誰がゴールを決めたのか？）

b. 本田 进球了。

běntián jìnqiú-le

本田 ゴールを決める-LE

(本田が決めた。)

c. ?本田 有 进球。

běntián yǒu jìnqiú

本田 YOU ゴールを決める

(本田はゴールを決めた。)

(5.77) a. 昨天 的 比赛 本田 进球了 吗?

zuótiān de bǐsài běntián jìnqiú-le ma

昨日の試合、 本田 ゴールを決める-LE 疑問

(昨日の試合、本田はゴールを決めたのか?)

b. (本田) 进球了。

běntián jìnqiú-le

本田 ゴールを決める-LE

([本田は]ゴールを決めた。)

c. (本田) 有 进球。

běntián yǒu jìnqiú

本田 YOU ゴールを決める

([本田は]ゴールを決めた。)

(作例)

後ろの「VP」を焦点化する「有 V」構文のこのような機能は、元の動詞「有」に反映される参照点能力に関わる認知プロセスを継承していると考えられる。動詞「有」は元々その後ろの部分である存在物（所有物）を焦点化する機能をもっている。例えば、(5.78)では、認知主体は「树（樹）」を参照点として、ターゲットである「鸟（鳥）」にアクセスするという場所・空間認知に関わるスキニングのプロセスとなっている。つまり、「鸟（鳥）」が新情報であり、焦点である。

(5.78) 树上 有 一只 鸟。

shùshàng yǒu yīzhī niǎo

樹の上 ある 1羽 鳥

(樹の上には鳥が1羽いる。)

(作例)

以上をまとめると、「有 V」も「V了」も「パーフェクト」の用法をもつが、両者は決して同じではない。「V了」と比べ、「有 V」は動詞の表す行為性を弱め、出来事を物のように捉える機能と、「有」の後ろの部分「VP」を焦点化する機能をもっている。つまり、「有 V」に含まれる情報量はより豊富である。

5.7 結

本章では、中国語の「有 V」構文に着目し、「有 V」が生まれた要因を考察した上で、場の理論、参照点構造を用いて「有 V」の構文的・意味的特徴を明らかにした。また、基本アスペクト形式とされている「V了」との比較を通して、両者の相違点を探り出し、「有 V」の固有の特徴を解明した。主な考察結果は次の3点にまとめられる。

- 1) これまでの先行研究では、「有 V」構文の使用は南方方言や英語の「have+p.p.」構文などの外部要素による影響であると指摘されているが、考察した結果、「有 V」と「有 N」構文とは同一構造をもっているということが明らかになった。「有 V」構文の出現は、言語使用の中で「具体的な対象の存在」という慣例的な言語ユニットから「抽象的な事態の存在」への拡張であると考えられる。「有 V」構文にある「有」は「パーフェクト」の意を表し、構文全体は「有 N」構文の意味が引き継がれており、先行する事態が動作主（経験主）という場に存在するという意味で説明できる。
- 2) これまで、「有 V」は「V了」と類似した機能をもつとされているが、両者の違いについては明らかにされていない。本章では、「有 V」を「V了」と比較させ、「有 V」の固有の特徴を明らかにした。「有 V」は「V了」とは異なり、出来事を物のように捉えている。従って、「有 V」は行為性を弱める機能をもっている。これは「有」の状態性によるものであると考えられる。加えて、「V了」とは異なり、「有 V」は

VP の部分を焦点化する機能をもっている。これも存在動詞「有」の特徴を受け継いだものと考えられる。すなわち、存在動詞「有」においては、焦点となるのは「有」の前の部分ではなく、「有」の後の部分である。

- 3) 「有 V」構文は「V 有」構文と異なり、動詞に関する制限が少ない。また、視覚で確認できる結果状態を生じる主体動作・客体変化動詞ではなく、視覚で確認できる結果状態を生じない主体動作動詞のほうが多く用いられる。すなわち、「有 V」は対象の結果状態にあまり関心を示さず、行為自体に焦点を当てている。対象に焦点が置かれる「V 有」とは相補的な関係である。

第6章 日本語「Vテアル」に関する考察

現代日本語では、動詞のテ形に存在動詞「アル」が後接する形式「Vテアル」表現は動作行為の結果としてもたらされる状態を表す結果相である（益岡 1987；杉村 1996；高橋 2003 など）。文（6.1）では、動作主「誰か」が主格をとって主語であり、動作を受ける対象「本」が対格をとって目的語である。これに対する「Vテアル」構文（6.2）では、元々対格に位置する客体対象が主格に昇格して主語になり、動作主「誰か」が義務的に削除される。これは、第4章で述べたI型の「V有」構文に類似している。

(6.1) 誰かが机に本を置いた。

(6.2) 机に本が置いてある。

(作例)

動作行為の結果状態を表すには、「Vテアル」構文の他に受動表現「Vラレテイル」も多く使用される。両者の類似性がしばしば指摘されている（寺村 1984；中畠 1999；齋藤 2010 など）。文（6.3）、（6.4）は、（6.2）と同様に、対象が主格に位置して主語になり、動作主が省略されており、客体の状態に焦点が置かれている。

(6.3) 浴場ののれんの前には、ユニークな酔っ払い人形が置かれている。

(6.4) いつの間にか、中庭に白い小屋が二棟建てられている。

(『BCCWJ-NT』)

また、日本語教育の面では、「母語によって日本語の結果表現[Vテイル、VテアルとVラレテイル]の細かいニュアンスの差を表し分けるのが難しい」（副島 2017:147）。初級日本語の教科書においては、一般的に「Vテイル」と「Vテアル」に関する説明はされているが⁷¹、「Vラレテイル」と「Vテアル」との違いに関する解説はあまり見られない。した

⁷¹ 日本語国内の日本語教科書である『日本語初級② 大地』では、第28課で「Vテイル」、第31課で「Vテアル」が導入されている。また、中国国内で広く使用されている日本語教科書『新編日語』では、第1冊の第9課で「Vテイル」、第2冊の第1課で「Vテアル」が導入されている。

がって、本章では「V テアル」を中心に考察し、その構文的・意味的特徴を明らかにし、「V テアル」と、「V テイル」、「V ラレテイル」との相違点およびその原因を明らかにすることを目的とする。本章では、主に以下の3点を主張する。

- 1) 「V テアル」は存在動詞「アル」の存在用法と所有用法を継承し、場所・空間的な存在の意味による拡張である。
- 2) 「V テアル」は客体に視点を置いて対象の結果状態を表す1つの「客体結果相」である。具体的な場所に対象がどのような状態で存在しているかを表す「対象の存在様態」の用法が基本的用法である。
- 3) 実際の言語使用では、「V テアル」は書き言葉よりも話し言葉として多く使用されている。

本章の構成は以下の通りである。

6.1 節では、「V テアル」に関する先行研究を概観し、その問題点を提示する。6.2 節では、存在動詞「アル」と「V テアル」との関係論じる。6.3 節では、「V テアル」の意味用法を分類し、Langacker (2008 etc.) の認知文法の枠組みで各意味用法を説明する。6.4 節では、コーパス調査を通じて、「V テアル」に用いられる動詞に関する制限を検討する。6.5 節では、小説データを中心とした先行研究とは異なり、小説・新聞・会話といった異なるジャンルのテキストを調査し、これらのテキストにおける「V テアル」の使用実態を明らかにする。6.6 節と 6.7 節では、「V テアル」と存在型アスペクト形式「V テイル」、受動表現「V ラレテイル」との比較を通して「V テアル」の対象指向性をより明らかにする。6.8 節では、本章のまとめを述べる。

6.1 先行研究

「V テアル」については、森田 (1971)、益岡 (1987)、杉村 (1996)、原沢 (2005)、副島 (2007、2009)、高見・久野 (2014) など、多くの研究の蓄積がなされている。

森田 (1971) は「V テアル」を「ガ～テアル」形式と「ヲ～テアル」形式に分けている。前者は過去の行為の結果を現状として捉える「結果の現存」であり、「行為主体は必ず素材たる第三者で、言語主体（話し手と聞き手）は行為者になりえない」(p.176)。後者は過去の動作行為の結果として行為主体に蓄積されていることを表す「結果の蓄積」であると述

べている。また、「ガ～テアル」は「現象文であり、外面的・現象的」であるのに対し、「ヲ～テアル」は「判断文であり、内面的・心理的である」と指摘している。

(6.5) 戸がしめてある。

(森田 1971:176)

(6.6) 相手の弱点はじゅうぶん研究してある。

(森田 1971:180)

寺村 (1984:147-152) は、「V テアル」には文 (6.7)、(6.8) のような「眼前の状態を描写する場合」と文 (6.9)、(6.10) のような「現在の状況を述べる場合」があり、前者の場合は、ある目的のための準備という意味合いがないことのほうが多いのに対し、後者の場合は、準備という意図の意味合いが強く感じられると述べている。「V テアル」形式の表すアスペクト的意味が「処置の結果の存在」であると指摘している。このように、寺村 (1984) の「V テアル」に対する 2 分類は大体森田 (1971) と同じである。

(6.7) 壁ニ絵ガカケテアル。

(6.8) 床ノ間ニハ花ガ活ケテアッタ。

(6.9) 先方ニハモウソノコトヲ話シテアリマス。

(6.10) マダ予約シテアリマセンガ、大丈夫デス。

(寺村 1984:147)

ただし、寺村 (1984) では、文 (6.11)、(6.12) のように、「『記述』を表す動詞の～テアル形は、日常非常に多く見られるが、この場合は、意図的処置という感じはほとんどない」(p.151) と述べられている。

(6.11) (石面ニ空穴アリ、径弐尺許、深七、八尺、御釜ト称ス。此辺ヨリ上ハ、女人ノ参詣ヲ禁ズ、女性禅定追立トアル是也) と甲斐国志ニ書いてある。

(『女人禁制』; 寺村 1984:151 より)

(6.12) それは新聞の記事ではなく、思いがけなく来た一枚のはがきであった。杉本隆治と書名してある。

(『地方紙を買う女』; 寺村 1984:151 より)

益岡 (1987) は統語的・意味的観点から「V テアル」表現を、「対象指向性」をもつ「対象がガ格で表される A 型」と「行為指向性」をもつ「対象がヲ格で表される B 型」という 2 つの型に分類し、各型をさらに A₁ 型、A₂ 型と B₁ 型、B₂ 型に区分している。そのうえ、「V テアル」表現の全体像は A₁ 型から、A₂ 型、B₁ 型を経て B₂ 型に至る、1 つの連続体を構成している」(p.232) と分析している。このように、構文的な違いに基づいた「V テアル」の意味特徴に対する分析は広く受け入れられている。

A₁ 型: 行為の結果もたらされる、対象の或る場所での存在を描写するタイプ [例 (6.13)]

A₂ 型: 或る行為の結果もたらされる、対象の何らかの状態が、視覚可能な形で存続していることを描写するタイプ [例 (6.14)]

B₁ 型: 行為の結果もたらされる事態が基準時において引き続き存在しているという、「結果の事態の存続」を表すタイプ [例 (6.15)]

B₂ 型: 単に、行為の結果が基準時 (及び、それ以降) において何らかの有効性を示すという意味での結果相を表すタイプ [例 (6.16)]

(6.13) 盆栽が幾鉢かならべてあった。

(6.14) 入口に近い片すみが一畳余りの広さだけあけてある。

(6.15) 業行は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けてあり…

(6.16) それで、京都府警に鑑定をたのんであるの。

(益岡 1987:221-225)

益岡 (1987) を受け継ぎ、原沢 (2005) は対象がガ格を取るタイプを「受動型」、対象がヲ格を取るタイプを「能動型」と分類している。そして、意図性という観点から「V テアル」の意味を表 6-1 にまとめている。

表 6-1. 意図性による「V テアル」の分類⁷² (原沢 2005:24)

V テアル	意図的	(1) 行為の結果
	非意図的	(2) 行為の結果
		(3) 非行為的状态

原沢 (2005) では、文 (6.17)、(6.18) のように、行為の意図性が感じられる「V テアル」を「意図的な行為の結果」としている。文 (6.19)、(6.20) のように、行為の結果状態から行為の意図性が感じ取ることができず、結果状態がありのままに描かれている文を「非意図的な行為の結果」と呼んでいる。そのうち、文 (6.21)、(6.22) のような先行した行為が感じられない「V テアル」文を「非行為的状态」と呼んでいる。

(6.17) 「さようなら」渋谷の駅で、送ると言う男を断って、帰宅すると十一時ちかかった。食卓の上にメモがおいてあって、世津子の婚約者が風邪で寝こんだという電話がかかったから、急いで看病に出かけてくるという文字が書かれていた。

(『何でもない話』; 原沢 2005:25 より)

(6.18) 東京駅にいるという山崎から鼻息の荒い電話が入ったのは、大学2年の夏だったろうか。千葉の海に泳ぎに行こうということになった。知り合いの民宿をおぜんだてしてあった。いつものように計画は山崎が立てた。それが、集合時間に全員遅刻だと彼は怒っていた。山崎の勘違いだった、海に行くのは翌日だったのだから。

(『素敵なヤツなのに』; 原沢 2005:25 より)

(6.19) 家のベルを押すと咲子が扉をあけた。玄関に男の靴がおいてあった。「俊彦さんが来ていらっしゃるの」俊彦とは桑田のことだった。

(『何でもない話』; 原沢 2005:26 より)

(6.20) 検察庁が乗り込んできた。横流しの書類にはすべて進藤さんの印が押してあったので、首謀者としてたちまち捕まってしまった。

(『読むクスリ』; 原沢 2005:26 より)

⁷² タイトルは筆者による。

(6.21) マリコは言葉を失ってうつむいた。だってあなたの顔には、ひどく傷ついたりかいてある、とは言えなかった。

(『ホロスコープ物語』; 原沢 2005:26 より)

(6.22) 外に出て拾った佐知子は、ポケットの中からのぞいた紙切れを元に戻そうとしてははつとする。馬券だった。濡れて湿った馬券には、つい数日前の日付が記してあった。

(『素敵なヤツなのに』; 原沢 2005:27 より)

この分類に基づいて、原沢 (2005) は、現代の小説、エッセイなどの 27 作品から収集した 360 の「V テアル」を考察した結果、非意図的な用法が全体の 41% を占め、「V テアル」の重要な特徴であると示唆している。そして、「V テイル」と「V テアル」は以下のような相補関係をなしていると主張している。

表 6-2. 「V テイル」と「V テアル」の関係⁷³ (原沢 2005:36)

用法	非意図的	意図的
1. (主体がかかわる) 行為の結果	①テイル	②テアル
2. (主体がかかわる) 非行為的状态	③テイル	—
3. (客体にかかわる) 行為の結果	④テアル	
4. (客体にかかわる) 非行為的状态	⑤テアル	—

しかしながら、主体がかかわる行為の結果を表す際には、「V テイル」にも「V テアル」にも意図性が表される場合とそうでない場合がある (副島 2009:10-11)。

(6.23) 太郎は花子の電話番号を既にメモ張に書いてあった。(意図的である)

(6.24) 太郎は花子の電話番号を既にメモ張に書いていた。(意図的である)

(6.25) 元旦に友達に出した年賀状が戻ってきたので見たら、細かい番地を書き忘れてあったので、自分でも啞然。(意図的でない)

(6.26) 元旦に友達に出した年賀状が戻ってきたので見たら、細かい番地を書き忘れ

⁷³ タイトルは筆者による。

ていたので、自分でも哑然。(意図的でない)

(副島 2009:10)

杉村(1996)も意図性のない「V テアル」が存在していることを指摘している。文(6.27)は客体にかかわる行為の結果を表し、文(6.28)は主体にかかわる行為の結果を表すが、両方とも意図性が感じられない。原沢(2005)自身も客体にかかわる行為の結果を表す「V テアル」が非意図的な場合と意図的な場合があることを主張している。つまり、意図性は「V テアル」構文がもつ固有の意味ではなく、さほど重要ではないと言えるだろう。

(6.27) おや、ガスがつけっ放しにしてある。消し忘れが多いな。

(6.28) おや、ガスをつけっ放しにしてある。

(杉村 1996:67)

また、高見・久野(2014)は「V テアル」構文全体に課される意味的・機能的制約を以下のように提示している。

「てある」構文は、動詞が表わす意図的行為が、過去において誰かによって何らかの目的でなされたことが話し手(疑問文の場合は聞き手)に明らかで、その行為に起因する状態が発話時において話し手にとって有意義であることを主張する表現である。

(高見・久野 2014:28)

しかし、高見・久野(2014)では、そもそも「有意義」についての詳しい説明がなされていない。また、以下の2つの文はただの眼前の現象描写文であり、高見・久野でいう「有意義」は読み取れるとは言い難い。

(6.29) それには、「芳香春園大姉」と金の字が彫ってある。

(『越前竹人形』)

(6.30) 大きな鉄格子の門から中に続く道を目で追うと、はるか彼方に、見たこともない最高級車が二、三台駐車してある。

(『若き数学者のアメリカ』)

このように、従来の「V テアル」研究では、対象を表す名詞句がとる格形式によって、「受動型」（対象を表す名詞句がガ格をとる A 型）と「能動型」（動作主を表す名詞句がガ格を取り、対象を表す名詞句がヲ格をとる B 型）に分けて意味分析を行った場合がほとんどである。確かに、このような分類基準は「V テアル」を分析する際、また、日本語学習者に教える際には便利である。しかしながら、「V テアル」の実例においては、対象を表す名詞句がガ格やヲ格ではない形で示される場合が多い。例えば、文（6.31）は実際の会話の例である。話す内容を指す「それ」はガ格やヲ格を取るのではなく、係助詞「ハ」でマークされている。また、文（6.32）は新聞の用例である。対象である「トマト」が省略されている。この2つの文における対象が取る格形式（ガ格であるかヲ格であるか）を判断するのは困難である。

(6.31) それはもう。もう、ちょ、親に言ってあるから。

(『名大会話コーパス』)

(6.32) 露地のトマトの収穫は7月末から9月中旬までだが、たくさん採れるので夏のうちにペーストにしたりローストにしたりして保存してある。真空パックに入れて冷凍すると、数年間は味が変わらない。

(『BCCWJ-NT』)

また、これまで「V テアル」をアスペクト形式として、動詞 V テが表す側面からの分析に偏っている。アスペクト形式としての「V テアル」の把握はもちろん重要な意味をもっている。しかしながら、「V テアル」の全体意味は「V テ」と存在動詞「アル」に関わっており、存在動詞「アル」の側面からの考察も欠かせないものであると考えられる。存在動詞の側面に焦点を当て、「V テイル」や「V テアル」を存在型アスペクト形式に位置づけて考察しているのは野村（1994、2003）、岡（2001、2013b）などが挙げられる。

野村（1994）は、現代語の「V テイル」の意義を「存在様態、動作の継続、完了、結果の状態、性質・単なる状態」に分類し、「存在様態」的「V テイル」を「V テイル」の広がり核として捉えている。

(6.33) a. 庭に木が三本立っている。（存在様態）

b. 少年がグラウンドを走っている。（動作の継続）

- c. 既にその家から引っ越している。(完了)
- d. 水が白く濁っている。(結果の状態)
- e. 山田さんは四角い顔をしている。(性質・単なる状態)

(野村 1994:31 ; 一部修正)

また、野村 (2003) は、図 6-1 のように文の内容に応じて存在文・動詞文・形容詞文の 3 種に分類し、これらの連続性の具体的な現象を示す「V テイル」構文を、文分類のトライアングルの内部において考察を行った。「V テイル」を、存在様態を核とした存在文の一種に位置づける観点には本稿も賛成する。

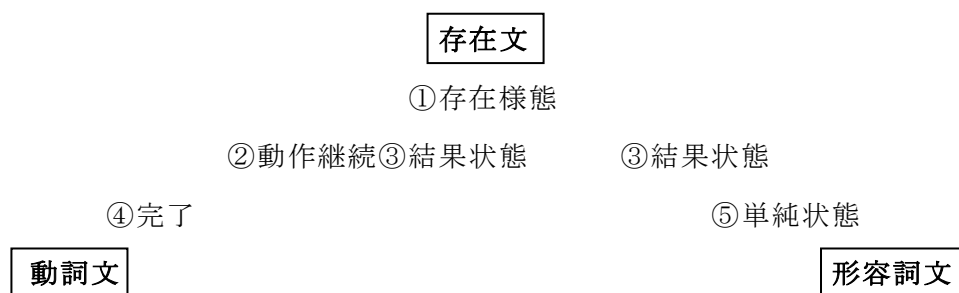


図 6-1. 「V テイル」の意味 (野村 2003:3 ; 一部修正)

野村 (1994) を受け継ぎ、岡 (2001、2013b) は認知言語学の観点から V テイル形式を事態の存在化形式として一次的に規定し、存在構文に基づいた放射状カテゴリーとして「V テイル」、「V テアル」を記述している。また、アスペクトを「状況のあり方=存在様相を述定する仕方の 1 つとして」(岡 2013b:20) 捉えている。

岡 (2013b) では、「空間的场所 Y に実体 X が存在する」ことを表す構文を「中心的存在構文」とし、「空間的场所 Y に実体 X がある状態で (V テ) 存在する」ことを表す構文を「存在様態構文」としている。そして、「存在様態型構文」は「場所の二格と共起せず、V テという動作様態の意味に焦点がシフトしていくことによって」、「結果存在型」や「過程存在型」へ発展し、この両者の間に「結果維持型」が存在するという。また、変化の痕跡が眼前に存在しているものを「痕跡存在型」、直接結果や痕跡もなく出来事と基準時が関連づけられる「V テイル」、「V テアル」をそれぞれ「出来事存在型」、「行為存在型」と呼んでいる。そして、これらの「V テイル」、「V テアル」構文は以下のネットワークをなして

いると指摘している。ただし、岡（2001、2013）では、「Vテイル」に焦点を当てて分析しているが、「Vテアル」については深く考察されているとは言い難い。

- (6.34) a. あそこに鳥がいる。（中心的存在構文）
 b. 机の上に本がある。（中心的存在構文）
 c. あそこに鳥が飛んでいる。（存在様態型構文）
 d. 机の上に本が置いてある。（存在様態型構文）
 e. 窓が開いている。（結果存在型）
 f. 窓が開けてある。（結果存在型）
 g. 子供が遊んでいる。（過程存在型）
 h. 犯人が銃を持っている。（結果維持型）
 i. （足跡を見て）「また、子供らが泥だらけの足で歩いている。」（痕跡存在型）
 j. あの女が犯人だ。被害者がそう証言している。（出来事存在型）
 k. 論文は完全に仕上げている。これで試問は大丈夫だろう。（行為存在型）

（岡 2013b:20-22）

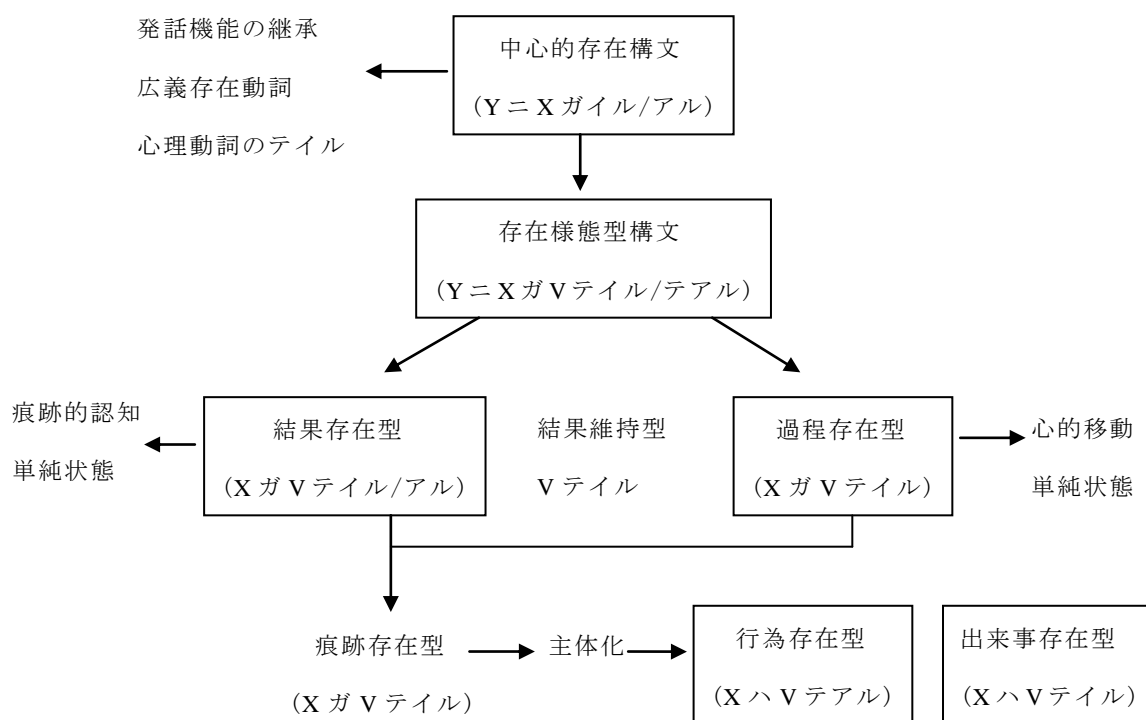


図 6-2. 存在構文に基づくテイル（テアル）構文のネットワーク（岡 2013b:22）

ところで、日本語教育の中では、「V テアル」は大体初級の後半に導入される。自他動詞の区別ができれば、「V テアル」は比較的簡単な文法項目であると思われるが、中上級日本語学習者においては、文 (6.35)、(6.36) のような誤用例が多く見られる。これは「V テアル」の使用実態が十分に明らかにされていないことに関連していると考えられる。従来の研究においては、小説データを中心に「V テアル」表現を考察した研究がほとんどである。しかしながら、「V テアル」の使用実態を考察すると、書き言葉よりも話し言葉のほうが圧倒的に多いことが分かった。そして、異なるジャンルのテキストにおける「V テアル」の使用実態に言及した研究は、筆者の知る範囲ではこれまであまりなされていない。

(6.35) *人は日本のアニメーションが好きなために日本語を習ってあることがおういで、私も日本のアニメーションがとても好きだ。

(6.36) *中国では友人に自分の友好を表すためにいつも家に招待してあることがある。

(『日本語学習者書き言葉コーパス』)

そこで、先行研究をふまえ、本稿では「V テアル」と存在構文との関連に着目して、「V テアル」を事態の存在の在り方として捉える。異なるジャンルのテキストにおける「V テアル」の意味用法を分類し、各意味用法の概念構造を認知文法の理論枠組みで説明する。また、「疑似受動文」(村木 1991:196) とされている「V テアル」と受動表現「V ラレティル」との比較を通して、「V テアル」の特徴をより明らかにする。

6.2 「V テアル」と存在動詞「アル」との関係

「V テアル」の表すアスペクト的意味は存在動詞「アル」の表す意味に深く関わっており、「V テアル」の特徴を分析するには存在動詞の「アル」の特徴を説明しておく必要があると思われる。例えば、山梨 (1995:67) は「場所・空間における位置づけを表現する動詞の『ある』/『いる』の用法にも、文字通りの場所・空間的な存在の意味からアスペクト的な意味への拡張がみられる」と指摘している。また、「太郎は学生である」という文に対しては、本来の存在の意味を引き継いで、「太郎は学生にてある」、すなわち太郎は学生という状態である (=存在する) と解釈される (岡 2013a:223)。

中国語の存在動詞「有」と同様に、日本語の存在動詞「アル」は独立動詞として使われ

ている。存在動詞「アル」も多義性を有している。野田（2017）は動詞「アル」の用法を20の意味に分けて考察し、「具体物（一般）の存在」という最も基本的な意味から拡張した多義ネットワークの全体像を提示しているが、一般的に存在動詞「アル」は（6.37）のような存在を表す用法と（6.38）のような所有を表す用法という2つの用法に大別できる。

（6.37）机の上に言語学の本がある。

（6.38）太郎に言語学の本がある。

（作例）

以上の2つの構文は表面上に違いがないことから、同一の構文と思われやすいが、文（6.37）と文（6.38）は異なる概念構造をもっていると考えられる。同じニ格に位置する場所名詞句と所有者名詞句の統語的特徴が異なっていることは既に柴谷（1978）、Kishimoto（2000）、竹沢（2001）などによって指摘されている。例えば、文（6.37）にある場所を表す名詞句をガ格に置き換えると容認度がかなり下がるが、文（6.38）にある所有者を表す名詞句をガ格に置き換えることが可能である。

（6.39）??机の上が言語学の本がある。

（6.40）太郎が言語学の本がある。

（作例）

（6.37）では、場所名詞句「机」という物理的空間において、「言語学の本」という具体的なものが存在を表す関係に参与しているという構造が考えられる。この時、ガ格名詞句「言語学の本」が主語として機能している。「にーが」構文において、どの名詞句が主語として機能しているかを判断するには、主語尊敬語化と再帰代名詞を用いるテストがしばしば用いられる。詳しくは柴谷（1978）を参照されたい。熊代（2002）は（6.37）のような構文を「参与者主語構文」と呼んでいる。プロフィールされている単一参与者「言語学の本」は外部からエネルギーを受けて机の上に存在している状態になっている。すなわち、非対格動詞的な構造であると考えられる。

これに対し、（6.38）では、場を示すニ格名詞句「太郎」は存在文のような無生物ではなく、人間である。「人間をある関係が存在する物理的空間として直接捉えることは全く不可

能ではないにしても、かなりの困難を伴う作業である。むしろ、このような『にーが』構文は参照点 (reference point) 構文を想起すると考える方が自然である」(熊代 2002:249)。すなわち、「太郎」は参照点として機能し、支配領域を想起し、その支配領域は「言語学の本がある」という関係が存在する場所である。熊代 (2002) はこのような文を「場主語構文」と呼んでいる。この時、ニ格名詞句「太郎」が主語として機能し、ガ格名詞句「言語学の本」が目的語として機能している。すなわち、他動詞的な構造であると考えられる。

一方、同じ動詞「アル」が非対格動詞的な項構造と他動詞的な項構造をもっていることは、「V テアル」構文にも見られる。文 (6.41) は、動作主体が義務的に省略されている。参与者「言語学の本」だけがプロファイルされ、主語として機能している依存的事態である。つまり、非対格動詞的な構造をもっている。これに対し、文 (6.42) は、参与者が 2 つである。ガ格名詞句「太郎」が主語として機能し、ヲ格名詞句「言語学の本」が目的語として機能している。すなわち、他動詞的な構造をもっていると考えられる。太郎は参照点の機能として、支配領域が想起され、その支配領域において「机に本を置く」という関係が存在すると考えられる。

(6.41) 机の上に言語学の本が置いてある。

(6.42) 太郎が机の上に言語学の本を置いてある。

(作例)

このようにして、「V テアル」構文は、項構造において単独として使用されている存在動詞「アル」と類似した特徴を見せている。すなわち、「V テアル」構文は存在動詞「アル」の存在と所有の用法を継承していると思なすことができる。以下、存在動詞「アル」からなる存在構文との関係を視野に入れながら、「V テアル」の特徴を論じていく。

6.3 「V テアル」の意味用法

6.3.1 本稿の分類

6.2 節で述べたように、「V テアル」構文が「アル」構文の表す存在用法と所有用法を継承している。このことに鑑み、本稿は、まず「V テアル」を大きく 2 種類に分ける。

文 (6.41) では、具体的な対象がある状態で具体的な場所に存在することを表す。ここ

では、この用法を「対象の存在様態」と呼ぶ⁷⁴。張（2006）は、(6.41) のような「V テアル」構文を「複合存在表現」と呼び、あるところに何がどのように存在しているかを述べる表現であると指摘している。また、金水（2006b）は、(6.43)、(6.44) のように、「『N ている』という形式は、『N で』がある種の状態を、『いる』が存在ないし存在から派生した意味を表すと分析することができる」と述べている。すなわち、「対象の存在様態」を表す「V テアル」は「N ている」と同様に、存在動詞の意味が色濃く残っているとと言える。

(6.43) このあいだ支那から山口が、ほら看護人でいたでしょうが、あの山口が内地に帰還してやってきましたが、

（『楡家の人びと』；金水 2006b:145 より）

(6.44) かがんだままの姿勢でいるよりも虫のようにちぢこまって横に寝るほうが楽だということも彼は知っていた。

（『孤高の人』；金水 2006b:147 より）

文 (6.41) に対し、文 (6.42) では、対象の状態ではなく、動作主が先行した行為を所有するという意味になる。所有用法は存在用法の「空間的场所」が「所有領域」へとメタファー的拡張したものであり、存在用法の一種であると考えられる（4.2.2 節参照）。したがって、文 (6.42) では、先行した行為経験が動作主という概念領域に存在していることを表すと解釈できる。ここでは、「行為経験の存在」（いわゆる「パーフェクト」の用法）と呼ぶ。金水（2000）でも指摘されているように、「V テアル」構文が「パーフェクト」を表す場合、動作主が表されるのは動詞（V）に選択された名詞句ではなく、「V テアル」構文全体に付加された経験主を示す名詞句である。

(6.45) NP（経験主）ハ[…V テ]_{VP}アル

（金水 2000:51）

また、金水（2000）は、(6.45) のように経験主を表す名詞句は (6.46) のような所有構文における所有者を表す名詞句に近く、また過去の経験を表す「～したことがある」構文

⁷⁴ この考え方は、野村（1994、2003）、岡（2001、2013b）、金水（2006b）、張（2006）などから学んだことが大きい。

の経験主と共通していると示唆している。「パーフェクト」を表す「V テアル」構文は、経験主を表す名詞句が主題の「ハ」で表される場合が多いという点からも、所有構文と経験構文と共通していると考えられる。

(6.46) 私は (??が) {家族/会社/予定} がある。

(6.47) 私は (??が) [10 年前に UFO を見たこと]がある。

(金水 2000:51)

以上の2種類の用法の他に、次のような「V テアル」構文も存在している。「対象の存在様態」の用法とは異なり、文(6.48)は場所を表す名詞句が現れていない。場所句が義務的に削除されることから、動詞(V)によって表される動作がシフトされ、対象がある場所に存在していることを表すよりも、眼前の結果状態が過去の出来事の痕跡であると捉えられる。ここでは、この用法を「結果の存在」と呼ぶ。

(6.48) 窓が開けてある。

(6.49) 電気が消してあった。

(作例)

上述のように、「V テアル」構文の意味用法を「対象の存在様態」、「結果の存在」、「行為経験の存在」に分けることができる⁷⁵。

⁷⁵ この分類は杉村(1996)、岡(2013b)から学んだことが大きい。ただし、杉村(1996)は対象の取る格形式によって「V てある」を分類している。また、岡(2013b)では、対象の取る格形式については言及されていない。

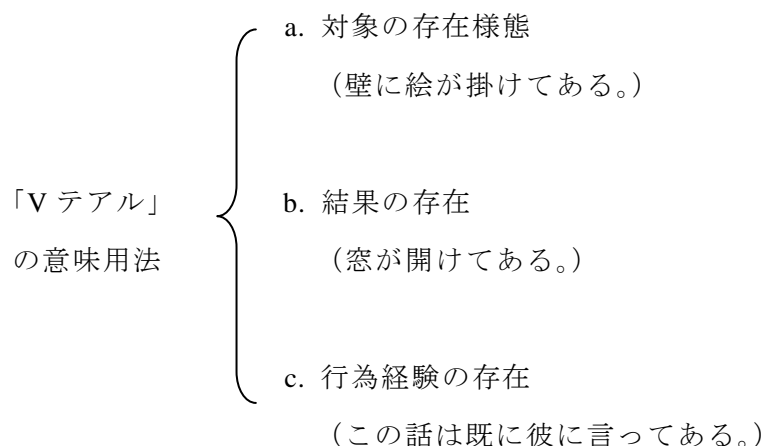


図 6-3. 本研究における「V テアル」の意味用法の分類

これまでの研究では、対象がガ格を取るかヲ格を取るかといった格形式によって、「V テアル」を分類しているが、「V テアル」の実際の使用状況を見ると、対象を表す名詞句がガ格でもなくヲ格でもなく、「ハ、モ、ト、ッテ」のように他の形式で現れる場合が多い。とりわけ、会話の中では、ガ格とヲ格以外の形式は圧倒的に多い。また、修飾節内の「V テアル」については、対象の格形式がガ格かヲ格かを判断するのは困難である。

表 6-3. 対象を表す名詞句の形式

出現形式	小説				新聞				会話			
	ガ/ヲ格	ハ、ト等	修飾節	合計	ガ/ヲ格	ハ、ト等	修飾節	合計	ガ/ヲ格	ハ、ト等	修飾節	合計
数	100	59	46	205	20	12	16	48	119	407	39	565
%	48.8	28.8	22.4	100	41.7	25.0	33.3	100	21.1	72.0	6.9	100

森田 (1971:187) は、「机の上に本が置いてある」と「机の上に本を置いてある」については、意味の違いはほとんど感じられないと述べ、単に対象を表す名詞句がガ格かヲ格に限定せず、もっと巨視的に文脈全体を眺めて考える必要があると示唆している。例えば、文 (6.50) では「対象事物の有形の状態性 (結果の現存)」を表すのに対して、文 (6.51) では「行為の完了、主体の無形の状態性 (結果の蓄積)」を表している (p.181)。

(6.50) 机の上に夕飯が用意してある。

(6.51) 私は前もっていろいろと用意してあるから心配ない。

(森田 1971:181)

また、副島 (2007:160-177) も、(6.52) は構文上「受動型」であるが、「パーフェクト」を表しているし、(6.53) は構文上「能動型」であるが、「変化の結果の継続」とも解釈されると指摘している。つまり、基本的な用法と派生的な用法の違いは「これら『受動型』、『能格型』といった構文上の違いからくるのではなく、コンテキストやその他の特定の条件による」(p.166)。客体対象の格形式だけによる「V テアル」の分類には問題があると考えられる。

(6.52) 3 日前にテーブルとイスがならべてある。

(6.53) テーブルとイスをならべてある。

(副島 2007:166)

これは「V テアル」構文だけではなく、他の構文においても同じ現象が見られる。「V テイル」構文を例として挙げると、文 (6.54) は、「船が岸壁を離れた状態である」という動作が終わった結果状態を表すのに対し、文 (6.55) は、「船が岸壁を離れているところ」という動作が終わらず進行中の状態を表す。つまり、副詞的成分もアスペクトに関わっている。

(6.54) 船はすでに岸壁を離れている。

(6.55) 船はゆっくり岸壁を離れている。

(日本語記述文法研究会 2007:9-10)

本研究は、森田 (1971)、副島 (2007) の観点をふまえ、対象を表す名詞句のとり格形式が大きな問題とならないと考えている。現代日本語においては、以下のように、対象がガ格でもヲ格でもとれる構文が多く見られる。

(6.56) ジュース {が/を} 飲みたい。

(6.57) お金 {が/を} 欲しい。

(6.58) 日本語 {が/を} 話せる。

(作例)

すなわち、従来論じられた A 型と B 型の違いは「[ジュースが[飲みたい]]」と「[[ジュースを飲み]たい]」との違いと類似していると考えられる。客体対象がガ格をとるか、ヲ格をとるかといった格形式だけではなく、動作主の明示か不明示、動作行為の時点を示す副詞句の有無などのコンテキストも考慮に入れて「V テアル」の意味用法を分類すべきである。

具体的には、「V テアル」の「対象の存在様態」の用法と「結果の存在」の用法は「アル」の存在用法と類似した項構造をもち、「アル」の存在用法を継承していると考えられる。両者の区別として、場所を表すニ格と共起可否という点が挙げられる。場所名詞句と共起する場合は、動作行為の結果としての状態よりも対象がある場所にある様態で存在していると捉えられやすい(岡 2013b)。つまり、このタイプは広義の存在表現であると捉えることができる(益岡 1987、杉村 1996、岡 2001、2013b など)。文(6.59)、(6.60)、(6.61)では、場所を表すニ格が現れたのは動詞 V ではなく、存在動詞「アル」が要求したものであると考えられる。これに対し、「結果の存在」の用法は、文(6.62)のように場所を表すニ格と共起できない。対象である「窓」がある場所に存在すると捉えるよりも、話し手は動作行為の結果として「窓」がどのような結果状態になっているかというところに関心を示している⁷⁶。

(6.59) テーブルの上に魚が焼いてある。

(cf. *テーブルの上に魚を焼く。)

(岡 2013b:25)

(6.60) 押し入れの中に布団が畳んである。

(cf. *押し入れの中に布団を畳む。)

⁷⁶ ただし、場所を表すニ格が省略されている場合がある。このとき、「ここに」を挿入して、文が成立すれば「対象の存在様態」と見なし、そうでなければ、「結果の存在」と見なす。それに加え、杉村(2002)に倣い、否定形テストも用いる。例えば、「本が置いてない → 本がない」のように、「対象の存在様態」を表す文に関しては、その否定形は物の存在を否定する文とほぼ同じ意味になるが、「窓が開けてない ≠ 窓がない」のように、「結果の存在」にはそういった対等関係が見られない。

(6.61) 冷蔵庫にビールが冷やしてある。

(cf. *冷蔵庫にビールを冷やす。)

(6.62) 窓が開けてある。

(cf. *ここに窓が開けてある。)

(作例)

一方、前述したように、「行為経験の存在」は存在動詞「アル」の所有用法を継承していると考えられる。所有表現から「パーフェクト」の用法に文法化されることは言語類型論においては珍しくない (Bybee et al. 1994)。また、所有表現が「パーフェクト」の用法をもつ認知基盤は Langacker (1991b:211-225) によって明らかにされている。文 (6.63)、(6.64)、(6.65) のように、言語主体の視点は眼前の結果状態ではなく、先行する動作行為によってもたらされた効力が基準時までには続いているところにある。

(6.63) 「しまった！」と思わず声を上げたのは、昨日の夕食と一緒に、と一昨日、谷口と約束してあったのだ。

(『女社長に乾杯!』; 副島 2007:168 より)

(6.64) 「大丈夫だよ。場所は考えてあるんだ。昔のおれたちのトバだよ」鯨やんが会社の天井のあたりを人差し指で差し、そいつを軽くひょいひょいと上下させた。

(『新潮社100冊 (CD-ROM)』)

(6.65) 果物も一口で食べられるように切っていますから心配ありませんが、汁を落とさないよう、左手で受けながらいただきますよう。

(『BCCWJ-NT』)

先行研究では、対象がヲ格をとる「V テアル」構文が「パーフェクト」を表すと考えているが、ガ格と違ってヲ格が現れることは、動作主を補うことができるに過ぎず、「パーフェクト」と判断する必須条件ではない。本研究では、「V テアル」が「パーフェクト」を表すかどうかを判断する場合、対象を表す名詞句がとる格形式よりも、コンテキストをより重要視する。文 (6.63) では、「一昨日」という動きの時点を示す状況語が現れ、動作を直接捉え、基準時より前に位置づけている。文 (6.64) では、対象は係助詞「ハ」でマーク

されている。具体的な結果痕跡が確認できず、話者は主体の解釈で、「場所は考えてあるんだ」という出来事を差し出すことによって、「大丈夫だよ」という判断を下した。「根拠—判断」という論理構造が成り立っており、典型的な「パーフェクト」の用法である（工藤 1995）。また、文（6.65）も同様に、「から」が使われて、「果物も一口で食べられるように切っている」という出来事を差し出して、「心配ありません」という判断が導かれている。

6.3.2 各用法の意味記述

次に、「V テアル」の概念構造は動詞のテ形「V テ」と存在動詞「アル」に深く関わっているという立場から、「『V テ』の意味+存在動詞『アル』の意味→『V テアル』の意味」となる仮定し、Langacker (2008 etc.) の認知文法の理論枠組みで「V テアル」の各意味用法の統合プロセスを明らかにする。「益岡 (1997) が証明したように、『ある』とシテアル、『おく』とシテオクでシテアルやシテオクを比較することは、諸構文の意味のパラディグマティックな関係に目を向け、文法形式の不変的意味を探る上で本質的な意味がある」（副島 2007:195-196）と考えられる。第4章でも述べたように、成分構造が統合することによって、合成構造が形成される。合成構造はそれ自体の構成要素である成分構造の意味極と音韻極をそれぞれ単純に足しあわせたものではない（Langacker 2008:164）。

前述したように、存在動詞「アル」には存在物がある具体的な場所に存在していることを表す存在の用法と所有物が所有者という抽象的な領域に存在していることを表す所有の用法がある。例えば、文（6.66）においては、「本」という存在物が具体的な場所「机」に存在していることを表す。これに対し、文（6.67）においては、太郎という抽象的な領域に本が存在していることを表す。つまり、太郎は本を所有するという意味が表される。

(6.66) 机の上に言語学の本がある。

(6.67) 太郎に言語学の本がある。

(再掲)

日本語には、存在を表す動詞は「アル」の他に、「イル」も挙げられる。一般に、「アル」は無生物の存在を表すのに対して、「イル」は有生物の存在を表すとされている。しかしながら、(6.68) のように、「アル」が有生物の存在を表す場合も可能である。また、(6.69) のように、「イル」が無生物の存在を表す場合も可能である。

(6.68) わあ、ここにきれいな貝があるよ。

(副島 2007:215)

(6.69) 見て。沖合いに船がいるよ。

(町田 2016:134)

(6.68) は意志性による動作の潜在性をもたない貝殻として、(6.69) は意志による動作の潜在性をもつ有人の「船」として解釈される。つまり、「アル」と「イル」の違いは意志性による動作の潜在性の有無である。図 6-4 のように、「イル」は「アル」とは異なり、動作の潜在性がある。実線の矢印で示している。

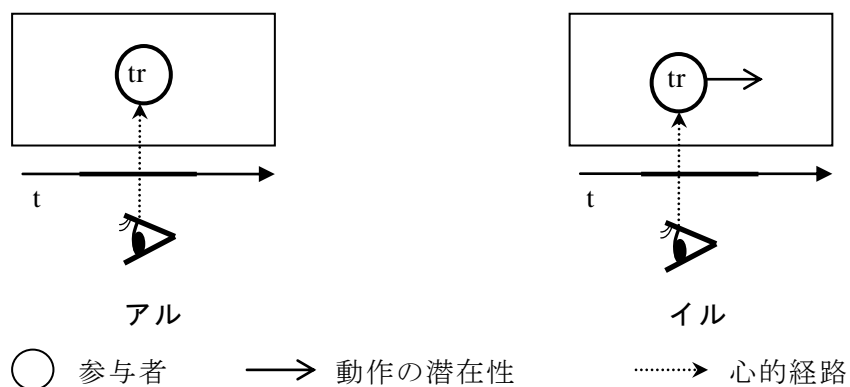


図 6-4. 「アル」と「イル」の概念構造

一方、「V テ」の意味用法に関する分類は仁田 (1995)、城田 (1998)、吉田 (2012) などが挙げられる。研究者によって分類が異なるが、共通に指摘されているのは「様態」、「継起」、「因果」、「並列」である⁷⁷。

①様態

(6.70) 髪をふりみだして探す。

(6.71) わき見をして運転する。

②継起

(6.72) 家に帰って、風呂にはいって、ねた。

⁷⁷ 分類と用例は城田 (1998:56-64) による。

(6.73) 戸をきちんとしめて、出てください。

③因果

(6.74) イスラエルが参加して、9ヶ国になる。

(6.75) 雨が降って、大会は中止になった。

④並列

(6.76) 今日は、花子は三越に行って、太郎は高島屋に行って、僕は丸善に行きます。

(6.77) おじいさんは山にしばかりに行って、おばあさんは川に洗濯に行きました。

様態用法は主たる事態である後件の事態の実現の仕方を表す。図 6-5 のように前件の動作 (V_1) と後件の動作 (V_2) が同時に進行していることが表される。文 (6.70) では、「髪をふりみだして」は動作主体の動作「探す」の様態を規定している。

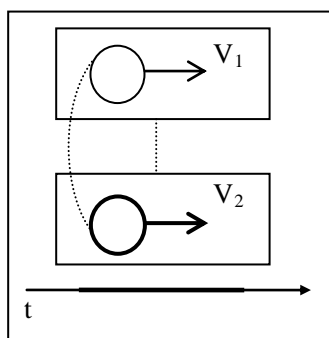


図 6-5. 「V テ」の様態用法 (町田 2016:135 ; 一部修正)

継起用法は後件の事態 (V_2) が立ち現れる前に前件の事態 (V_1) が成立することを表す。例えば、(6.72) では「家に帰る」、「風呂に入る」と「寝る」という動作は順番的に行われた。様態用法においては、前件が付帯的な事態、後件が主たる事態であるが、継起用法には前件と後件が対等の関係にある。

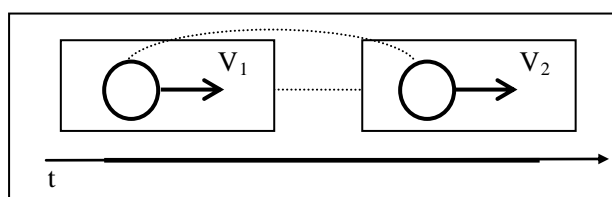


図 6-6. 「V テ」の継起用法

因果用法は主たる事態である後件の事態 (V_2) の条件や原因・理由を表す。時間的關係としては継起關係が見られる。ただし、継起用法は前件の事態と後件の事態が対等的關係にあるのに対し、因果用法においては、結果としての後件の事態が主たる事態となる。よって、ここでは、結果用法と呼ぶことにする。結果用法には、前件の事態と後件の事態との継起性が見られる一方、2つの事態が同時進行しているという側面も見られる。従って、結果用法は様態用法と継起用法の中間に位置づけられる。町田 (2016) も同じ見解を示している。

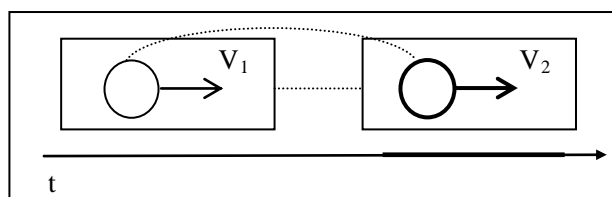


図 6-7. 「V テ」の結果用法 (町田 2016:135 ; 一部修正)

並列用法は、時間關係が捨象されて前件の事態と後件の事態が対等的關係である。継起用法や因果用法とは異なり、『タクシス』上の關係が特にうちたてられておらず、(思いつくままに) ことがあげられているにすぎない」(城田 1998:62)。様態用法と異なるのは前件の事態と後件の事態が同時に進行しているとは限らず、また、前件と後件がともにプロファイルされている。

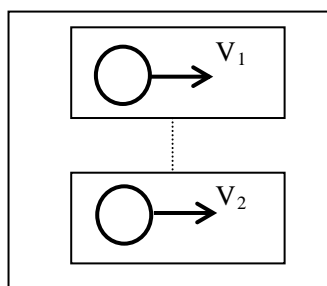


図 6-8. 「V テ」の並列用法

以上、「V テ」の4つの用法を見てきたが、副島 (2007:202) も指摘しているように、これらの用法は「V テ」自体が備わっているものではなく、構文的、コンテクスト的な要因

による前後の意味関係によって決まる。

続いて、上述した動詞連用形「Vテ」と存在動詞「アル」の用法をふまえ、「Vテアル」の意味用法が「Vテ」と「アル」からどのようにして合成されてきたかを検討する。

6.3.2.1 対象の存在様態

文(6.78)、(6.79)、(6.80)、(6.81)においては、具体的な場所を表すニ格が現れている。格助詞「デ」は動的事態の行われる場所であるのに対して、格助詞「ニ」は物の存在場所を表す。動詞「焼く」、「畳む」、「冷やす」は元々物の存在を表すニ格と共起しないことから、ニ格が現れたのは存在動詞「アル」が要求したと言える⁷⁸。この場合は、先行する動作が殆ど感じられず、動詞「アル」の表す対象の存在がプロファイルされている。「Vテ」が物の存在様態を規定していると理解できよう。つまり、「Vテ」の表す様態の用法がベースとなっている。益岡(1987)も指摘しているように、この用法が存在構文に一番近く、行為の結果もたらされる、対象の或る場所での存在を描写するタイプの広義の存在表現である。行為自体は二義的な意味しかもたない。文(6.78)は、テーブルの上に、魚が焼かれている状態で存在していることを表す。文(6.79)では、基本的に「絵の存在」が表されているが、「絵の存在」のあり方まで規定されている。すなわち、絵は壁に貼られている様態ではなく、壁に描かれている様態でもなく、掛けられている様態で存在しているという意味が表されている。また、文(6.80)は、布団が畳んだ状態で押し入れの中に存在していることを表す。文(6.81)は、ビールが冷やされている状態で冷蔵庫に存在していることを表す。

(6.78) テーブルの上に魚が焼いてある。

(岡 2013b:25)

(6.79) 壁に絵が掛けてある。

(6.80) 押し入れの中に布団が畳んである。

⁷⁸ 一戸(2001)はFillmore(1977)によって提唱された「フレーム意味論」を用いて、場所格ニ格の出現可否は動詞Vが喚起するフレーム知識と存在動詞「アル」の相互作用によって決定されると主張している。「冷やす」という行為が喚起するフレームは対象を冷蔵庫に入れて、一定の時間をおく。その行為の結果として、対象が冷蔵庫に存在することになる。アルのもつ存在の概念と一致しているため、文(6.81)が成立すると述べている。しかしながら、動詞「焼く」、「畳む」は「テーブルの上」や「押し入れの中」という場所はフレームに入っているとは考えにくい。

(6.81) 冷蔵庫にビールが冷やしてある。

(作例)

上記の文と文 (6.82) との間には、類似した用法が見られる。

(6.82) 髪をふりみだして探す。

(再掲)

すなわち、文 (6.82) では、動詞「探す」の表す事態がプロファイルされ、「Vテ」の表す付帯状態がベースとなり、動詞「探す」の表す動作の様態を規定している。「Vテ」と「探す」とは「修飾語－被修飾語」の関係である。同様に、文 (6.78)、(6.79)、(6.80)、(6.81) は、場所名詞句が共起し、存在動詞「アル」の表す対象の存在がプロファイルされ、「Vテ」の表す付帯状態がベースとなり、対象の在り方を規定している。「Vテ」と「アル」も「修飾語－被修飾語」の関係であると理解することができるだろう⁷⁹。両文の違いとして、文 (6.82) の「ふりみだして」は動作主体の動的な動作の様態を規定しているのに対して、文 (6.78)、(6.79)、(6.80)、(6.81) の「焼いて」、「掛けて」、「畳んで」、「冷やして」は客対象の静的な存在の様態を規定していると考えられる。

6.3.2.2 結果の存在

「結果の存在」は「Vテ」の結果用法と「アル」の存在用法が合成されたと考えられる。例えば、文 (6.83) のように、「窓を開ける」という動作は有界であり、動作が終わった後に、対象「窓」には視覚で確認できる結果が生じる。生じた結果は存在動詞「アル」と合わせてそうした結果状態で存在している意味になる。

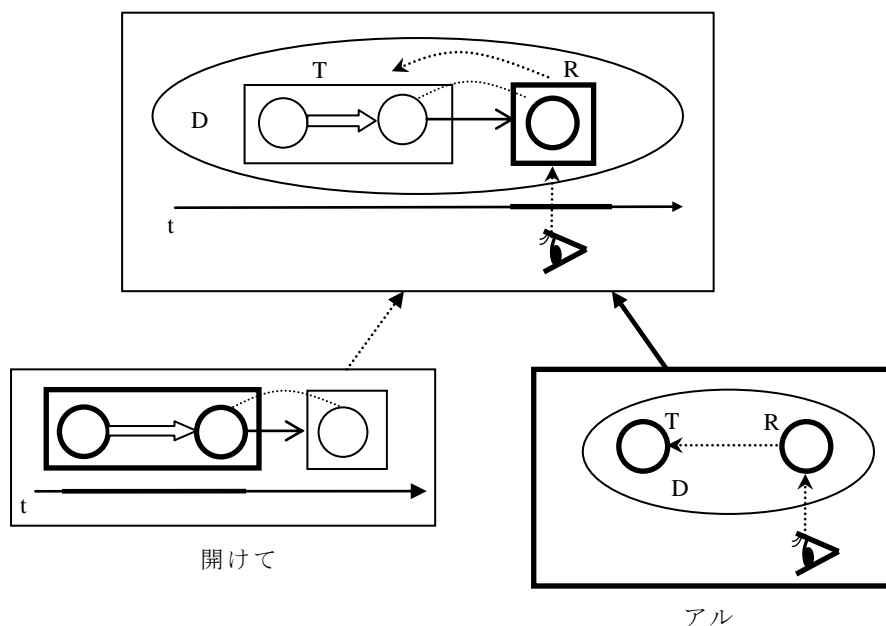
(6.83) 窓が開けてある。

(作例)

図 6-9 に示されるように、(6.83) は成分構造「Vテ」と成分構造「アル」とが統合されて、合成構造ができあがると考えられる。動詞のテ形自体は特定の意味を持たず、単に他

⁷⁹ 野村 (2003) は、「Vテイル」形式を内部的には「様態+存在」=「Vテ+イル」と捉えて分析している。

の語や文とのつながりの機能を果たしているにすぎない。「開ける」は限界動詞であるが、「開けて」という形式は、動作主と対象がそれぞれトラジェクターとランドマークとしてプロファイルされているが、対象の状態変化はプロファイルされていない。成分構造「アル」と統合することによって、結果状態の存在がプロファイルされている。場所名詞句が現れず、「対象の存在様態」と比べて行為のほうがシフトされる。この場合、参照点構造が機能し、相対的に際立って存在している結果状態を参照点（R）として、先行する行為へアクセスする。つまり、結果状態を通して先行する事態を推論することになる。



R: 参照点 T: ターゲット D: 支配領域
> 心的経路 一致

図 6-9. 「窓が開けてある」の合成構造

ただし、先行する行為に焦点を当てるか、それともその行為による結果に焦点を当てるかという認知主体の捉え方には「図地反転」の現象が見られる。認知主体は行為による結果に焦点を当てれば、先行する行為が地（ground）であり、結果の存在になる。認知主体は結果よりも先行する行為に焦点を当てれば、行為による結果状態が地であり、行為経験の存在となる。

6.3.2.3 行為経験の存在

「結果の存在」とは異なり、「行為経験の存在」は、動作行為が終わった後の結果は視覚で確認されることができないことが多い。認知主体は「行為—結果」という事態の2つ平面のうち、「結果」よりも「行為」のように関心をもっている。たとえ具体的な結果が残されているとしても、認知主体は行為のほうに関心を示す。また、動作主の顕在化により、具体的な物の存在ではなく、抽象的な物への所有を表す所有用法が引き継がれている。典型的な「パーフェクト」の用法は、目の前に結果痕跡が残されておらず、認知主体の態度、判断や主張といった主体的なもので先行する動作行為へアクセスすることになる。動作主（経験主）は話し手になることが多い。

(6.84) NP₁ (所有者) ハ…NP₂ (所有物) ガアル

(6.85) NP (経験主) ハ…[V₁テ]_{VP}アル

(金水2000:51)

前述したように、文(6.84)と文(6.85)は同じ構造をもっていると考えられる。文(6.84)では、所有者が具体的な所有物を所有するという意味が表され、文(6.85)では、経験主が過去の抽象的な行為経験を所有するという意味が表されている。「行為経験の存在」を表す「Vテアル」と「アル」の所有用法に関連すると言えるのはもう1つの根拠がある。「アル」の「所有」用法と同じく、動作主（経験主）が現れることが多い。動作主（経験主）が省略されても補うことができる。そして、文(6.86)のように所有を表す「アル」においては、動作主はガ格ではなく、主題の「ハ」をとることが多い。文(6.87)のように、「行為経験の存在」においても、動作主はガ格ではなく、主題「ハ」をとることが多い。ガ格は眼前の状況を描写する現象文に使われるのに対し、「ハ」は主題について判断を表す判断文に多く用いられる。

(6.86) 私は(??が) {家族/会社/予定} がある。

(金水2000:51)

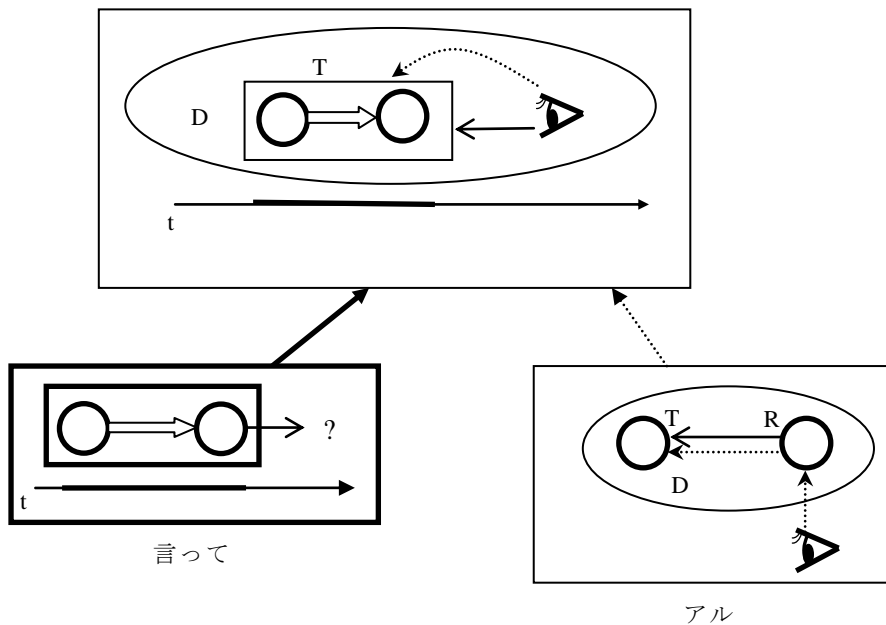
(6.87) 「ばか、慌てるな。オレはもう、身上調査してある。彼女は、お前より三つ年上だ」

(『新潮社100冊(CD-ROM)』)

(6.88) 上京する時間は言ってあったのですが、…略…

(『ストリーカー』; 益岡 1987:225 より)

文(6.88)の合成構造は図6-10に示すことができる。動作主の顕現化により、認知主体の関心は先行する動作に置かれる。「Vテ」のほうがプロファイル決定子となる。図では太線で囲われる。同時に、「(経験主)は～ある」が備えている概念基盤は、所有を表す参照点構造である。つまり、「アル」の所有用法がベースになる。具体的な結果状態が存在しておらず、参照点となる存在物がないため、認知主体が参照点(R)と一致している。そして、ターゲット(T)が「上京する時間を言う」という動作によって精緻化される。このようにして、認知主体の態度、判断や主張といった主体的なものによって、先行する動作へアクセスする仕組みになっている。



R: 参照点 T: ターゲット D: 支配領域

……> 心的経路 …… 一致

図6-10. 「上京する時間は言ってあった」の合成構造

6.4 動詞に関する制限

以上、「Vテアル」構文の合成構造を見てきた。この構文の意味特徴は「Vテ」の用法と

存在動詞「アル」の用法に深く関わっていることを示した。本節では、構文の意味を大きく左右する動詞 V について考察し、「V テアル」構文にはどのような動詞が用いられるかを明らかにする。そこで、筆者は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ-NT) より「V テアル」の用例を無作為に 3000 例採集した。収集された用例の中では、「V テアル」に用いられる動詞の異なり語数は 457 語である。出現回数が 2 回以上の動詞を以下の表 6-4 に示す。

表 6-4. 「V テアル」に用いられる動詞 V

順番	動詞	出現回数	順番	動詞	出現回数	順番	動詞	出現回数
1	書く	576	"	定める	6	"	乾燥する	3
2	置く	338	"	調べる	6	"	集める	3
3	貼る	85	"	しつらえる	6	"	合わせる	3
4	掛ける	78	"	詰める	6	144	当てる	2
5	記する	49	"	吊る	6	"	洗う	2
6	止める	47	"	投げる	6	"	生きる	2
7	用意する	44	"	伏せる	6	"	謳う	2
8	飾る	43	"	分ける	6	"	うつ ⁸⁰	2
9	入れる	39	"	安置する	6	"	選ぶ	2
10	言う	32	"	貯蔵する	6	"	送る	2
11	並べる	31	"	下げる	6	"	折る	2
12	描く	28	82	生ける	5	"	頼む	2
13	敷く	27	"	凝らす	5	"	飼う	2
14	隠す	26	"	仕切る	5	"	囲む	2
"	巻く	26	"	知らせる	5	"	刻む	2
16	とる	25	"	出す	5	"	切り替える	2
17	示す	23	"	伝える	5	"	くっ付ける	2

⁸⁰ 物理的な打撃を表す「打つ」だけではなく、「手をうつ」といった比喩的な表現形式で現れる場合もある。ここでは、「打つ」のこの 2 つの用法の出現回数を分けてカウントしている。

18	立て掛ける	22	"	話す	5	"	配る	2
"	作る	22	"	巡らす	5	"	削る	2
20	載せる	21	"	展示する	5	"	こさえる	2
"	張る	21	"	挙げる	5	"	込める	2
22	植える	20	"	明記する	5	"	捧げる	2
"	つける	20	93	保管する	4	"	仕立てる	2
24	しまう	19	"	移す	4	"	締めきる	2
"	掘る	19	"	貸す	4	"	剃る	2
26	切る	18	"	消す	4	"	揚げる	2
"	取り付ける	18	"	済ます	4	"	散らかす	2
28	預ける	17	"	鏤める	4	"	閉じ込める	2
"	据える	17	"	混ぜる	4	"	飛ばす	2
"	添える	17	"	盛る	4	"	取り除く	2
"	積む	17	"	記載する	4	"	縫う	2
"	塗る	17	"	工夫する	4	"	ねじる	2
33	備える	16	"	準備する	4	"	挟みこむ	2
34	吊るす	15	"	セットする	4	"	払う	2
"	設ける	15	"	説明する	4	"	開く	2
36	まとめる	13	"	駐車する	4	"	含める	2
37	開ける	12	"	報告する	4	"	振る	2
"	掲げる	12	"	展示する	4	"	触れる	2
"	捨てる	12	"	保存する	4	"	与える	2
"	引く	12	"	締める	4	"	まぶす	2
41	買う	11	"	表す	4	"	まわす	2
"	立てる	11	112	押さえる	3	"	見つける	2
"	干す	11	"	替える	3	"	結びつける	2
"	祀る	11	"	借りる	3	"	命じる	2
45	埋める	10	"	区切る	3	"	結わえる	2
"	決める	10	"	組み合わせる	3	"	茹でる	2

"	施す	10	"	加える	3	"	寄せかける	2
"	設置する	10	"	拵える	3	"	依頼する	2
49	挿す	9	"	断る	3	"	確認する	2
"	使う	9	"	仕上げる	3	"	確保する	2
51	打つ	8	"	染め抜く	3	"	紹介する	2
"	収める	8	"	炊く	3	"	宣言する	2
"	仕掛ける	8	"	貯える	3	"	注文する	2
"	縛る	8	"	繋げる	3	"	調節する	2
"	残す	8	"	整える	3	"	繫留する	2
"	述べる	8	"	手配する	3	"	伝達する	2
"	放る	8	"	放置する	3	"	配慮する	2
"	渡す	8	"	外す	3	"	表示する	2
"	予約する	8	"	嵌める	3	"	プリントする	2
60	押す	7	"	控える	3	"	分類する	2
"	打つ	7	"	ひっかける	3	"	連絡する	2
"	揃える	7	"	間違える	3	"	規定する	2
"	任せる	7	"	磨く	3	"	記録する	2
"	待たせる	7	"	剥く	3	"	掲載する	2
"	記入する	7	"	もらう	3	"	充填する	2
66	重ねる	6	"	印刷する	3	"	省略する	2
"	固める	6	"	記述する	3	"	紹介する	2
"	被せる	6	"	構成する	3	"	陳列する	2
"	考える	6	"	固定する	3	"	添付する	2
"	括りつける	6	"	刺繍する	3	"	編成する	2

※「"」は出現回数と同じ動詞の順番を表している。

これまで、「Vテアル」構文に用いられるのは他動詞であるという主張が多いが、今回の調査では、「生きる」、「座る」などの自動詞の使用も観察された。ただし、その出現数はそれほど多くない。工藤（1995）の動詞分類を参考にして、抽出した457個の動詞は図6-11

に分類することができる。

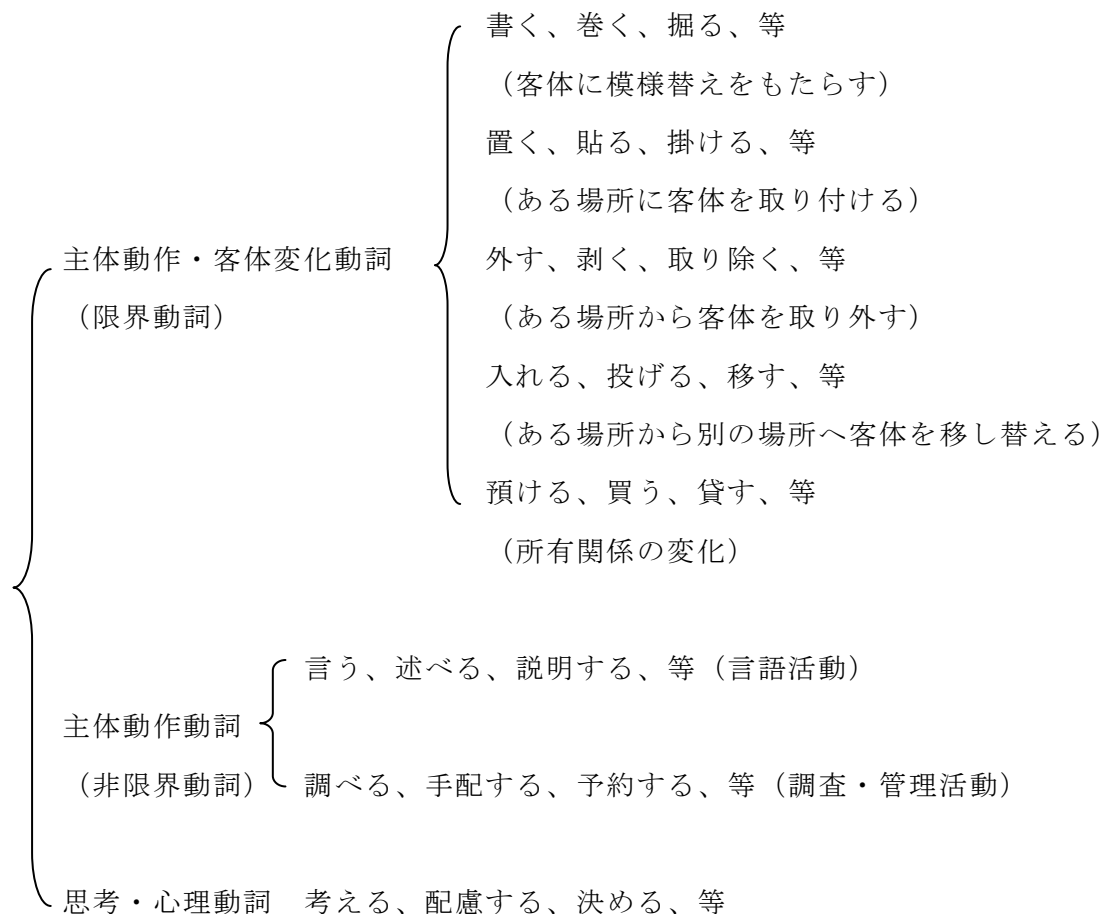


図 6-11. 「V テアル」に用いられる動詞 V の分類

使用される動詞の中では、一番用いられやすいのは主体動作・客体変化動詞 (限界動詞) である。すなわち、他動性の高い動詞である。出現回数が前 5 位の動詞「書く」、「置く」、「貼る」、「掛ける」、「記する」は全て主体動作・客体変化動詞である。特に、「書く」と「置く」という 2 個の動詞の用例数は全体の約 30% の割合を占めており、他の動詞より遥かに高い頻度で使用されている。また、「言う」、「考える」、「調べる」のように、客体対象に変化をもたらされない動詞も「V テアル」に用いられる。以下、図 6-11 に基づいて各グループの動詞の特徴を詳しく分析する。

6.4.1 主体動作・客体変化動詞

6.4.1.1 客体の位置変化

動作主体が客体対象に働きかけて、客体対象を位置変化させてしまった後の状態を表す。「V テアル」に使われる動詞が表す位置変化には具体的な客体の取り付け、取り外しから抽象的な所有関係の変化まで様々であるが、位置変化後の継続状態という点では共通している。

a. ある場所から別の場所へ客体を移し替える

動作主体が客体対象にエネルギーを伝達して、限界に達した結果として、客体対象が元の場所から別の場所に移動されることになり、空間的な位置変化をされた後の結果継続が表される。場所名詞句は普通ニ格で表される。

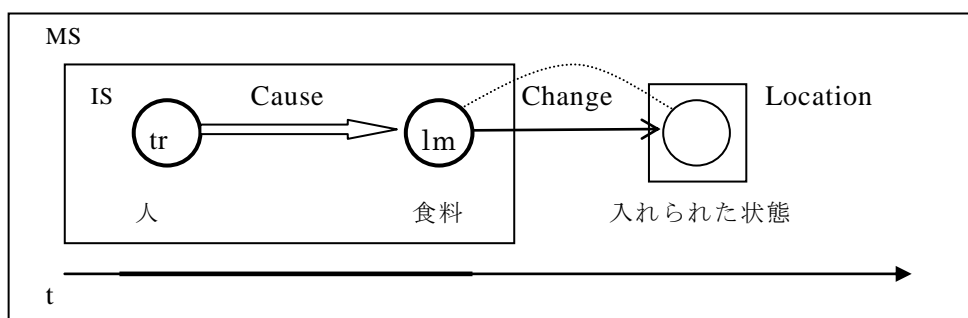
(6.89) がらんとした部屋の中には冷蔵庫が用意されており、中には数日分の食料が
入れてある。

(6.90) そこに小さいほうのアンカーを投げてあったのだ。

(6.91) 彼女のもう一つの顔である詩人神林美和子の電話には、昼間だろうが休日だろうがお構いなしにかかってくるが、その電話はすでに新居のほうに移してある。

(『BCCWJ-NT』)

例えば、文(6.89)に使用される限界動詞「入れる」は次のような概念構造をもつと考えられる。動作主体が客体対象「食料」に働きかけ、その位置変化を引き起すが、移動物が移動先へ移動するプロセスが直接スコープに含まれていない。「入れる」を「V テアル」構文に用いると、結果状態の存在がプロファイルされ、食料が冷蔵庫に入れられた状態で存在しているという意味が表される。



エネルギーの伝達 \Longrightarrow

位置の変化 \longrightarrow

IS: 直接スコープ (immediate scope) MS: 最大スコープ (maximal scope)

図 6-12. 「入れる」の概念構造

b. ある場所に客体を取り付ける

取り付け類の動詞は移し替え動詞類の一種であると考えられる。動作主体が客体対象にエネルギーを伝達し、その結果として客体対象が所定の場所に取り付けられていることを表す。場所名詞句（取り付けの場所）は移し替え類の動詞と同様に普通二格で表される。

(6.92) 底に小さな楕円形のラベルがはってあった。

(6.93) 広場に、欄干のついた檣のやうな式台があつて、梯子段が取りつけてある。

(6.94) 正門には、若い衛兵が立哨していて、右の門柱には筆太に「厚木基地」と墨書した大型の名札が掛けてあった。

(『BCCWJ-NT』)

取り付け類の例として、文 (6.93) に使用される動詞「取り付ける」の表す概念構造は次の図 6-13 に示すことができる。動作主体が客体対象「梯子段」に働きかけ、その位置変化を引き起し、結果として「式台に取り付けられた状態」になっている。「Vテアル」形式をとることによって、結果状態の存在がプロファイルされて、取り付けられた状態で存在しているという意味が表される。

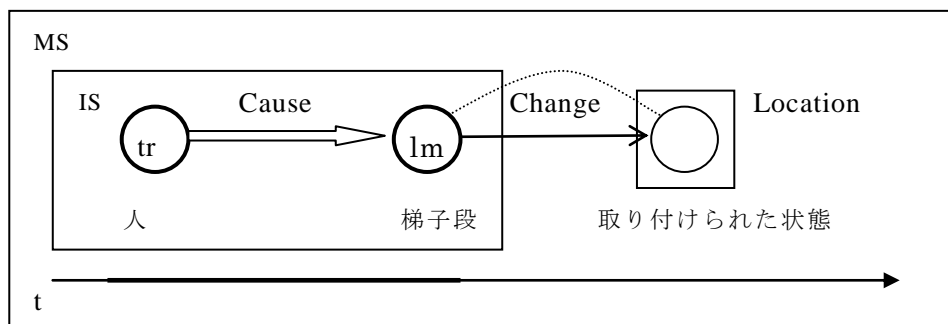


図 6-13. 「取り付ける」の概念構造

c. ある場所から客體を取り外す

取り外し類の動詞は取り付け類の動詞と正反対であり、元の場所から客體対象を取り外し、存在物の着点場所は確認されにくい。

(6.95) 大きな家の中の戸は全部はずしてあった。

(6.96) ヨステンが見ると、プロペラの覆いが取り除いてあり、エンジンを始動できる温度まで温めるのに使った手製のストーヴはどけられていた。

(6.97) 四つか六つかに切ってあって、もちろん皮がむいてあって、芯が三角にとつてある、それが二切れか三切れお皿に乗って出てくるわよね。

(『BCCWJ-NT』)

例えば、文 (6.95) に使用される「外す」は次のような概念構造が考えられる。動作主が対象「戸」に働きかけて、その結果として、「戸」は元の場所からなくなる。「V テアル」の形で、戸が外されたという状態が続いていることになる。

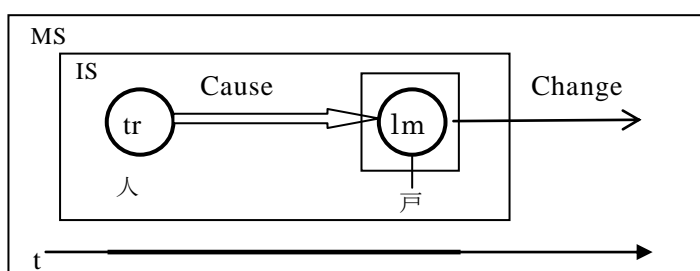


図 6-14. 「外す」の概念構造

d. 所有関係の変化

「貸す」、「買う」などの客体対象の所有関係の変化を表す動詞は、動作終了後、所有権が受け手に移動され、抽象的な位置変化が表されている。

(6.98) おじさんはぼくに煙を吹きかけた。「おまえさんたちのお袋さんに金を貸してあるんだよ。それを貰わないうちは……」

(6.99) その学生アルバイトに、携帯電話を預けてあります。何かあれば、すぐにこれがなりますからね」白川は、ポケットからポケベルを出して見せた。

(6.100) 「私は今ここにいるけど、あと五年たったら定年でイギリスに帰る。田舎に家を買ってある。そこで海岸を散歩して、本を読んで……、それが夢だ」と。

(『BCCWJ-NT』)

例えば、(6.100) に使われる「買う」は次のような概念構造をもつと考えられる。客体対象「家」は本来「売り手」が所有していた。「買う」という動作行為を通して、対象「家」が動作主「私」という場（支配領域）に存在することとなる。「Vテアル」の形式をとることによって、「買う」という行為の効力が基準時まで続く。すなわち、所有者である「私」が「家」を所有する状態が続いていることが表される。

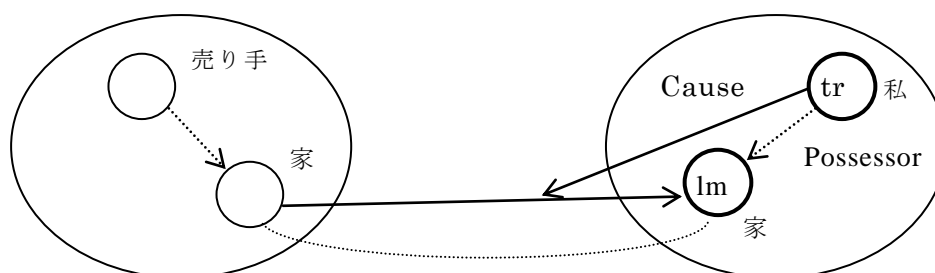


図 6-15. 「買う」の概念構造

6.4.1.2 客体の状態変化

前述したように、状態変化は位置変化の一種であり、位置変化から拡張したと考えられる(4.4.1.2節参照)。「Vテアル」には「書く」、「巻く」、「掘る」などの客体の状態変化を表す動詞が用いられる。「書く」という動詞は正確に言うと、生産動詞であり、2つの側面が含まれている。1つは、対象である文字がない状態からある状態になるという対象の出

現である。もう1つは、文字が現れることによって、その場所に状態変化が起こされるといふ場所の状態変化である。「書く」の「Vテアル」形式は対象である文字が紙などに現れたという結果状態が継続していることを表す。

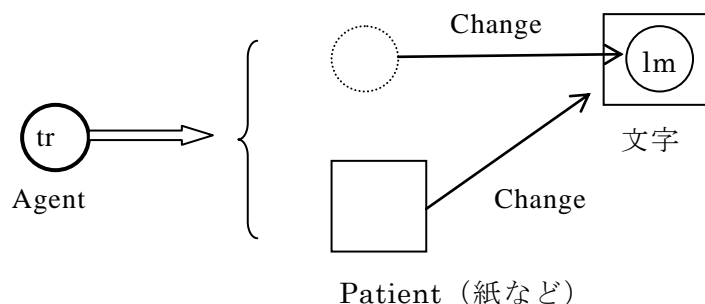


図 6-16. 「書く」の概念構造（谷口 2005:69 を参考に作成）

6.4.2 主体動作動詞

「Vテアル」に用いられる主体動作動詞の中には、「言う」、「説明する」などの言語活動を表す動詞と「調べる」、「予約する」などの調査・管理活動を表す動詞がある。これらの動詞は主体動作・客体変化動詞とは異なり、一般的に動作が終わった後に視覚で確認できる具体的な結果状態が残されない。したがって、これらの動詞の「Vテアル」形式は結果状態の継続ではなく、動作行為の効力の継続を表す。また、動作主は話し手または話し手が知っている動作主体に限る。以下の4つの例文の動作主は省略されているが、文脈から見ると全て話し手であることが分かった。

(6.101) あの学生が病気か中毒かの判定については、東南医大に連絡して、分かり次第こっちに知らせるように言っているんですがね

(6.102) 「…略…このことは頭取にも説明してあることだよ」

(6.103) その日新幹線が正常に走っていたかどうかは調べてあった。

(6.104) 「横浜の自宅から、佐賀県の唐津を目指しました。唐津のホテルを、予約してありましたので……」レイは相変わらず、屈託のない答え方をした。

(『BCCWJ-NT』)

6.4.3 思考・心理動詞

「考える」や「決める」などの思考・心理動詞も「V テアル」構文に用いられる。これら動詞は「内的状態動詞」とも呼ばれ、主体動作動詞と同様に、動作が終わった後に視覚で確認できる具体的な結果状態を残さない。これらの動詞は「V テアル」構文に用いられる場合、話し手は結果状態よりも動作行為に関心を示す。動作行為の効力が基準時まで継続していることが表される。

(6.105) 彼は、いずれ海老原が桜井のもとに、休戦の仲介を依頼しに行くことも読んでいたし、その時にする返答ももう考えてあった。

(6.106) 新居は、三鷹に建築中の三 DK のマンションと決めてある。

(『BCCWJ-NT』)

以上、「V テアル」に用いられる動詞を見てきたが、用いられやすいのは他動性の高い限界動詞である。「V テアル」の形式をとることによって、限界達成後にその状態で存在していることを表される。ただし、再三述べたように、「V テアル」の意味は動詞の表す意味だけではなく、コンテクスト的な要因によって左右される。

6.5 「V テアル」の使用実態

本節では、6.3 節で述べた「V テアル」の3つの用法についてその使用実態を考察する。これまで、小説データを中心に「V テアル」に関する考察は少なくないが、会話など他のジャンルにおける「V テアル」の考察は筆者の知る限りでは見つけることができない。しかしながら、「V テアル」の使用実態を把握するためには、小説データだけでは足りないと思われる。そこで、本稿は小説、新聞、会話という3つのジャンルのテキストにおける「V テアル」を対象とする。

小説データに関しては、『新潮社 100 冊 (CD-ROM)』から 1960 年代以降の 11 編の文学作品を選んだ。この 11 編の文学作品は以下の通りである。これらは全て 200～300 ページ程度の長編小説であり、総文字数は約 138.9 万字である。

- ・『新橋烏森口青春篇』(椎名誠)
- ・『二十歳の原点』(高野悦子)
- ・『コンスタンティノーブルの陥落』(塩野七生)
- ・『錦繡』(宮本輝)

- ・『若き数学者のアメリカ』（藤原正彦）
- ・『エディプスの恋人』（筒井康隆）
- ・『太郎物語・高校編』（曾野綾子）
- ・『越前竹人形』（水上勉）
- ・『ブンとフン』（井上ひさし）
- ・『青春の蹉跌』（石川達三）
- ・『沈黙』（遠藤周作）

そして、新聞データに関しては、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に収録されている全国紙と地方紙のデータを利用する。総文字数は約 137.0 万字である。また、会話データは、日本語自然会話を書き起こした『名大会話コーパス』を利用する。総文字数は約 113.2 万字である。小説・新聞・会話のデータの総文字数から見れば、この3つのコーパスの規模は大体同じであると言える。これらのコーパスで、それぞれ「てあ」、「であ」というキーワードで検索する⁸¹。

6.5.1 「V テアル」の使用領域

上記の小説・新聞・会話コーパスから、「V テアル」表現を 818 例収集した。ジャンル別に「V テアル」の用例数をまとめたものが以下の表 6-5 である。

表 6-5. 各ジャンルにおける「V テアル」の使用状況

	小説		新聞	会話	合計
	地の文	会話の文			
V テアル	183	22	48	565	818
(%)	22	3	6	69	100

この表 6-5 から明らかなことは、「V テアル」の使用領域は偏っているという事実である。具体的には、会話コーパスでは、「V テアル」表現の用例が一番多く（565 例）、全体の約 69% を占めている⁸²。会話では、眼前の状況描写だけではなく、「言っている」、「考えてある」ように、具体的な結果状態が残されていないにも関わらず、話し手の主張や判断とい

⁸¹ 検索結果には、「そしてあたたかいパンと脂のよく出たスープで食事をしよう」のように「てあ」が含まれているが、「V テアル」表現ではないため削除する。また、「書いてあんのよ」のような用例も現れた。これらの文は「V テアル」の縮約形であるため、「V テアル」表現と見なす。

⁸² 会話コーパスの文字数は小説・新聞と比べて約 25 万字が少ないが、「V テアル」の用例数は小説・新聞より遥かに多い。

った主体的なものによる先行する動作との関連づけを表すものも多いため、「V テアル」が比較的多く使用されると考えられる。小説コーパスでは、「V テアル」表現が 205 例あり、全体の約 25%を占めている。中でも、眼前の場面描写といった「地の文」に「V テアル」が多く使用されている。新聞コーパスでは、「V テアル」表現の用例が一番少なく(48 例)、全体の約 6%にすぎない。新聞では「V テアル」があまり使用されていないのは新聞記事の特徴に関連していると考えられる。新聞記事は過去の出来事や現象を客観的に読者に伝えるという特徴をもち、動作主と対象を明示する能動表現が好まれると考えられる。「V テアル」の中では、動作主が省略されて対象に話者の関心が置かれる「受動型」の使用が圧倒的である⁸³。また、行為に話者の視点が置かれる「能動型」においては、話者の経験や主張を表す主観的判断が用いられる場合が多く、第三者の立場から出来事や現象を客観的に報道する新聞記事には「V テアル」はあまりふさわしくない。

ところで、小説コーパスでは、「地の文」としての「V テアル」の用例は 183 例であり、「会話の文」としての「V テアル」の用例は 22 例である。例えば、文(6.107)は眼前の場面を描写する「地の文」であり、文(6.108)は先行した動作行為の効力を表す「会話の文」である。

(6.107) 道の両側に畠があり、材木が積みかさねてある。

(6.108) 「もちろん言ってあるわよ」と涼しい顔で言う。

(『新潮社 100 冊 (CD-ROM)』)

この 22 例の「会話の文」と会話コーパスにある 565 例を合わせ、話し言葉としての「V テアル」の用例数は 587 例であり、全体の約 72%を占めている。すなわち、「V テアル」表現については、書き言葉よりも話し言葉として広く使用されていることが言える。

6.5.2 小説・新聞・会話における「V テアル」の用法

次に、6.3 節に挙げた「V テアル」の意味用法に対する分類基準に基づいて、収集した「V テアル」表現の実例をジャンル別に「対象の存在様態」、「結果の存在」と「行為経験の存在」という 3 つの用法に分類する。818 例の「V テアル」表現のうち、アスペクトの特徴

⁸³ 原沢(2005)参照。

が明示できるように、文末に位置するものだけを考察対象とし、(6.109)のようにヴォイスが関わっている「受身+テアル」の形式や(6.110)のように修飾節としての「Vテアル」表現は考察対象外とする。

(6.109) 今、手許に残っているその絵葉書には、次のように書かれてある。

(6.110) 太郎は、魚友の店先に置いてある三つばかりの樽のうち二つを丹念にのぞきこんだ。

(『新潮社 100 冊 (CD-ROM)』)

その結果、考察対象になる「Vテアル」の用例数は 667 例である。ジャンル別における「Vテアル」の用法は表 6-6 に示している⁸⁴。

表 6-6. 小説・新聞・会話における「Vテアル」の用法

	小説(地の文)		新聞		会話	
	例数	比率	例数	比率	例数	比率
対象の存在様態	81	70%	17	53%	304	58%
結果の存在	11	9%	2	6%	50	10%
行為経験の所有	24	21%	13	41%	165	32%
合計	116	100%	32	100%	519	100%

「対象の存在様態」は小説では 81 例(約 70%)、新聞では 17 例(約 53%)、会話では 304 例(58%)である。いずれのコーパスにおいても、一番多く使用されている用法である。また、「対象の存在様態」の比率は小説の地の文で一番高い。この用法は主に眼前の状況描写といった現象文に使われ、小説の地の文の特徴—状況の描写にふさわしいため、多く使われていると考えられる。「対象の存在様態」に使用されている動詞から見れば、「書く」という動詞は各コーパスにおいて出現数が一番多く、小説・新聞・会話コーパスにおいて、それぞれ 25 例(31%)、5 例(29%)、106 例(35%)ある。

「対象の存在様態」を表す「Vテアル」構文は存在動詞「アル」が表す事物の存在と深

⁸⁴ 各用法については、中間的な用例が見られることから、精度に問題があることは否めない。しかし、分類に関しては、時間をおいて 3 回にわたって見直している。全体の中 70%であるか 9%であるかを取り上げれば、それぞれの用法の使用傾向は知ることができると考えられる。

く結び付いている。前述したように、場所名詞句を要求するのは、動詞「冷やす」、「焼く」ではなく、補助動詞「アル」のほうであると考えられる。

(6.111) 冷蔵庫にビールが冷やしてある。

(6.112) テーブルの上に魚が焼いてある。

(再掲)

また、益岡（1997）は次の2つの根拠を示している。（6.113）のように、「止める」という動詞に対して、場所名詞句にニ格もデ格も両方使えるが、「Vテアル」に用いると、場所名詞句にデ格の使用が不自然になる。デ格ではなく、ニ格を要求するのは補助動詞「アル」のほうであると考えられる。

(6.113) a. 家の前に/でトラックを止めた。

b. 家の前にトラックが止めてある。

c. ?家の前でトラックが止めてある。

(益岡 1997:191)

さらに、(6.114) に示されるように、存在動詞「アル」は動作の潜在性のない存在対象に限られ、この特徴は「対象の存在様態」の「Vテアル」にも反映されている。

(6.114) a. *あそこに人がある。

b. ?あそこに人が吊るしてある。

(益岡 1997:191)

このように、「対象の存在様態」の「Vテアル」は典型的存在構文に一番近く、眼前描写文である。「いま、ここに」存在する事物は人間にとって最も直接的な経験である。その上、副島（2005、2007）をふまえ、「対象の存在様態」においては、動作主の顕在化、動きの時点の明示や動きの量の規定などの条件の限定は最も少ない⁸⁵。したがって、4.3.4 節で述べ

⁸⁵ 副島（2005、2007）は条件の限定の多少を根拠に基本的な用法と周辺的な用法を決めている。

た「概念的中心性」と「機能的中心性」という2つの側面から見ると、「対象の存在様態」は基本的な用法であると考えられる。「対象の存在様態」が一番多く使用されていることもこの主張を裏付けている。

文(6.115)～(6.118)においては、場所名詞句「看板に」、「窓の外の軒下に」、「そこに」、「店の欄間に」が現れている。そして、動作主、動きの時点や動きの量などの条件は現れていない。さらに、否定用法として対象は存在していないという意味になる。これらの文は眼前の状況を描写する「対象の存在様態」の用法である。「アル」の存在用法がプロファイルされ、「Vテ」の様態用法がベースとなっている。動作行為の結果として捉えるよりも、対象がVした状態で二格をとる場所名詞句の表す場所に存在しているとして捉えられやすい。つまり、動詞の「Vテ」の表す部分は修飾部分であり、「アル」は被修飾部分であると理解できる。文(6.115)では、「赤ちょうちん」という文字が「看板」に書かれている状態を表す。文(6.116)では、対象である「襦袢」が干し並べた状態で「窓の外の軒下」という場所に存在している。文(6.117)では、対象である「買い物」が置かれている状態で「そこ」という場所に存在している。文(6.118)では、対象「絵」が飾った状態で「店の欄間」という場所に存在している。

(6.115) 「赤ちょうちん」と、その看板には書いてあった。

(6.116) 机を置いた窓の外の軒下には子供の襦袢が干し並べてあった。

(『新潮社 100 冊 (CD-ROM)』)

(6.117) うんあーそれで買ったのよー。うん？そこに置いてあるのよ。

(『名大会話コーパス』)

(6.118) 久しぶりにその雑貨屋を訪ねてみると、店の欄間に子どもたちの絵が飾ってあった。

(『BCCWJ-NT』)

そして、「結果の存在」は、小説・新聞・会話ではそれぞれ、11例(9%)、2例(6%)、50例(10%)であり、どれも一番少ない。文(6.119)、(6.120)においては、場所名詞句が見られない。補おうとしても補うことができない。また、否定表現に付け加えると、対象の存在の否定ではなく、対象の変化状態の否定になる。この場合、「Vテ」の結果用法がベースとなり、結果状態から先行する動作行為を推論することになる。つまり、これらの

文においては、対象がある場所にどのような状態で存在しているかというよりも、動詞 V の表す動作がシフトされて動作への推論が強くなり、動作行為の結果として対象の状態がどのようになったのかとして捉えるほうが適切であると考えられる。

(6.119) その眼は日本人には珍しいほど茶がかっているし、鬢も染めてあるのか白髪一本みえない。

(『新潮社100冊(CD-ROM)』)

(cf. *ここに鬢も染めてある。)

(6.120) あの、おイモを細く切ったのをね、揚げてあるらしい、それが巻いてあるの、そいでね、あんがかかって煮たの、すごくおいしかった。

(『名大会話コーパス』)

(cf. *ここにおイモを細く切ったのをね、ここに揚げてあるらしい…略…)

また、「行為経験の存在」の用法は、小説では 24 例 (21%)、新聞では 13 例 (41%)、会話では 165 例 (32%) あり、「対象の存在様態」に次いで二番目の使用頻度となっている。小説と比べ、会話において「行為経験の存在」の用法が多く使われている。つまり、この用法は話し手の主観的判断によるものが多いため、書き言葉としては比較的少ないとみられる。文 (6.121) では、動作主である「太郎」が顕在化され、結果よりも行為という平面に話し手が関心をもっていると考えられる。「魚の名前をノートに書く」という行為はプロファイルされ、「太郎」とその行為の間の所有関係がベースとなる。文 (6.122) では、動作主が明示されていないが、文脈から動作主が話し手であることが推測される。しかも、動作主の意図性が読み取れる理由を表す「ため」が使われ、先行する動作行為の効力が基準時（発話時）に引き続き存在している意味が含まれている。文 (6.123) では、副詞「もう」が使われ、動作行為の時点が基準時より前にあることが明示され、やはり行為という平面に話し手が関心をもっていると考えられる。

(6.121) 太郎は、生れてこの方、自分の食べたことのある魚は、皆ノートに名前を書きつけてある。

(『新潮社100冊(CD-ROM)』)

(6.122) 少しでも涼を得るため、風呂場や流しでは大きなスイカを流水に当てて冷

やしてある。

(『BCCWJ-NT』)

(6.123) 終助詞のよとねの頻度数はもう調べてある。

(『名大会話コーパス』)

6.6 対象指向性

これまでの研究では、A型（ガ格に対象が位置する「Vテアル」）は「対象指向性」をもち、B型（ガ格に動作主が位置する「Vテアル」）は「行為指向性」をもつことを主張する場合が多い（益岡 1987；杉村 1996 など）。これに対し、副島（2007:142-151）は対象を表す名詞句がガ格かヲ格にかかわらず、「Vテアル」が「意志的な動作の結果生じた対象＝客体の状態」を表す「客体結果相」と主張している。その理由については、以下の2点が挙げられている。i) ヲ格の「Vテアル」構文は動作主を明示することができるが、必須項ではない。また、顕在化した場合でも題目語化しているという点で、能動形に対して結合価の減少が見られる。ii) ヲ格でマークされているSは、文法関係においては主語として機能しており、能格的である⁸⁶。

(6.124) a. 芳子が 紺緋の書生羽織！ 白い木綿の長い紐を 買いますよ。

格標示:	(能)	(絶)	
文法関係:	(主語)	(目的語)	(述語)
意味役割:	(動作主)	(対象)	

⁸⁶ 副島（2007）は柴谷（1986:76）によって指摘された対格性、能格性のパターンを次のように示している。

a. 対格パターン

S	V	(典型的には S=A=0 で、P が対格表示を受け、一般的に前者を主格 (NOM)、そして
A	P	V て後者を対格 (ACC) と呼ぶ。)

b. 能格パターン

S	V	(典型的には S=P=0 で、A が能格表示を受け、一般的には前者を絶対格 (ABS)、
A	P	V そして後者を能格 (ERG) と呼ぶ。)

(副島 2007:148)

b. 紺緋の書生羽織！白い木綿の長い紐を 買ってありますよ。

格標示:	(絶)	
文法関係:	(主語)	(述語)
意味役割:	(対象)	

(副島 2007:149)

加えて、「行為経験の存在」を表す「Vテアル」が「意志動詞からつくられる意志・勧誘形（シヨウ）、命令形（シロ）、願望態（シタイ）等のいわゆる『主観的表現』と共起できない」（副島 2007:170-171）。さらに、このタイプの「Vテアル」は動作主を疑問詞にした疑問文も作りにくいいため、弱い「対象指向性」を有する（副島 2009:170-171）。本稿も、この主張の基本的な部分を受け継ぎ、「Vテアル」は客体の状態に焦点が当てられる1つの「客体結果相」であることを主張する。

「行為経験の存在」を表す「Vテアル」は「動作主ガ対象ヲ～Vテアル」という構文形式をもっているとされているが、コーパスから抽出したデータの中では、主格に立つ動作主は表面上格助詞「ガ」ではなく、係助詞「ハ」で表されている「Vテアル」が多い。格助詞「ガ」は新出情報として使用されるのに対して、係助詞「ハ」は既知情報（主題）として使用されることが多い。「ハ」で表される動作主は既知情報（主題）として提示されていると考えられる。また、菅井（2002）は、ガ格は「叙述部（ドメイン）内における最高の顕著性」（p.178）というスキーマ的意味をもっていることを指摘している。すなわち、「行為経験の存在」の「Vテアル」における動作主がガ格でマークされにくいことは、動作主は最高の顕著になりにくいことを意味する。話し手の視点は既知情報ではなく、「ハ」の後ろの部分、つまり対象にあると考えられる。

ところで、「Vテアル」がもつ「対象指向性」はどこに由来しているのかという疑問が浮かんでくる。ここでは、3.4節で述べた参照点構造を用いて説明する。前述したように、「Vテアル」は存在動詞「アル」の用法を継承している。存在を表す「アル」が表す概念構造では、認知主体は場所を参照点として、ターゲットである存在物へアクセスするプロセスを表している。最初に、認知主体は際立ちの高い事物である場所を参照点とする。そして、参照点を経由して支配領域にある存在物にアクセスする。この場合、認知主体の焦点は参照点からターゲットに移行される。ターゲットである存在物はより際立って認知される対象になる。これに対し、参照点である場所は背景的になり、ターゲットである存在物を位

置くることになっている。「対象の存在様態」と「結果の存在」の「Vテアル」では、典型的存在構文と同様に、場所は背景的に位置づけられ、客体対象はより際立って認知される。つまり、客体対象は焦点化されるわけである。

一方、前述したように、「行為経験の存在」を表す「Vテアル」は存在動詞「アル」の所有用法を継承していると考えられる。所有物が具体的な領域ではなく、抽象的な領域に存在するという点に関しては、「アル」の所有用法は存在用法と少し異なるが、両者の認知プロセスは同様である。認知主体は所有者を参照点として、ターゲットである所有物へアクセスするプロセスを表す。この場合、参照点としての所有者は背景的であり、ターゲットとしての所有物は前景的である。従って、「行為経験の存在」を表す「Vテアル」においては、動作主（経験主）は背景的に位置づけられ、客体対象はより際立って認知される対象であると考えられる。

6.7 「Vテイル」、「Vラレテイル」との比較

対象の結果状態を表すには、「Vテアル」形式の他に、「Vテイル」と「Vラレテイル」形式も挙げられる。本節では、「Vテアル」を「Vテイル」、「Vラレテイル」と比較し、「Vテアル」の「対象指向性」をより明らかにする。

(6.125) テーブルの上には、二枚の航空券が、まるでお守りのように置いてある。

(6.126) 「おや、車道のあるなすぐそばに、小さなぼうしが落ちているぞ。風がもうひとふきすれば、車がひいてしまうわい。」

(6.127) そこにやはり西洋式の家具が置かれている。

(『BCCWJ-NT』)

寺村（1984:147）は、眼前の状態を、「自然にそのようにある」と捉える場合には「Vテイル」が用いられ、「何らかの外部からの力、作用によってもたらされたものである」と捉える場合には「Vテアル」と「Vラレテイル」が用いられる。その上で、その「外部からの力、作用」を意図的な行為と捉えられる場合に「Vテアル」、そうでない場合に「Vラレテイル」になると指摘している。しかし、寺村自身も指摘するように、実際の選択には他の複雑な要素が絡んでいる。既に述べたように、「Vテアル」の意図性は動詞に由来し、構文自体のものではない。意図性が感じられない「Vテアル」表現も数多く存在する。

まず、「V テイル」と「V テアル」との違いを分析する。「V テアル」とは異なり、「V テイル」の場合は結合価の 1 減 (2 項述語文から 1 項述語文になる) の現象が起こらない。「V テアル」は主に客体の結果状態を表すのに対して、「V テイル」は主に主体の結果状態を表している⁸⁷。

- (6.128) a. 太郎が窓を開ける。(参加者 2)
b. 窓が開けてある。(参加者 1)
c. 太郎が窓を開けている。(参加者 2)

(副島 2007:133 ; 一部修正)

「V テアル」と「V テイル」とがもつこのような違いは語彙的源泉となる存在動詞「アル」と「イル」の区別に由来していると考えられる。図 6-4 に示されているように、「アル」の表す概念構造では意志性による動作の潜在性をもたない客体の存在が際立っている。これに対し、「イル」の表す概念構造では意志性による動作の潜在性をもつ主体の存在が際立っている。このような特徴は「V テアル」と「V テイル」にも引き継がれて、それぞれ客体中心と主体中心になっている。

次に、「V テアル」と「V ラレテイル」との相違点について見てみよう。まず、両表現に用いられる動詞の種類が異なる。「V テアル」と比べ、「V ラレテイル」表現に用いられる動詞の範囲は広い。「見る」、「嫌う」など、「V テアル」に用いられない動詞は「V ラレテイル」に用いられる。「V ラレテイル」は「V テイル」の特徴を継承して「結果の継続」だけではなく、「動作の継続」としても使われている。

(6.129) いま私は両方から不信の目で見られている。

(6.130) 他の王子に劣らない自負はあるがなぜか父に嫌われている。

(BCCWJ-NT)

「V ラレテイル」の各用法がどのような割合で使用されているかを把握するために、筆者は『日中対訳コーパス』にある以下の 6 編の日本語小説を対象に「V ラレテイル」表現

⁸⁷ 副島 (2007) は、「V ツツアル」との対比によって、「V テイル」は結果相であり、動詞の表す動作を「基準時点において、結果の状態としてとらえ、さしだす」(p.132) と指摘している。

を 149 例収集した。

- ・『坊ちゃん』(夏目漱石)
- ・『雪国』(川端康成)
- ・『砂の女』(安部公房)
- ・『黒い雨』(井伏鱒二)
- ・『あした来る人』(井上靖)
- ・『ノルウェイの森』(村上春樹)

この 149 例の「V ラレテイル」表現を分析した結果、表 6-7 に示されるように、「結果の継続」と「動作の継続」はそれぞれ 56 例と 40 例である。そして、これらの表現に対する中国語訳には受動表現は少なく、能動表現が多く使用される。よって、中国人学習者にとっては、「V テアル」と同様に「V ラレテイル」も困難な項目の 1 つであると考えられる。

表 6-7. 「V ラレテイル」形式のアスペクトの意味

意味 形式	結果の 継続	動作の 継続	パーフェ クト	反復 (習慣)	単なる 状態	内容の 受身	合 計
V ラレテ イル	56 38%	40 27%	18 12%	9 6%	8 5%	18 12%	149 100%

「V ラレテイル」とは異なり、「V テアル」は「動作の継続」を表さない。また、(6.131) に示されるように、「パーフェクト」を表す「V テアル」構文は「V ラレテイル」に置き換えると意味が全く異なるため、ここでは、「結果の継続」を表す「V テアル」と「V ラレテイル」に焦点を絞り、両者の比較を進めていく。

(6.131) a. 「二、三時間はね。それ以上、長く二人でおいとくと、シメシがつかないから、僕は帰る、と言ってある」

(『新潮社 100 冊 (CD-ROM)』)

b. 「二、三時間はね。それ以上、長く二人でおいとくと、シメシがつかないから、僕は帰る、と言われている」

「結果の継続」を表す「V テアル」と「V ラレテイル」は、動作主が話し手以外の者であるという点を共有している。また、「V ラレテイル」は、「V テアル」と同様に、動作主

が義務的に省略されると指摘されている（工藤 1990:91-92 ; 1991:16）。確かに、「V ラレテイル」表現は客体の状態を表し、動作主を省略する場合が多い。しかしながら、「V ラレテイル」では必ずしも動作主を顕現化してはいけないわけではない。以下の用例に示されているように、「結果の継続」を表す「V ラレテイル」表現においても、動作主を顕現化することができる。文（6.132）、（6.133）は「結果の継続」を表しているが、両方とも動作主が顕在化されている。

(6.132) 船は白蟻によって食いつくされているという報告を今日、受けました。

(6.133) バグダッド中心部では、アラウィ首相の顔をあしらった選挙ポスターが何者かによって破られていた。

(『BCCWJ-NT』)

これらの例文から見れば、話し手にとって望ましくない結果の場合、「Vラレテイル」表現においては動作主を顕現化することができる。従って、「Vラレテイル」表現においては、動作主を補おうとすると補うことが可能である。これに対し、「結果の継続」を表す「Vテアル」表現においては、動作主が義務的に省略され、補うことが不可能である。この点から見れば、「Vテアル」は「Vラレテイル」よりも動作を受ける側である客体対象の結果状態を客観的にさしだす。

ところで、「結果の継続」を表す「Vラレテイル」では、動作主が明示される場合、ニ格ではなく、「ニヨッテ」でマークされるのが一般であるというところに非常に興味深い。ここでは、類像性（Haiman 1983）の観点からその理由を説明する。「ニ」も「ニヨッテ」も共に動作主をマークする機能をもっているのであれば、「ニ」と比べて言語的にみて長さのある「ニヨッテ」の方が、tr と lm の概念上の距離のより長い関係を表すのに用いられるという類像性が想定される（谷口 2005:85）。

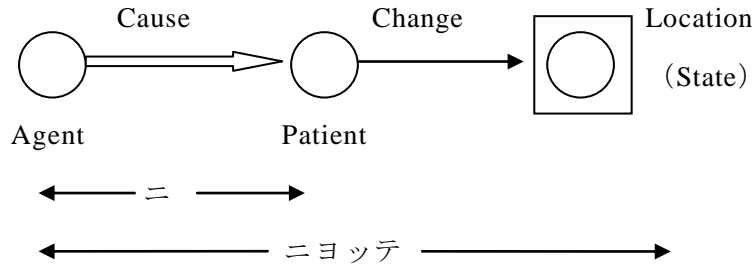


図 6-17. プロトタイプ他動詞と「ニ」、「ニヨッテ」(谷口 2005:85 ; 一部修正)

谷口 (2005) によると、図 6-17 のように、「壊す」、「動かす」といった他動詞は、1m は Change の分節に位置しているが、結果としての位置・状態を表す分節に位置する参加者も同じ 1m であるため、受身文にした場合、tr と 1m の距離は長短 2 通りの解釈が可能である。

- (6.134) a. この窓は、昨日太郎 {に/によって} 壊された。
 b. あの岩は、昨日太郎 {に/によって} 動かされた。

(谷口 2005:84)

一方、生産動詞の場合は、action chain の中間部分が欠落し、1m は状態の分節にしか現れないため、tr と 1m の距離は必然的に長くなる。したがって、「ニ」ではなく、「ニヨッテ」のみが動作主をマークすることになる。

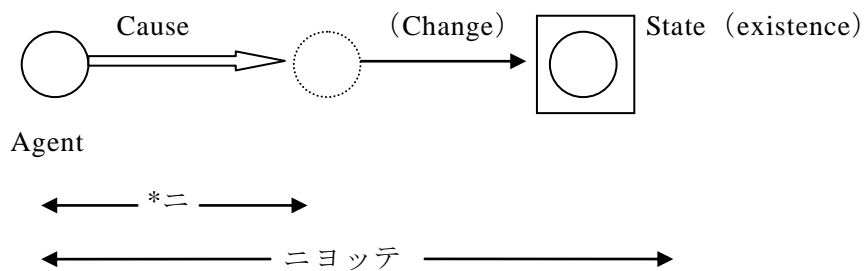


図 6-18. 生産動詞と「*ニ」、「ニヨッテ」(谷口 2005:86 ; 一部修正)

- (6.135) a. この絵は、太郎 {*に/によって} 描かれた。
 b. この石碑は、太郎 {*に/によって} 建てられた。

(谷口 2005:84)

谷口（2005）の観点に基づき、「V ラレテイル」においては、動作主を「ニ」でマークするか、「ニヨッテ」でマークするかという使い分けも類像性の観点から説明できる。図 6-17 に示されているように、「結果の継続」を表す「V ラレテイル」の場合は、tr が状態の分節に位置し、Im が Cause の分節に位置し、tr と Im の距離が必然的に長くなるため、「ニヨッテ」のみが動作主のマークに選ばれる。これに対し、「動作の継続」を表す「V ラレテイル」の場合は、動作終了後の結果状態が不問であり、tr が Change の分節に位置しており、Im が Cause の分節に位置する。よって、動作主がニ格でマークされる場合が多い。

(6.136) 彼の力強い体に押しつけられている間、彼女の意識は非現実的な空間をさまよっていた。

(6.137) 兵士たちにあちこち探られているあいだ、アザクは、すさまじい形相をして彼らを睨みつけていたが、いっさい抵抗はしなかった。

(『BCCWJ-NT』)

また、「V テアル」は話し手にとって中立的な結果または望ましい結果の場合に用いられ、望ましくない結果には用いられにくい。これに対し、「V ラレテイル」は話し手にとって中立的な結果または望ましくない結果（被害の意味）の場合に用いられる。そのため、両者が置き換えられるのは話し手にとって中立な結果の場合であると考えられる。

(6.138) しかし、広間でこの光景がくり広げられている間に、ハレムの浴室では、浴槽の中で幼児が殺されていた。

(『コンスタンティノーブルの陥落』)

(6.139) ??しかし、広間でこの光景がくり広げられている間に、ハレムの浴室では、浴槽の中で幼児が殺してあった。

(6.140) しかも、前日の空襲により通信施設が破壊されていたため、情報確認に手間どり、そのことがパニック状態に拍車をかけた。

(『BCCWJ-NT』)

(6.141) ??しかも、前日の空襲により通信施設が破壊してあったため、情報確認に手間どり、そのことがパニック状態に拍車をかけた。

さらに、実際の動作が行われていない場合、すなわち、比喩的な表現においても、「V ラレテイル」表現が用いられるが、「V テアル」表現は用いられにくい。

(6.142) 何も話さないでいる苦しさが、二人の間のやみの中に置かれている。

(『あした来る人』)

(6.143) ??何も話さないでいる苦しさが、二人の間のやみの中に置いてある。

以上のように、「V テイル」、「V ラレテイル」、「V テアル」の意味特徴は以下の表 6-8 にまとめることができる。「V テイル」の基本的意味は、限界動詞と結びつく場合、「結果の継続」を表す。非限界動詞と結びつく場合、「動作の継続」を表す。そして、「V ラレテイル」は「V テイル」の特徴を受け継いでいる。一方、「V テアル」の基本的意味は、限界動詞と結びつく場合、「結果の継続」を表す。また、「V テイル」は積極的に主体の状態を表すのに対し、「V テアル」は積極的に客体の状態を表す。「V ラレテイル」も客体の状態を表しているが、「V テアル」とは異なり、動作主を補うことが可能である。よって、「V テアル」は積極的に客体の状態をさしだす1つの「客体結果相」である。

表 6-8. 「V テイル」、「V ラレテイル」、「V テアル」の意味的特徴

形式 \ 意味	基本的意味		派生的意味
	限界動詞	非限界動詞	
V テイル	結果の継続	動作の継続	パーフェクト/反復 (習慣) /単なる状態
	(主体の状態 ⁸⁸)		
V ラレテイル	結果の継続	動作の継続	パーフェクト/反復 (習慣) /単なる状態
	(客体の状態)		
V テアル	結果の継続	—	パーフェクト
	(客体の状態)		

6.8 結

本章では、「V テアル」表現の構文的・意味的特徴を考察した。「V テアル」において用

⁸⁸ 副島 (2007) は、「V テイル」を主体結果相と名付け、基本的に主体の状態を表すと指摘している。

いられやすいのは他動性の高い動詞であり、特に「書く」、「置く」という2個の動詞が高頻度で使用されている。そして、「Vテアル」を「対象の存在様態」、「結果の存在」と「行為経験の存在」に分類し、認知文法の枠組みで、「Vテアル」の合成構造を明らかにした。

また、異なるジャンルのテキストにおける「Vテアル」の使用実態を考察した結果、この構文の使用領域は偏っており、書き言葉より話し言葉として多く使用されている。これまで、「結果の継続」が基本的用法と指摘されているが（益岡 2000、副島 2003）、本研究は、対象が具体的な場所にある状態で存在していることを表す「対象の存在様態」は基本的な用法であると主張する。この用法は、書き言葉においても話し言葉においても一番多く使用されている。

さらに、「Vテアル」を「Vテイル」、「Vラレテイル」と比較させて、「Vテアル」は「対象指向性」をもつことがより明らかになった。「Vテイル」は積極的に主体の状態を表すのに対し、「Vテアル」は積極的に客体の状態を表す。そして、「Vテアル」と「Vラレテイル」との類似性がしばしば指摘されているが、両者を比較した結果、「Vテアル」においては、動作主が義務的に省略されるが、「Vラレテイル」においては、動作主を顕現することが可能である。これも「Vテアル」が「客体結果相」であることを裏付けている。

第7章 「V有」、「有V」と「Vテアル」の対照

本章では、第4章、第5章、第6章の考察結果に基づき、存在動詞を語彙的源泉とする中国語の「V有」、「有V」と日本語の「Vテアル」を対照させて両言語の存在型アスペクト形式の共通点と相違点を明らかにする。これまで、日本語の「Vテアル」に関する日中対照研究では、主に中国語の「V着」が取り上げられている（鄭 2010；郑・冯 2010；刘 2012；北村 2013 など）。しかしながら、中国語のアスペクト助詞「V着」は動作の持続と結果の持続両方を表し、「Vテアル」よりも「Vテイル」の方に近いと考えられる。また、副島（2017）は、類型論の視点から日本語の「Vテアル」に対して、タイ語には類似した構文があるものの、中国語や英語、ポルトガル語には該当する構文が存在していないと述べている。中国語には「Vテアル」に該当する構文は本当に存在していないかと、筆者は日本語学習を始めて以来考え続けてきた。第4章と第5章で考察してきたように、中国語の「V有」と「有V」は日本語の「Vテアル」に非常に類似していることが分かった。これらの形式を対照させることによって、両言語の存在型アスペクト形式の特徴がより明らかになるとともに、中国人日本語学習者或いは日本人中国語学習者に対してより効果的な指導にも結びつくことになる。

本章の構成は以下の通りである。

7.1節では、構文的・意味的な面から、中国語「V有」構文と日本語「Vテアル」構文を考察し、両構文の共通点と相違点を探り、その原因を明らかにする。7.2節では、中国語「有V」構文を、中国語「V有」構文と比較した上で、構文的・意味的な面から日本語「Vテアル」構文と対照させ、両構文の共通点と相違点を探り、その原因を究明する。7.3節では、文法化の観点から、中国語「V有」構文、「有V」構文と日本語「Vテアル」構文の特徴を考察する。7.4節では、中国語「V有」構文、「有V」構文と日本語「Vテアル」構文が反映する日中両言語の事態に対する捉え方を見る。7.5節では、本章のまとめを述べる。

7.1 「V有」と「Vテアル」の対照

7.1.1 構文的・意味的特徴

第4章で述べたように、中国語の「V有」構文は基本的に（7.1）のように動作主が明示

されていない「対象の存在様態」と、(7.2) のように動作主が明示されている「行為経験の存在」に分かれる。

- (7.1) 左臂衣袖上 縫有 英国 国旗。
zuǒbì yīxiù shàng féng-yǒu yīngguó guóqí
左袖 上 縫う-YOU イギリスの国旗
(左袖にイギリスの国旗が縫ってある。)

(『京华时报』、2007-03-31)

- (7.2) 我们 拍有 照片 呢。
wǒmen pāi-yǒu zhàopiàn ne
私達 撮る-YOU 写真 よ
(私たちは写真を撮ってあります。)

(『中国語辞典』)

これに対し、第6章で述べたように、日本語の「Vテアル」構文には基本的に(7.3)のように場所名詞句が共起して対象がどのように存在しているかを描写する「対象の存在様態」、(7.4)のように場所名詞句が共起できず先行する動作行為がシフトされる「結果の存在」と、(7.5)のように先行する動作行為の効力が引き続く「行為経験の存在」という3つのタイプが存在する。

- (7.3) テーブルの上に魚が焼いてある。
(7.4) 窓が開けてある。
(7.5) この話は既に彼に言っている。

(再掲)

このようにして、「V有」と「Vテアル」の構文特徴は以下の表7-1にまとめられる。

表 7-1. 「V 有」と「V テアル」の構文的特徴

	「V 有」構文	「V テアル」構文
対象の存在様態	場所+V 有+対象	場所ニ+対象ガ+V テアル
結果の存在	—	対象ガ+V テアル
行為経験の存在	動作主+V 有+対象	動作主ガ+対象ヲ+V テアル

表 7-1 から分かるように、「V 有」と「V テアル」との構文特徴は非常に類似している。日本語において、(7.6) のように、「対象の存在様態」を表す「V テアル」は典型的存在構文に非常に近い。「掛ける」という行為によって、壁に絵があるという結果になるが、ここでは、絵の存在の状態が注目されており、「掛ける」行為は二義的な意味であり、広義の存在表現であると考えられる。同様に、(7.7) のように、「対象の存在様態」を表す「V 有」も典型的存在構文に近い。「挂（掛ける）」は「有」を修飾する成分として解釈できる。

(7.6) 壁に絵が掛けてある。

(7.7) 墙上 挂有 一幅 画。

qiángshàng guà-yǒu yīfú huà

壁上 掛ける-YOU 一枚 絵

(壁に絵が一枚掛けてある。)

(再掲)

また、「対象の存在様態」を表す「V 有」と「V テアル」においては、動作主体を表す名詞句が義務的に省略されている。受身文の特性は動作主の「脱焦点化 (agent defocusing)」である (Shibatani 1985)。「V 有」と「V テアル」とは、動作主体を「脱焦点化」させるところに受身文と共通点がある。これについては、以下のテストを用いて確かめることができる。文 (7.8) では、動作主を表す名詞句は「ガ」のみならず、「ニ」、「ニヨッテ」などの形式をとって明示することもできない。同様に、文 (7.9) では、能動文の形としても受動文の形としても動作主を挿入することができない⁸⁹。

⁸⁹ 「墙上, 工作人员挂有一幅画 (壁には、スタッフは絵を掛けてある)」のように、会話文の中で、「墙上 (壁上)」の後ろにポーズを入れて「墙上 (壁上)」を主題とすると、文の容認度が高くなるが、「対象の存在様態」ではなく、「行為経験の存在」の意味が読み取れる。また、「工作人员在墙上挂有一幅画

(7.8) 壁に{??スタッフが/??スタッフに/??スタッフによって}絵が一枚掛けてある。

(7.9) 墙上 {??工作人员 / *被 工作人员} 挂有 一幅 画。

qiángshàng gōngzuòrényuán bèi gōngzuòrényuán guà-yǒu yīfú huà
壁上 スタッフ 受身 スタッフ 掛ける-YOU 一枚 絵

動作主が完全に背景化され、動作・行為による結果として捉えるより、存在の状態を表す場面描写として捉えられやすい。つまり、ある場所に対象が動詞 V の表す動作によってもたらされる結果状態で存在しているという意味を表している。いわゆる現象文である。そして、「対象の存在様態」を表す「V テアル」構文に対して人称制限が課されており、一般に動作主が話し手ではない第三者であることは既に指摘されている（森田 1977；寺村 1984；益岡 1987 など）。I 型の「V 有」についても同じことが言える。例えば、(7.10)、(7.11) のように、動作主になれるのは話し手以外の者に限られ、1 つの現象文である。話し手の焦点は対象にある。話し手が動作主である場合は、(7.12)、(7.13) のような文が使用される。つまり、「対象の存在様態」を表す「V 有」と「V テアル」の間に対応関係が見られることになる。

(7.10) 黑板 上 写有 两个 字。

hēibǎn shàng xiě-yǒu liǎnggè zì

黑板の上 書く-YOU 2つ 字

(黑板の上に2つの字が書いてある。)

(7.11) 桌上 放有 一本书。

zhuōshàng fàng-yǒu yīběn shū

机の上 置く-YOU 一冊 本

(机の上に本が一冊置いてある。)

(7.12) 书 放 在 桌上 了。

shū fàng zài zhuōshàng le

本 置く 机の上に LE

(本は机の上に置いた。)

(スタッフが壁に絵を掛けてある)」のように、場所名詞句の前に「在」を付け加えると、文が自然になるが、これもやはり対象の存在を表す現象描写文ではなく、「行為経験の存在」になる。

(7.13) 我 把 书 放 在 桌 上 了。

wǒ bǎ shū fàng zài zhuōshàng le

私 処置 本 置く に 机の上 LE

(私は本を机の上に置いた。)

(作例)

ところが、「V テアル」構文においては、場所を表す名詞句が共起せず、先行する動作行為がシフトされ、対象の結果状態が存続していることを表す「結果の存在」のタイプがある。文(7.14)、(7.15)では、場所を表す名詞句を挿入しようとしても付け加えることはできない。

(7.14) 髪が黒く染めてある。

(7.15) 窓が開けてある。

(作例)

一方、(7.16)、(7.17)に示されているように、「V 有」構文においては、(7.14)、(7.15)のような「結果の存在」に相当する用法は存在しない。

(7.16) *染有 头发。

rǎn-yǒu tóufā

染める-YOU 髪

(7.17) ??开有 窗户⁹⁰。

kāi-yǒu chuānghù

開ける-YOU 窓

(作例)

動詞 V ではなく、「有」を中心としている I 型の「V 有」構文には常に物や人の位置変化又は状態変化という意味が含意されている。場所名詞句を要求するのは存在動詞「有」

⁹⁰ 文(7.17)については、場所名詞句が示される前文脈があれば、容認度が高くなる。ただし、この場合、「开」は「開ける」という意味ではなく、「造る」という意味になる。

によるものであると考えられる。つまり、場所を要求する「有」の本来の存在義が色濃く残されている。大堀（2005:4）で挙げられている文法化の度合いを判断する基準に照らして、「V テアル」構文に生じた「テアル」に比べ、「V 有」に生じた「有」の意味・機能は具体的である。「テアル」と比べ、「有」の文法化の度合いはそれほど高くないと言える。

しかしながら、(7.18) のように、「V 有」には具体的な動作行為がほとんど感じられない「単なる状態」の用法もある。この「単なる状態」には、基本的に先行する動作を問題としないわけであるが、過去の動作の結果としての痕跡であると解釈する「痕跡的認知」（国広 1985:8）のプロセスが介在していると考えられる。例えば、(7.19) では、先行する出来事は考えられないが、「明月（明月）」の位置関係について、「人が動かした結果」と捉えられることが分かる。これに対し、「V テアル」の方にはこのような用法はない。

(7.18) 中国 战机 编队 中 包含有 至少 3 种
 zhōngguó zhànjī biānduì zhōng bāohán-yǒu zhìshǎo sān zhǒng
 中国戦闘機隊 中 含む-YOU 少なくとも 3 種類
 类型的 战机。
 lèixíng de zhànjī
 種類の 戦闘機

（中国戦闘機隊の中には少なくとも 3 種類の戦闘機が含まれている。）

（中央电视台、『中国国际频道』、2013-01-11）

(7.19) 天上 挂有 一轮 明月。
 tiānshàng guà-yǒu yīlún míngyuè
 空 掛ける-YOU 一輪 明月

（空に一輪の明月がかかっている。）

（作例）

次に、「行為経験の存在」を表す「V 有」構文と「V テアル」構文を見てみよう。「行為経験の存在」を表す「V テアル」構文は動作・行為を行った動作主が顕在化され、対象がガ格ではなく、ヲ格で示されている。文脈上動作主が省略される場合も少なくないが、対象がヲ格で示されるので、動作主が話者にとって存在していると判断できる。文 (7.20) は動作主「僕」が顕在化され、文 (7.21) は動作主が潜在化されている。対象がヲ格で示

されていることから、話者の関心は対象ではなく、「飛行機の予約をした」、「鑑定を頼んだ」という動作・行為にあると言える。「行為の結果が基準時において何らかの有効性」（益岡 1987 : 226）を示している。また、「すでに」「とっくに」などのような動きの時点を示す副詞的成分と共起できることもこのタイプの「V テアル」構文が動作を直接とらえ、基準時より前に位置づけていることを裏付けている。

(7.20) 僕は飛行機の予約をしてあるのだ。

(副島 2007 : 161)

(7.21) それで、京都府警に鑑定をたのんであるの。

(益岡 1987 : 225)

「行為経験の存在」を表す「V 有」と「V テアル」は、動作主が主格の位置に立ち、対象は対格をとるという点を共有している。例えば、(7.22) のように、動作主「迪拜警方」が顕在化されている。ただし、「行為経験の存在」の「V テアル」においては、(7.20)、(7.21) のように、動作主が話し手になり、しかも、省略される場合が多い。一方、(7.22)、(7.23) のように、「V 有」においては動作主が話し手でない場合も少なくない。また、一般に動作主を省略することができない。

(7.22) 迪拜 警察 局长 日前 表示, 迪拜 警方 掌握有 新的 证据,

dǐbài jǐngchá júzhǎng rìqián biǎoshì dǐbài jǐngfāng zhǎngwò-yǒu xīnde zhèngjù

ドバイ警察局長 近日 言う ドバイ警察側 把握する-YOU 新しい証拠

足以 指控 摩萨德 卷入了 针对 马巴胡赫 的 刺杀 行动。

zúyǐ zhǐkòng mósàdé juǎnrù-le zhēnduì mǎbāhúhè de cìshā xíngdòng

十分 訴える モサド 巻き込まれる-LE に対する 名前 の 暗殺行動

(近日、ドバイ警察局長はドバイ警察側が新しい証拠を把握しており、マサドがマバフへに対する暗殺行動に巻き込まれていると十分に訴えることができると言っている。)

(中央电视台、『中国新闻』、2010-02-22)

(7.23) 此外，青奥会 还 安排有 20 项 文化 教育
 cǐwài qīngàohuì hái ānpái-yǒu èrshí xiàng wénhuà jiàoyù

その他 ユースオリンピック も 手配する-YOU 20 項目 文化教育
 活动。

huódòng

イベント

(その他、ユースオリンピックの主催側は 20 項目の文化教育イベントをも手配している。)

(『人民日报』、2014-08-17)

加えて、同じ「行為経験の存在」であっても、「V 有」と「V テアル」においては次のような相違点が見られる。例えば、(7.24) に示されるように、視覚的に確認できない結果状態をもたらす動詞は普通に「V テアル」構文に用いられるが、「V 有」構文には用いられない。『中日対訳コーパス』においても、益岡 (1987) でいう B₂ 型の「V テアル」構文に対応する中国語訳は「V 有」構文ではなく、「V 了」構文や他の表現になっている。この点からも、「V 有」構文の「有」は意味・機能は具体的であり、文法化度合いが「テアル」より低いと言える。「V 有」構文は動作終了後、結果状態の存在が求められる。

(7.24) a. 集合する時間を言てあったのですが、…略…

b. *我 说有 集合 的 时间, …略…

wǒ shuō-yǒu jíhé de shíjiān

私 言う-YOU 集合時間

(7.25) a. ホテルは既に予約してある。

b. *我 已经 预约有 酒店

wǒ yǐjīng yùyuē-yǒu jiǔdiàn

私 既に 予約する-YOU ホテル

(作例)

以上をまとめると、「V 有」構文と「V テアル」構文においては共通点が存在しているものの、相違点も否定できない。両者の意味用法の異同を表 7-2 に示すことができる。すなわち、「V 有」と「V テアル」は「対象の存在様態」と「行為経験の存在」という 2 つの用

法を共有している。しかし、「V有」には「結果の存在」という用法はない。一方、「Vテアル」には「単なる状態」という用法は存在しない。

表 7-2. 「V有」構文と「Vテアル」構文

	「V有」構文	「Vテアル」構文
対象の存在様態	○	○
行為経験の存在	○	○
結果の存在	×	○
単なる状態	○	×

7.1.2 動詞に関する制限

「V有」と「Vテアル」に用いられる動詞にも類似した特徴が見られる。両構文には「主体動作・客体変化動詞」が一番用いられやすい。「パーフェクト」の意を表す場合に、「主体動作動詞」なども可能である。

「Vテアル」に使われる動詞の中では、出現頻度が前5位の動詞は「書く」、「置く」、「貼る」、「掛ける」、「記する」である。一方、「V有」構文に使われる動詞の中では、出現頻度が前5位の動詞は「印（刷る）」、「装（取り付ける）」、「存（預ける）」、「留（残す）」、「写（書く）」である。これらの動詞は全て他動性の高い「主体動作・客体変化動詞」であり、動作が終わった後に、客体対象の結果状態が確認できる。

「主体動作・客体変化動詞」が「Vテアル」構文に用いられ、対象の存在の在り方が描写され、広義の存在表現になる場合が多い。例えば、文（7.26）、（7.27）は、動詞のテ形「飾って」、「貼って」は客体対象の存在の在り方を規定すると理解しても可能である。つまり、存在表現の一種と考えられる。この点に関しては、益岡（1987）、岡（2013b）、神永（2008）などでも指摘されている。

(7.26) 久しぶりにその雑貨屋を訪ねてみると、店の欄間に子どもたちの絵が飾ってあった。

(7.27) 模造紙にはたくさんの写真が貼ってある。

(『BCCWJ-NT』)

一方、中国語の「V有」においても同じことが言える。例えば、文(7.28)、(7.29)は『中日対訳コーパス』から引用した用例である。日本語の原文(a)に対する中国語の訳文(b)は「V有」構文が使われている。「有」は対象の存在を表し、「安(置く)」、「嵌(鏤める)」は存在の様態を規定する役割である。その根拠として、これらの文は動詞Vを省略した典型的な存在表現と意味がほぼ同じである。つまり、「主体動作・客体変化動詞」が用いられる「対象の存在様態」の「V有」構文と「Vテアル」構文との対応関係が見られ、対象がある状態で存在していることが示される。

(7.28) a. 窓際に机と椅子が置いてある。

b. 窗边 安有 桌椅。

chuāngbiān ān-yǒu zhuōyǐ

窓際 置く-YOU 机と椅子

(7.29) a. 襖は金粉がちりばめてあった。

b. 隔扇 上面 嵌有 金粉。

géshàn shàngmian qiàn-yǒu jīnfěn

襖 上 鏤める-YOU 金粉

(再掲)

しかしながら、(7.30)、(7.31)が示しているように、「主体動作・客体変化動詞」である「取り外す」、「消す」などの「消失」の意味をもつ動詞は「Vテアル」構文に用いられるが、同じ意味をもつ中国語の「摘掉(取り外す)」、「擦(消す)」は「V有」構文に用いると、不自然になる。

(7.30) a. 万一智津香が籠城しようとしてもそれを防ぎ、いつでも室内へ踏み込んでこられるようにするための措置として、チェーンを取り外してあるわけだ。

b. 为了 以防 万一、即使 智津香 闭门不出 的时候 也 能够

wéile yǐfáng wànyī jíshǐ zhìjīnxiāng bìménbúchū de shíhòu yě nénggòu

万が一のため 逆接 名前 籠城する の 時 も 可能

随时 冲进 房间里、他们 摘掉 { *有/ *着/ 了 } 门链。
 suíshí chōngjìn fángjiānlǐ tāmen zhāidiào -yǒu -zhe -le ménliàn
 いつでも 踏み込む 室内 彼ら 取り外す -YOU -ZHE -LE チェーン
 (『BCCWJ-NT』)

(7.31) a. 黑板に書いた字が消してある。

b. 写 在 黑板上 的 字 擦掉 { *有/ *着/ 了 }
 xiě zài hēibǎnshàng de zì cādiào yǒu zhe le
 書く 黑板に の 字 消す -YOU -ZHE -LE

(作例)

動詞「取り外す」、「消す」は、ある場所から客体対象が消えるという「消失」の意味を表す。動詞の表す動作は終了時に客体対象に位置変化が起こされ、移動の一種とも考えられるが、一般の移動動詞とは異なり、「取り外す」類の動詞の表す動作は、移動の起点を特定できるものの、終点は特定されないという特徴をもっている。動作が終わった時点で、着点領域に客体対象の出現の確認は一般に難しいため、これらの動詞は「V有」構文に用いられにくい。すなわち、「Vテアル」においては、客体対象に変化を与える他動性の高い動詞が用いられやすいのに対して、「V有」においては、他動性よりも客体対象の「出現」という意味特徴をもつ動詞が用いられやすい。日本語の「Vテイル」、「Vテアル」とは異なり、「V有」、「V着」は動詞の意味と協働的である。

また、「主体動作動詞」の中では、「安排（手配する）」、「发表（発表する）」などの一部の動詞はある意味では動作が終わって存在物が現れ、「V有」に使える。しかし、「说（話す）」のような「言語活動」表す動詞や「考虑（考える）」などの思考動詞は客体対象の「出現」という意味特徴をもたないため、「このことは既に彼に言っている」や「このことは既に考えてある」という意味を表すには、「V有」構文には容認されない。これに対し、これらの動詞は自然に「Vテアル」に用いられ、何らかの行為の有効性が表されている。

(7.32) *我 跟 他 说有 这件 事情。

wǒ gēn tā shuō-yǒu zhèjiàn shìqing
 私 彼に 話す-YOU このこと

(7.33) *我 考慮有 这件 事情。

wǒ kǎolù-yǒu zhèjiàn shìqing

私 考える-YOU このこと

(作例)

(7.34) こちらの事情は委細、残らず先方に話してあり、お前の就職に就いても既に承諾済みである。

(7.35) 「いったい、犯人はどこへ消え去ったのか—この答えも、僕はちゃんと考えてあります。…略…

(『BCCWJ-NT』)

一方、「站（立つ）」、「坐（座る）」のような主体変化動詞は「V有」に用いられるが、「Vテアル」表現には用いられない。日本語の「立つ」、「座る」は変化や過程に重点が置かれるのに対して、中国語の「站（立つ）」、「坐（座る）」は、変化や過程よりも状態を表していることが基本的な意味である（荒川 2015:109）。例えば、座っている人に立ってほしい場合は、日本語では「立ってください」という表現が用いられる。これに対して、中国語では、「请站⁹¹」という表現は不自然になる。かわりに、「请站起来（立ちあがってください）」のように座った状態から立った状態への変化を表す方向補語「起来」の助けが必要である。よって、「站（立つ）」、「坐（座る）」は「その状態で存在する」という意味を表す存在動詞「有」と一緒に使う時、主体が「立っている状態」、「座っている状態」で存在している意味が表される。一方、「立つ」、「座る」は変化や過程に重点が置かれ、何らかの影響性という限定的な条件が現れない限り、動作終了後の有効性を表す必要がないため、眼前の状況描写の「Vテアル」にも行為の有効性を表す「Vテアル」にも用いられない。したがって、主体変化動詞が使われる「V有」表現は、「Vテアル」ではなく主体の結果状態を表す「Vテイル」で対応することが多い。

(7.36) 在 长春市 重要 路段 的 十字 街口, 除了 站有 交警,

zài zhǎngchūnshì zhòngyào lùduàn de shízì jiēkǒu chúle zhàn-yǒu jiāojǐng

に 长春市 重要道路 の 交差点 の他 立つ-YOU 交通警察

⁹¹ 中国語の「请」は日本語の「どうぞ」、「ください」の意味に相当する。

还有 协警 或者 少量 志愿者。

hái yǒu xiéjǐng huòzhě shǎoliàng zhiyuànzhě

も アル アシスタント 或いは 少数のボランティア

(長春市の重要道路の交差点には、交通警察の他にアシスタントや少数のボランティアが立っている。)

(『人民日报海外版』、2012-11-02)

(7.37) 前几排 还 坐有 明显 像是 游客 的 外国人。

qiánjǐpái hái zuò-yǒu míngxiǎn xiàngshì yóukè de wàiguórén

前の何列かにも 坐る-YOU 明らかに 観光客に見える外国人

(前の何列かに明らかに観光客に見える外国人も坐っている。)

(『人民日报海外版』、2017-02-07)

以上をまとめると、「V有」と「Vテアル」に用いられる動作動詞を以下の表 7-3 に示すことができる。主体動作・客体変化動詞については、「V有」にも「Vテアル」にも用いられる。この場合、両構文は対応関係をもつと考えられ、客体対象の存在様態を描写するのに多く使われている。ただし、消失の意味をもつ動詞は「V有」には用いられない。また、主体動作動詞も「V有」と「Vテアル」に用いられるが、結果状態を視覚で捉えられない「言語活動」などを表す動詞は「Vテアル」には用いられるが、「V有」には用いられない。一方、主体変化動詞については、「V有」に用いられるが、「Vテアル」に用いられない。この場合、両表現には対応関係が見られない。

表 7-3. 「V有」と「Vテアル」に用いられる動詞 V

	V有	Vテアル
主体動作・客体変化動詞	○	○
主体動作動詞	△	○
主体変化動詞	○	×

(※ ○=対応； △=一部対応； ×=対応しない)

7.1.3 対象指向性

日本語では、動作行為が生じた結果の継続状態をさしだすにあたって、「Vテイル」、「V

テアル」、受動表現「V ラレテイル」を用いることが可能である。「V ラレテイル」は「V テイル」の用法を受け継ぎ、「V テイル」と同じように「結果の継続」、「動作の継続」、「パーフェクト」などの用法をもっているが、「V テイル」と異なるのは、「V ラレテイル」が「結果の継続」を表す際に、主体の状態ではなく、客体の状態を表している。一方、「V テアル」は「結果の継続」と「パーフェクト」の用法をもち、「V テイル」、「V ラレテイル」と違って「動作の継続」の用法をもたない。客体対象の結果状態を表すところにおいては「V テアル」と「V ラレテイル」とが類似点をもっている。すなわち、「V テアル」と「V ラレテイル」とは、動作主体を「脱焦点化」させることに共通している。ただし、「V ラレテイル」の場合、動作主体はオプショナルなものであり、必ずしも義務的に削除しなければならないわけではない。とくに、被害の意味を表す場合、動作主を顕現化させても文が自然である。一方、「結果の継続」を表す「V テアル」は動作主の顕現化が許されない。よって、「V テアル」のほうが積極的に客体対象の結果状態を客観的にさしだす「客体結果相」である。

中国語の「V 有」に関しては、他の存在型アスペクト形式—「在 V」、「V 着」と比べると、客体対象の結果状態に重点が置かれるという特徴はさらに明らかになる。「在 V」は動作を動的に捉える「動作の進行」のみを表すのに対し、「V 有」は動作の結果としての「結果の継続」のみを表す。両者は、動作に焦点を置くか結果に焦点を置くという面においては相補的であると言える。また、「V 着」は動作を静的に捉える「動作の継続」を表す他に、「結果の継続」を表す。したがって、従来論じられているように、日本語の「V テイル」に対して「V 着」が対応する場合が多い。「結果の継続」を表すという点においては「V 有」と「V 着」とが共通している。しかしながら、4.6 節で述べたように、「V 着」は主体の状態と客体の状態両方を表す。中でも、主体の状態を積極的に表す。これに対し、「V 有」は積極的に客体の状態を表す。つまり、「V 有」は「V テアル」と同様に、1つの「客体結果相」と考えられる。

「V 有」と「V テアル」が同じ客体結果相であり、眼前の対象の存在状態を描写するに多く使われているというところに共通点がある。ただし、両者の使用領域が異なっている。「V 有」構文は書き言葉として多く使われる傾向があるのに対し、「V テアル」構文は話し言葉として多く使われる傾向が見られる。

以上をまとめると、中国語「V 有」は日本語「V テアル」と類似しており、客体の結果状態に視点が置かれる 1つの「客体結果相」であり、構文の多義性を有し、「対象の存在様

態」、「行為経験の存在」、「単なる状態」といった意味用法が存在している。「対象の存在状態」は基本的用法であり、本動詞「有」の特徴を最も色濃く残しているが、「行為経験の存在」は「対象の存在状態」から派生した用法であり、意味・機能がより抽象化されていることが確認できた。ただし、「V有」構文には「Vテアル」構文のような「結果存在型」の用法が存在しない。一方、「Vテアル」構文には「V有」構文のような「単なる状態」の用法は許されない。

動詞の使用に関しては、両構文とも一番多く使用されるのは主体動作・客体変化動詞である。しかしながら、「Vテアル」に用いられやすいのは他動性の高い動詞であるのに対して、「V有」に用いられやすいのは他動性が高いという特徴の他に「出現」という意味特徴をもつ動詞である。加えて、主体動作・客体変化動詞と一部の主体動作動詞は「V有」にも「Vテアル」にも用いられる。この場合、両表現には対応関係が見られる。しかし、主体変化動詞は「V有」に用いられるが、「Vテアル」には使えない。

7.2 「有V」と「Vテアル」の対照

「有V」と「Vテアル」との対照に入る前に、先に「V有」と「有V」の関係を考察する必要があると思われる。第4章では、動詞の直後に存在動詞「有」がくる形式「V有」形式について述べた。第5章では、動詞の前に「有」が用いられる「有V」形式について述べた。すなわち、存在動詞「有」は動詞（V）の前後に現れることができる。文（7.38）と（7.39）、文（7.40）と（7.41）に示されているように、動詞「画（描く）」、「写（書く）」の前又は後ろに「有」が用いられ、いずれも行為によってもたらされた結果が述べられている。

- (7.38) 昨晚 9点, 记者在胡大爷的指引下看到, 两四处
 zuówǎn jiǔdiǎn jìzhě zài húdàye de zhǐyǐn xià kàndào liǎngsānchù
 昨夜 9時 記者 胡おじさんの案内の下で 見かける 二三箇所
 田地 画有 长方形 或 钥匙孔 形 白线圈,
 tiándì huà-yǒu chángfāngxíng huò yàoshikǒng xíng báixiànquān
 畑 描く-YOU 長方形 や 鍵穴 形 白いサークル

上方 插有 竹竿。

shàngfāng chā-yǒu zhúgān

上方 挿す-YOU 竹竿

(昨夜 9 時に、記者は胡おじさんの案内の下で次のような光景を見かけた。二三箇所の畑には長方形や鍵穴などの形をした白いサークルが描いてあり、上方には竹竿が挿してある。)

(『京华时报』、2009-11-17)

- (7.39) ...略...比方说 严开, 他 当年 有 画过 《雪椰》, 他的
bǐfāngshuō yánkāi tā dāngnián yǒu huà-guo xuěyē tā de
例えば 人名 彼 当年 YOU 描く-GUO 作品名 彼の
作品 吸收了 欧美 和 日本 各种各样 的 长处, …略…
zuòpǐn xīshōu-le ōuměi hé rìběn gèzhǒnggèyàng de chángchū
作品 吸収する-LE 欧米 と 日本 各種 の 長所

(…略…例えば、嚴開は当年『雪椰』を描いている。彼の作品には欧米と日本の各種の長所が吸収されている…略…)

(中央人民广播电台、『新闻纵横』、2011-05-02)

- (7.40) 这台 假 ATM 机 安装 在一个 简陋 的 透明 小房间 里,
zhètái jià jī ānzhuāng zài yīgè jiǎnlòu de tòumíng xiǎofángjiān li
この ATM 取り付ける に 1つ 簡易 の 透明な 小さな部屋 中
玻璃门 上 写有 “24 小时 自助 银行 服务”、 “图像
bōlimén shàng xiě-yǒu èrshísì xiǎoshí zìzhù yínxíng fúwù túxiàng
ガラスドア 上 書く-YOU 24 時間 セルフ 銀行 サービス 画像
采集 区域” 等 标志, …略…
cǎijí qūyù ” dēng biāozhì
採集 区域 等 標識

(この ATM は透明な小さな部屋に取り付けられ、ガラスドアには「24 時間セルフ銀行サービス」、「画像採集区域」などの標識が書いてある。)

(中央电视台、『新闻 20 分』、2010-06-21)

(7.41) 我 都 写 了 八 百 多 字 ， 因 为 到 后 面 时 间 比 较 赶 ，
 wǒ dōu xiě-le bābǎiduō zì yīnwèi dào hòumian shíjiān bǐjiào gǎn
 私 ま だ も 書 く -LE 八 百 字 余 り た め 後 半 に な っ て 時 間 比 較 的 急 ぐ
 …略…， 后 面 的 一 段 字 有 些 潦 草 ， 我 都 有 写 。

hòumian de yīduàn zì yǒuxiē liǎocǎo wǒ dōu yǒu xiě
 後 半 の 1 段 字 少 し ぞ ん ざ い 私 全 部 YOU 書 く

(私は八百字余りほども書きました。後半になって時間が足りなかったため、
 …略…字が少しぞんざいですが、全部書いていますよ。)

(人民广播电台、『中国之声』、2013-08-04)

一見、「V 有」構文と「有 V」構文とが類似しているように見えるが、「V 有」構文と違
 って、動詞の前に「有」が位置する「有 V」構文は基本的に「A+有 V+P」という構造を
 もっている。動作主が顕在化されていることにより、対象の結果状態よりも行為自体に重
 点が置かれる「行為指向性」をもっていると考えられる。たとえ動作主が明示されてい
 なくても、話者にとっては動作主が確定できる。その上、動作主が主格の位置に現れ
 ることから、「有 V」構文は結果よりも行為のほうに重点が置かれる。これに対し、
 「V 有」構文においては、動作主を表す名詞句が義務的に省略される場合が多い。例
 えば、文 (7.42) のように、動作主を補おうとしても、明示することができない。また、
 話者にとって動作主を確定できない場合が多い。動作主が義務的に省略されることや
 確定できないことから見れば、話し手は行為よりも結果のほうに関心を示しているこ
 とが言える。すなわち、「有 V」構文は動作主を顕現させることができる B 型の「V テア
 ル」と構文の特徴が類似している。

(7.42) a. ??他 在 墙 上 挂 有 一 幅 画 。

tā zài qiángshàng guà-yǒu yīfú huà
 彼 壁 に 掛 け る -YOU 一 枚 絵

b. *墙上 他 挂 有 一 幅 画 。

qiángshàng tā guà-yǒu yīfú huà
 壁 に 彼 掛 け る -YOU 一 枚 絵

(作例)

また、前述したように、「说（話す）」、「考虑（考える）」などの具体的な結果状態を残さない言語活動動詞や思考動詞は「V テアル」構文に使われるのに対し、「V 有」構文に使われない。しかし、これらの動詞を「有 V」構文に用いると、かなり自然になる。例えば、

(7.43) 我 跟 他 有 说 这件 事情。

wǒ gēn tā yǒu shuō zhèjiàn shìqing

私 彼に YOU 話す このこと

(このことは既に彼に話してある。)

(7.44) *我 跟 他 说有 这件 事情。

wǒ gēn tā shuō-yǒu zhèjiàn shìqing

私 彼に 話す-YOU このこと

(作例)

(7.45) 据悉, 美国 有考虑 寻求 中方 赞助。

jùxī měiguó yǒu kǎolǜ xúnqiú zhōngfāng zànzhù

聞くところによれば アメリカ YOU 考える 求める 中国側の賛助

(聞くところによれば、アメリカは中国側へ賛助を求めるのを考えたことがあるそうだ。)

(『国际金融报』、2009-01-23)

(7.46) 胡一菲：“我 有考虑 啊。”

húyīfēi wǒ yǒu kǎolǜ a

名前 私 YOU 考える 感嘆詞

(既に考えたよと胡一菲が言った。)

(『爱情公寓 3』; 康 2014:10 より)

(7.47) *据悉, 美国 考虑有 寻求 中方 赞助。

jùxī měiguó kǎolǜ-yǒu xúnqiú zhōngfāng zànzhù

聞くところによれば アメリカ 考える-YOU 求める 中国側の賛助

既に述べたように、「V 有」に使用される動詞の中では、「写（書く）」、「放（置く）」のような客体対象に結果状態をもたらす主体動作・客体変化動詞が最も多い。言語主体は行為による結果状態のほうに関心を示している。「有 V」構文に使われる動詞の中では、「V

有」構文と異なり、「主体動作・客体変化動詞」ではなく、「去（行く）」、「看（見る）」、「考虑（考える）」、「讲（話す）」などの「主体動作動詞」が一番多い。これらの動詞は客体対象に結果状態をもたらさない動詞、或いは行為自体は客体対象に及ばない非能格動詞の場合が多い。具体的な結果状態の存在を基本的用法とする「V有」構文に対し、「有V」構文は基本的に抽象的な行為経験の存在を表す。

こういった「V有」と「有V」との違いは、類像性の観点から説明できる。前述したように、存在動詞「有」においては、一般に「有」の後ろの部分が焦点化される。「V有」と「有V」とは存在動詞「有」の特徴を継承している。「V有」では、動詞Vが「有」の前に位置し、対象の結果状態が「有」の後ろにくるため、動詞Vが表す動作よりも「有」の後ろの部分である対象の結果状態が焦点になる。ゆえに、一般に「V有」に用いられるのが結果状態を生じる動詞である。また、「V有」の焦点が後ろの部分であるため、「V有」の後ろに目的語がないと文として成立しない。

(7.48) 一书后 附 {了 / 有} 笔划 索引 没有?
 shūhòu fù -le -yǒu bǐhuà suǒyǐn méiyǒu
 本の後 付ける -LE -YOU 筆画 索引 疑問
 (本の後に筆画索引が付いていますか?)

一附 {了 / *有}
 fù -le -yǒu
 付ける -LE -YOU
 (付いている)

(罗・范 2006:93)

これに対し、「有V」では、「有」の後に動詞Vがくる。たとえ対象を表す名詞句がきても、対象より動詞Vが「有」に近い位置にあり、動詞Vの表す動作が焦点になる。結果よりも動作のほうに関心が置かれるため、結果状態をもたらさない動詞もこの構文に用いられる。例えば、「说（言う）」、「看（見る）」などの動詞は「有V」に多く使用される。また、会話文として「有V」構文では、対象を表す名詞句を省略しても可能であることから、話し手は動作のほうに関心を示していると考えられる。

(7.49) 一昨天， 你 有看 新闻 吗？

zuótiān nǐ yǒu kàn xīnwén ma

昨日 貴方 YOU 見る ニュース 疑問

(昨日、ニュースを見ましたか？)

一我 有 看。

wǒ yǒu kàn

私 YOU 見る

(見ましたよ)

(7.50) 一你 有 寄存 行李 吗？

nǐ yǒu jìcún hánglǐ ma

貴方 YOU 預ける 荷物 疑問

(荷物は預けましたか。)

一我 有 寄存。

wǒ yǒu jìcún

私 YOU 預ける

(預けてあります。)

(作例)

日本語の「V テアル」は具体的な結果状態と抽象的な行為経験の存在という両方の意味を表せるが、「V 有」または「有 V」は基本的にどちらか一方の意味用法だけを担わっている。両者は相補的な関係をなしていると考えられる。

ところで、「V テアル」構文に関しては、従来意図性の観点から考察されることが多い。つまり、「V テアル」構文は意図性を備えているとされている。しかしながら、以下の文において意図性はあまり感じられない。

(7.51) えっ、なんで？窓が開けてあるよ!!!ちゃんと閉めて出たのに…略…

(7.52) 困るなあ。窓が開けてあったので、部屋がびしょびしょだ。

(副島 2009:8)

また、非意志動詞も「V テアル」構文に用いられる。例えば、「忘れる」、「脱ぎ散らか

す」は非意志動詞であり、当然これらの動詞自体には意図性が含まれていない。そして、これらの動詞を含んだ「V テアル」構文にも意図性は感じられない。

(7.53) 書斎の奥の、信子のために急拵えしたおかしな恰好の部屋は、荷物が消え去っていて、隅の方にハンカチーフが一枚忘れてあった。

(7.54) 玄関には男物のスニーカーが脱ぎ散らかしてありました。

(『BCCWJ-NT』)

したがって、本稿では、「V テアル」構文自体はモノ又はコトの存在を表し、意図性は「テアル」構文固有の意味ではなく、動詞に由来していることを主張したい。この点に関しては「V テアル」と類似している中国語の「有 V」構文と比べると、より明らかになる。

文(7.41)、(7.46)のように、意志性動詞が用いられ、構文全体は意図性が感じられるが、文(7.55)、(7.56)では、「听到(聞こえる)」、「遇到(出会う)」は何れも非意志性動詞である。構文全体は先行する出来事の存在を表し、意図性が感じられない。また、前述したように、「有 V」構文には形容詞が現れることもできる。この場合は、ある状態の存在を表す。すなわち、「行為経験の存在」を表す「V テアル」と「有 V」は、先行する出来事が動作主という支配領域に存在していることを表すにすぎない。意図性は構文自体のものではないと考えられる。

(7.55) 前年 10 月份，妇联 有 听到 我 在 创业， 资金 很
qiánnián shí yuèfèn fùlián yǒu tīngdào wǒ zài chuàngyè zījīn hěn
一昨年 10 月 女連 YOU 聞こえる 私 ZAI 起業する 資金 とても
困难， 她们 就 主动 找上门， …略…
kùnnán tāmen jiù zhǔdòng zhǎoshàngmén
困難 彼女たち そして 自ら 来る

(一昨年の10月、女連は、私が起業して資金の面でとても困難していることが耳に入って、自ら私のところに来てくれた。)

(中央人民广播电台、『新闻和报纸摘要』、2012-02-15)

(7.56) 主持人：有遇到过 什么样 的 难题 吗？

zhǔchí rén yǒu yù dào-guò shén me yàng de nán tí ma

司会者 YOU 出会う-GUO 何かの難題 疑問

(司会者:何かの難題に出会ったことがありますか?)

(中央电视台、『今日关注』、2010-03-30)

7.3 文法化の観点から

上述した中国語の「V有」、「有V」と日本語の「Vテアル」の共通点と相違点が文法化の度合いに関係していると考えられる。本節では、文法化の視点から両言語の存在型アスペクト形式「V有」と「Vテアル」は、存在動詞「有」/「アル」の意味が比較的強く影響しており、文法化の度合いが低いことを検証する。文法化はもともと通時的概念であるが、ここでいう文法化は主に共時的概念である。文法化に関する共時的な研究を行うことの意義として三宅（2005）は以下の2点を主張しているが、本研究もその立場にたつ。

- (7.57) a. 同一の形式における内容語的な用法と機能語的な用法との連続性、及び両者の有機的な関連性を捉えることが可能になること
- b. 文法化後の機能語としての意味・文法機能を説明する際に、文法化前の内容語としての意味からの類推が可能になること

(三宅 2005:73)

まず、「V有」においても「Vテアル」においても、場所名詞句を伴う「対象の存在様態」の用法が圧倒的に多く、基本的な用法である。(7.58)、(7.59)のように、中国語の「包(包む)」、日本語の「畳む」は場所名詞句を要求しないが、場所名詞句「粽子里(粽の中に)」、「押し入れの中に」が現れたのは「有」/「アル」が要求するものであると考えられる。すなわち、存在動詞「有」/「アル」の影響が比較的強いことが分かる。

(7.58) 据 知情 人士 透露，有些 粽子里 包有 金银 首饰

jù zhīqíng rénshì tòulù yǒuxiē zòngzǐ lǐ bāoyǒu jīnyín shǒushì

関係者によると 幾つか 粽 中 包む-YOU 金銀 アクセサリー

等 貴重 礼品, …略…

děng guìzhòng lǐpǐn

など 貴重 贈答品

(関係者によると、粽の中に金銀アクセサリなどの贈答品が包まれている場合もある。)

(『江南时报』、2006-05-28)

(7.59) 押し入れの中に布団が畳んである。

(作例)

ただし、日本語の「V テアル」と比べて中国語の「V 有」が場所名詞句を要求する場合がほとんどであり、全体的方向として「V 有」は存在動詞「有」による影響が強いと言える。

加えて、中国語の「V 着」、日本語の「V テイル」と比べて、「V 有」、「V テアル」に用いられる動詞の中では「主体動作・客体変化動詞」がほとんどであり、動詞の種類が制限されており、動詞に対する選択が有標である。よって、「V 有」と「V テアル」の文法化の度合いが低い。ただし、「V テアル」と比べて、存在物の出現が含意されない「言う」、「考える」などの動詞は「V 有」に用いられないという点では、「V テアル」と比べて、「V 有」の文法化の度合いがより低いことが分かる。

さらに、「V テアル」は「パーフェクト」の意味を表す例がそれほど多くない。「書く」のように、「行為経験の存在」を表すには「V テアル」ではなく、「V テイル」が用いられる。同様に、「V 有」は「V 了」と比べて、「パーフェクト」の意味を表す場合が遥かに少ない。

(7.60) 1926年、川端康成は『伊豆の踊子』を書いている。

(7.61) 父は若いころたくさん勉強している。

(作例)

これらの現象は全て、存在型アスペクト形式「V 有」と「V テアル」に、存在動詞「有」/「アル」の意味が強く影響していることを示していると解釈できる。中でも、「V テアル」と比べて、「V 有」のほうが存在動詞「有」の影響をより多く受けており、文法化の度合い

が低いと言える。

Bybee et al. (1994) は文法形式「simple past (単純過去)」と「perfective (完結相)」に至る文法化の過程を次の図 7-1 に示している。

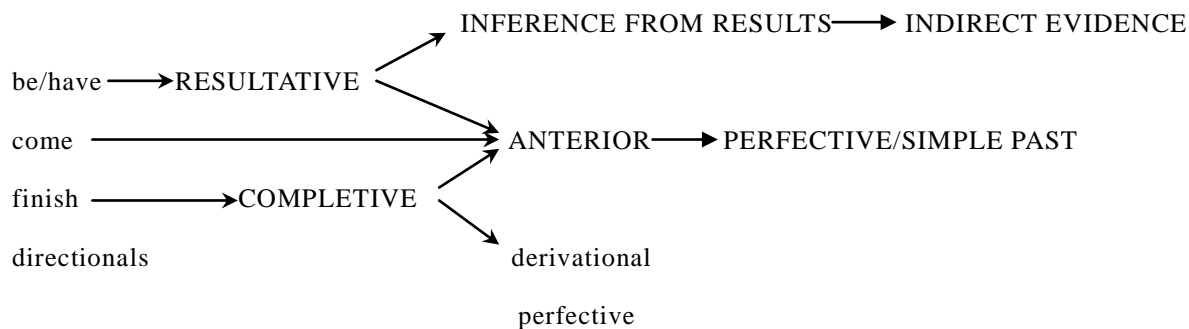


図 7-1. Paths of development leading to simple past and perfective grams
(Bybee et al. 1994:105)

図 7-1 では、「resultative (結果相)」又は「completive (完了)」が「anterior (パーフェクト)」へ発展し、さらに「perfective (完結相)」又は「simple past (単純過去)」へ発展していくというテンス・アスペクトの主な文法化過程が示されている。Bybee et al. (1994) に基づき、「V 有」は基本的に「結果相」の段階にとどまっております。「有 V」は「結果相」の用法が見られなく、「パーフェクト」の用法だけが見られ、「V 有」より文法化が進んでいると考えられる。一方、「V テアル」は「結果相」だけではなく、「パーフェクト」の用法までに発展している。

7.4 存在型アスペクト形式から見た日中の事態の捉え方

最後に、このような存在型アスペクト形式の使用から日中両言語の事態の捉え方を見てみよう。池上 (1981) は、「場所の変化」は「個体への注目」を通じて「する」的な捉え方であり、「状態の変化」は「全体的状況への注目」を通じて「なる」的な捉え方であると指摘し、英語では、「場所の変化」を表す動詞が「状態の変化」に転用されるのに対して、日本語では、「状態の変化」を表す動詞が「場所の変化」に転用させる傾向から、英語が「する」的言語であるのに対して、日本語が「なる」的言語であると主張している。

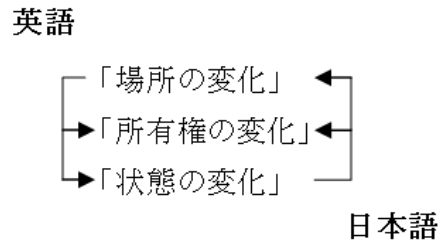


図 7-2. 「する」的言語と「なる」的言語（池上 1981:281；一部修正）

個体を中心とする「する」型を好む英語では、話者が自らを事態の外に置き、外部視点からモノの移動を把握することが特徴的であり、全体の状況を中心とする「なる」型を好む日本語では、話者は自らを事態の中に置き、内部視点からコトの生成を把握することが特徴的である。盛（2006）は文学作品『雪国』の日中対訳データを考察し、日本語は主語を非明示する機会が多いのに対して、中国語は主語を明示する機会が多いことから、日本語は主観的把握をとる傾向であり、中国語は脱主観的把握をとる傾向であると主張している。また、徐（2009:66）は、英語や中国語では、言語主体が「事態や自らをイマ・ココの場から切り離して抽象化・対象化して把握し、それに即して言語化する仕方を好む傾向」であり、日本語では、言語主体が「発話のイマ・ココの場にある話し手自らを原点とし、場に密着したまま事態をまるごと（コト的、非分析的に）、体験的・身体的に把握し、それを言語化する仕方を好む傾向」である。こうして見ると、中国語は日本語とは違って、英語の事態把握のスタイルに近い「する」型と言えるだろう。

しかしながら、中国語においては、事態把握が日本語に近い一面もある。古川（2007）は中国語には「1つの言語形式 (linguistic form) が相反する 2つの意味解釈 (meaning, sense) と対応する」といった中国語らしい現象がある。これを「意味論的双方向指向性」としている。古川（2007）によれば、モノの「出現」、「存在」、「消失」という意味特徴を表す存現構文は「出現」と「消失」という相反する事態描くことができる。つまり、「双方向性」をもっていると考えられる。

(7.62) 構文特徴: 「N₁ (トコロ) + V + 数量詞 + N₂ (モノ)」

- a. 我们 村里 来了 一个 年轻 书记。 [出現 APPEAR]
 wǒmen cūnlǐ lái-le yīgè niánqīng shūjì
 我が村 来る-LE 一人 若い 書記

(我が村に若い書記がやって来た。)

- b. 我们 村里 走了 一个 老书记。 [消失 DISAPPEAR]

wǒmen cūnlǐ zǒu-le yīgè lǎoshūjì

我が村 行く-LE 一人 老書記

(我が村から老書記が去って行った。)

- c. 家里 来了 一封 信。 [方向不明 APPEAR or DISAPPEAR]

jiālǐ lái-le yīfēng xìn

我が家 届く-LE 一通 手紙

(我が家に手紙が届いた。/我が家から手紙が届いた。)

- d. 桌上 有 一台 电脑。 [存在 BE AT]

zhuōshàng yǒu yītái diànnǎo

机の上 YOU 一台 コンピュータ

(机の上にコンピュータがある。)

- e. 桌上 放着 一台 电脑。 [存在 BE AT]

zhuōshàng fàng-zhe yītái diànnǎo

机の上 置く-ZHE 一台 コンピュータ

(机の上にコンピュータが置いてある。)

(古川 2007:240)

(7.62) では、a~e は全て存現構文であり、「N₁ (トコロ) + V + 数量詞 + N₂ (モノ)」という構文特徴をもっている。文 a は行為の結果として「我们村里 (我が村)」に「年轻书记 (若い書記)」が現れるという「出現」の意味が表される。文 b は行為の結果として「我们村里 (我が村)」に「老书记 (老書記)」が居なくなるという「消失」の意味が表される。文 c は「我が家に手紙が届いた」或いは「我が家から手紙が届いた」という 2 つの解釈ができる。すなわち、「家里 (我が家)」を「信 (手紙)」の移動の「起点」としても「終点」としても解釈することができるわけである。日本語の場合、モノの移動の「起点」として格助詞「から」が使用され、移動の「終点」として格助詞「に」が使用される。中国語には日本語のような格助詞がないため、こうした曖昧性が生じるわけである。文 d、e は共にモノの存在を表し、「出現」と「消失」の中間状態と考えられる。このように、同じ存現構文は「出現」と「消失」の「双方向性」を表している。

そして、古川は、この存現構文を客観的世界の根幹を描く基本構文であると位置づけている。

まず事物（モノ・thing）の生存消長を考えるならば、あるゆるモノは〈出現〉→〈存在〉→〈消失〉という過程を宿命的に経るものである。しかもこの世からの〈消失〉は同時にあの世への〈出現〉に繋がると考えれば、この過程は輪廻のごとく永劫に絶えることがない。また動的な事態（コト・event）の発展消長を考えるならば、〈出現〉→〈存在〉→〈消失〉というモノの辿る過程は、動作行為の〈実現・発生〉「V了・V起来」→〈持続・進行〉「V着・在V」→〈経験・経過〉「V过・V下去」というアスペクト・動相の展開に並行して見えてくる。存現構文とはかくの如く、生きとし生けるもの、森羅万象のモノゴト（モノ・事物とコト・事態）が必然的にたどる輪廻のプロセスを専ら描く極めて基本的な構文であることがわかるのである。

（古川 2007:242）

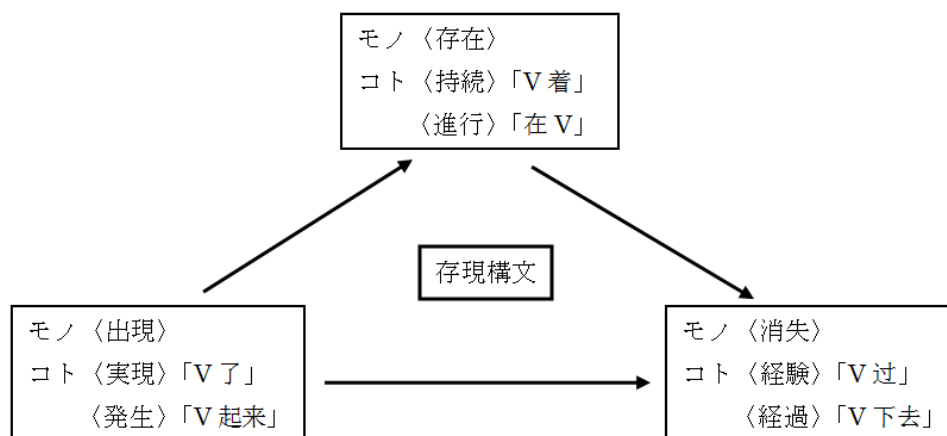


図 7-3. 「出現」→「存在」→「消失」の過程（古川 2007:242；一部修正）

また、岡（2002）は池上（1981）によって提唱された「する」型と「なる」型という類型論的な考え方を継承し、「なる」型の根底には「ナルことはアルこと」—「存在＝生成」という発想があると指摘している。そして、名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文、知覚文、能力文などの日本語の諸構文を存在論的観点から位置づけなおし、存在構文に基づく諸構文のネットワークを構築している。場所論的に見て、中国語の認知的特徴は日本語にかなり近いものである（岡 2013a:259）。

本節では、古川（2007）、岡（2002、2013a）の観点をふまえ、「V有」構文、「有V」構

文と「V テアル」構文の対照を通して、中国語の事態把握は日本語に近いことを述べたい。

田窪（2010）は以下の例文を取り上げて日本語では「場所」の果たす役割が大きいのに
対し、英語では「場所」の果たす役割がそれほど大きくないと指摘している。

(7.63) 日本の首都はどこですか。

(7.64) What is the capital of Japan?

(7.65) 神戸大学はどこですか。

(7.66) Where is Kobe University?

(7.67) (店は) どこもあいていない。

(7.68) Nothing is open today.

(田窪 2010:105)

文 (7.63)、(7.65)、(7.67) に対応する中国語の訳文はそれぞれ以下の通りである。

(7.69) 日本 的 首都 在 哪儿?

riběn de shǒudū zài nǎr

日本 の 首都 ZAI どこ

(7.70) 神戸 大学 在 哪儿?

shénhù dàxué zài nǎr

神戸大学 ZAI どこ

(7.71) (商店) 哪儿 都 没 开。

shāngdiàn nǎr dōu méi kāi

店 どこ 全部 否定 開く

(中国語訳は筆者による)

3 つの文においては、何れも場所を表す名詞句「哪儿」が使われている。つまり、中国語においても、日本語と同様に「場所」が果たす役割が大きいと言えるだろう。

木村(2006)が提案しているように、中国語のアスペクト形式は自律的なものではなく、ある事態が空間的又は時間的に「実存する」という大きなカテゴリーの中に位置づけて考えたほうが良い。特に、本稿で最初から検討してきた中国語存在型アスペクト形式「V有」

と「有 V」を事物が具体的な場所又は抽象的な場に存在すると捉えることができる。「対象の存在様態」を表す「V 有」においては、場所的表現が必須であり、物が具体的な場所に出現して存在することが表される。行為を中心に事態を捉えるのではなく、コトの生成を中心に事態を捉えるのである。

また、「行為経験の存在」を表す「V 有」と「有 V」においては、具体的な場所が存在しないものの、動作主（経験主）を抽象的な場として捉えることができる。中国語は「主題優越型の言語」であり（Li&Thompson 1976）、「動作主+動作」よりも日本語のように「主題+解説」型の表現が好まれる（中川 1997）。前述したように、完了型アスペクト形式「V 了」と比べ、「行為経験の存在」を表す存在型アスペクト形式「V 有」と「有 V」における動作主（経験主）は主題として捉えられる。主題の概念は基本的に「場所」の概念をメタファー的に拡張したものである（池上 1981、2000）。主題によって作り出される領域は、「眼前の領域である必要はなく、認知主体の作り出す概念領域（心的領域）である」（岡 2013a:221）。「行為経験の存在」を表す「V 有」と「有 V」においては、動作主（経験主）を場として捉えて、場である動作主（経験主）を参照点として先行する事態へアクセスし、その場において先行する事態が存在することが表される。「出現→存在」という在り方はまさに日本語の「場所においてコトガナル」という事態把握に近いと考えられる。

7.5 結

以上、構文的・意味的な面から、中国語「V 有」構文、「有 V」構文と日本語「V テアル」構文を考察した。「V 有」も「V テアル」も対象の結果状態に焦点が置かれる「客体結果相」であることを明らかにした。「V 有」構文と「V テアル」構文に用いられる動詞は他動性の高い動詞という類似した特徴をもっているが、「V テアル」構文とは異なり、「V 有」構文に使用される動詞には「出現」という意味特徴が含まれている。これに対し、「有 V」構文には「说（言う）」、「考虑（考える）」のように、他動性の高くない動詞が多く使用される。そして、「有 V」は対象の結果状態ではなく、行為自体に焦点が置かれる。益岡（1987）でいう B₂型の「V テアル」に類似している。「V 有」と「有 V」におけるこのような違いを類像性の観点から分析を試みた。すなわち、存在動詞「有」においては、一般に「有」の後の部分に焦点が置かれる。「V 有」も「有 V」も存在動詞「有」の特徴を受け継いでいる。「V 有」の場合、対象を表す名詞句が「有」の後に用いられ、対象に焦点が当てられるわけである。これに対し、「有 V」の場合、「有」の後に動詞 V が用いられ、行為自体に焦点

が当てられるわけである。

また、共時的な面から「V 有」、「有 V」と「V テアル」の文法化過程を考察した結果、「V 有」も「V テアル」も文法化の度合いはそれほど高くない。「対象の存在様態」を表す「V 有」と「V テアル」は主に眼前の状況描写に用いられ、典型的存在文に近い。一方、視覚で確認できる具体的な結果状態をもたらさない「行為経験の存在」の「有 V」と「V テアル」は話し手の態度や判断によって先行する出来事と基準時とが結びつかれるため、文法化が進んでいる。

最後に、中国語は日本語と同じように、場所表現が好まれる。とりわけ、今回検討してきた存在型アスペクト形式「V 有」と「有 V」においては、「出現→存在」という在り方はまさに日本語の「場所においてコトガナル」という事態把握に近いと考えられる。

第 8 章 結論

8.1 本研究のまとめ

本研究では、序論で提示した仮説、すなわち、「中国語の存在型アスペクト形式『V有』は、場所・空間的な存在の意味から拡張したものであり、継続相『V着』と相補分布的な関係をなし、1つの『客体結果相』である」を検証するために、「V有」を中国語アスペクトの体系に位置づけ、他の存在型アスペクト形式と比較した上で、日本語の「Vテアル」との共通点と相違点を詳細に検討してきた。

これまでの中国語アスペクト論では、「V了」、「V着」、「V过」を中心に議論が進められ、その他のアスペクト的意味を表すと思われる形式、動詞Vの後に本来の存在動詞「有」が付く「V有」と、動詞Vの前に本来の存在動詞「有」が付く「有V」という存在型アスペクト形式は個々の形式ごとの研究として行われてきた。その結果、「V了」、「V着」、「V过」は中国語のアスペクト形式の範例としてしばしば取り上げられるが、「V有」や「有V」などの他の形式は純粋なアスペクト形式とされていない。しかしながら、これらの存在型アスペクト形式を解明するには、中国語アスペクトの体系に位置づけ、他のアスペクト形式との比較が欠かせないものである。

一方、日本語の「Vテアル」も動詞のテ形に本来の存在動詞「アル」が付いて、場所・空間的な存在の意味から拡張した存在型アスペクト形式である。これまで、「Vテアル」に該当する中国語構文が存在しないと言われている（北村 2011；副島 2017 など）。日本語の「Vテアル」に関する日中対照研究においても、主に「Vテイル」に対応する中国語表現「V着」、「V了」に焦点を当てて考察が行われてきた。したがって、「Vテイル」に対しても「Vテアル」に対しても、同じ中国語表現「V着」、「V了」で対応させている。また、中国国内の日本語教育においても、「Vテアル」の意味特徴は中国語の「V着」、「V了」で説明されている。よって、中国人日本語学習者にとっては、「Vテアル」の意味特徴を理解するのが困難である。筆者自身は十数年前から日本語学習を始めて以来、「Vテアル」に該当する中国語表現は本当に存在していないのかと考え続けてきた。

『日中対訳コーパス』では、日本語の「Vテアル」構文に対して「V有」構文が使用される対訳例も少なくない。これらの対訳例を見ると、日本語の場合、「書く」や「置く」のテ形に本来の存在動詞「アル」が付いており、動作主が省略されている。同様に、中国語

の場合、「写（書く）」や「安（置く）」の後に本来の存在動詞「有」が付いており、動作主が省略されている。両方とも対象の結果状態に重点が置かれる表現である。中国語の「V有」と日本語の「Vテアル」に共通して見られることは、偶然なのか、それとも言語類型論的に意味のあることなのか。また、偶然でないとすれば統一的に説明できることなのか。

以上の問題意識に基づき、本研究は、存在動詞である中国語の「有」と日本語の「アル」から文法化された形式である「V有」と「Vテアル」を中心に考察し、他の存在型アスペクト形式との比較を通して、日中両言語の存在型アスペクト形式の特徴を明らかにすることを目的とした。主に5つの研究課題を設定した。ここでは、この5つの研究課題をもう一度提示する。

- 1) 「V有」は中国語のアスペクトカテゴリーの正当な形式と言えるか？
- 2) 「有」と「V有」/「有V」、そして、「アル」と「Vテアル」とはそれぞれどのような相関があるか？
- 3) 「V有」、「有V」と「Vテアル」は体系の中にどのように位置づけられるか？
- 4) 「V有」/「有V」と「Vテアル」は実際にどのように使用されているか？
- 5) このような存在型アスペクト形式は日中両言語の事態の捉え方をいかに反映しているか？

この5つの課題に基づき、本研究は、認知言語学のアプローチで存在型アスペクト形式と存在動詞との関係に焦点を当て、アスペクトを事態の存在の在り方として捉え、「V有」が場所・空間的存在の意味から拡張したアスペクト形式であることを明らかにした。そして、体系の機能単位間の対立の観点から、「V有」を中国語アスペクト体系に位置づけ、存在型アスペクト形式である「在V」、「V着」との比較を行った。

また、構文は孤立して存在するのではなく、相互に有機的な関係を保って存在すると考えられる（益岡 1997:182）。「V有」の意味特徴を明らかにするためには、構文の表す幾つかの個別的な意味相互の間にいかなる関係が構成されているかという構文の多義性を考察するだけでなく、異なる構文の間の意味的な繋がりへの考察も欠かせないものである。したがって、本稿は「V有」を「有V」構文と比較し、両者の違いを考察した。

さらに、「V有」を日本語の存在型アスペクト形式「Vテアル」との対照を通し、日中両言語における存在型アスペクト形式は主体の状態に重点が置かれる表現だけではなく、客

体の状態に重点が置かれる表現を確立させているという特徴を明らかにした。本動詞としての中国語の「有」も日本語の「アル」も本来空間的存在を表すものである。この空間的存在という概念における空間性の性質が時間的なもの、心理的なものに変容することにより、意味の拡張がもたらされるわけである。

本研究を通して明らかにできた主な点をもう一度まとめておく。

1) 「V有」構文には他のアスペクト形式「V了」や「V着」を用いることができないが、「有」は「了」又は「着」と入れ替えることができる。すなわち、「V了」、「V着」と「V有」はシンタグマティックな関係ではなく、パラダイグマティックな関係にある。「V有」は「結果」という独自のアスペクト的意味をもち、中国語アスペクトカテゴリーの正当な形式である。

2) 日本語の「Vテアル」は、「Vテ」と「アル」それぞれが単独で直接示す用法と両者が結合した場合のアスペクト的意味とは相関がある。同様に、中国語の「V有」/「有V」構文の意味も動詞Vと存在動詞「有」の独自の意味に関連しており、場所・空間的な存在から拡張したものである。

3) 表4-7が示しているように、中国語の存在型アスペクト形式では、「在V」は動作を動的に捉えて、限界動詞と結びついても非限界動詞と結びついても基本的に主体の「動作の進行」のみを表す。これに対し、「V有」は基本的に限界動詞と結びついて動作行為の「結果の継続」を表す。よって、両者は相補的な関係をなしていると言える。「V着」は基本的に非限界動詞と結びつく場合には、進行中の動作を静的に捉えて「動作の継続」を表す。限界動詞と結びつく場合には、動作行為が終わった後の「結果の継続」を表す。これに対し、「V有」は「結果の継続」のみを表す。すなわち、「V着」と「V有」は「結果性」という特徴を共有している。Jaxontov (1988)も「V着」を「結果相」と位置づけている。しかしながら、「V着」は積極的に主体の状態を表すのに対し、「V有」は積極的に客体の状態を表す。両者は相補分布的な関係をなしていると言える。

表 4-7. 「在 V」、「V 着」、「V 有」の意味的特徴（再掲）

形式 \ 意味	基本的意味		派生的意味
	限界動詞	非限界動詞	
在 V	動作の進行		—
V 着	結果の継続	動作の継続	単なる状態
	(主体の状態)		
V 有	結果の継続	—	パーフェクト
	(客体の状態)		単なる状態

一方、日本語の存在型アスペクト形式「V テアル」に関しては、「V テイル」、「V ラレテイル」と比較した結果を表 6-8 に示す。「V テイル」の基本的意味は、限界動詞と結びつく場合、「結果の継続」を表す。非限界動詞と結びつく場合、「動作の継続」を表す。これに対し、「V テアル」の基本的に限界動詞と結びついて「結果の継続」を表す。そして、「V ラレテイル」は限界動詞と結びつく場合、基本的には客体の状態を表すが、「V テアル」とは異なり、「V ラレテイル」においては動作主を補うことが可能である。つまり、「V テアル」も「V 有」も、対象の結果状態に重点が置かれる 1 つの「客体結果相」であると言える。

表 6-8. 「V テイル」、「V ラレテイル」、「V テアル」の意味的特徴（再掲）

形式 \ 意味	基本的意味		派生的意味
	限界動詞	非限界動詞	
V テイル	結果の継続	動作の継続	パーフェクト/反復（習慣） /単なる状態
	(主体の状態)		
V ラレテイル	結果の継続	動作の継続	パーフェクト/反復（習慣） /単なる状態
	(客体の状態)		
V テアル	結果の継続	—	パーフェクト
	(客体の状態)		

「V 有」と「V テアル」とは、動詞に関する制限においても類似した特徴が見られる。

両者に用いられやすいのは他動性の高い動詞である。ただし、「V有」に用いられる動詞は「出現」という特徴も有している。

4) 対象の結果状態に重点が置かれる「V有」とは異なり、「有V」は行為に焦点を当て、先行する行為の効力が基準時まで続くという「パーフェクト」の意味をもっている。この違いは類像性の観点から分析できる。すなわち、存在動詞「有」では、一般に「有」の後の部分が焦点となる。「V有」の場合は、「有」の後に対象が現れ、対象のほうに関心が置かれる。これに対し、「有V」の場合は、「有」の後に動詞Vが現れ、動詞の表す動作のほうに関心が置かれるわけである。また、これまで「有V」は「V了」に相当すると指摘されているが、本稿は、「V了」と比べて「有V」は「行為性を弱める」と「VPの部分に焦点化する」という2つの固有の特徴を有していることを主張する。

5) 使用領域に関しては、「V有」は話し言葉よりも書き言葉として多く使用されている。これまで「V有」は文語的表現であり、文体的な制限があると指摘されているが、話し言葉コーパスにおいても「V有」の使用が確認されていることから、この形式は特定の文体において使用制限を受けているのではなく、「V有」自体がもつ「客観性」で、書き言葉において使用機会が多くなっているだけであると言える。一方、「Vテアル」も「有V」も書き言葉より話し言葉として多く使用される傾向がある。

6) これまで、英語が「する」的言語であり、日本語が「なる」的言語であり、中国語が中間的であると指摘されているが、日中両言語の存在型アスペクト形式が場所的な表現を伴う場合が多く、「場所においてコトがなる」というところから見れば、中国語の事態把握はかなり日本語に近く、「なる」言語的な捉え方であると考えられる。

8.2 本研究の意義

本研究の意義と新規性については、以下の4点が挙げられる。

まず、従来の「V有」に関する研究とは異なり、本研究は存在動詞を語彙的源泉とする存在型アスペクト形式「V有」を中国語アスペクト体系に位置づけ、体系の機能単位間の対立の観点から、他の存在型アスペクト形式「在V」、「V着」、「有V」と比較し、これらのアスペクト形式の対立関係を明らかにした。

次に、日中対照の観点から初めて中国語の存在型アスペクト形式「V有」を日本語の存在型アスペクト形式「Vテアル」と対照させることによって、日中両言語における存在型アスペクト形式は主体の状態に重点が置かれる表現だけではなく、客体の状態に重点が置

かれる表現を確立させているという特徴を明らかにした。すなわち、「V有」も「Vテアル」も客体対象に重点が置かれる「客体結果相」である。これは日中両言語のアスペクト体系の在り方を解明することにも繋がるものと考えられる。

また、日本語学習者としての筆者は、日本語を外国語として学習者の立場から母国語との対照を通して客観的に分析する必要があると痛感している。そういうことも念頭に置きつつ、本研究は日本語教育または中国語教育への応用を視野に入れている。これまで、中国語には日本語「Vテアル」構文のような構文が存在しないと言われてきたが、本研究は初めて「V有」構文、「有V」構文と「Vテアル」構文を対照させることによって、中国語にも日本語「Vテアル」構文のような表現が存在していることを確認し、構文的・意味的観点からその対応関係を明らかにした。中国人日本語学習者に対して「Vテアル」構文を教える際、或いは日本人中国語学習者に対して「V有」構文、「有V」構文を説明する際に、より効果的な指導の方法に繋がると考えられる。

さらに、東アジアの言語の立場から見ると、これまでアスペクトと捉えられた形式は、ほとんど存在表現から文法化されたものである（岡 2013b:74）。木村（2006）、岡（2013b）が提案しているように、本研究は認知言語学の枠組みでアスペクトを事態の存在様態を規定する仕方の1つとして捉えている。事態がどのような形で存在するかという観点から日中両言語の存在型アスペクト形式を分析したものは、日中アスペクト論において、これまであまり見られなかった。そういう意味で、本研究は日中存在型アスペクト形式を存在論的に位置づけて捉えなおそうとする、初めての試みであると言える。

8.3 今後の課題

本研究は日中両言語の存在型アスペクト形式に焦点を当て、アスペクトを存在論的に位置づけて考察してきた。中国語のアスペクト形式に関しては、存在型アスペクト形式がほとんどであるが、完了型アスペクト形式も存在している。今回あまり焦点が当てられなかった完了型アスペクト形式「V了」は存在型アスペクト形式「V有」、「有V」、「V着」、「在V」と語彙的源泉が異なっているため、これらの存在型アスペクト形式とどのように関連しているか、そして、事態がどのような形で存在するかという本研究のアスペクトに対する捉え方で、完了型アスペクト形式「V了」をどのように説明していくかという問題が残されている。

また、本研究では、共時的な面から「V有」、「有V」と「Vテアル」の文法化過程を検

討してきたが、文法化のメカニズムとしては、主体化/主観化 (subjectification) が重要な役割を果たしている⁹²。「対象の存在様態」を表す「V テアル」は、「結果相」の段階に位置づけられる。眼前の結果状態を参照点として、出来事を客観的に捉えている。これに対し、「行為経験の存在」は「パーフェクト」の段階に位置し、参照点となる実体が存在せず、話し手によって先行する出来事が基準時に関連づけられている。つまり、話し手自身がその言語表現に関与している。森田 (1971:186) も指摘しているように、「ガ～テアル」は現象文であり、外面的・現象的であるが、「ヲ～テアル」は判断文であり、内面的・心理的である。これについては、今後主体化/主観化の理論で考察したいと考える。

さらに、今回の分析により、日本語の「V テアル」、「V ラレテイル」と中国語の「V 有」は、動作主が省略され、対象が主格の位置に昇格される、という格交替の現象が見られる。すなわち、これらの形式は単なるアスペクトの問題ではなく、ヴォイスの問題にも関わっていることが分かった。工藤 (1991、1995) が証明したように、アスペクト、ヴォイスは異なる文法カテゴリーとされているが、実際に繋がっている。日本語の「V テアル」、「V ラレテイル」と中国語の「V 有」を、アスペクト、ヴォイスという相関性の立場からアプローチしていく必要もあると考えられる。これらの問題に関しては、今後の課題としたい。

⁹² 主体化/主観性については、Langacker (1985、1991a、1999)、Traugott (1995)、Carey (1995)、Uehara (2006)、上原・熊代 (2007)、上原 (2016) などの研究が挙げられる。

資料

【中国語】

『中日対訳語料庫 第一版』（日中対訳コーパス 第一版）

『人民网报刊杂志搜索』（人民網新聞雑誌検索）

『媒体言語語料庫』（Media Language Corpus）

『北京大学中国語言学研究中心語料庫』（北京大学中国語学研究センターコーパス）

『北京口語語料庫』（北京話し言葉コーパス）

【日本語】

『現代日本語書き言葉均衡コーパス 通常版』（BCCWJ-NT）

『名大会話コーパス』

『新潮社 100 冊（CD-ROM）』

参考文献

- 安平鎬・福嶋健伸 2005. 「中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系—存在型アスペクト形式の文法化の度合い—」『日本語の研究』1 (3) : 139-154.
- 荒川清秀 2015. 『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社.
- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, Joan L., Revere Perkins and William Pagliuca 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- 蔡瑛 2009. 「上海高校学生“有+VP”句使用情况调查分析」『语言教学与研究』6:79-86.
- 曹起 2013. 「新时期现代汉语变异研究」博士论文. 吉林大学.
- Carey, Kathleen 1995. “Subjectification and the Development of the English Perfect.” in Dieter, Stein and Susan, Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*, 83-102. Cambridge: Cambridge University Press.
- 陈宝勤 2006. 「试论“着”的语法化过程」『语文研究』1: 31-38.
- 陈前瑞 2005. 「“来着”的发展与主观化」『中国语文』4: 308-318.
- 陈前瑞・王继红 2010. 「南方方言“有”字句的多功能性分析」『语言教学与研究』4: 47-55.
- Comrie, Bernard 1976. *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 崔娜 2013. 「现代汉语普通话中的“有+VP”句式」『云南师范大学学报』11 (4) :49-55.
- 大東文化大学中国語大辞典編纂室 (編) 1994. 『中国語大辞典』角川書店.
- 戴耀晶 1997. 『现代汉语时体系统研究』浙江教育出版社.
- Dowty, David 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Durst-Andersen, Per. 1992. *Mental Grammar: Russian Aspect and Related Issues*. Columbus, Ohio: Slavica Publishers, Inc.
- 江川泰一郎 2008. 『英文法解説』金子書房.
- 江藤裕之 2015. 『英文法のエッセンス』大修館書店.
- 方梅 2000. 「从“V着”看汉语不完全体的功能特征」『语法研究和探索』9: 38-55. 商务印书

館.

Fillmore, C. 1977. "Topics in Lexical Semantics." in R. Cole (ed.) *Current Issues in Linguistic Theory*, 76-138. Bloomington: Indiana University Press.

Friedrich, Paul 1974. "On Aspect Theory and Homeric Aspect." *International Journal of American Linguistics*, 40 (4) : 1-44.

郭锐 1993. 「汉语动词的过程结构」『中国语文』6: 410-419.

Goldberg, Adele E. 1995. *Construction: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

江田すみれ 2002. 「中上級の学習者に『テアル』を教える際の問題点—動詞の選択と連体修飾句の中の『テアル』の使い方について—」『杏林大学外国語学部紀要』14: 59-78.

顾鸣镝 2016. 「“有 N”和“有 V”的同构性研究」『语言教学与研究』4: 104-112.

Haiman, John 1983. "Iconic and Economic Motivation." *Language*, 59 (4) : 781-819.

韩旭 2009. 「现代汉语“有 VP”句式研究」硕士论文. 上海外国语大学.

原沢伊都夫 2005. 「テアルの意味分析—意図性の観点から—」『日本語文法』5 (1) :20-38.

Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Friederike Hünemeyer 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.

Heine, Bernd 1997. *Possession: Cognitive sources, forces, and grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson 1980. "Transitivity in Grammar and Discourse." *Language*, 56 (2) : 251-299.

Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott 2003. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

黄伯荣 (编) 1996. 『汉语方言语法类编』青岛出版社.

黄伯荣・廖序东 (编) 2002. 『现代汉语 (增订三版下)』高等教育出版社.

Huang, C. -T. James, Y. -H. Audrey Li and Yafei Li 2009. *The Syntax of Chinese*. Cambridge: Cambridge University Press.

黄利斌 2017a. 「中国語の“V 有(yǒu)”構文の意味体系—日本語の“V テアル”構文との比較を通して—」『国際文化研究』23: 45-58.

黄利斌 2017b. 「中国語新型『有 VP』構文に関する認知的考察—使用基盤モデルおよび存在論的観点から—」『日本認知言語学会論文集』17: 322-334.

- 黄利斌 2017c. 「コーパスを利用した中国語“V有(yǒu)”表現の意味分析—日本語『Vテアル』表現との比較を兼ねて—」『日中言語対照研究論集』19: 16-33. 白帝社.
- 黄利斌・李広志 2017. 「漢語“有V”與日語『Vである』的対比研究」『或問』31: 87-98. 白帝社.
- 黄正徳 1988. 「说『是』和『有』」『中研院史语所集刊』59(1): 43-64.
- 古川裕 2007. 「『中国語らしさ』の認知言語学的分析—日本語から見える中国語の世界—」彭飛(編)『日中対照言語学研究論文集』225-260. 和泉書院.
- 飯田真紀 2013. 「広東語の“有/有V到”構文—“-到”の機能と文法化・機能拡張—」木村英樹教授還暦記念論叢刊行会(編)『中国語文法論叢』157-176. 白帝社.
- 池上嘉彦 1981. 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館.
- 池上嘉彦 2000. 『「日本語論」への招待』講談社.
- 井出祥子 2006. 『わきまへの語用論』大修館書店.
- 井出祥子・植野貴志子 2012. 「場の理論で考える配慮言語行動」『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房.
- 井上優 2001. 「中国語・韓国語との比較から見た日本語のテンス・アスペクト」『言語』30(13): 26-31.
- 井上優 2012. 「テンスの有無と事象の叙述様式—日本語と中国語の対照—」影山太郎・沈力(編)『日中理論言語学の新展望2 意味と構文』1-26. くろしお出版.
- 一戸克夫 2001. 「結果表現テアルにおけるアルの存在動詞としての性質について」中右実教授還暦記念論文集編集委員会(編)『意味と形のインターフェース 上巻』41-52. くろしお出版.
- 伊地智善継(編) 2002. 『中国語辞典』白水社.
- Jakobson, Roman 1957. “Shifter, Verbal Categories, and the Russian Verb.” 長島善郎(訳) 1973. 「転換子と動詞範疇とロシア語動詞」川本茂雄(監修)『一般言語学』149-170. みすず書房.
- Jakobson, Roman 1972. “Verbal Communications” 早田輝洋(訳) 1978. 「言語コミュニケーション」服部四郎(編)『ロマン・ヤーコブソン選集 II 言語と言語科学』53-66. 大修館書店.
- Jaxontov, Sergej Je. 1988. “Resultative in Chinese.” in Vladimir P. Nedjalkov (ed.) *Typology of*

- Resultative Constructions*, 113-133. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 金立鑫 2002. 「“着”“了”“过”时体意义的对立及其句法条件」『国际汉语教学讨论会论文集选』7: 377-388.
- 神永正史 2008. 「テアル構文の動詞構成—存在文との近さから—」『筑波日本語研究』13: 33-50.
- 康梅花 2014. 『“有 VP” 句式研究及其教学探讨』 硕士学位论文. 重庆大学.
- 城戸雪照 2003. 『場所の哲学—存在と場所—』 文芸社.
- 木村英樹 1981. 「『付着』の“着/zhe/”と『消失』の“了/le/”」『中国語』258: 24-28. 内山書店.
- 木村英樹 1983. 「关于补语性词尾“着/zhe/”和“了/le/”」『语文研究』2: 22-30.
- 木村英樹 2006. 「『持続』・『完了』の視点を超えて—北京官話における『実存相』の提案—」『日本語文法』6 (2) : 45-61.
- 木村英樹 2011. 「“有”構文の諸相および『時空間存在文』の特性」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』14: 89-117.
- 木村英樹 2012. 『中国語文法の意味とカタチ—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究—』 白帝社.
- 金田一春彦 1950. 「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48-63. 金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』5-26. むぎ書房.
- 金水敏 2000. 「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子 (著) 『時・否定と取り立て』1-92. 岩波書店.
- 金水敏 2006a. 『日本語存在表現の歴史』 ひつじ書房.
- 金水敏 2006b. 「『でいる』について」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平 1 形態・叙述内容編』143-156. くろしお出版.
- Kishimoto, H. 2000. “Locative verbs, agreement, and object shift in Japanese.” *The Linguistic Review*. 17: 53-109.
- 北村よう 2011. 「存在文の日中対照—テイル/テアル/ラレテイルとそれに対応する中国語—」『東海大学紀要 国際教育センター』1: 21-27.
- 北村よう 2013. 「日中両語における動詞の自他の対応について—存在文の場合—」『東海大学紀要 国際教育センター』3: 1-13.

- 孔令达 2004. 『汉族儿童实词习得研究』 安徽大学出版社.
- 工藤真由美 1990. 「現代日本語の受動文」 『ことばの科学』 4: 47-102. むぎ書房.
- 工藤真由美 1991. 「アスペクトとヴォイス」 1988-1990 年度科学研究費報告書 『現代日本語のテンス・アスペクト・ヴォイスについての総合的研究』 5-40.
- 工藤真由美 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房.
- 熊代敏行 2002. 「日本語の『にーが』構文と分裂主語性」 西村義樹 (編) 『認知言語学 I: 事象構造』 243-260. 東京大学出版会.
- 熊代敏行 2013. 「成分構造 (component structure)、合成構造 (composite structure)」 辻幸夫 (編) 『新編 認知言語学キーワード事典』 201. 研究社.
- 国広哲弥 1985. 「認知と言語表現」 『言語研究』 88: 1-19.
- Lakoff, George and Mark, Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Lakoff, George and Mark, Johnson. 2003. *Metaphors We Live by*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1985. “Observations and Speculations on Subjectivity.” in John, Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, 109-150. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1988. “A Usage-Based Model.” in Brygida, Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*, 127-161. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Langacker, Ronald W. 1991a. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991b. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. “Reference-point Constructions.” *Cognitive Linguistics*, 4 (1) : 1-38.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

- Langacker, Ronald W. 2000. "A Dynamic Usage-Based Model." in M. Barlow and S. Kemmer (eds.) *Usage Based Models of Language*, 1-64. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson 1976. "Subject and Topic: A New Typology of Language." in Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 457-489. New York: Academic Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Li, Charles N., Sandra A. Thompson and R. McMillan Thompson 1982. "The Discourse Motivation for the Perfect Aspect: The Mandarin Particle LE." in Paul J. Hopper (ed) *Tense-Aspect: Between Semantics & Pragmatics*, 19-44. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 黎锦熙 1924.『新著國語文法』商务印书馆. 復刊(2007). 湖南教育出版社.
- 劉琛琛 2011.「日本語と中国語のアスペクト体系の異同再考」『ありあけ 熊本大学言語学論集』10: 27-36.
- 刘琛琛 2012.「结果持续表达方式的日中对比分析—テアル与存在句中的“着”、“了”、“过”一」『日語学習与研究』4: 51-58.
- 劉琛琛 2013.「“有 V”構造に関する一考察」『ありあけ 熊本大学言語学論集』13: 1-12.
- 刘丹青 2011.「“有”字领有句的语义倾向和信息结构」『中国语文』2: 99-109.
- 刘林 2013.「“来着”的语义性质和句法环境探讨—兼与“了₂”“过”的对比分析—」『语言研究』33(2): 71-78.
- 刘宁生 1985.「论“着”及其相关的两个动态范畴」『语言研究』2:117-128.
- 刘月华·潘文娱·故韡 2001.『实用现代汉语语法』商务印书馆.
- 劉綺紋 2006.『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪大学出版会.
- 卢英顺 2012.「从凸显看“了”的语法意义问题」『汉语学习』2: 23-29.
- 罗建邦·范美群 2006.「从三个平面看“V有”和“V了”之差异」『江西科技师范学院学报』3: 92-95.
- 吕叔湘 1999.『现代汉语八百词(增订本)』商务印书馆.

- 益岡隆志 1987. 『命題の文法—日本語文法序説—』 くろしお出版.
- 益岡隆志 1997. 『複文』 くろしお出版.
- 益岡隆志 2000. 『日本語文法の諸相』 くろしお出版.
- Маслов, Юрий С. 1978. “К основаниям сопоставительной аспектологии.” 菅野裕臣 (訳) 1992. 「アスペクト論の基本概念について」 『動詞アスペクトについて (II)・学習院大学東洋文化研究所調査研究報告』 35: 98-139.
- Маслов, Юрий С. 1984. “Об основных понятиях аспектологии.” 菅野裕臣 (訳) 1992. 「アスペクト論の基本概念について」 『動詞アスペクトについて (II)・学習院大学東洋文化研究所調査研究報告』 35: 98-139.
- 町田章 2016. 「事態把握の様式と日本語『ている』構文」 『KLS』 36: 133-145.
- メイナード・泉子 2000. 『情意の言語学—「場交渉論」と日本語表現のパトス—』 くろしお出版.
- 松本曜 2009. 「多義語における中心的意味とその典型性—概念的の中心性と機能的の中心性—」 『Sophia Linguistica』 57: 89-99.
- 孟琮・郑怀德・孟庆海・蔡文兰 (編) 1999. 『汉语动词用法词典』 商务印书馆.
- 孟倩玫 2013. 「论现代汉语“有+VP”句式的用法和意义—从“你有替我买点白兰地吗?”说起—」 『海外华文教育』 4: 442-448.
- 三原健一・平岩健 2006. 『新日本語の統語構造—ミニマリストプログラムとその応用』 松柏社.
- 三上章 1963. 『日本語の論理』 くろしお出版.
- 三宅登之 2005. 「アスペクト助詞“着”の実際の使用状況と文法教材への応用」 2002-2004年度科学研究費報告書『インターネット技術を活用したマルチリンガル言語運用教育システムと教育手法の研究』 186-203.
- 三宅知宏 2005. 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」 『日本語の研究』 1 (3) : 61-76.
- 靱山洋介 1992. 「多義語の分析：空間から時間へ」 カッケンブッシュ 寛子・尾崎明人・鹿島央・藤原雅憲・靱山洋介 (編) 『日本語研究と日本語教育』 185-199. 名古屋大学出版会.
- 靱山洋介 2000. 「名詞『もの』の多義構造—ネットワーク・モデルによる分析—」 山田進・菊地康人・靱山洋介 (編) 『日本語 意味と文法の風景』 177-191. ひつじ書房.

- 梶山洋介 2002. 『認知意味論のしくみ』 研究社.
- 梶山洋介 2014. 『日本語研究のための認知言語学』 研究社.
- 森田良行 1971. 「『本が置いてある』と『本を置いてある』」 森岡健二・永野賢・宮地裕 (編) 『講座 正しい日本語』 174-188. 明治書院.
- 森田良行 1977. 『基礎日本語』 角川書店.
- 望月圭子 1999. 「『は』と『が』—中国語を母語とする学習者への教授法—」 『東京外国語大学百周年記念論文集』 197-221.
- 望月圭子 2000. 「汉语里的“完成体”」 『汉语学习』 1: 12-16.
- 村木新次郎 1991. 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房.
- 中川正之 1997. 「類型論から見た中国語・日本語・英語」 大河内康憲 (編) 『日本語と中国語の対照研究論文集』 3-21. くろしお出版.
- 中島孝幸 1999. 「結果を表す構文について: テアルとラレテイル」 『三重大学日本語学文学』 10: 45-54.
- 中村渉 2004. 「第5章 他動性と構文 I: プロトタイプ、拡張、スキーマ」 中村芳久 (編) 『シリーズ認知言語学入門 (第5巻) 認知文法論 II』 169-204. 大修館書店.
- Nedjalkov, Vladimir P. and Sergej Je. Jaxontov 1988. “The Typology of Resultative Constructions.” in Vladimir P. Nedjalkov (ed.) *Typology of Resultative Constructions*, 3-62. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 日本語記述文法研究会 2007. 『現代日本語文法 3』 くろしお出版.
- 仁田義雄 1995. 「シテ形接続をめぐって」 仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』 87-126. くろしお出版.
- 野田大志 2017. 「現代日本語における動詞『ある』の多義構造」 『国立国語研究所論集』 12: 81-110.
- 野村剛史 1994. 「上代語のリ・タリについて」 『国語国文』 63 (1) : 28-51.
- 野村剛史 2003. 「存在の様態—シテイルについて—」 『国語国文』 72 (8) : 1-20.
- 岡智之 2000. 「存在型アスペクトとしての朝鮮語 ko/eo issta 構文」 『EX ORIENTE』 3: 113-131.
- 岡智之 2001. 「テイル (テアル) 構文の認知言語学的分析」 『日本認知言語学会論文集』 1: 132-142.
- 岡智之 2002. 「存在構文に基づく日本語諸構文のネットワーク—日本語文法論への存在論的アプローチ—」 山梨正明他 (編) 『認知言語学論考』 2: 111-156.

- 岡智之 2005. 「場所的存在論による格助詞ニの統一的説明」『日本認知言語学会論文集』 5: 12-22.
- 岡智之 2013a. 『場所の言語学』 ひつじ書房.
- 岡智之 2013b. 「第 1 章 日本語存在表現の文法化」「第 2 章 テンス・アスペクトの文法化と類型論」山梨正明他 (編)『認知歴史言語学』 3-38. くろしお出版.
- 奥田靖雄 1977. 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『ことばの研究・序説』 85-104. むぎ書房.
- 奥田靖雄 1978. 「時間の表現 (1)、(2)」『教育国語』 94: 2-7 ; 95: 28-41.
- 大堀壽夫 2005. 「日本語の文法化研究にあたって—概観と理論的課題—」『日本語の研究』 1 (3) : 1-17.
- 潘文 2006. 『現代汉语存現句的多维研究』 南京师范大学出版社.
- Perlmutter, David 1978. “Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis.” *BLS*. 4:157-189.
- 讃井唯允 2002. 「コムリーのアスペクト論と日本語・中国語のアスペクト体系」日中対照言語学会 (編)『日本語と中国語のアスペクト』 67-78. 白帝社.
- 齋藤茂 2010. 「テアル構文と受動表現 (ラレテイル) との使い分け—結果を基に動作が行われたと推論することによる制約—」『麗澤大学紀要』 90: 131-154.
- 瀬戸賢一 2007a. 「メタファーと多義語の記述」楠見孝 (編)『メタファー研究の最前線』 31-61. ひつじ書房.
- 瀬戸賢一 (編) 2007b. 『英語多義ネットワーク辞典』 小学館.
- 盛文忠 2006. 「日本語の主語と中国語の主語はどう違う?」『言語』 35 (5) : 58-61.
- 柴谷方良 1978. 『日本語の分析』 大修館書店.
- Shibatani, Masayoshi 1985. “Passive and Related Construction: A Prototype Analysis.” *Language*, 61: 821-848.
- 柴谷方良 1986. 「能格性をめぐる諸問題」『言語研究』 90: 75-96.
- 清水博 2003. 『場の思想』 東京大学出版会.
- 下地早智子・任鷹 2011. 「『視点』の違いから見るアスペクト形式選択の日中差—非限界動作動詞の場合—」『第 27 回中日理論言語学研究会 発表資料』.
- 施其生 1996. 「论“有”字句」『语言研究』 1:28-33.
- 白井恭弘 2004. 「非完結相『ている』の意味決定における瞬間性の役割」佐藤滋・堀江薫・中村渉 (編)『対照言語学の新展開』 71-99. ひつじ書房.

- 城田俊 1998. 『日本語形態論』 ひつじ書房.
- 史有为 1984. 「关于“动+有”」 『語言學論叢』 13:25-39. 商务印书馆.
- 石毓智 1992. 「论现代汉语的“体”范畴」 『中国社会科学』 6: 183-201.
- 石毓智 2004. 「汉语的领有动词与完成体的表达」 『语言研究』 24 (2) :34-42.
- 石毓智・李讷 2001. 『汉语语法化的历程—形态句法发展的动因和机制—』 北京大学出版社.
- Smith, Carlota S. 1997. *The parameter of aspect*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- 副島健作 1998a. 「シツツアルに関する一考察」 『日本語教育』 97: 106-117.
- 副島健作 1998b. 「現代日本語の不完結相—シツツアルの意味記述—」 『日本語科学』 4: 31-52.
- 副島健作 2003. 「シテアルとスルーシテイルとの関係について—」 『留学生教育』 1: 1-15.
- 副島健作 2005. 「日本語のアスペクト—文法の解明と体系化の試み—」 博士論文. 九州大学.
- 副島健作 2007. 『日本語のアスペクト体系の研究』 ひつじ書房.
- 副島健作 2009. 「シテアル再考—他動性の観点から—」 『留学生教育』 6: 7-23.
- 副島健作 2017. 「日本語学習者の『動作主が不特定の人為的事態の表現』使用について」 『東
北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』 3: 147-157.
- 宋金兰 1994. 「“有”字句新探—“有”的体助词用法—」 『青海师专学报』 2: 33-37.
- 須田義治 2010. 『現代日本語のアスペクト論—形態論的なカテゴリーと構文論的なカテゴリーの理論—』 ひつじ書房.
- 菅井三実 2002. 「構文スキーマによる格助詞『が』の分析と基本文型の放射状範疇化」 『世
界の日本語教育』 12: 175-191.
- 杉村泰 1996. 「形式と意味の研究—テアル構文の2類型—」 『日本語教育』 (91) : 61-72.
- 杉村泰 2002. 「意志性のないテアル構文について」 『言語文化論集』 24 (1) : 159-174.
- 孙宏林 1996. 「由“V+有”构成的存在句」 『世界汉语教学』 2: 21-29.
- 砂川有里子 2000. 「空間から時間へのメタファー—日本語の動詞と名詞の文法化—」 青木
三郎・竹沢幸一 (編) 『空間表現と文法』 105-141. くろしお出版.
- 鈴木重幸 1957. 「日本語の動詞のすがた (アスペクト) について—～スルの形と～シテイ
ルの形—」 金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房.
- 鈴木重幸 1983. 「形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトについて」 『金田一春彦古希記
念論文集第一巻国語学編』 435-460. 三省堂.
- 田川憲二郎 2005. 「統語的アスペクトの表現形式としての英語 to 不定詞」 『言語研究』 128:
73-111.

- 高橋太郎 1985. 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版.
- 高橋太郎 2003. 『動詞九章』 ひつじ書房.
- 高見健一・久野暉 2014. 『日本語構文の意味と機能を探る』 くろしお出版.
- 竹沢幸一 2001. 「コンピュータ動詞アルの二面的語彙特性とその構文的具現」『意味と形のインターフェース 下巻』 713-723. くろしお出版.
- 田窪行則 2010. 『日本語の構造—推論と知識管理—』 くろしお出版.
- 谷口一美 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 ひつじ書房.
- 寺村秀夫 1984. 『日本語のシンタクスと意味 第2巻』 くろしお出版.
- Traugott, Elizabeth C. 1995. “Subjectification in Grammaticalisation.” in Dieter, Stein and Susan, Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- 坪井栄治郎 2013. 「認知文法 (cognitive grammar)」『新編 認知言語学キーワード事典』 282. 研究社.
- 角田太作 2009. 『世界の言語と日本語 改訂版—言語類型論から見た日本語—』 くろしお出版.
- 鵜殿倫次 1982. 「北京語動詞の自動・他動とアスペクト辞の働き」『愛知県立大学外国語学部紀要』 15: 1-33.
- 上田閑照 (編) 1987. 「場所」『西田幾多郎哲学論集 I 場所・私と汝他六編』 67-151. 岩波書店.
- Uehara Satoshi 2006. “Toward a Typology of Linguistic Subjectivity: A Cognitive and Cross-linguistic Approaches to Grammaticalized Deixis.” in Angeliki Athanasiadou, Costas Canakis, and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*, 75-117. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 上原聡・熊代文子 2007. 『音韻・形態のメカニズム』 研究社.
- 上原聡 2016. 「ラネカーの subjectivity 理論における『主体性』と『主観性』—言語類型論の観点から—」中村芳久・上原聡 (編) 『ラネカーの (間) 主観性とその展開』 53-90. 開拓社.
- Vendler, Zeno 1967. “Verbs and Times.” *Linguistics in Philosophy*. 143-166. Cornell University Press.
- 王冬梅 2014. 「从“是”和“的”、“有”和“了”看肯定和叙述」『中国语文』 1:22-34.

- 王国栓・马庆株 2008.「普通话中走向对称的“有+VP(了)”结构」『南开语言学刊』2:87-91.
- 王静 2011.「“NP₁+V+有+NP₂”类存在句研究」硕士论文. 复旦大学.
- 王力 1943.『中国现代语法』商务印书馆. 1985.
- 王森・王毅・姜丽 2006.「“有没有/有/没有+VP”句」『中国语文』1:10-18.
- Wang, William S-Y. 1965. “Two Aspect Markers in Mandarin.” *Language* 41 (3) : 457-470.
- 王学群 2007.『中国語の“V着”に関する研究』白帝社.
- 王周明 2012.「现代汉语普通话“有+VP”用法的现状及其与方言的关系试析」『言語文化』15 (1) : 97-117.
- 伍文英 2003.「“有+VP”格式研究」硕士论文. 湖南师范大学.
- 吴卸耀 2006.『现代汉语存现句』学林出版社.
- 肖治野・沈家煊 2009.「“了₂”的行、知、言三域」『中国语文』6: 518-527.
- 邢福义 1990.「“有没有 VP”疑问句式」『华中师范大学学报(哲社版)』1: 82-87.
- 熊仲儒 2003.「“来着”的词汇特征」『语言科学』2 (2) : 58-65.
- 熊仲儒 2009.「再论“来着”」『汉语学习』3: 12-16.
- 徐一平 2009.「你、我、他(她)」池上嘉彦・守屋三千代(編著)『自然な日本語を教えるために一認知言語学をふまえて一』65-69. ひつじ書房.
- Яхонтов, Сергей Евгеньевич 1957. *Категория глагола в китайском языке*. Издательство Ленинградского университета. 橋本萬太郎(訳) 1987.『中国語動詞の研究』白帝社.
- 山田小枝(訳) 1988.『アスペクト』むぎ書房.
- 山梨正明 1995.『認知文法論』ひつじ書房.
- 山梨正明 2000.『認知言語学原理』くろしお出版.
- 山崎佳子他 2008.『日本語初級② 大地』スリーエーネットワーク.
- 楊凱榮 2001.「中国語の“了”について」つくば言語文化フォーラム(編)『「た」の言語学』ひつじ書房.
- 杨凱榮 2013.「从表达功能看“了”的隐现动因」『汉语学习』5: 31-43.
- 吉田妙子 2012.『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房.
- 俞敏 1954.「汉语动词的形态」『语文学习』4: 43-51.
- 袁毓林・李湘・曹宏・王健 2009.「“有”字句的情景语义分析」『世界汉语教学』23 (3) : 291-307.
- 张斌(編) 2010.『现代汉语描写语法』商务印书馆.
- 張麟声 1991.「中日様態存在表現の対照研究」『月刊言語』20 (7) : 76-83.

- 張麟声 2006. 「現代日本語の存在表現」 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎（編）『日本語文法の新地平 1 形態・叙述内容編』 69-82. くろしお出版.
- 張麟声 2010. 「日本語と中国語の存在表現について」 2007-2009 年度科学研究費報告書『中国語話者のための日本語教育文法の開発と学習者中間言語コーパスの構築』 67-82.
- 张豫峰 2006. 『现代汉语句子研究』 学林出版社.
- 鄭汀 2010. 「存在表現における中国語の『着』構文と日本語の『てある』構文の対応について」『Scientific Approaches to Language』 9: 133-148.
- 郑汀・冯素梅 2010. 「静态存在句“V 着”语义再考—兼与日语『V ている/V てある』比较一」『日語學習与研究』 2: 29-35.
- 郑懿德 1985. 「福州方言的“有”字句」『方言』 4: 309-313.
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室（編） 2012. 『现代汉语词典第 6 版』 商务印书馆.
- 周国正 2008. 「“有+VP”的功能特性」北京大学汉语语言学研究中心（編）『语言学论丛』 38: 165-181.
- 周凌 2009. 「“NP₁+V 有+NP₂”句的两种意义类型考察」『现代语文』 7: 69-70.
- 周平・陈小芬（編） 2010. 『新编日语 修订本』 上海外语教育出版社.
- 朱德熙 1999. 『朱德熙文集 第一卷』 商务印书馆.

初出一覧

本論文のもとになったものは、以下の通りである。ただし、論文全体に統一性をもたせるため、部分的に修正・加筆してある。

1. 「中国語の“V 有(yǒu)”構文の意味体系—日本語の“V テアル”構文との比較を通して—」『国際文化研究』23:45-58. 東北大学国際文化学会.
2. 「中国語新型『有 VP』構文に関する認知的考察—使用基盤モデルおよび存在論的観点から—」『日本認知言語学会論文集』17:322-334. 日本認知言語学会.
3. 「コーパスを利用した中国語“V 有(yǒu)”表現の意味分析—日本語『V テアル』表現との比較を兼ねて—」『日中言語対照研究論集』19:16-33. 白帝社.
4. 「漢語“有 V”與日語『V てある』的対比研究」『或問』31:87-98. 白帝社.

謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々からご指導・ご支援を頂きました。この場を借りて、お世話になった多くの方々に心より感謝申し上げます。

主指導教員の副島健作先生をはじめ、副指導教員の上原聡先生、江藤裕之先生、審査委員として応用言語研究講座の中村渉先生にご指導を賜りました。副島先生はご多忙中にもかかわらず、いつも相談に乗ってくださり、研究の内容や方法などについて多くの教示を与えてくださいました。また、学術誌へ論文を投稿する際や博士論文を執筆する際には、温かい励ましのお言葉をくださいました。これまで積み上げてきた研究が博士論文という形で結実したのも、ひとえに副島先生のご指導あってのものです。上原先生には認知言語学の基礎からご指導頂き、演習発表後、毎回貴重なご指摘をたくさん頂きました。江藤先生には、論文の書き方などについてご教示頂き、日本語の表現を丁寧に直して頂きました。中村先生には、年末年始のお忙しい時期に拙論を丁寧に読んで頂き、論文の用語の定義などについて鋭いご指摘や建設的なご意見を多く頂きました。

また、言語科学研究講座の小野尚之先生、川平芳夫先生、高橋大厚先生、中本武志先生には、演習発表の際に有益なご指摘やご意見を頂きました。岡山大学の王安先生には、本論文の中国語の部分についてご教示頂きました。私の研究に対し、王先生が「面白い」と言ってくださったことには感激致しました。

言語研究の世界へ導いてくださり、修士課程の指導教員であった岩大大学の 大野眞男先生、交換留学時の受入教員であった藪敏裕先生には、研究のみならず、生活の面においても大変お世話になりました。卒業後も温かく見守ってくださいました。

さらに、元仙台市立岩切小学校長の清水眞哉先生には、論文全体の日本語表現を添削して頂きました。文量の多い論文にもかかわらず、丁寧に読んで頂きました。

言語科学研究講座の皆さんには、日頃のご応援を頂き、お世話になりました。皆さんのお陰で楽しい研究生生活を過ごすことができました。

最後に、留学生活を支え続けてくれた両親、姉、妻に感謝致します。

2018年2月19日

黄 利斌